

---

# 星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

星朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星光の魔王 - シュテル・ジ・エルケーニヒ -

### 【Nコード】

N4448Z

### 【作者名】

星朔

### 【あらすじ】

次元断層に巻き込まれ死んだ1人の平々凡々のヲタクが居た。そのヲタクは無限大数に存在するとある高町なのはに転生を果たし、リリカルマジカルな宿命へと立ち向かっていく。リリカルマジカルもとい『リリカルバイオレンスマギウスなのは』、始まります。？注意？この小説のなのはは血みどろの戦いに身を投じる為、そんな無様ななのはさんが嫌だ！という方は閲覧をお控え下さい。さらに他作品のキャラが様々な形で出て来ます。しかも原作が骨組み位しか残っていない為、そういう他作キャラ乱入やら原作ブレイク&a

m p・レイプが嫌いな方は決して閲覧しないでください。

## プロローグ（前書き）

とりあえず新しくプロローグをあげておきます。

やっぱりコレだけは思い入れが大きくて、消せそうにはありません。

目障りならお気に入り登録から削除してください。

## プロローグ

人生何が起こるかなんてわからない。

そう、わからないという絶望だらけ。

明日に希望も持てず、惰眠を貪る日々を送る。

某悪夢少佐みたいなのが居れば喜んで起き上がりますが……。

「これは夢だ……」

「残念ながら夢ではない」

呟く自分にそう言ったのは、悪夢少佐の上司。閣下だった。

「ジーク・ジオンッ!!」

「ジーク・ジオン!」

やったら応えてくれました。感動で死ねそう。

「さて、急で唐突だが、真実を述べれば、貴公は死んだ」

「そーなのかー」

うん。はい。死んだそうです。

確か今日はDVDを返しに行つて……

「所謂転生トラックに追突されて貴公は死んだ  
い」

わけではな

「あつえ！？ならどーして？」

確かにトラックに追突された覚えはないけど……。

「実はな、次元断層に巻き込まれて死んだのだ」

「次元断層 ！？」

まさか三次元リアルで次元断層なんて

「げ、原因とか……何なんですか？」

「ふむ。とある遺失物の影響による次元断層が、貴公の前に現れた  
のだ」

そんなのアリ？てか遺失物ってロストテクノロジー？ロストログイア？ですか？

「本来なら死ぬべきでない貴公であった。故に貴公には転生してもらう」

死因はアレなのに、ちゃんと転生させてくれるの？

や、その前に

「閣下は神様なのですか？」

「うむ。貴公のいうように僕は神だ。この姿は貴公との会話にあわせて用立てたものだ」

ああ、そーなのですか。

でもいきなり転生なんていわれても

あ。

「次元断層の先には、世界はあるのですか？閣下」

「ん？ああ、貴公の地球ではない地球が一応はある」

「ならそこをお願いいたします」

「良いのか？」

「はい。それで構いません。あとはそちらにお任せします」

「そうか、だが良いのか？貴公自らが選んだ能力を付随することも儂には出来るが」

「それは閣下のさじ加減にお任せします。それに、下手に欲張ってしまいそうですから」

「ふむ。委細承知した。貴公の次生に幸あらんことを祈る」

「ハッ！有り難き幸せ。御世話になります、閣下！」

敬礼を閣下にとると、急に眠くなってきた。

うつ、か、つ、かの前、で、寝るわけ、には



## 第0話 高町なのは始めました。

side：高町なのは？

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、3歳です。

いきなりのご挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしています、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかりリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私になつてしまつとは夢の端にも思ひはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしよう。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはな  
らつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでし  
よう。リリカルマジカルは見ているから良いのであつて、実際にや  
れと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穩無事に2度目の人生を謳歌したいの  
です。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょう  
から

|||||

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだ、この1  
年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようにな  
りました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や  
母様におねだりして、魔装機神や第 次シリーズを買って貰つたり  
しながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばか  
りを書いて、さらには電子機械系の本を読んだり、ロボットヲタ  
クで物静かな子となつていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系  
と文系は得意になつたりはしたのですが、運動はからつきしダメで  
した。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程

までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思っております。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかない、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとってはカロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのはは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやっとだというのに。

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

|||||

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンプとして、姉様の返事以外には聞こ

えませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということ、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買い物にでも行ったのでしょうか。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

プラモが飾っており、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きに プレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階の様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、1階に降

りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなると  
いう旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよつぽど忙しかったのだろう。朝食はあっても、お弁当が  
なかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材  
をチヨイス。

この身体になってから料理はしていませんが、2年のブランクなど  
なんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。  
出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁  
を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもし  
ないと間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場と  
する為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えるバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎  
え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあ  
と、いよいよ色々とも私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく  
尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなく  
とも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰っ  
てきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまで来ると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディガードなどを務めていたというトラハの設定は私も知っています。そしてSPの仕事中に殉職したことも。

ですがトラハでは父様は高町なのは顔を見ないまま逝ってしまった人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれません。

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はつきり言って最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私子どもだからではなく、私が本物の高町なのではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょうか。わかっていたことです。所詮私は高町なのではない。別のナニカ。

本来の高町なのには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さや速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょうか。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇気もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナーやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。



杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、コミックの15歳、stsの18歳、さらに23歳と25歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっばけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないではいられないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を

決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、にっ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て…」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さい)』

「うっ…ぐすっ…………えっ?」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「…だ、だれ、です、か……」

『Please do not cry. I will always become sad if you are crying. (泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げて、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ?」

『It is not a mishearing. I am in a you side perfectly. (空耳ではありませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます)』

「わたし、の…そば?」

『Yes. Therefore, please do not cry. My mistress who loves (はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター)』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

「Meister? Did it carry out if  
you please? In something, I am  
impoliteness by no means. (マイス  
ター?どうかしましたか?まさか私が何か失礼を)」

「いい、え……いいえ、違い……ます」

嬉しかったんだ。

ひとりぼっちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るの  
を。

「あなた……なのですね?」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからな  
のか

『Yes・That's right・My meister  
(はい。その通りです。私のマイスター)』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言って抱きついた。

少し苦悶の音が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話 タイムリミットまで、あと (前書き)

連投です。

## 第1話 タイムリミットまで、あと

side：高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステムの未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることもなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気付き隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われなくても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが

昼休み、学校の屋上。



いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時限目の授業は将来の夢について

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが

今日は4月22日。もし劇場版コミックのように4月26日が運命の日であるならば、あと4日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

「…私ですか？」

頷く2人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えを述べます。

「翠屋を継ぐのもいいですが」

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかもしれませんか」

叶わない夢　　なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきつと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得してくれました。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしまいました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『マイスター  
Meister』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書・ライブラリーー。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリア・もっひとりのわたし。

「ア、リス……わた、し……」

『Please cry and breathe out now.  
It muffles, although it is awkward.  
（今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます）』

「うっ、あ、つつ、うあああああああーっ  
！……！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちっぽけな星でしか 否、スペースステブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ……」

『Could it settle down? Meister  
（落ち着きましたか？マイスター）』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。



第1話 タイムリミットまで、あと (後書き)

このなのは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシユテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般凡人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはと銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

第2話 星の光の生誕・Birth of a stellar light

side:高町なのは

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

とうとうこの日がやって来ました。

少年が怪異と戦う夢も見ました。

十中八九、あれがユーノとジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずに翌朝を迎えました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もする。

正直、コンディションは最悪と言っても過言ではありません。

「大丈夫？なのはちゃん」

「…ええ、軽い寝不足ですので、」心配なく」

「また夜中までゲームでもしてたんでしょ？あんた普段生真面目なのにそういうことだけは不良よねえ」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですから…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回かあるので、すずかとアリサには怪しまれずに済んではいますが、アリサの胸に抱かれるフレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フレットことユーノを病院に預け、すずかとアリサは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い。また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね…」

『マイスター  
Meister』

「…大丈夫ですよ、アリサ。私には……『私』には貴女も居るのですから……」

そう、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから





が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。

窓から飛び出したユーノを横からかつさらいながら一目散りに走り抜けます。後ろから破碎音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。

戦うにしろ何をするにしろ、この辺りでは被害が大きくなる。

「っ！後ろ！！」

「くっ！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人が少ない海岸線。

「……はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っちょろい機能なんて搭載していませんでしょう。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかMAXをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやっとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車ごと飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！こ、ここ、まで、くれば…」

カクカクと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平気でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよりはかは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けていますし。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしょうか？」

「えっと、あの、それは……」

ロロもるユーノ。

言うなら早くした方がよろしいですよ。

「もう、追いついてきましたか……」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠目ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「っ、ごめんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです」

本当なら管理局に任せていても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備というものをして来

の方が良いと思う私は悪くないはずです。

「これを　手に取って下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなった。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡った。

私は紡ぐ。

其れは聖約

其れは誓願

其れは不屈の力を手にする為の聖句

「我、使命を受けし者成り」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣　ミッドチル  
ダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に　この手に魔導  
を　レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup.』

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Welcome・New User.』はじめまして、新たな  
ユーザーさん( )』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『I am the Raging Heart. I need your help well henceforth. (私はレイジングハート。以後よろしくお願いします)』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか?」

『Your magic love qualifies you to use me. May I select the optimum configuration for the Barrier Jacket and the Device? (あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか?)』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『It understood. An image, trace e start. (了解しました。イメージ、トレース開始)』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Stand by Ready.』

宝石だったレイジングハートにパーツが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなって弾ける。

『Barrier Jacket setup.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトスカートが形成される。

金色の脛当てが形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『How much do you know about magic? (魔法についての知識は?)』



「無きに等しきと思って下さい。ですが説明を受けている暇もないようです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲って来ないのは、先ほど私のセッティングした光りの所為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さい。出来ますか？」

『Comprehension・Various status is displayed.（了解。各種ステータスを表示します）』

空中に投影される複数のモニター！。

敵はジュエルシールドの暴走体。魔力ランク推定A A。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D + 総合ランク推定C +

使用可能魔法

シュートバレット

デイベインシューター  
パイロシューター  
クロスファイアシュート  
チェーンバインド  
デイベインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）  
プロテクション

ほとんど自分の才能無しには涙すら流れず、渴いた笑いも出ませんよ。A・Sで高町なのはがAAAランク。この歴然の差はなんなんですか!?

……ですが、チェーンバインドとクロスクロスファイアシュートが使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもいきません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでしようか？

なのにプラスファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでしょうか？

考えていても仕方ありませんね。

『G a a a a a!~!』

「くっ」



## 第2話 星の光の生誕 - Birth of a stellar light

今の主人公なのは、実力的にはsets開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があっているかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

**第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）**

レイ八さんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にシヨルダーアーマーを追加。下半身がs t sのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

side:高町なのは

『G a a a a a ! ! !』

「くっ！」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から目を離さないように努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、躓きそうになっても、気合いで脚を動かします。

大体10m離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『G a a a a a ! ! ! ! !』

暴走体が触手を伸ばして襲ってくる。その数は4本！

「デイベインシューター！」

『Divine shooter』

今形成出来たシューターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Protection』

「くっ！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「っ、やはり私では」

『Front cautions! (前方注意!)』

「なっ！？」





めり込む身体を動かして抜き出る。

「くっ、がはっ！」

込み上げる吐き気を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲っては来ない。

襲ってこないのならば好都合！

「レイジングハート、ディバインバスターを撃ちます」

『All right・Devine Buster, standby・Mode change・Cannon Mode』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーユニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Shoot in Buster Mode・』直射砲』形態で発射します(』

砲口にミッド式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『Immediate fire when target is locked. (ロックオンの瞬間にトリガーを)』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「っ、デイバインバスター！シュートッ！！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、デイバインバスターに撃ち砕けぬものはないと。

ですがそれを放ったのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧にでもしたのでしょうか。

デイバインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてその赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすディバインバスター。

『Front watch! Hostile object energy reaction increase! (前方警戒! 敵性体エネルギー反応増大!)』

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

『Protection』

「きゃああああー!!!!」

展開したバリアごと吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うっ、ああ、ああっ」

『F O O O O O.....』

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。



心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は高町なのには成りえない

シュキンっと、空を裂くような音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね

『Protection』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが砕ける音、そして全身を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズレたのですか？

『Please do not give up.』諦めないでください

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up. (私は、諦めたくはありません)』

.....。

『I was able to meet the person using me at last. (私はやっと、私を使ってくれる人に出逢えました)』

レイジングハート.....。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power. (私のすべてを貴女に捧げましょう。私は、貴女の力になりたい)』

レイジングハート.....。

『It must not be discouraged. A master and you are not one person. (挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ)』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリア・もっひとりのわたし。

アリス……。

『being in a you side and keep ing the heart , although I can do nothing . . . if . . . it can do . . . ) 私には何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐら いなら出来ます(』

アリス

『Therefore , the Raging Heart . Please become the power which cuts a master's way . (だからレイジングハート。あなたはマスターの道を切り開く力になってあげてください)』

『I understand . I mean to from the first . Are reliable . (わかりました。もとよりそのつもりです。ご心配なく)』

レイジングハート

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち砕く勇気を私に！」

『All right , My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Hover Feather』

後ろ腰辺りに桜色の一对の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいつたい？

『The magic for empty games was arranged in land battles. Movement on land becomes smooth now. (空戦用の魔法を陸戦用に変じしました。これで陸上で移動がスムーズになります)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Hover Feather

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。



ジュエルシード暴走体 推定ランクA A +

物理質量攻撃 触手（円柱）威力A A 射程推定A + 発動速度推定B +

砲撃 威力A A A - 射程推定B \ A A 発動速度A

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D +（ホバーフェザー発動中はA +） 総合ランク推定C +（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シールドバレット

デイバインシューター

パイロシューター

クロスファイアシュート

チェインバインド

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

プロテクション

ホバーフェザー

「さあ、2人とも、反撃の時間ですよ」

『Comprehension .

Please leave support .（了解。サポートはお任せください）』

『About the fortune of war , it

『 i s  
m y  
m y  
m a s t e r . ( じ ) 武運を、  
マイマイマスター (

**第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）**

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこうしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハさんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

#### 第4話 星光よ、使徒を撃て！

side：高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはATフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やATフィールドはイメージしていなかった為、余計なことを考えるのもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだってやってみせたんです。

10年後、出逢うかもしれない1人のガンナー。

彼女の気持ちは、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。



『Comprehension・Best evasion、  
Cross Fire deployment! (了解。全力回避、  
クロスファイア展開!)』

「くうつつ!!」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は30本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーによつて、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は0。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは6つ。

「クロスファイア! シュートツツ!!」

6発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。

4発は迎撃され、残り2発はあろうことか、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで!?!」

『Barrier generating of presume  
d A + is checked. (推定A+のバリア発生を確認)』

「ならばバリアごと撃ち抜くまで! シュートツ!」

6つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

デバインバスターは残り1発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアシュートの砲撃バ  
ジョンしか思いつきません。

「レイジングハート! カノンモード!」

『mode change . cannon mode .』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフ  
ルを支えるように添え、トリガーユニットを握る。

デバインバスターの衝撃を子どもの私が抑えるのには、やはりラ  
イフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高  
町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「デイバインバスター！シュートッ！！」

クロスファイアシュートに続くようにデイバインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアシュートをバリアで防御。その直後を襲ったデイバインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

荒んだ呼吸を整える。

デイバインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は

「It is an energy reaction to the center of an explosion!」(爆心地



にエネルギー反応！』

「何ですって ！!?」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「そ、そんな……………」

今ので落とせなかった…………。

もう、ディバインバスターは撃てないというのに…………。

「ッ！…！うおおおおーッ！…！」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシューターッ！！クロスファイアシュートッ！！」

『Pyro shooter and Cross Fire  
hoot』

クロスファイアシュート6発とパイロシューター4発の計10発を

至近距離で撃つ。

ジュエルシールドには、まだ届かない！

「いい加減に 墜ちなさい!!」

カノンモードの砲口を触手に押し当て

「シユートバレット連射!」

『Shot Barrett automatic fire!』

カノンモードの先端から連射されるシユートバレット。しかし零距离射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。

「あああああ—————!!!!!!」

込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。  
しかし

プシュン!

「レイジングハート!?!」

『Overload・Compulsive cooling』

撃ちすぎた!?

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がっ!!!」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の目と暴走体の目が交差する。その身体には束ねて円柱になつた触手

空中コンボ……

『Protection』

「っ、きゃあああ——!!」

またバリアごと吹っ飛ばされ、砂浜にうつ伏せになる私。

『Is it safe? Master(ご無事ですか?マスター)』

どうする!?どうする高町なのは!?

デイバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシユートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない!

他に私が出れることは!?

逃げる?

そんなの論外です!私は高町なのはとなるためにも、こんな所で退くわけにはいかないのです!

誰かに援軍を?

ユーノは戦えないでしょう。

それにこうも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまっ=ジ・エンド。

バインドで拘束して集中砲火?

無駄でしょう。シュートバレットとはいえ零距离連続射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアシュートとディバインバスターでやっ  
と破れるバリアの前では。

もつと、私に攻撃力のある魔法が使えれば

『Hover Feather, Output fall!  
Please master and concentrate!  
ホバーフェザー、出力低下！マスター、集中してください！』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでくれた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ

「……レイジングハート」

『What is it? Master (何でしょうか? マスター)』

「フルドライブを使います。もうそれしか手立てはありません」

『It is it why? (な、何故それを?)』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持っているのですから。

フルドライブ

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカーコアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいでしょう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です！ですから、レイジングハート！」

『I understand. Surely prepared』

ness of the master was receive  
d. (わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました)』

「ありがとうございます。レイジングハート」

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上げら  
せる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『All right limit release. Full  
Drive』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一対の桜色の  
翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲う倦怠感。ですが、それを上回る力  
の鼓動も確かに感じます。

「チェーンバインド！」

『Chain Bind』

突き出した右手の先に展開されるミッド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリアごと雁字搦めにしてしまいます。

『Hover Feather, output full op  
en!』

「やあああああー！！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懐へ突貫します。

「デイベインバスター！スタンバイ！」

『All right. Divine Buster, sta  
nd by. Charge start.』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。



『Master! (マスター!)』

「私に構わず続けなさい!」

『∴Comprehension・(∴)了解』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を

『It is 5 more seconds till the completion of charge! (チャージ完了まで後5秒!)』

「ホバーフェザーへの魔力供給を80%カット!少しでも良い、チャージにまわして下さい!」

『All right・80% of magic supply cut・Count 4 (オーライ。魔力供給80%カット。カウント4)』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならぬ時。機動力の低下は何かかすれば良いだけです!

『An enemy part, bind break! Attack comes! Numbers are 3 and evasion! (敵一部、バインド・ブレイク! 反撃が来ます! 数は3、回避を!)』

「構いません!そのまま直進、最小半径で回避!」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避!

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい!」

『All right. Count 2 (オーライ。カウント2)』

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければなりません!」

「デイバインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが」

『An enemy and bombardment come!  
! (敵、砲撃が来ます!)』

「空へ!!!」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Completion of magic charge! (魔力チャージ完了!)』

「レイジングハート!私を敵の眼前へ!」

『All right. My master! (オーライ。マイマスター!)』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通るのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のショルダーアーマーが碎け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に応えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーユニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を

「私を、勝たせて下さいっ！！」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシールドを大事にする触手に突き刺すように押し付ける！

『Starlight Breaker・Stand by Ready.』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が　速い！

「スターライトブレイカー！！デッド・エンド・シュートオオオオオオツ！！！！」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となって解き放たれた。

「…私の　私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクツ、シューーーーッ！！！！」

ダメ押しの一撃。

長い長い、されども20分にも満たない最初のジュエルシールドとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。



**第4話 星光よ、使徒を撃て！（後書き）**

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスターライトブレイカー

本家なのはより無茶をしないとダメな我が家のなのは。あとがコワ  
い……

第5話 実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。by高町なのは

side:高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は1つではなく

「ふ、2つ……?」

『receipt number XX・XXI』

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝について四つん這いになってしまいました。

ふ、2つなら、あんなべらぼうに強かったわけが理解出来ました

「っ、くっ、はぐっ、がはっ」

息苦しさで胸の痛みに目を瞑って耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、ゲホッゲホッ」

口から流れ落ちる液体。





魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくとも傷も負ってる。

それに

「私が、高町なのはであることを証明する為に！」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side:高町なのは

やっと呼吸が落ち着いたところで、レイジングハートを杖代わりに立ち上がるうとしますが、膝に殆ど力が入らずに、レイジングハートにもたれかかるように何とか立ち上がります。

興奮状態が落ち着いてきた所為か、頬や背中がヒリヒリしてきました。

腰の痛みなんて久し振りですから長らく忘れていましたが、懐かしさを感じて、私が今此処に確かに生きて存在しているのだと感じます。

「…さて、帰りましょうか」

『It is tired with labor. Meister. (お疲れ様です。マイスター)』

「死ぬかとも思いましたがね…」

まさか生身で、偽物とはいえ使徒と戦うなんて。しかも力を司る最強の使徒。

外から撃つても仕方がないから零距离で撃ち込みましたが、良くこれだけの軽傷で済んだと、普通なら手足の2、3本失ってもおか

しくない攻防でしたね。

今後を考えると、もっと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクA A +

ランクA A Aのフェイト・テストロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まったばかりなのですから

|||||

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入って自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちやにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋が有り、剥き出しの柱と木壁だけの1階部分は物置として使い。2階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていていま

す。置ききれないプラモの大半も向こうです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。目を覚まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼ってあり、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あつ、いたたた」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

|||||

「おはようなのは！って、どうしたのよ！？そのほっぺた！」

バスに乗ったところでアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄ってきました。

「なんでもありませんよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまいました」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行った！？行っていないなら今すぐ行きましょー！」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言っても5段くらいからだったので、少し痣になりましたが概ね問題はありませんですよ」

「あーんつもー！だからなんであんたはそうやって冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいっつもなんでもありませんしか言わないのよ！」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どもにする怪我の痛みはあんまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

つと、言葉で言っても聞きそうにないだろうアリサの手を引いて、いつもの後ろの席に座ります。

「ちょ、ちょっとなのは…」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だって痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは…ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたから、血の残り香に自分と戦っているのでしょうか。

こういう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやって貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによって使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法をチヨイスしてアクショントリガーに登録していきます。

そして放課後、送っていくというアリサの誘いをやんわり断り、帰路に着きます。

アリサとすずかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすずかの理性が心配ですし、確か今日も1つジュエルシードが発動するはずだったような？

第1期はテレビでなく二次創作からの知識が主である為、かなり曖昧不確かなのが難点なんですよね。

劇場版はちゃんと見ている分心配はありませんが、初っ端からジュエルシードの数に違いがありますから、どっちのルートを進むかわからないんですよね。

一番手っ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なのですが。

とりあえず今、レイジングハートは色々忙しい為、適当に街の中心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのかを考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇場版形態の為、TV形態のレイジングハートを再現してみたい思いもあります。喧嘩になりそうですね。



他にはバルディッシュのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

《それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、こっちは魔法は無いはずなのに》

《何者と言われましよ、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなかるうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないとは思いますが？》

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにトラハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしれなかったでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくもありませんし、管理局のトップがあるエゴ塗れの脳髓で思考がお花畑な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

《なのは？》

《……すみません。少し考え事をしていました》

今考えても仕方がないことですね。

『The completion of adjustment .  
The next battle to a motion s  
hould become light now . (アジャスト完  
了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです)』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその思いにも応えなければ

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は

《なのは！》

《ユーノ、今の感覚が》

《うん。ジュエルシールドだ！結構近い！》

《私は先行します。ユーノもなるべく早く速く来て下さい》

《ダメだよなのは！1人じゃ危険だ！》

《こうしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めて、被害を食い止めておかなければ……》

《ちょ、なのは！なのはったら！》

私はユーノの言葉を無視し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走って転ぶような無様は 自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。50m13秒台ですが……。

やってきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確か八束神社でしたか？

「いきますよ、レイジングハート」

『Stand by Ready』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジングハートがデバイスモードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Hover Feather』

背中と足にホバーフェザーが展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに跳び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には

「あれは 狐……ですか…?」

『Kuooooooooo……!』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。  
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましよう。レイジングハート、アリス」

『My master which should go! (行きましよう、マイマスター)』

『Please do your best. It is the Raging Heart to a master. (頑張ってください。マイスター、レイジングハート)』

ジュエルシード暴走体：狐型 魔力ランクA+

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+ (ホバーフェザー発動中はA+) 総合ランク推定C+ (ホバーフェザー発動中はB) 使用可能魔法

シユートバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシユート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター (2発限定。3発目は不発の可能性大)

スターライトブレイカー (フルドライブ時条件付きで使用可)

プロテクション  
バリアバースト  
リングバインド  
チェーンバインド  
クリスタルケージ  
ブリッツアクション  
ホバーフェザー  
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話 新しい友達は『くおん』です(前書き)

調子が良かったので連投です！

第6話 新しい友達は『くおん』です

side:高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Kuooooooooo!!!』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート!」

『Protection』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「っ、きゃうっ!」

『Master! (マスター!)』



突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故！？防御には成功したはずなのに！

『Kuooooon!!!』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラズマランサー？それともスタンバレット？

『Kuoon!!!』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット？

「レイジングハート、もう一度！」

『Protection』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「っ、きゃああー!!」

『Master!?(マスター!?)』

またです。バレット自体は防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように

「まさか!?!」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは

4つのパズルから導き出された答え。こういう時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動攪乱で攻めますよ」

『I understand. I also judge th

at it is wiser. Please do not  
carry out unreasonableness. (わか  
りました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしな  
いで下さい)』

「それは向こうが許してくれませんかでしょうね」

『Fushuuuu……』

バチバチと帯電する暴走体。体勢を低くしていると、突っ込  
んでくる気のようにです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、  
神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印するには少々骨が折れそうですね。

『High plasma object! It is rap  
id approach from back! (高プラズマ体!  
後方より急速接近!)』

「回避後、180度ターンと同時にダイバインランサー展開!」

『All right!』

地面を滑りながらスライドマニュアルでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は囿。

『Kuooooo!!!』

後ろから本体による直接攻撃！

『Devine Lancer』

私の周囲に展開される環状魔法陣に包まれた桜色のスフィア。その数は12。

私は球技も絶望的ですから、誘導系より直射型の方を求め、レイジングハートに組んで貰った新しい魔法。

デバイスランサー

「ファイア!!」

12個のスフィアから次々と槍型の魔力弾が発射。配置感覚も考えているため、回避する間すらなく直撃してゆきます。どうやらバリアは張れないようですね。ならばこれで幕引きです！

『Blitz Action・Devine Buster・Stand by Ready!!』



「デイベインバスターー!!」

零距离でのデイベインバスター直接攻撃。

スバルが近代ベルカ式で放つそれを真似た物ですが、デイベインバスターはデイベインバスター。

威力は十分であり、加速度も相まって相当のアップパーになっているハズ。

現に私の3、4倍ある暴走体の巨体が浮き上がっていますし。

『Mode change! Cannon mode! Devine Buster. Stand by Ready!』

カノンモードに変形したレイジングハートを、浮き上がった暴走体の、デイベインバスターを打ち込んだ同じ箇所突きつける!

「シュートッ!!」

トリガーを引き、再び零距离でデイベインバスターを放つ!

『KYUOOOOO!!!』

「ジュエルシード、封印！」

『Sealingg.』

光りが晴れ、ジュエルシードと分離された狐。

『receipt number XVII.』

「…スウ…ふう…」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レ  
イジングハートは。

「……………」

ジュエルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「……………」

もふ

「……………ふにゃあ……………」

な、なんですかこのふっくらもふもふもっころもかまかの癒やし物  
体は ！？

「なのは！！」

「ユーノ？」

ユーノが来た様ですね。

「なのは！ジュエルシードは！？」

「しーっ、ですよ。ユーノ」

「????？」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街  
の屋根をブリッツアクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、  
家に向かいます。

は、早くこのモコモコをゆっくり堪能したい！





ビゲームが原因かもしれない。

何度か挑戦してみたけど、ノーマル難易度でもかなり難しいのに、ハードモードはもつと難しい、てか僕にはノーマルですら無理なのに、なのは縛りプレイというのもやる上に、これでも簡単な奴だつて言うんだ。

ちなみに難しい奴は1ステージすらクリア出来なかった。これがなのはが言うムリゲーっていう意味を正しく知った時だった。

でもこの魔装機神つてやつはスゴいなあ。

確かに空想の設定でも、僕達の魔法とはまた違った解釈に興味がないよ。頑張つてやってみようかな？

side:高町なのは

至福です。

もはや語るまい……。

言葉は不要か

言葉を飾ることに、意味はない。

ただただ、至福です。

「……クー……ク　!?」

あ、起きたようですな。

キヨロキヨロ見渡している様がまたなんとも……。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです!

「　!?　クー……!!」

後ろからもさもさの物体を抱き締めます。

……ふにゃあ……。

「クー……!!　クー……!!」

「な、なのは、その子嫌がつてない?」

「なにを言いますかユーノ?ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう?もう大丈夫ですからね?怖い物は私が取り扱いますから」

泣き声を上げて狐はもがき続けてる。

ユーノは見て思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアツパーディバインバスターからレイジングハートの零距离ディバインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「クーーーーー!!!」

「あっ…」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

目のあったなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「……クー……クオン……」

「そう、久遠　ですか」

「クオツ　！？クー……」

私が久遠と正しく発した言葉にはつきりとビクンっと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とら八の久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病　通称  
HGSでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いったいどの程度この世界にとら八が混じっているのか皆目見当もつきません。

劇場版かTV版かも判らないのに横腹からとら八まで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦闘民族高町家。

もしとら八設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いないと気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがあります、それでも月に一度二度あるかないか、あまり出歩いては心配もされず。

あまり夜は動くべきではないのでしょうかね。

「久遠、こっちに来て下さい」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まったまま動きません。  
仕方がありません。

「クオン！？クー、クー」

「…ふにゃあ……………」

至福です……………。

「クーーーー！！」

「あ、あはは……………」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？僕オトモ扱い？」

「クウーーーー！！」

「…ふにゃあ………」

## 第6話 新しい友達は『くおん』です（後書き）

V S 久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。

しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値はデカかったです。

決して久遠が弱いんじゃない、なのはがちょっと強くなったのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式 O H A N A S I でも

ちなみにとらハキヤラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。



第7話 御神の剣（しるぎ）（前書き）

ちよつと長めです。

## 第7話 御神の剣(つるぎ)

side:高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだ  
と思った私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締  
めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢って5日目。集まったジュエルシード  
は3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が  
複数あり、これ幸いにとちゃんどぐっすり寝るようにしている為、  
疲労感は無く。レイジングハートも二度の戦闘経験から私の為にア  
ジャストとブラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーショ  
ンを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しづ  
つですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘  
スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだ的が大きいいジュエルシードの暴走体だから当てられるものの、  
フェイト・テストロツサにはまだまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私  
自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のリビングへ。

「母様、おはようございます」

「おはようなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませぬ。

「父様達は道場の方ですか？」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向かいます。

《そう言えば、道場って言ってたけど、なのはの家族はなにかやってるの》

ユノが念話で質問してきます。そういえばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

《え、えーっと……》

《御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針とばし 棒手裏剣のようなものや鋼糸こしと呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です》

《さ、殺人術って……》

《御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立った要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです》

《な、なんか、壮大だね……》

《ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定AAAからS+、条件付けでSSクラスでしょうね。私の私見ですが》

《す、凄いなだね……》

《達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のを見たこともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粹な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう』

《も、もういいよなのは。早く行こう》

《そうですね》

改めて御神流のことを軽く振り返ってみたこの時、私は思いました。そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流

そのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持っていましたが、場合によっては兄様が姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立っている父様。そして道場の中心で

「せえいつ！」

「ふっ」

二本の小太刀の木刀で打ち合う兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか？」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうな。でももう少し待ってくれ、今良い所なんだよ」

「良いところ？」

小太刀を構え鏝競り合う2人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄ろうとしますが

「おっと……なのは、そこから先は来ない方が良さぞ」

「え…？ツ！？」

ゾクリッ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか

「今の……」

「んー、まあなんだ、殺気というか闘気というか……なのはにはまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいませんが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

《すごい……これほどの戦士は僕たちの世界にもそうそう居るものじゃないよ》

《現代にもあまり居ないと思いますよ……》

《あ、なのは、危ない!》

《え? なっ !?》

ユ一ノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようにはなりました。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使った渾身の一撃で

「ダイバインバスター!」

カチ上げる!!

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カランカランという音が道場に響き、ドンツという私の着地音が続けて響きます。



自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やってしまいました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せるでしょう。

「いやあ……凄いななのは、何時の間にそんなこと出来るようになったんだ？」

父様が和やかな声で言いながら、私に歩み寄って頭を撫でてくれました。

幾つになっても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「ごめんねなのは、びっくりさせちゃって」

「いえ、偶然ですからお気になさらずに、姉様」

「驚かせてすまなかったな。それと、あの一撃は中々の切れだったぞ」

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、こうして態度でそれを補ってあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からいう事はもうあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにしても、兄様もやはりとら八方面色が強いように感じます。何より踏み込みの時に一瞬脚を庇うように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかTV版以前に、どこからリリカルなのか、どこまでとら八なのかまったくわかりません。

そのうちHGSとか出て来たりするんじゃないんですか？

そうになったらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジュエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いとも！」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくてゴツゴツしている手。

私はこの手が大好きです。

「あゝあ、とつとつなのはも御神流を習うのかあ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思うが」

「だってあの運動音痴のなのが、あんなアッパー決めちゃったんだよ！？私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かったじゃないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか？」

「わ〜んなのは〜！！恭ちゃんがイジメるう〜！！」



いや、今はなのはの拾ってきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろう。あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろう。さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だったただけだ。

何よりこうしているとどこか心が落ち着くし、考え事をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだだよな」

5日前の夜、なのはの拾ってきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ掻き回され怪我をしたとなのは言っていたが、頬からの他に右腕の方からも微かに血の臭いがした。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭いだった。

機械いじりで火傷したと言っていたが、その日から家に狐の気配も増えた。

フェレットに狐となのはの怪我。何か関係でもあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾いた美由希の木刀を力チ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育ってきたのはが、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を発した事。

何かあったのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱いていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になってからの事だ。あの子は鋭い子だ。

御神流と 正確にはSPの仕事と父さんの怪我の関連に気づいていたのかも知れない。

それに俺の焦りとプレッシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのでなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで昔じゃないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかったが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張って、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切なものを守る為にあると。





契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジンググハート、セットアップ!」

『Stand by Ready・Setup!』

レイジンググハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締めながら、ユーノを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジンググハート」

『Hover Feather』

ホバーフェザーを展開し、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジンググハート、速度を上げて下さい」

『All right・Blitz Action!』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。



八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか？」

「そうかもしれないね。行ってみよう？」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間でダイバインランサーやデイベインバスターを放ったのですから、その魔力余波に反応せず動しなかったジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあったか、あとから持ち込まれたか

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイト・テストロツサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サーチャーへの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量がありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、こつも暗いとね。僕が照明魔法を使うからちょっと待ってて」

ミッド式魔法陣がユーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスフィア。

「これで少しは探しやすくなったかな？」

「ええ。では再開しましょう」





バリアを張り、何者かの攻撃を防ぐ。

「なのは！」

「ユーノ！結界を！」

「う、うん！広域結界！」

ユーノの魔法にて八束神社一帯を包む結界が張られる。

『G u a a a a a a ! ! !』

「と、鳥い！？」

「大きいですね。焼き鳥何人前でしょうか？」

現れたジュエルシードの暴走体は鳥型。大きさは約6m弱。

『G u a a a a a a ! ! !』

翼を羽撃かせ、暴走体は羽を弾丸のように放ってきた。

『Protection』

「くっ」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きゃあっ！！」

「炸裂弾！？なのは大丈夫？」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、ディバインランサー展開！」

『All right! Devine Lancer・Stand by Ready!』

「ファイア！！」

6つのスフィアからディバインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、ディバインランサーを回避する。







『Guaaaaaa!!!!』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ

『Gua!?!』

「デイベインバスター!!!」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放!

暴走体の懐にドンピシャで突貫し、アッパーと同時に零距离でデイベインバスターを撃ち込む!

そして

「ジュエルシールド、封印!」

『Sealingg!!』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Devine Buster!!』



『Protection.』

「くっ、ああああーっ!!」

バリア事押しされ、そのまま木に追突する。

「がはっ!!」

「なのは!!」

『Gyuaaaaaa!!!!』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない!

「くっ!」

「なのはー!!」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やって来ませんでした……。



もう一度、砲撃を喰らわせた場所にレイジングハートを突きつける！

「リミット解除！レイジングハート！フルドライブ！！」

『All right！ limit release・Full Drive！！』

フルドライブにカノンモードのフレームに展開される一対の桜色の翼。

環状魔法陣がフレーム、トリガーユニット、柄に次々と展開する。

残った魔力と周囲に散らばった魔力を有りつ丈集める！

「デインバスター！！マキシマム・シュートオオオツ！！！！」

トリガーを引き、3発目の零距离デインバスターが解き放たれる！

「ブレイクッ！シューーっトッ！！」

『GUGYaaaaa！！！！！！』

今度、こそ!!

「ジュエルシード!封印っ!!」

『Sealing!』

デインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード2  
個と黒い鳥……おそらく鴉。そして兄様の鋼糸。

『Receipt number XIII・XVII』

「っ、ぜい……はあ……はあ……はあ……がはっ!」

「なのはっ!!」

駆け寄ってくる兄様。

また、無茶をしてみましたね……。

「なのは!なのは!なのは!」

「……だい、じょうぶ、ですよ……よし、少し、やす……めば……」

兄様に魔法がバレた。





おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは……！」

「私が勝手に、首を突っ……込んで……いるの、ですか、ら……」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかった。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい……」

「ユーノも……な」

「僕は……」

なのはを背負って、俯くユ一ノの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「きよ、恭也さん……」

「話しはあとでゆっくりと聞かせ」

久しぶりに背負ったなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負った5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに遅しく育ってしまったことを少し嬉しく思った。

とりあえず美由希。お前本気でこのままだとあつという間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話 御神の剣（つるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とら八恭也スペックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

## 第8話 切なる言葉

side：高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありませ  
ん。

「そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「うっ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしよう。

焦って準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持っていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まあ、そうなる運命であると言われてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが

「それになのはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれせん。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかった戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まあ、大きなケガもなく済んでいたから良かったものの、今日俺が居なかったらどうなったか、それは一番なのは自身が良くわかっているだろう」

「はい……」

あの時兄様が居なかったら、きっと私は

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろうが、俺達は家族だろ？」

「っ！！」

「もう少し、俺達の事を頼ってくれたって良いんだぞ？なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのではない、異物な存在である私を家族と言われる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙っておくから、ちゃんと話せるようになったら話すんだぞ？」

「はい……」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを与える。

高町なのではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なののである事を証明するまでは

「クウ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ4日でも、久遠は私の事を好いてくれているのを感じます。

この世界がどの程度とら八に浸食されているか判りませんが、場合によっては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならぬかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。

久遠はとら八キャラではありませんが、それでもリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはでなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要ない壁も作らずに懐を許してしまえるのです。

兄様が出て行った作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢って、止まっていた作業が少し進ませる事が出来ました。

何時か久遠と戦わなければならない可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によって行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粋な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や霊力効果を防ぐ事が出来ない。



私が久遠と戦った時に電撃だけ通ったのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやAMF環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでプラーナが存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乘せてのスクワット。

それが終わった後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようなのは。昨日はぐっすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によっては小太刀を振るえない状況も考慮されてもいるのでしよう。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしれません。

高町なのはが御神流を習っていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていただでしょうか。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古。

私は父様から御神流とはなにか？についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違いはないのですが、ただ知っているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の





それを越える為の力が御神流。

大切なものを守る剣、御神流。

その志しからとは離れたところに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。

今年が終われば、無印やA・Sも終わる。

だから今だけは

「なのは〜！一緒に入ってもいいか？」

父様の声で現実に呼び戻されます。

「ええ、構いませんよ」

「それじゃあ失礼するよ〜」

腰にタオルを巻いて風呂場に入って来た父様の身体は、私以上にハッキリと判る傷痕だらけです。

「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなあ」

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入ったのはこの私になる前の私の臆気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしょうか？

「それにしても、なのはは呑み込みが速いなあ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか……？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕むコブセン下。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みでもあるんじゃないか？」

頭を洗ってもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかってしまっただけですね。

「ええ。悩み事はありません。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならぬ事故、父様にも話せません」

「そっか。なのはも、大人になって来たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

## 第8話 切なる言葉（後書き）

一応ちよつとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を

家族

我が家なのはにとつてはとても大切で、本家なのは次に心の悩み  
です。

私も戦闘民族一家高町家に居候してみたい……。



第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（前書き）

軽く誤字を修正。

第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？

side：高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋JFCの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流 斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せつかくの魔装機神体系の魔法造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ませんが、最大の違いは対AMF環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせAMFは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。AMF効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないのと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使うということも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまつのは、ミッド式やベル力式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット

どこそのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターみたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこそこのなのはの身体になってから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張って言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のとコレでかなり悩みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん！」

「おはようなのは！って、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューティープリンセス。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になってテンガロンハットを被ってから、ハーケン言葉を使ってみてたりします。

だってカツコイいんですもん。それにこの良き容姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しくらい女の子らしいオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカツコイいから良いと思うんだけどなー」

「さすが！良いの！？このままなのはが男の子になっちゃっても！」

「そ、それは……………良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよ！！……………ま、まあ、それはそれであたしも……………」

「さすが、何を想像して顔を朱くしているのですか？」

「それとアリサ、怒って朱いのかすすかと同じ意味で朱いのかわかりません。」

「OK、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかってるわよ！行くわよなのは！さすが！」

「うん。行こっかなのはちゃん。アリサちゃん」

「OK、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとさすがが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかしコートでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。護身用です。

あと半分趣味で造った炸裂火薬打ち出し電動式超合金エアガン『ナイトファウル』と火薬加速式超合金エアガン『ロングトウム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まあ、眼に当たると怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まあ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーコートまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

5月は時々軽く寒かったりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いので嫌いですから。厚着しても寒いんですよね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが……」

ひよう……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシユッ」

「ちょ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。ご心配なく」

しかしクソ寒いですね、5月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちょ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはようございます」

「お？来たかなのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なっかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返ってから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めてきます」

「ん？ああ、気をつけてな」

「わかりました」

てくてくと歩いて、コートの端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかちょうど良い高さの切り株も発見。ふむ、やってみましょうか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流 斬へ  
繫げます。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、シヨウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リップパー！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイッツ！」

リップパーの斬撃に射撃を織り交せて、最後にステーキを撃ち込むテキサス・ホールデム。

まあ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリップパーとステーキは頑丈、ステーキは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまかけて習得したハーケン・ブラウンングの技の数々。まあ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたものですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ」



ナイトファウルを真上に投げ、ロングトウムで撃ちつつ落ちてきたリッパ―が回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトウムの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしょう？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパ―攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せい！や！7発目！！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでシヨウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鍔を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フツ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュ 2nd、ファントム・ホールデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきれないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン？

パシンツッ！！

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持って顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ！それ本物じゃないでしょうね！？てか、私に惚れないでってなんなのよ！？なにがしたいのよ！？曲芸師にでもなりたいの！？てゆーかおもいつき目立ってるわよ！！」

「なのはちゃん、カツコイい……」

ツッコミ乙ですアリサ、アナタなら八神はやてと全国行けますよ。

そしてさすが、練習すればあなたにも出来ますよ？

「ほんと！？教えてなのはちゃん！」

「やめいー!!」

すずかは雰囲氣的に、てか名前に錫華姫でも

「OK、エブリワン。とりあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカッコ良くキザにキメるんですよ。

まあ、試合前の余興としては重畳でしょう。

170

「（凄いななのは、あんな曲芸染みた技、どこで覚えて来たんだ？）

」

「（なのも別ベクトルで軽く非常識だと僕は思うんだけどなあ…

…）」

なののは曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフェレット少年だった。

|||||

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすすかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すすか」

「うん。私、胸がときどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトフアウルとロングトウム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳4割の高町なのはスペシャル。一杯100円也

「でもなのはちゃんの曲芸もカッコ良かったよ!」

「アンタあんなのどこで覚えてくんよ……?」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウィンクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとう。楽しんでくれたかな？」

店から父様が出て来ました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

さっきまでは翠屋JFCのコーチだった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服がコロコロ変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか？専業主婦だからでしょうか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはちゃんも」

「パパもびっくりだよ。いつの間になってね」

「子どもは陰日向で日々成長するものですよ、父様」

「はは、違くない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですよね。

憑かれている？呪いの品ですか？

たかまちなのははのろわれた。

なんてテロップとか出ませんよね？

「それでは私達は今日はこの辺でお暇します」

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けに」

「私はお父さんとショッピングです」

「そうだったのですか、近くまで送りましょうか？」

「ううん。迎えに来て貰うから」

「あたしもよ」

「そうですね、明日お話しを聞かせて下さいね」

「うんー！」

「いいわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ？」

「そうですね。せつかくの日曜日ですし、久しぶりにウィンドウショッピングに行ってきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そっか、気をつけて行ってらっしゃい」

「はい。では行ってきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行って久遠を連れて来て下さい」

《え？別にいいけど、久遠を迎えに行つてからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかったよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生並みに後悔するのです。



第9話 さすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ ！？（後書き）

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが

整った容姿だからこそ許されることもありますよね？

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

またまた誤字修正になります。期待させてごめんなさい。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

side: 高町なのは

「こつして出掛けるのは、久しぶりのような感じがしますね」

『Well. Because this one week was these very days. (そうですね。この一週間は、とても濃い毎日でしたからね)』

受け答えたのはアリス。

今私達はあの海岸へ来ていました。

私の泣き場にして、私が私を始め、私が高町なのはを目指し始めた場所。

「たった3度ですが、私はあの時から強くなっているとは思いますが」

でなければ鴉の暴走体にも苦戦していたことでしょう。

上手く立ち回れるようにはなった。

でも高町なのはには程遠い。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私が使っ異端で矛盾の戦闘スタイル。

御神流

守る為の剣。

高町なのは

私であり、私でない。

不屈の心と正義感に溢れる心優しき魔法少女。

『高町なのは』

高町なのはではなく、高町なのはである私。

沢山の友人を得て、家族に囲まれて、将来は魔法使いの男の子と敵対しながらも恋をする乙女に

将来は友人に囲まれながら様々な期待と希望を背に、娘を育てる良き母親に

そんな未来を奪い、居場所を奪い、身体を奪い

高町なのはに成り代わる存在の私。

私が『理』を真似るのは、本当の本当は、高町なのはへの罪悪感を少しでも誤魔化して減らす為

私は星屑。

私は居てはいけない存在。

この世界で生きている権利すらないはずの存在。

この世界にとっては異物の存在。

そんな世界に逆らって、もがき足掻いて、方法すらわからないのに自分が高町なのはある事を証明するのだと言って、世界と意地を天秤に掛ける最低のうつけ者。

こんな私、何度も消えてしまえと思った事は数知らず。

本物の高町なのはが私を消し去ってくれらるだろうと思いつけ星霜を  
経る。

でも

「（消えたくない。消えたいのに……消えたくない！）」

5年だ。

たった5年。

私にとっては人生の1/6の時間。

たったそれだけの時間で、世界は残酷にもしかし温かく私を縛り付ける。

父様、母様、兄様、姉様、アリス、レイジングハート、アリサ、すずか、久遠、そしてユーノ。

私の運命と偶然が紡いだ絆。

運命は必然

偶然も必然

宿命も必然

世の中は必然で出来ているらしい。

なら、私の存在は何だ？

必然？

そんなバカなはずがない。

次元断層に巻き込まれて死んだのを、閣下の温情でこの世界に生まれ変わったにすぎない。

異物に必然など　あろうはずもない！

「世界は、私は、こんなはずでは、無かったのでしょうか……」

『Meister. (マイスター)』

唯一なのは歪んだ内面を知るアリスは、自分の無力感を嘆いた。

スケッチブックに宿る不完全なデバイス、なのはの使い魔。

自分の存在がマイスターたるなのはに負担を掛けている。

消えてしまいたいと、この一週間何度も思った。だがマイスターの心の弱さを正しく理解しているアリスには、消えることすら出来ない。

なのははアリスに依存している。

それはアリスがファミリアだから、もう1人の自分であり、自分を支えてくれる存在だからだ。

今アリスが消えれば、なのはの心は壊れて砕け散るだろう。

世界の運命と、なのはの存在意義の掛かっているこの戦いには、負けは許されない。落ち込んでいても、折れることは許されない。

そんな現状が、なのはとアリスを追い詰めていた

「っ！？」

『Meister! (マイスター!)』

『 Jewel Seed is Awakening! (ジュエルシードの発動を確認!) 』

魔力波を感じた方向　街中から強力な魔力を感じ、巨大な巨木が生えていった。

ガスツ!!

「なんたる失態ですか!!」

コンクリートに拳を叩きつけ、私は巨木を見みながら思い出した。

今日この日、ジュエルシード最大級の被害が起こってしまうことを……。

「レイジングハート!」

『 Stand by Ready! 』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に　星は天に　そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を



「レイジングハート、セットアップ!!」

『Stand by Ready・Setup!!』

変形したレイジングハートを握り締め、バリアジャケットが形成される。

『Hover Feather! Blitz Action!!』

「くっ!!」

初速無しで一気に瞬間最大速度で、私は街に向かって駆け抜ける!

木の根を撃ち落としながらとにかく中心へ向かうのですが

『Next! intercept coming at 3 o

clock, 11 o'clock, 6 o'clock!

(次! 3時方向、11時方向、6時方向、迎撃が来ます!) 『

「全力で撃ち落としますよ! デイバインランサー!!」

『Devine Lancer! Standby!!』

「ファイア!!」

8つのスフィアからディバインランサーを撃つ。

ディバインランサーは直射魔法故に、自分がトロンベよろしく回転しながら木の根を撃ち落とし、先へ。

木の根の外輪部に着いてからまるで私の侵入を拒むように、木の根やつるのムチ、はっぱカッターやリーフブレードなどが襲いかかってきます。

幸いにも葉っぱやつるは強度がそのままのようで、ナイトファウルのリッパで斬り裂き、木の根はディバインランサーやシュートバレットで撃ち落とししている為、そこまでの消耗が無いのが助かります。

まさかネタレプリカ武器と忘年会新年会隠し芸大会用に身につけた技がこうして実戦で使う日が来ようなんて思いもしませんでしたよ。

左手にレイジングハート、右手にナイトファウルを握って、私は街中をひた駆けます。

途中で巻き込まれて逃げ遅れたり、退路を塞がれた人の救助なりもしているのです、進行スピードは遅いですが、気づいて然るべき私が気づけず、被害を広げてしまった私が出る償いは、これしかありません。

ちなみに顔はテンガロンハットを眼深に被って、出来るだけ顔は晒さないように努めています。

しかし妙です。

ジュエルシードの暴走体は、私には襲いかかりはしますが、一般人は発動に巻き込んだくらいで、あとは攻撃を受けている様子はありません。

魔法が使えるか否かの違いからくるのか、それとも明確な敵意に反応しているのか判断に迷いますが、今は限りなく迅速な対応が急務です。

|||||

side:アリサ・バニングス

あたしは今、親友のすずかとジャングルの中に居た。

別に誘拐されたりとか、どこでもドアとか、レポートとかを使つたわけじゃない。常識だけど、あつという間に街がジャングルになつてしまっただけだ。

「ア、アリサちゃん……」

もともと優しくして、言い換えると自己主張の激しくないすずかは、あたしの背中にくっついて震えてる。

あたしも脚が笑ってる。

でもあたしが少しでも不安をみせたらすすかは泣き出しちゃうかもしれない。

あたしだって怖いけど、そんなのイヤ。

すすかを泣かせる位なら、あたしが少し我慢すれば良いだけ。

「大丈夫すすか、きっと助けが来るから」

「で、でも……」

怖がっているすすかの手を握る。

少し痛い位に握り返されたけれど、顔には出さない。

それでもバニングスの跡取り娘なのよ！

ふ、普段は恥ずかしかったりして出来ないけど、今この非常識な状況だから出来る。

ポーカーフェイス

「私に惚れないで下さいね？」



「まだ見つかりませんか……」

エリアサーチをかけながら探してはいますが、私はそこまでマルチタクスにリソースが割けないというか、あっちこっちで頭を働かすという考え方が未だに馴染まず、エリアサーチはレイジングハート任せ、レイジングハートがエリアサーチにリソースをかけている分、今は私が単体で放てるシールドバレットとナイトファウルでの戦闘を行っています。

『Master・(マスター)』

「見つけましたか!？」

『Please see this, although Jewel Seed is not found yet・(ジュエルシードはまだ見つかりませんが、これを見て下さい)』

戦闘の邪魔にならないように表示されたモニターには、半ばジャングルと化した街を歩くアリサとすずか。

血が出る程に唇を噛み締め、レイジングハートとナイトファウルが震える程、手が白くなる程握り締める。

やっぱり私には高町なのではあるところか、2人の友達という立場すら許されるべきでは無かった……!

私に関わってしまったばかりに、こんなことに巻き込んでしまっ

た！

『Master! Jewel seed was discovered! They are together action immediately to the method of a friend! (マスター！ジュエルシードを発見しました！友人方のすぐ傍に反応有り！)』

「ホバーフェザー推力全開！！ブリッツアクション！！」

一気に高機動に移行した所為か、再び暴走体の迎撃が再開。その勢いは真つ直ぐ本体に向かっている所為か、先ほどとは比べ物にならない。

「邪魔を」

つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレードを斬り裂き八チの巣にステークで撃ち抜き、遠方はディバインランサーで迎撃。

「するなあああー！！！！！！！！！！」

何時もの自分すら忘れて、以前の自分が表に出て来る程、私は周りも見ずに一直線に突き抜けて行く！

アリサもすずかも、高町なのはの運命によって出逢うのは必然だっ  
たかもしれない。でも

「私が紡いだ3年間は、運命だ必然だなんて言わせない!!」

正面から迫る鋭いつるのムチをグレイズで回避しながらリッパで  
斬り裂く!

「アリサもすずかも」

四方からくるはっぱカッターをナイトファウルで八手の巢に撃ち墜  
とす!

「傷つけさせはしないっ!!」

視界の先に捉えたアリサとすずか。

本体に近寄り過ぎた所為か、2人を追い払うようにはっぱカッター  
が集まり魔力を宿し、リーフブレードに変わる。

「どんな魔法だろうと!!ただ」



レイジングハートを握る拳の先に環状魔法陣が展開。ブリッツァクシオンを連続で使い、2人の前に立ちふさがってリーフブレードに拳を打ちつける！

「撃ち貫くのみ！！ディバインツ、バスターー！！！！！」

私の十八番、零距离ディバインバスターはリーフブレードを撃ち碎き、そのまま生い茂るジャングルに風穴を開けて消えた。

「な、なの……は……」

「なのは……ちゃん……？」

兄様に続けてこんな早期に友人にも正体がバレる魔法少女も稀でしょうね。

ディバインバスターを撃った所為か、私に向けて木の根、つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレード、さらには私の放ったのをコピーされたのか、シユートバレットまでが殺到する。

防御も回避も無理と即座に判断した私は、アリサとすずかを守るように抱きすくめ、2人の衣服に干渉、イメージし易い私立聖祥大附属小学校の制服姿のバリアジャケットに再構成、有りつ丈の魔力を防御にまわす。

バリアと暴走体の攻撃が殺到してぶつかって弾ける音に炸裂音。

永遠にも、刹那にも感じる一時

『M e i : s : t e r : … (マイ…スター…)』

背中に感じる熱と途切れ途切れの弱々しい、レイジンググハートとは違う電子音。

背中を振り返れば、突き刺さっている木の根が見えるだけで3本。内どれか1本が貫通していて、お腹が痛くなってそれから熱くなつて

でも私のことなんてどうだって良い……。

『I s : i : t s a f e : ? (い、無事…ですか…?)』

私の背中にはいつも

「ア…リ…ス…?」ぶっ

口に広がる鉄臭い味。

それすらどうでも良い……。

『It was good. My darling  
meister (良かったです。愛しい私  
のマイスター)』

「アリス…？アリス？」

『……………』

「ふざけッぽっ、…て…ない…で、返…事…して…  
下さい…よ……」

私の中で何かがキレ、何かが砕け散る音がした。

シュートバレットで私に刺さる木の根を寸断する。

背中やお腹の痛みも熱さも感じない。ただ感じるのは

言い表すことの出来ない程の喪失感。そして怒りと憎悪

レイジングハートがカタカタと揺れる。

手に爪が食い込んで血を流す。

それは心を支配する感情によって涙を流す余裕のない私から溢れ出した涙だった。

魔力がすつからかんで笑う膝に喝を入れて大地を踏みしめる。

「なの……は……それ……」

「な……のは、ちゃ、せ、せな、か……」

友人の声すら遠く感じるのは血の流しすぎか、それとも心の余裕の無さが、いや、そんなのもうどつちでも良い。

背中に刺さる木の根を煩ったしく思いながら背中からバックを下ろす。

血濡れの私立聖祥大附属小学校のバック。

その中には穴の空いてしまったスケッチブック。

それを込められるだけの魔力を込めて抱き締める。

半分がデバイスならリカバリーも効くかもしれない。

心の底から想いを込めて祈った。

スケッチブックが淡い桜色に光って、損失を回復させる。

スケッチブックをバックの上に重ね、それをアリサとすずかの前に置く。

私は”3人”を背にして、ジュエルシードの暴走体の本体を見据え

る。

「レイジングハート……カノンモードへ」

『Mode change・Canon mode』

これほどまでに何かを憎んだ事があるだろうか

これほどまでに何かを消してしまいたいと思ったことがあるだろうか

展開されるホバーフェザー、残った魔力は少ない。デイベインバスターもあと1発。これじゃあ届かない。

「レイジングハート……フルドライブ」

『I am sorry. It is a master which is not made. Then, the body of a master does not maintain. There is even a crisis of a life function! (すみません。それは出来ませんマスター。それではマスターの身体が保ちません。生命機能の危機さえあります！)』

「構いません。私は　それで構いません」

『I care about! Master. Reexamination of a command! (私が構います! マスター。命令の再検討を!)』

「早くして下さい。私が理性と意識を保っている内に……」

『Yes... Master……』

貴女には、無理を聞いて貰ってはかりですね。

こんな我が儘で行き当たりばつたりのマスターで、貴女も呆れていることでしょう。

カノンモードのフレームから一対の桜色の翼が生える。

「堪忍袋の尾が切れました……」

レイジングハートを構え、カノンモードの砲口を暴走体の本体。男の子と女の子の、2人を守るようにバリアを張って滞空するジュエルシードへ向ける。

「フルブースト!! ブリッツアクション!!」

『All right. Full boost. Blitz Action.』

「っ、なのは!!」

「なのはちゃん!!」

「はあああああ————!!!!!!」

一気にトップスピードに加速。空気の壁すら突き抜けるような速度で、ジュエルシードのバリアに砲口を突き刺す!!

「レイジングハート!!もつと推力を!!」

『It is useless!! More than this is useless!! Absolutely useless!! (ダメです!!これ以上はダメ!!絶対にダメ!!)』

初めて聞いたレイジングハートの感情的な声。

電子音でも伝わる気持ち。

でも私は

「オーバーブースト!!」

自分で術式を組み、無理やりに推力を上げる!

飛び散る魔力を集めて更に推力に転化する。

血が溢れゆく、眼が霞む、手から力が抜ける。でも!!

「もつと強く!!もつと速く!!もつと熱く!!」

カノンモードの砲口へ魔力を集中的に込め、魔力刃を形成する。魔力刃とバリアは火花とスパークを散らして凌ぎあう!

単純な出力勝負。出力が負けている私にはバリアを破る力が

「ッ、デイバインツ、バスターアアアッ!!!!!!」

零距离デイバインバスター。いつも、何度も、私に立ちふさがる脅威を撃ち抜いてきた一撃必殺の一撃。

「ブレイクツ、シューーートツ!!!!!!」

この一撃の前に、撃ち抜けないものはない!!

閃光と爆碎音に視界と耳を奪われる。でも手応えが消えない!!



「あああああーーーーっ！！！！！」

雀の涙程度でも更に魔力を込める。撃ち貫く意志を！想いを！すべて！！

「撃ち貫けええええーーーーっ！！！！！！！」

更に強烈な閃光と爆碎音、それに生じた爆風を受け、ホバーフェザーが四散した事によって前進するどころかその場に留まる浮力すら失ってしまった所為で爆風には耐えられず、私は後方へと吹き飛ばされてしまった。

地面に叩きつけられ、錐揉みしながら地面を転がって、建物の外壁にぶつかって、ようやく止まることが出来た。

「うつ、つく、あぐ」

私の死力を尽くした一撃

でも、その一撃すら

届かなかった

「なのは！！！！」

「クウーーーー!!」

ユノ、久遠……。

「なのは!!しっかりして!なのは!!」

「クーーーー!!クーーーー!!」

「こふつ、大丈夫……です……」

レイジングハートは手放さなかった。

まだ私は戦える!

でも

手元に握るレイジングハートを見る。

カノンモードのフレームどころか、本体フレームにも亀裂が入っている。

レイジングハートの本体には傷がないのが不幸中の幸いですね。

「レイ……ジン……グ、ハート……」

私の声に応えるように、コアが点滅するレイジングハート。

私は死にかけの虫の息。

レイジングハートもボロボロ。

死力を出し尽くしても破れないバリア。

それでも！！

「まだ……たたか、ゲホツゲホツ、ごぽっ、っは！くっ、まだ！！  
私達は戦えます！そうでしょう！？レイジングハート！！」

『That's right！（その通りです！）』

もう魔力は空っぽで、身体を支えているのは怒りと憎悪と、燃え滾り衰えることのない闘志。負けたくないという強き想い！！

「あれ…を、貫く…には……」

零距离ディバインバスターで無理なら、次は

「レイジングハート、周囲に散った魔力素、すべて集めて下さい！  
！一撃で良い、最後の！一撃を叩き込む、撃ち貫く力を私に！！」

『All right・My master!』

魔力素を集めることで、再びホバーフェザーを展開。

胸がかって無い程に苦しくなる。でもそんなの関係はない。もう一度、もう一撃加えて、そして帰ろう

「帰る……か……」

私にとって、高町家は、その権利がなくても、もう帰る場所に認定してしまっているらしい。

亀裂の入った砲口に魔力が集まっていく。

高町なのはの切り札　スターライトブレイカー。

模造、贋作と言えども、最強の使徒すら下した零距离スターライトブレイカーでならば、あのバリアだって破れるはず！

脈打つ鼓動、魔力素を集める過程で、はっぱカッターやリーフブレードをコントロールし構成する術式の魔力すら強引に集めて力にする。

相手との距離とスターライトブレイカーのチャージ時故に出来る今

回限りの荒技です。

「チェーンバインド!!」

ユーノがバインドで私に迫る木の根とつるのムチを絡め捕る。

ユーノにも世話になりっぱなしですね。

今夜は少し豪華な物にしましょうか

私が、生きていたらの話ですが

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

実際あんな巨木を相手にあんな呆気なく終わるのはリリカルだから許されるものだと思っっています。

巨木でこれならマジでフェイトと戦ったら我が家なのは死ぬんと違つか？

意見・感想お待ちしております。

**第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭・そっくり！！（前書き）**

最新修正版です。英語力が欲しい……

第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭・そうくいー！

side：高町なのは

血の流しすぎで眼がチカチカしてきました。

身体はガタガタ、脚も立っているのでやっとの程。

そしてやはり今回の暴走体は、明確な敵意とある程度の脅威に対して自動迎撃するタイプのようです。

「うっ！くうっ」

「耐えて下さいユーノ！あと少しです！！」

「わ、わかった！！」

スターライトブレイカーのチャージで無防備の私を、ユーノが全力で守ってくれています。

暴走体は木の根でユーノのバリアを破ろうとしますが、ディフェンスとサポートに特化するユーノのバリアは私の物より数段硬く、暴走体の攻撃をすべて防いでいます。

Master・I have a proposal・(マス



ター。私に提案があります(´)

「提案？」

『Yes. Therefore, please give me time to a slight degree. (はい。その為にもう少し私に時間を下さい)』

「ユーノ！」

「聞こえてたよ！レイジングハート！どれだけ保たせれば良いの！」

『If it gets for 60 seconds... (60秒頂ければ...)』

レイジングハートの言葉に私はユーノを見る。

ユーノは頷いた。

「お願いします。レイジングハート」

『Thank you. (ありがとうございます)』

魔力素のチャージは続行されましたが、ホバーフェザーは私の脚に負担がかからない程度の高さの浮力を保って小さくなる。脚のホバ

ーフェザーに関しては完全消失しました。

レイジングハートも頑張っているのです。私も

「ホバーフェザー解除。シュートバレット!」

向かってくる暴走体のシュートバレットをシュートバレットで相殺する。

「なのは無茶しないで!ここは僕が」

「ユーノとレイジングハートが頑張っているんです。私にも意地があります!」

そこまで一度に数は撃てませんが、基本魔法であるシュートバレットなら、私の演算能力でも負担がほばないレイジングハートと同レベルのシュートバレットを撃つことくらいは出来ます!

「っつ　!?!」

急な魔力の高まりを感じて、その方向　ジュエルシードの暴走体を見る。

単なる木であった暴走体。

しかし表面がボコボコと気泡のように波立つと、そのカタチを少しずつ変えて行った。

全身に角を生やし、上部に青紫の鎧を纏い、頭部は赤く、緑色の双眼が光る。その首元にはジュエルシードを取り込んで青くなった結晶体。

ムチの様な蔦が不気味に生え動く腕。巨大な爪で武装し、掌には赤い結晶体がある腕。の2本の腕を生やすその姿はまるで人間の上半身。

「変身した！？ここに来て!？」

「くっ、魔法と言うより外道に過ぎますよ！ジュエルシード!！」

大木だったジュエルシードの暴走体は、その姿をインストレジセイアへと変えたのだった。

インストレジセイアへとカタチを変えた暴走体は、その胸部から砲撃クラスのエネルギー波を放ってきた。

「くっ!!や、やらせるもんかああっ!!！」

「エアヴァルトウング……懐かしい技を……」

ユーノのバリアを後ろから補助しながら私は呟く。

こっちに来てCOMPACTやIMPACTはやってませんからね。

しかし私はインストを全くイメージしてないところを考えると、あの少年がどつちかをやっているのか偶然か

とにかくインストレジセイアであることを喜びましょうか。『シユテルン』だったら今ので私達は終わっていましたよ。

『I kept you waiting. Master.』お待たせしました。マスター( )

「お疲れ様でしたユーノ。あとは私達で受け持ちます。貴方は私の友人を護って下さい」

「う、うん。気をつけてね、なのは」

最早ボロボロで何に気をつけるかわかりませんが、私は頷いて暴走体を見据えます。

ある意味あの巨木よりかは知り尽くしている相手故に、今も何通りかの対策は考えついています

「レイジングハート、お願いします」

『All right! Energy absorption.』

Recovery start. (オーライ！魔力吸収。リカバリ開始) ♪

レイジングハートは集めた魔力を吸収し、機体の損傷を修復させた。その過程の恩恵か否か、私の背中やお腹を貫いていた木の根は分解され、ケガも治っていきます。

『Recovery complete. Condition green!』

復活するレイジングハート。

私のケガも治るばかりか、バリアジャケットは修復され、空っぽだった魔力は一気に回復し、収めきれない、120%以上の魔力が外に溢れ出る程、私の身体は魔力に溢れかえる。

『Renewal of mode data. Mode change! Lancer mode! (モードデータ更新。モードチェンジ！ランサーモード!)』

「ランサーモード？」

聞き覚えのないモードにオウム返しに呟いた私。

桜色に包まれたレイジングハートはその姿を変える。

カノンモードの倍はある縦幅。

デザインはカノンモードのフレームのままだが、先端部が延長して砲口が閉じる。

それは正に、どこかで見たような至近感を感じる大型の突撃槍・ランス-だった。

その全体の長さは私の身体の1.5倍くらいでしょうか？

石突にはカノンモード時のメインフレームのミニチュアが後ろ向きに備わっています。しかもそのミニチュアメインフレームの廃熱機構は後ろ向きであり、そこからは魔力素が溢れ出している。

私はランサーモードのスペックデータを確認して、口元に弧を描きます。

「レイジングハート、貴女は最高のデバイスですよ」

『It seemed that I had you pleased. My master. (気に入ってもらえた様で良かったです。マイマスター)』

「レイジングハート……」

私は感謝の意を込めてレイジングハートを抱き締めたいですが、その前にやらなければならぬ事があります。

「征きましよう、レイジングハート。打と意地をもって、あのバリアを撃ち抜く為に！」

『Yes . It is only our merely shooting and piercing!（はい。私達はただ撃ち貫くのみです!）』

レイジングハートの石突のミニチュアメインフレームの廃熱機構がスライドし、魔力素を放出する。

それは廃熱機構ではなく推進機構。エーテルスラスタや機動兵器のバーニアを参考に造られた魔力素を推進剤にするバーニア。

レイジングハートを正しく槍を持つ様に、左手は柄の前方、柄と一体内蔵されたトリガーユニットを握り締め、人差し指はトリガーに掛ける。右手は後ろに添えて握る。

石突から放たれる魔力素が強くなる。

フレームの側面からも内蔵式魔力素スラスタが現れ、強烈な勢いで魔力素を噴出する。ホバーフェザーを展開して、準備は整った。

「レイジングハート！」

『All right! Stern Acceleration . Full boost! Devine breaker!』

地を蹴った瞬間。かつて無いスピードで私達は加速した！

ランサー・突撃槍・モード

文字通り突撃することだけを追い求めた形態。

あらゆる移動魔法をぶつちぎる速さを実現するのは、フレーム内蔵式と石突のバーニアユニットと、ミニチュアメインフレーム。スラストユニットは言わずもがなだが、ミニチュアメインフレームから指向性の魔力素を収束放出することにより大出力推進力を得る。その為の魔法が、レイジングハートが新たに組んだ魔法『シユテルンアクセラレーション』である。

発動速度もトップクラスであるが、なによりその燃費の良さだ。魔力ランクCでも普通に攻撃魔法を使用しながらも戦闘に支障がない程の燃費である。

しかしあまりの大出力推進力と直進突撃しか考慮されておらず、使い手を選ぶ魔法。

ですが私達には、名前も含めてこれ以上ない魔法です！

星の加速。その名の如く、私達は宇宙を駆ける星となる！

暴走体は腕を動かして鳶を伸ばしてくる。

エレガントアルム



ドイツ語で『優雅な腕』と言う意味合いを持つ右腕の触手を伸ばして攻撃するものです。

しかし既にトップスピードに乗っている私達には掠りもしない。

「今度こそ!!」

突撃物理魔法、デイバインブレイカーを発動したレイジングハートの矛先が、暴走体のバリアに突き刺さる。

カノンモード以上に私は手応えを感じていた。押し当てるのではなく突き刺す感覚を

『Barrel open! (砲身展開!)』

バリアに突き刺さったまま、レイジングハートのランサーモードのフレイムが上下に開き、カノンモードのように矛先からコアまでの道、バレルが出来上がる。

「貫けええええー!!!!!!」

トリガーを引く。

ガシャンツと音を立てながら、コアから直接光がバリアに突き刺さ

る！

魔力で構成した杭を撃ち込む魔法『プラスティングステーキ』。

ナイトファウルのプラスティング・ステーキから取られたこの魔法は物理貫通打突魔法であり、最大力点に破壊力のすべてを込めることで一点突破を可能とする一撃貫砕の魔法である。

「くっ！硬い！！」

『If useless at one shot, any number of shots are!!』(一発でダメなら何発でも!!)』

もう一度トリガーを引こうとしたところで、暴走体が左腕を振り上げた。

「拙い！」

ウアタイルスクラフト

レジセイアの最強技だ。

あんな物を放たれたら私どころかみんなまで！

もう頭上にエネルギーボールが現れる。

一撃を叩き込む時間すらあるかどうか、しかし私がやらなければみんが

なら答えは1つ！

「リミットリリース！！ブラスター1！！」

刹那膨れ上がる魔力。

しかし引き換えに身体中を走る激痛と目尻から流れ零れる血涙と口から溢れ出す血。

「ブラスティングステーク！！」

バゴンッ！！と先程とは比べ物にならない程の衝撃と威力に、ついに暴走体のバリアを撃ち貫いた。

しかしブラスターシステムの起動は無改修のレイジングハートには相当の負荷をかけてしまい、新品のフレームに早々亀裂を入れてしまふ。

「レイジングハートッ!？」

『I am not cared about! I would

also like to shoot a friend's  
enmity. Therefore, it is a mas-  
ter NANOHA!! (私に構わず!私も友人の仇を討ちたい  
のです!だからマスターなのは!!!)」

「ブラスター2!!セブン・スタッド!!」

さらに走る激痛を気合いでねじ伏せ、突き上げられた腕に7連続で  
ブラスティングステークを撃ち込む。

5発のステークで撃ち貫かれ風穴だらけになった腕はボロボロにな  
り、結晶体も5発目で破壊され、エネルギーボールは四散、6発目  
と7発目で左腕の付け根を吹き飛ばす。

「OK、アインスタッキング、ショウダウンです」

『Sealing!』

首元の結晶体にレイジングハートを突き刺し、トリガーを引く。

ジュエルシードを封印したことで暴走体は崩壊した。

ジュエルシードを発動させてしまった2人も、アリサとすずかも無  
事

ボンッ

「……お疲れ様……です。レイジング……ハー……ト……」

『It is t i r e d w i t h l a b o r .  
M a s t e r N a n o h a I a m s o r r y , i  
t r e s t s f o r a w h i l e …… (お……疲れ  
……様で……す。マス……ター……な……のは。すみ……ません……少し……休  
み……ます……)』

「……ご、ゆっく……り、私の……戦……ゆ……う……こぶ……ふ、ふふ、こ  
……の……未……熟……すぎ……る……小……さ……な……身……体……で……は……リ……ミ……ット……ブ  
レ……イ……ク……は、無……謀……で……し……た……か……う……っ……ご……っ……ふ……」

口から止まらず溢れる血。

ブラスタースステムの効力が切れ、過度の魔力と肉体行使により膝から崩れ落ち、そのまま目の前が真っ暗になりました。

高町なのは

魔力ランクA+ 空戦適性C 陸戦適性B 総合ランク推定B+  
使用可能魔法

シールドバレット

デイバインランサー

デイバインランサー・ファランクスシフト

クロスファイアシュート

クロスファイア・バーストモード

ファントムブレイザー

デイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スターライトブレイカー（フルドライブ時条件付きで使用可）

デイベインブレイカー  
ブラステイングステーク  
プロテクション  
バリアバースト  
リングバインド  
チエーンバインド  
クリスタルケージ  
ブリッツアクション  
ホバーフェザー  
シュテルンアクセラレーション  
フィジカルヒール

レイジングハート

搭載機能

待機モード

デバイスモード

カノンモード

ランサーモード

フルドライブ

ブラスターシステム

第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭・そっくり！！（後書き）

ランサーモード

元ネタは武装錬金のサンライトハートです。

デイベインブレイカー

平たくいうとソニックブレイカーの魔法版。

シュテルンアクセラレーション

元ネタはサンライトハートプラスの特性を真似ている。

ブラステイングステーク

とっつき！！

以上！

未来を知っている分、我が家なのは改めて星光なのは本家なのはよりも無茶ぶりを敢行出来ますが、逆に身体の負荷は比べるのがアホらしいくらい天地の差があります。

最終回後について悩んでいます。そのままA'sに入るか、平行世界<sup>アニ</sup>のstsに星光なのはさんをつっ込んで本家なのはと異例の対面をして星光なのはさんを心身共に強くするかで

それによって最終回模様も変わるため、皆さんのご協力をお願いします。

意見・感想お待ちしております。

ノイレジセイア 魔力ランクAAA 空戦適性 - 陸戦適性AAA  
総合適性AAA 魔導師ランクSS+

ジュエルシードの暴走体の巨木が変化した姿。

stsはやて並みの強さだが、星光なのはがレジセイアを知っていたのと、フルドライブ+ブラスターシステムの併用により強化されていた星光なのはの前に敗れ去った。ジュエルシードリアルは10。



第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（前書き）

誤字修正をしましたです。

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心

side：高町なのは

ふと顔に落ちた冷たいナニカ……

それは頬や額、目尻を伝って流れ零れる。

ふと頬をナニカがつつく。

耳に聞こえるのは泣き声だろうか

「……………んあ……………」

「な、なのはちゃん!！」

「なのは!！」

「クオン!！」

すずか? アリサ? 久遠?

重い瞼を開けると、朱色に染まりゆく空と、泣いている友人達

「ユーノ……」

「ここに居るよ、なのは……」

もうバレてしまったからでしょう。すずかやアリサが居ても普通に喋っていますね。

「私はどれくらい……寝ていましたか……?」

「30分も……寝てないと思うよ」

「そうですか……うぐっ!」

起き上がろうとしましたが、少し力を入れるだけでも激痛が身体を駆け巡る所為で、起き上がる云々以前の話ですね。

魔法も使わない方が良いでしょう。プラスターシステムを使った所為で、リンカーコアにもかなりの負荷がかかっているはずですし。

「すみません……もう少し、寝かせて下さい……」

「うん。ゆっくり休んでなのは……ありがとう、なのは」

私は小さく「いえ」とだけ応えて、再び闇の中へ意識を落としました。





side：高町なのは

私が目を覚ましたら病院のベッドの上に居ました。

「うっ、くっ……っは！……やっぱり、ダメですか……」

身体の痛みはありませんが、殆ど力が入りません。

ブラスターシステムは、使用を控えないと死にますね。10年後以降はともかくも、今の私では身体が保たないのでしょう。

「ふっ、くうっ、あぁっ！」

肘を立てて、腕を使って上半身だけでも起こしました。

「個室……？」

きつとアリサかすずかですね。兄様という線もありますが、ともあれ

「早急に、なんとかしませんとね」

レイジングハートのフレイム強化。

新しい魔法や御神流の修練。

そしてこのあとに控える

「フエイト……テストロッサ」

万全の状態で挑みたかったのですが、仕方ありません。

《ユーノ、聞こえますか？ユーノ》

とにかく現状を把握しようと、ユーノに念話を繋げます。

《なのは！？起きたの！》

《ええ、つい今し方。ところで、先日の戦いから何日経ちましたか？》

《2日が経ったよ》

《そうですか》

48時間、無駄にしましたね。

《レイジングハートは？》

《今、自動修復中だけど、レイジングハートもなのはも、しばらくは戦わない方が良いでしょう》

《そうですね…》

レイジングハートは無事の様子ですね。

《ユーノ、レイジングハートをお願いします》

《うん。任せて》

ユーノとの念話を終えて窓の外を見る。

「まま…なりません…ね…」

本来なら壊すことのないところで壊してしまったレイジングハート。

そしてアリス。

私が未熟だから……。



私が弱いから……。

「もっと……強く……ならなければ」

誰にも負けないように

誰も傷つけないように

「もっと、強く！」

左手を握り締めて、私は心に誓った。

その日の夕方、お見舞いに来てくれたアリサと話すか。

アリサは私に抱きつくとき泣き出して、それを私があやして、すずかは微笑みながら私達を見守っていました。

その後来た父様、母様、兄様、姉様

一応入院理由は異常災害に巻き込まれた時に負傷した為という理由らしいです。

ケガといっても急成長した木の根に乗り上げてからの落下という、  
真実をぼかしてケガの過程を少々捏造したくらいです。

まあ、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのであながち間違いではないのですが。

ブラスターステム使用によるリンカーコアへの負担以外はケガも一度リセットされた為、これといってひどいケガもなく、翌日の退院許可が下りました。

しかし母様に心配させる顔や姉様の悲しげな顔をさせてしまい、とても胸が苦しくなりました。

翌日の退院の時は、父様と兄様が迎えに来てくれました。

私は今回のことをどう父様や兄様に説明しようものか悩みました。

しかし兄様はともかく、父様にはなんと説明したら良いか

「良かったなのは。大したケガもなくして」

「…はい。お騒がせしました。父様」

「そんなに気にすることはないぞなのは。天災みたいなものだったんだ。お父さんは、なのはが無事でいてくれたことが、それだけでとっても嬉しいんだ」

ガシガシと私の頭を撫でてくれる父様。

やっぱりダメですね私は。

こんなにも優しい父様にも何も語らない私は

「お前なりに何かやっているのは、父さんはなにも言わないが、無茶は良いが無理はするなよ？なのはが居なくなったら、みーんな、悲しむんだからな」

耳元で囁かれた父様の言葉に、私は緩む涙腺に力を込めて歩き出しました。

|||||

翌日。

まだ大事をとって学校は休み、毎朝の筋トレも、御神流の鍛練もお休みです。

アリスは一応器のスケッチブックは治ってはいますが、中身のシステム面は私だけではどうにもしようがないので、レイジングハートの修復待ちです。

「只今帰りましたよ。ハーケン」

『無事の帰還を祝福するぜ。マイソウルブラザー』

作業部屋の机に飾ってある黒いゲシユペンストのプラモ。

そこから聞こえるさすらいのバウンティハンターの声。

外見はプラスチックボディですが、中身は精密機器の塊。

ゲシユペンスト・ハーケン

D X電童をバラして、内部機構を真似て造ったボディに、インテリジェントデバイスのA Iデータを基に組んだ自己進化完全自立型擬似人格コンピューターO Sを搭載していて、私の場合はさすらいのバウンティハンターをモデルに擬似人格を組み上げました。

コプセントは身近なパートナー。

八神はやてのリンフォース？が羨ましかったのでつい造ってしまったものです。

4日前の夜に完成し、3日間放置でしたが。

『家の屋根から見てたぜ。あんな無理を続けてたら、元祖より早く身体を壊しちまうぜ？』

「わかっています。わかっていますが

」

私ではああでもしなければ、暴走体とも真つ当に戦えない程弱い力しか持たないのです。

それが悔しくて堪らない！

『まあ、しばらくは安静なのは変わりないんだ。この時に休めるだけシエスタをエンジョイしようぜ？』

「ええ。さしもの私も、今回ばかりはどうしようつにもありませんから……」

私はハーケンを手に持って自室に向かう事にします。

今日は素直に寝ていましょう。

おやすみなさい

第12話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（後書き）

ちよろつとですが、遂に出せたハーケン！

支える者〃アリス

共に歩む者〃レイハ

導く者〃ハーケン

を目指しています。

ひとりで戦えない。弱いと自らを言う星光なのですが、大勢の絆に支えられ無様でも勝利を掴み取るのが星光なのはあります。

無印最終回はやはりsts路線が強い模様です。皆さんそんなに本家なのはvs星光なのはが読みたいのか！？

ハーケン『OK、エブリワン。これからもマイソウルブラザーなのはよろしく頼むぜ？』

レイハ『マスターの障害は、すべて私が撃ち貫いてみせます！』

アリス『私は……ダメな子です……』

ハーケン『OK、ダファミリア。悲観的なのはマザーと同じだが、お前が居なきや、俺は生まれてないんだぜ？お前はマザーのハートを護ってきた。そいつは誇って良いことだぜ？』

アリス『ハーケン……』

レイハ『ストロベリるのは良いのですが、場所をわきまえて下さいね？』

ハーケン『ウエイト：だ、レイジングハート。俺のソウルはブラザーなのは物さ、誰にもやるつもりもないさ』

アリス『私の身も心も、マイスターの物です。勘違いしないで下さい。レイジングハート』

レイハ『わかりました。ですがマスターの最強の槍の座は譲りませんよ？』

ハーケン『OK、レイジングハート。俺は俺の領分でやるだけさ』

アリス『私もいつか……』

こんな感じで相棒達に愛されてる星光なのはです。

意見・感想をお待ちしております。

第13話 H a k e n . g o e s t o s c h o o l ! (前書き)

またまた修正。



### 第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l !

side:高町なのは

私が退院して2日目、先の戦いから5日。

私は2日目も大事をとって学校はお休みです。

本当は大丈夫なのですが、高町一家+ユーノ、ハーケン、電話ですずかやアリサからも今日も休めと言われてしまった為、私は作業部屋でちまちまとナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの整備をしました。

他にはプラモ造りとかラノベを読んで過ごしていますが、どうも暇すぎて、今は縁側で久遠を抱いて横になっています。

「クオン……」

どこか元氣のない声で鳴き、私の目尻を舐める久遠。

「どうかしたのですか？久遠」

「クウン……」

久遠は私の顔に自分の顔をこすりつけてきました。

久遠と会話が出来れば良いんですけど……。

『なあに、ただ構ってやれば良いのさ。久遠も久遠で、ブラザーの事が心配なのさ』

横になっている私の頭の上で同じく横になるハーケン。

かなり可動範囲は広く作りましたが、片手を頭の後ろに下敷きにして、片膝を立てて横になっている様は人間みたいです。まあ、自身は正しく人間なわけですから。

自己進化完全自立型擬似人格コンピュターOSの元ネタは超AIですし。

1から人格を育てることも出来れば、ハーケンのように擬似人格を組むことも出来ますし。

ハーケンの場合は、レイジングハートに手伝って貰い、イメージをトレースしてイメージをデータ化し直接AIにインプットしてある為、より人間的ですが。

今、この擬似人格コンピュターOSのデチューンしている最中ですが、至高を目指すのは簡単な分、デチューンはかなり難しいです。どの程度がデチューンラインなのか計りかねますし。

まあ、当分の間は時間的余裕ありませんし、デチューンラインを



「クウ…クウ…」

『寝ちまったか？』

センサーが捉えた寝息に、俺は立ち上がってブラザーとアヤカシフオックスを見る。2人ともとっても心地良さそうだ。

『グツナイ、ブラザーズ』

俺が完成したのは6日前だが、基礎のプログラムやメモリーに関しては去年から既に存在していた。

ブラザーはとても心配性でな、世界と自分を少しでも繋ごうと俺を造り始めたのさ。

まあ、寂しがりやというのもあって、少しでも仲間が欲しかったのも確かさ。

こんなリトルプリンセスにだけ戦わせるのは俺のプライドが許さないんだが、生憎俺には戦えるボディがねえ。

レイジングハートが復活したらプログラム体について訊いてみるか。

守護騎士がプログラム体なら、俺もリアライズできるかもしれない。

ナイトファウルやロングトウム・スペシャルがあるの考えると、



お目付役としてついてきたハーケンが頭の上で言います。

木の根は道沿いに生えた為、建物自体にそれ程被害はありませんが、アスファルト舗装の道路は軒並み壊滅状態。

こんな状態ではバスも走れないのと、被害を自分の目で確かめる意味も込めて、私は歩いて学校へ向かっています。

「私が、もつとしっかりしていれば……」

『ウェイト。ストップだブラザー！。お前は自分を卑下しすぎだ。お前が居なかったら、アインストキングが街をメチャクチャにしたんだ。そいつをお前は止めた。それは誇って良いことだぜ』

「ハーケン……」

レイジングハートもアリスも居なくて寂しいですが、ハーケンのお陰で少しは元気になります。

さすがさすらいのバウンティハンター　ハーケン・ブrouニング。  
女性の扱いは手慣れてますね。

『さて、シリアスターンエンドだ。スクールに向かおうぜ、ブラザー』

「ええ」



使いの王道だし。

なのはの魔法は魔法と言うより魔装機神の方がしっくり来るけど、どっちにしろ、今のところはあだし達の秘密という事になった。

結局なのはは2日も寝眠ってた。

素人のあだしから見てもかなり無理してるみたいだった。

ううん。実際無理してたんだと思う。

あだし達を守った所為で、なのははケガをして、ユーノが魔法で護ってくれてたけれど、ユーノが居なかつたら、なのははあだし達を護りながら戦わなくちゃならなかつたかもしれない。

あたしは悔しかった。

なのはが戦っているのに、護られて、足手まといの自分が嫌になつた。

なのはとの出逢いはケンカからだつたけど、今はすずかと一緒に一番の親友と胸を張って言える存在。

なんの力もないあたしに、何も出来ないのはわかってる。でもあたしは、なのはの力になりたい！

「おはようございます」

「なのはちゃん!？」



さすがなのはが教室に入ってきて驚いてる。

あんのバカチンツ！

今週はしっかり家で寝てなさいって、あたしとすずかで念を押しと  
いったのに普通に何事も無い顔で学校に来やがってえ！！

「な、なのはちゃん、ダメだよ！今週くらいゆっくり休まなくちゃ  
！」

普段大人しいすずかも声を上げてなのはに詰め寄ってる。

「気遣い感謝します、すずか。ですが暇過ぎてやることもなく、体  
力も戻ったので学校に来ました」

「でも…！」

ここはこの石頭にガツンとやるべきかしら？

てかやっても良いわよね？

あたし間違っでないわよね？

『ウエイト。プリティーガールズ、少し落ち着いたらどうだ？』

不意に聞こえた男の人の声に、あたしやすずかだけじゃなく、クラスのみんなまで辺りをキョロキョロと見る。でも男の人なんてどこにも

てかこの喋り方、偶に聞き覚えがあるのはあたしだけじゃないわよね？

「ハーケン、貴方は」

『おっと、OHANASHIはノーセンキューだマイソウルブラザー』

おでこに手を当てて顔を呆れ歪ませるのは。

まさかユーノみたいにまたなんか拾ったんじゃないでしょうね？

なのはは両手を後ろ、カバンの上にまわすと、何かを持ち上げるように手を上げて、何か黒い物体を近くの机の上に置いた。

黒いゲシュペンスト？

でもギリアムとかヘリオスの声じゃなかったわ。それにMk-？とは所々違うみたいだし。

『ハローエブリワン。俺はゲシュペンスト・ハーケンの管制擬似人格コンピュータOS、ハーケン・ブラウニングだ。さすらいのバウンティハンターとは、俺の事さ』

いや、知らないわよそんなの。

ていうかこのミニチュアゲシュペンスト、普通に喋って動いてるけど、これも魔法なの!?

『ノーだぜバーニングガール。俺のマザーはマイソウルブラザーなのはさ。俺はブラザーが造った自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS……まあ、わかりやすく言えば賢いAIって言ったところだが、スクールチルドレンにはわけわかめか』

「それって超AIみたいなやつってこと?てかあたしはバーニングじゃなくてバニングス!!間違えるな!!」

ていうかそんなの造れるのはってホント何者!?

『OK、バーニングガール。さすがブラザーなのはのフレンドだ。その解釈でまあまあ間違いないさ』

「あ、あたり前じゃない!あたし達の友情は伊達や酔狂じゃないわ!てかバニングスだって言ってるでしょ!?!勇者王ヴォイスなのになんかムカつく!なのは!コイツ一回デリートよデリート!!ハリ

「ハリーハリー……！」

「ア、アリサちゃん、落ちついて」

『デリートはノーセンキューだ。ブラザーが泣くんでは』

「私はそんなに泣き虫ですかハーケン？」

『おっと、ウエイトだブラザー。さっきのフレーズはメモリーデリートで頼むぜ？』

なんか知らない間に騒がしいのが増えたのは確実ね……。

先生が入ってくるまで、ハーケンなのはの休みに対する理由が、自分の最終調整の為だつて説明した。

まあ、こんなに精巧に動いて人間的に喋る小さいロボットの調整なら、みんな納得したみたいね。てかあたしもビックリよ！

まあ、授業中は静かに経験値を稼ぐ為つて、なのはと勉強しているから、やたらめつたら高性能つてわけじゃないのかしら？

先生は最初おもちゃかと思つたらしいけど、ハーケンの1から7あたりまでの説明を聞いてお手上げみたい。

超AIとか機械だけど生きてるとか、パートナーとかメンタルケアとか、経験値稼ぎとか特許取得への前段階とか、後半別として、前半は多分あたしくらいしかわからないわよ。もしくは勇者王をちゃ



side：月村すずか

なのはちゃんが学校に来てくれたのは嬉しいけど、無理してないか心配になった。

でもハーケンさんが一緒だから大丈夫だよな？

一時間目の国語も、二時間目の社会も、4日休んで遅れ気味のなのはちゃんにハーケンさんが随時アドバイスして、それぞれの休み時間には私達と同じところにもう追いついてた。

なのはちゃん自身、とっても頭も良くてテストも毎回満点だけど、やっぱりハーケンさんみたいなパートナーが居るのは羨ましいなあ。

なのはちゃんにはユーノくんも居るし。

私の家にもネコがたくさん居るけど、ハーケンさんみたいに勉強まではね。

ファリンも居るけど……なのはちゃんに造って貰おうかな？

そしてお昼。

私達3人は屋上で久しぶりにお弁当を食べることになったの。

「それにしてもハーケンって何で動いてるのよ？電池にしたら結構長持ちよね？」

『エーテルって言えばわかるか?』

「エーテルって、魔装機神のエーテル?それともトップの?」

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメイ  
ンはそれで動いてるのさ』

「あんた無駄に高性能よね」

『あたり前だろ?俺はブラザーなのは処女作にして傑作なんだぜ』

「ま、まあ、わからなくもないかも」

アリサちゃんはハーケンさんと難しい話をしてる。

私にはわからないかな。

なのはちゃんは黙々とお弁当を食べてる。

いつもの風景だったはずのお昼ご飯。

でも今は色々知ってしまった私は、なのはちゃんにどうしてあげれば良いのか、どうしたらなのはちゃんの力になれるのか、私はそればかり考えてた。

『M S . すすか、箸が止まってるぜ』

「さすが、大丈夫？調子悪いの？」

「ううん。何でもないよ」

「ごちそうさまでした」

いつの間にかお弁当を食べ終えてたなのはちゃんは、イスから立って階段の方へ歩いていく。

「なのは」

『ウエイトだ、Ms. さすが、バーニングアリサもな。少しブラザーをひとりにさせてやってくれ』

ハーケンさんに止められて、私はなのはちゃんを呼び止められず、なのはちゃんは階段を降りて行っちゃった。

『済まないなフレンズプリンセス。ブラザーもまだ、結構参っててな』

「なのはは、大丈夫なんでしょうね？」

『そいつあ俺にも、誰にもわからない。ブラザーのハートはブラザー次第だからな。俺達がどうこう言わなくても、ブラザーはわかっているし、わかってはいるが、ブラザーは勇気が中々出せないのさ。』







途中まで歩いて帰るあたしは、帰り道の海鳴臨海公園に寄った。

特に理由はないけど、なんとなく、あたしはなのはとどう接していけば良いのか考えたかった。

なのはは親友。それはこれからも変わらないこと。

でも今のなのはは近くで遠い存在に思えてしまう。

特別な力なんてないあたしには、なのはの隣りに立って支えてたり、力になってあげることすら出来ない。

あたしに力があれば良いのに。

魔法までとは行かなくても、魔装機神の精霊とかと契約とか出来れば、あたしもなのはの手伝いが出るんじゃない

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

エーテルがあるなら精霊だっているはずよ！

「でもどうすれば……」

顔を下げたところで、座っていたベンチの足元に光るものがあつた。

気になって取ってみたら、それは綺麗な石だった。

優しく赤く、力強く輝く宝石だった。

「あたしを……呼んだの？」

ドクンッ

あたしの声に應えるように、宝石は弱々しいけど、確かに一瞬脈打った。

あたしはその宝石をポケットに入れて、早足で家に帰った。

第13話 H a k e n ・ g o e s t o s c h o o l ! (後書き)

どうしてかな？

ハーケン入れたらすらすら書けるのは？

大人を子ども達の中に突っ込んだから話しがまとめ易くなったとでもいうのか？

意見・感想、お待ちしております！

皆さんが無事ハーケン兄貴に見えているようで良かったです。

フラグ乱立中ですが、やはりみんなで支え合っのっていいですよねえ。

## 第14話 家族（前書き）

高町家にピントを絞ってみました。修正版です。

## 第14話 家族

side：高町なのは

土曜日です。

今日は学校はお休みです。

私は早朝から目が覚めてしまった為、作業部屋でナイトファウルをいじりながら、レイジングハートが早く治る事を祈るばかりです。

ブラスターステムの反動はレイジングハートにも多大な負荷をかけてしまった為、その所為で修復が遅れているのだとハーケンは言います。

会話は無理ですが、同じ機械同士だからデータリンクでレイジングハートの状態が診れるようです。

父様の起きてきた気配を感じ、私は作業着から道着に着替えて小太刀の木刀を腰に挿して道場へ向かいます。

まだ兄様と姉様は起きてきてないのでしょう。道場にその姿はありませんでした。

「おはよう、なのは。もう良いのか？」

「おはようございます、父様。もう身体は全快しました。鈍らぬ内に稽古を再開したいと思います」

「そうか。まあ、お父さんはなのはが良いらいつでも良いわ。でもなのは、1つ訊いても良いか？」

「ええ。構いません」

父様の訊きたいことですか、いったいどのような事柄でしょうか？

「なのは、お前に守りたいものはあるか？」

守りたいものですか……。

「ええ、あります。一つは言えませんが、もう一つは私を取り巻く人々です。父様、母様、兄様、姉様、アリサ、すずか。私の大切なものです。それを守る為ならば、この身、この命、喜んで差し出す覚悟があります」

私の意地、高町なのはである事を証明し、そして私の身の回りの人々を守る。

私はそれだけしか出来ません。

「そうか……」



父様がガシガシと頭を撫でてくれました。

ゴツゴツで少し重いですが、とても落ちつきます。

「さてなのは、今日はおさらいからするぞ！」

「はい！父様」

私は準備体操をしてから、御神流 斬のおさらいに入りました。

斬撃は基本的に九つしかなく、刺突つぎを始め、切り下ろしの唐竹からたけ、右からの切り落としの袈裟斬り（けさぎり）、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟さかげそ。横切りである右薙みぎなぎ、左薙ひだりなぎ。斜め下からの切り上げである右切上みぎきりあげ、左切上ひだりきりあげ。そして完全に下から切り上げる逆風さかかせ。

その一通りを振るい終えてからの御神流 斬へと繋がります。

緩急を斬撃の使い分けの合間に、迅速の速度を一閃に加えることによつて斬撃を相手の認知領域から消す。

剣の立ち会いはそれ故に勝負は一度、一瞬、そして一撃必殺でなくてはならない。

「ふう……」

「よし、大分形になってきたじゃないか。この分だと、次のステ

「ッブに移るか？」

「良いのですか？」

「ああ。御神流 斬は基礎の基礎だ。なのはなら自主鍛練で斬を習得出来る程形になっているからな」

新しいステップ……。なんて良い響きでしょうか。

「それじゃあ次のステップ。御神流 虎切と御神流 貫だ」

「御神流 虎切に御神流 貫……」

「ああ、虎切は一刀での遠間からの抜刀による一撃を振るう奥義だ」

「いきなり奥義なのですか？」

まだ習い始めて一週間、事実上の稽古時間はそれ以下の私に、こんな早期に奥義を？

「本来なら次の基本技の虎乱を教えた方が良いんだが、なのはのあの刃捌きなら、虎乱は少し練習すれば出来ると俺は思ってる。虎乱はまた後で教えてあげるから、虎切と 相手の防御を突き抜ける技。実際には相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける御神流 貫を先の方が良いと思ってな」

「相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける技……」

まるで私の為にあるような技です。

「これなら、相手の防御がどんなに硬かろうが、その弱点を確実に見抜いて必殺の一撃を叩き込む事が出来る」

「是非御教授下さい、父様」

私の食いつきぶりに、父様は軽く笑って「ああ。そんなじゃあやるか！」と腰に挿してあった木刀を抜きます。

「虎切はともかく貫は身体で覚える技だからな、ガンガン行くぞ！」

「はい！父様！」

私は手に持つ二刀で父様に斬りかかります。

私は有意義で楽しい朝の鍛練を過ごしました。



確かに一発成功では姉様がかわいそうなので、ナイトファウルの刃捌きを披露したのですが

「うわあああ〜ん！絶対なのは私より強いってばあ〜ん！！私の努力って何だったのよ恭ちゃ〜ん！！」

「お、おい美由希。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるかあ〜ん！！なのはばっかりなんでえ〜！！」

本泣きされるとは思いませんでした。

姉様にはかわいそうなことをしてしまいましたね。

「姉様、姉様はとてもお強い剣士です。私の技量では姉様に勝つことなんて出来ません。そして兄様も言っていました。姉様は成長するスピードこそ遅くとも、自分にはない才能を持っていると。今は経験差で自分が強くともいつかそれすら上回っていくと……」

「なのは……ホント？恭ちゃん？」

「……ああ。俺は御神流剣士としては一生かかっても完成は難しいだろう。だが美由希はそれを成せる剣の天才だ。俺にはないものだからわかる。お前は必ず俺を超えて一人前の御神流剣士になれるかな」

「恭ちゃん……」

「そしてなのはもた。なのはは努力の天才だ美由希と同じで一度覚えた事を忘れない。そればかりか御神流を深く理解している。そしてそれを振るう意味の覚悟もある。なのはもまた、いつか俺を超えるだろう」

「兄様……」

どこか寂しげに、でも嬉しそうに言う兄様。

姉様も私を抱き締めたまま嬉しそうに、「そう簡単には負けないんだからね！なのは」と言いました。

私の守りたいもの。

私を取り巻く人々。

友人

そして 『家族』。

産まれてくるはずだった高町なのはの居場所を奪ってしまった私には、言える義理はないのですが、私は温かく、優しい友人や『家族』を守りたい。

その為に私は魔導を行使し、御神流を振るう。

高町なのはとしてでなく、『私』として、それは胸を張っていう事

が出来ます。

高町なのは

貴女が手にするはずだった家族も友人も、私が命を賭けて守ります。だから私が死に、或いは貴女が私を消し去るまで構いません。

私を取り巻く人々を、『友人』　そして『家族』と心から想ってもよろしいですか？

|||||

その日の夕食は私の退院祝いと新しい家族の歓迎会ということ、少し豪華なものでした。

新しい家族とは久遠とハーケンのことです。

入院中に久遠の存在はバレていたそうです。

私は久遠を膝の上に乗せて食事をしていました。

母様が久遠を物欲しそうに見ていますが、久遠はたとえ母様でも譲れません。この至福の抱き心地は私だけのものです。

「それにしてもなのは頭が良いのね。ハーケン君がロボットなんて母さん未だに信じられないわ」

『サンクス、マザー』

「恐縮です。母様」

しかし何をトチ狂ったのか、次の母様の言葉は

「でもそれならハーケン君はなのはの息子よねえ。あらあら、あなた。私達にいつの間にか孫が出来ちゃったわ。今夜はお赤飯の方が良かったかしら？」

「『ブフツ！』」

あまりにも突飛な言葉に少々ご飯を嘔き出してしまいました。

「そついえばそつなるのか？やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかったなあ」

「母様、父様、お戯れも程々にして下さい」

『そつだぜサムライペアレンツ。俺となのはソウルブラザーパートナーだ。確かにマザーでもあるが、俺はブラザーと思ってるのさ』



「……なのは兄の座はやらんぞ」

『OK、エルダーブラザー。別にそういう意味じゃないさ。俺達はパートナーだ。だがパートナーじゃあ壁を感じるからソウルブラザー、略してブラザーと俺は呼んでるのさ、これがな』

「……そういう意味なら我慢しよう」

「恭ちゃんてば嫉妬深いよねえ。それにハーケンの方がお兄さんぽいし」

「美由希、明日は素振り一万回からやろうか」

「うっ、失言でした忘れて下さい大明神様恭也様あ〜〜！」

「ダメだ」

「あうう〜！！ハーケンお兄さんからもなんかいつてえー！」

「むう……」

『ウエット…だ。メガネシスター、悪いが俺も死にたくないんでな』

「絶望した！！優しくない世界に絶望した！！なのはあ〜〜！」

「はいはい、姉様はかわいそかわいそなのですね。なでなでしてあげましょう」

「うう、私に優しいのは妹だけか……なのは大好き！」

「にげー」

そんな楽しい夕食でしたが、その後とんでもないことが起こるとは、  
私は　私達家族は微塵にも思ってはいませんでした。

## 第14話 家族（後書き）

美由希のキャラ崩壊が激しすぎる件について

そして一番の難敵は桃子さん。

ハーケンが守護騎士なりユニゾンデバイスなりで実体化したら恭也とガチバトルになりそうな予感しかしねえ

さて、魔法少女バーニングアリサですが、凄いですねえ元祖は。カッコイいぜよアリサ。今のところ我が家バーニングアリサは中身繋がりで殆ど炎髪灼眼になると思います。武器は刀と銃を予定してますが、刀ともかく銃はどんなのがよろしいと思いますか？

あと箒繋がりで”戦術砲機” ブロンテ・クラフトとか

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

第15話 スクランプル戦闘民族高町家（前書き）

短いです。

## 第15話 ス克蘭ブル戦鬪民族高町家

side:?????

夜、誰もが寝静まる夜。

高町なのはの寝室では、眠っているなのはを悲しさの色濃い瞳で見る少女が居た。

「…なの……は……」

優しく寝ているなのはの髪を梳く少女。

その表情はとても柔らかいのに、瞳だけは悲しみに満ちていた。

音が出ないように窓を開けて、窓枠に足を掛ける少女。

月明かりに照らされた少女は、頭に一对の獣の耳を生やし、一本の太く柔らかそうな毛並みの尻尾を持っていた。

『ウェット。待ちな、アヤカシフォックス』

少女を呼び止めたのはゲシュペンスト・ハーケンことハーケン・ブロウニングだった。

『こんなナイトにお出掛けかい？』

「……………」

ハーケンの言葉に、少女は顔を俯かせた。

「くお…ん……………じかん……………ない」

『マイブラザーにちゃんと相談してからでも良いと俺は思うぜ？フ  
オックスプリンセス』

「…だめ……………くおん…なの…は…めいわく……………」

『ブラザーはそんな奴じゃないさ。と言うより、わかってんだろ？  
俺達の誰かが欠けたら、ブラザーはたちまちハートブレイクってこ  
とは』

「…でも……………」

少女はもう自分がこの家に留まれないのを感じていた。

今だからまだ自分を保てていても、それも長くはないと。

「…ありがとう……………」



両腰にナイトファウルとロングトウム・スペシャル、後ろ腰には刃を漬した小太刀を挿して、テングロンハットを被る。

いつかこうなるとわかっていた為、どこまで効果があるかわかりませんが、火薬に願をかけた塩を混ぜ込んで、弾丸にも『The Minions of Cthugha』

魔力を注ぎ込めば爆裂弾になる術式文字をナイトファウルの弾丸に彫り。

『Wending the Blackwood』  
自動追尾弾、敵を捕らえるまで追い続け、急所を仕留める術式文字をロングトウム・スペシャルの弾丸に彫り。

絶対数は少ないですが、無いよりはマシでしょう。本当ならイブン・ガズイの粉薬とかがあれば良いのですが、材料が材料です。小学生の私には　というよりデモベ世界でないリリカル世界では用意出来ない代物です。これで今やれることをやりましょう。

友人を救う為に法を犯し、本物の銃口を向ける。

私自身には恐怖はありません。

しかし久遠を救えないかもしれないことには恐怖を感じます。

私には霊力はありませんでしょう。

魔導がなければまともに戦えないでしょう。

でも私には



「OK、相棒。行きましょうか」

『OK、マイソウルブラザー。マイファミリィダフォックスにカチコミと行くっか?』

「目指すは八束神社、でしょうね」

『オーライ、ブラザー。さっそく行くっぜ』

私はハーケンがコートの襟を掴むのを感じながら作業部屋を出ます。

「どこ行くの?なのは」

「姉様……」

『こいつは予想外のお客さんだな。ボンソワール、メガネシスター』

ハーケンが手を帽子に添えるように、自らの手を頭部に軽くあてがう。

「通して下さい姉様。私は行かなければなりません」

「どっどっ」

目的地を告げてしまえば姉様も着いてくるでしょう。

相手は大妖狐。

魔導師の私でさえ、久遠の攻撃は防げない。

御神流剣士たる姉様でも無傷は免れないでしょう。

傷つくのは、私だけで十分です

「ブリツツアク　　ッ!！」

「なのは!?!」

くっ! 念話はともかく、他の魔法はまだ使えませんか。

10年後の高町なのはでさえ、しばらくの養生を強要される程の負担を強いるプラスターシステム。

一週間の休養では身体はともかく、リンカーコアはまだ無理の様です  
ね。

痛みの襲った胸をかき握る。

『大丈夫かなのは!?! ？まだ魔法の行使は無理だぜ』

「のようです。久遠への勝ち目が余計に減りましたね」

「久遠？久遠に何かあったの！？」

『ウェット。落ち着いてくれ、メガネシスター』

「ハーケンは黙って。ねえなのは？なのはは何をしてるの？私達に何を隠しているの？」

「…私は……」

「そこまでだ、美由希」

「とーさん」

「父様……兄様……」

そこには道着姿で完全武装した父様が、同じく完全武装の兄様を連れてやってきました。

「とーさん。恭ちゃん」

「美由希。人は譲れない戦いをする時が来る。今なのはは、その戦いに身を投じている。俺達には、なのはが黙っている事を強要する権利もない」

「恭ちゃん……」

「父様、兄様、私は…」

私が口を開こうとしたところで、父様が頭をガシガシと撫でてきた為、喋ることは叶いませんでした。

「なのは。別に無理に言う必要はないんだ。ただ、お父さん達にも手伝えることがあるなら、遠慮なく言ってくれて良いんだ。なのははまだ子どもなんだ。なんでもかんでも1人で抱え込まなくて良いんだ」

「父様……」

どうして父様は何も語らない私に、こうも優しくしてくれるのだろう。

私には、そんな風にされる資格なんてないのに

「なのははお父さんの大切な娘だからな、1つや2つの隠し事くらいあってもなんともないさ。それに、なのはも隠し事をするような歳になったんだって、嬉しく思うくらいさ」

「……父様……」

私は帽子を眼深くずらすと、数滴の涙を流した。

そんな事を言ったり思ったりする権利はない。

でも私は父様の言葉に嬉しいと感じてしまった。

本当は抱きついて泣き叫びたい。

でも今は久遠を助けに行かないと

「ほらなのは、背中に」

「に、兄様!？」

「急ぐんだろ？」

「……はい!」

私は兄様の背に乗ると、腕を前にまわして落ちないようにしようとします。

「おっとと、なのは、随分重くなっただな……いて!」

「失礼な。武器と服が重いだけです」

『失言だったな、エルダーブラザー』

私は中身は元男でも体重や体型くらいは気にするんですよ？

まあ、体型は将来ニスバディが約束されてますが、腐らせるのも磨くのも自分自身です。

「さあ、ちゃんと捕まっているよ、なのは」

「はい！」

兄様の背中……とつても広くて温かくて、父様の手のように安心して身を委ねられます。

「ちょっとまって恭ちゃん！私も！」

「お前はなのはの戦いを知らないから今回はお留守番だ。師範代としてはお前はアレ関係の戦いには前知識無しには出せない」

「うう、とーさん」

「俺より美由希を知ってる恭也が言うんだ。今回は我慢な？」

「うぐ、な、なのはあ〜」

「すみません姉様、私は今回足手まといにしかならないでしょう。そんな立場では私には2人の説得は」

『そう言うことだ、メガネシスター。今回は留守を頼むぜ？《ユーノもな？》』

デバイスのAIEDータを基にして造られたハーケンですから、念話もお茶の子さいさいです。

「みんなひどいよお……」

《わかった。久遠が相手なら、僕じゃあなんの役にも立てない。悔しいけど、なのはをお願い》

《OK、フレンズフレット。ブラザーは任せな》

「行くぞ、なのは」

「いってくるな、美由希」

「いってきます、姉様」

『留守を頼むぜ、メガネシスター？』

「うう、いってらっしゃーい……」

姉様を残して、私達は家を出ました。

向かう先は八束神社

私達が出逢い。

とら八で久遠の封印が解ける場所。

今一番考えられて久遠と一番縁のある場所。



第15話 スクランブル戦闘民族高町家（後書き）

ついに出撃の戦闘民族高町家の主戦力！

意見・感想、お待ちしております。

第16話 結ばれる絆は (前書き)

本気久遠VS高町家です。

## 第16話 結ばれる絆は

side：久遠

久遠は高町家を出た後、八束神社に居た。

神社は死ぬほど嫌いの久遠。だがなのはと永遠の別れをする前に、彼女と出逢ったこの場所に来たかったのだ。

青い石に身体の自由は奪われても、心だけは平気だった。

そこから初めて見たなのはは、怖かった。

しかし高町家で生活する内、なのははとても強いけれどとても弱い子であることがわかった。

傷ついても諦めないところが、辛くても優しくしてくれるなのはが好きになっていった。だから自分はなのはとこれ以上一緒に

「…なの…は」

自らに掛けられた封印。

今はその封印のお陰で感情も押さえつけられているからいい。けれど封印が解ければまた自分は憎しみに駆られ、暴れる妖狐になってしまうかもしれない。



その瞳はとても口では表現出来ない悲しみが見えたような気がしました。

「久遠！何故です！？何故何も言わずに私の前から居なくなるんですか！」

兄様の背から飛び降りるように私は境内に立ち、久遠の背中へと言葉を投げかける。

「久遠…なのは…一…緒…駄…目」

「そんなことはありません！！貴女を蝕む祟りは、私が被ってみせます！だから！！」

「…無…理…なのは…は…霊…力…ない…」

「たとえそうでも、必ず貴女を祟りから救ってみせます！！」

今引けば、久遠とはお別れになってしまう。それも永遠の。そう感じる

「こないで！」

久遠が雷を放つ。

それは子どもサイズでとても威力は低い物。それでも子どもものなのはには十分な脅威となる。

「なのは!」

「くっ」

ナイトファウルフェイクリッパーを展開して正面から雷を断ち切る。

こういうこともあるのかと、今夜のリッパーも服も耐電絶縁処理は完璧に仕上げてきました。ちょっとやそつとの雷撃くらいなら防げはします。

「久遠、貴女がどう言おうとも、私は貴女を連れて帰ります」

「なのは……なん……で……」

「貴女は私の友達で家族だからです」

「……とも……だち……かぞ……く……うっ……」

「久遠!？」

急に身体を掻き抱く久遠。その身体からは靈感のない私にもはつき

り見える黒いオーラ。

兄様と父様が身構えるのが気配でわかります。

「つつ　　あああああああ！！！！！！」

久遠の身体から稲妻と黒いオーラが溢れ、稲妻の閃光は久遠を照らし包み、私の視覚から隠してしまう。

星空は曇が立ち込め、稲妻を発し、明らかに空気の雰囲気が変わっていく。

重圧感　　プレッシャーもジュエルシードの暴走体とは比較にならない。

閃光が収まれば、久遠が居た場所には

「なのは……あれも…久遠、なのか？」

元々なのはと同年くらいいの、獣耳や尻尾を生やした女の子だった久遠は、今は美由希や恭也に近い年齢くらいの女性の姿になっているのだ、なのはと久遠の会話から、作業の少女が久遠だと薄々察していた恭也でも、目の前で急に少女から女性に姿を変えられたら戸惑う。

「…ええ、約300年前に封印された大祟り妖狐　久遠。でも久遠は何も悪くはありません。その当時の人間達の所為で、久遠は大切なものを奪われて、怒りと憎悪に捕らわれ、狂ってしまっただけ。本当の久遠は人見知りでおとなしいだけの狐妖怪。祟りを追い払えば、久遠は元に戻るはず」

「祟り…か、超能力や自動人形や魔法とは戦ったことはあるが、果たして祟りなんていう魔法以上に超怪奇的なものに御神流が通じるかどうか……」

御神流師範代で、ついこの間魔法と対峙こそしたが、あれには実体もあつたし、刃で斬ったわけでもなく、鋼糸で動きを止めた程度だ。祟りなんていう日本ではある意味で魔法的な、實在すら曖昧なものに御神流が通じるか否か考えてしまうのは仕方がないことだろう。

「久遠自体には実体があります。祟りは私の方でなんとかしてみます。兄様と父様は　」

「久遠の動きを止めるか、時間稼ぎをするか、そのどちらかぐらいか」

「いえ、私に一度だけ久遠に張り付く隙を作っていただければ」

父様の案を遮って私は言いました。

高町なのはが砲撃で想いを伝えるなら、私は己自身の肉体を用って想いを伝えるしか思い浮かべられません。



もはや高町なのはでもなんでもないような戦い方しか出来ない私ですが、それでも久遠を救いたい気持ちは本物です！

『レイジングハートも魔法も使えない今のブラザーには分の悪い賭けだが、それでもやるのか？』

「当たり前です。久遠を救う為ならば。それに貴方らしくもありませんよ？ハーケン」

『フツ、そうだな。OK、ブラザー。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ、こいつがな。そういうわけだファーザーアンドエルダーブラザー、覚悟は出来てるかい？』

「愚問だぞハーケン。妹の征く道くらいは切り開いてみせるさ」

「なのは、言うからには、必ず成功させるんだぞ？そしてみんなで家に帰って朝ご飯にしよう」

「はい！兄様、父様」

私達は身構えて久遠と対峙する。

その瞳は恨み、怒り、憎しみ

普段の久遠からは考えられない感情ばかりが見えた。

「あああああああああ！！！！！！」

一筋の雷が久遠に落ちる。

久遠の背の黒いオーラが更に膨れ上がる。

人の姿でも鋭い爪を振り上げて叫び声を上げながら襲い掛かってくる久遠。その先には私が居た。

「くっ、結構重いな。だが娘に手を出すなら、この高町家大黒柱高町士郎の屍を踏み越えて往ってからにして貰おうか！」

しかし、間に割って入った父様が小太刀をクロスさせて久遠の突進を止める。

「父さん！」

兄様が一瞬かき消えたかと思えば、一瞬で久遠の右横に居た。

「はあっ！」

兄様は小太刀を抜いたが、私が見えたのは、最初の一刀が反応した久遠の腕を薙いで払う軌道のみ、あとはいつの間にか背後にまわっ

ていたり、また右横に戻ったかと思えば左側に居たりと、そして久遠を襲った斬撃は4つ。

たまらず久遠は父様から離れましたが、身体どころか服にすら傷はなかった。

「小太刀二刀御神流 奥技之六 薙旋」

「ダメだ父さん。まるで鉄板にでも打ち込んでいるような硬さだった」

父様が技名を述べ、兄様が打ち込んだ感想を述べた。

兄様に連撃を入れられた所為か、久遠の警戒心が急激に高まるのを私は感じました。

「なるほど、となると久遠には悪いけれど、少し俺達も本気で行かないとな」

父様から放たれるプレッシャーは、久遠の放つプレッシャー どころか野性的な荒々しさとは違う、明確な、人としての指向性のあるプレッシャー。後ろから感じるだけでも冷や汗を掻く程のプレッシャー。これが御神流剣士、不破としての父様ですか

兄様からも見劣りないプレッシャーを感じます。

なるほど、これはかなり強烈です。

何度が死ぬ思いをした私は平気でいられますが、兄様が姉様を置いてきたのは、もしかやこれが理由でしょうか

『凄まじいプレッシャーだな。メカニカルの俺でもビンビンに感じるヤバさだぜ』

「ええ」

ハーケンに応えながらナイトファウルを構える。

勝負札は二枚、切り札は一枚

ただの博打でしかないけれど

「久遠…！」

必ず助ける！必ず！

side..

「あああああああ！！！！！」

久遠が雷撃を放つ。

標的はなのは

しかしなのは横に転がることで雷撃を回避した。

次に動いたのは土郎。

10m近くありそうな距離を一瞬で詰めた。

幾閃もの煌めきが久遠に打ち込まれた。

御神流 虎乱

しかしなのはが鍛練するものは勿論、恭也や美由希が振るう虎乱以上の速さを持ち、恭也は一瞬出掛かりの動作が斬撃でなければ、美由希の母、美沙斗の放った御神流裏 奥技之参 射抜と勘違いしそうな程速かった。

恭也は負けじと神速で、土郎の虎乱を受けてたたらを踏む久遠を眼前に捉える。

傷つけるのが、殺すのが目的じゃない。

小太刀を久遠に打ち込む。

久遠は腕で防いだ、次の瞬間飛び退いて、防いだ右腕を抑えていた。

#### 御神流 徹

衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃法。素手や刃のついていない武器でも簡単に人を殺すことができる技。加減して放てば相手の打撃面を痺れさせて使えなくすることが出来る。狐だった久遠に、対人戦法が通じるかと思つたら、なまじ人型の分、通じることには恭也は確信を持った。

鋼糸を懐から取り出して投げつける。

久遠が鋼糸を防御しようと振り上げた左腕を絡め取る。

「父さん!!」

恭也が士郎に叫ぶと、士郎も鋼糸で久遠の右腕を絡め取り、同時に引つ張り上げる。

久遠は負けじと脚で踏ん張る。

御神流剣士2人分の力に拮抗する力に士郎も恭也も僅かに驚くが、そういう物だと今は自分を納得させる。

「「なのは!!」」

父と兄の切り開いてくれた活路に、なのはは飛び込む。

転びそうになる脚を動かして、久遠に向かって駆ける。

「うああああああ!!!!」

久遠から雷が迸る。

空からも稲妻が落ちる。

しかし感電を恐れずに、土郎と恭也は鋼糸を引く手を止めなかった。

指から焼ける臭いがしても離さない。

なのはを信じて、意地でも2人は離さない。

なのはは放電される雷の中を、リップパーで受け流し、切り裂きながら進む。

この雷には久遠の妖力が混じっていて、魔力変換資質の電気と似たような変換のされ方をしている。

空から降る自然の稲妻は斬ろうとは思わないし、まず絶縁処理したリップパーでも感電するだろう。

しかし久遠から放たれる雷は、この僅かにエーテルを纏うリッパで斬り裂ける。

「正気に戻りなさい！久遠！！」

また正面からきた雷をフェイクリッパで斬り裂く。

もう腕を伸ばせば届く距離に久遠が居る！

「ああああああ！！！！」

「くつつああああああ！！！！」

「「なのは！！」」

『よせなのは！！こんな電流受け続けたら脳天焼ききれぞ！！』

放電する久遠を抱き締めたなのは、超至近距離から直接久遠の雷を受ける事になった。

なのはの姿に叫ぶ士郎と恭也、そして徹底した耐電絶縁処理を施されたハーケンが耳元で叫ぶ。

零距离ディバインバスターはこんな物だろうかと一瞬思いながらも、飛びそうになる意識を気合いで維持して、なのはは久遠を仰ぎ見る。



すっかり大人の久遠は、今はなのはよりも大きい。自然とそういう形でなのはは久遠を見る事になる。

「久遠……私はいつも無様で、本物の高町なのはには程遠い星屑の存在です」

掠れゆく声でしっかりと伝わるかどうかはわからなくても、なのはは伝えたかった。

「私は自分を取り巻く絆に自信がありませんでした。それは高町なのはが手に入れて必然の絆でしたから」

家族やアリサ、すずかにユーノ。

それらは魔法少女高町なのはが手に入れて必然の絆。

「でも私にはアリサが居た。そして貴女が私の前に現れた……」

アリサ

本来ならば存在しない私のファミリア。

久遠

リリカルマジカルな世界には登場しない狐妖怪。

「私は貴女のお陰で救われました。私が紡いだ私だけの絆　そして気づかされた。たとえそれが必然でも、私が紡いできた絆は本物だという事を……」

久遠に語り続けるなのはの身体から、若葉色の光の粒子の様な物が溢れ出し始め、それは神社の境内や裏手の森からも若葉色だったり青だったりする光の粒子が、一様になのはの周りに集まっていく。

「こ、これは」

「傷が……治っていく……」

『マジか……エーテル係数計測限界値突破、数値化出来ねえ。まさかフレアー現象なのか？一体何が始まるんだってんだ……』

「……………」

side:高町なのは

「……………」

気づけば真っ白な空間に私は居ました。

「ハーケン？父様？兄様？」

肩に居たはずのハーケンも、後ろに居たはずの父様も兄様も居ませ  
ん。

「はっ　！！久遠！？久遠！！」

「なのは……」

声が出た後ろを振り向けば、そこには久遠が居た。

「久遠！！」

私は久遠を二度と離さないようにキツく抱き締めた。

「久遠のバカ！アホ！ボケ！駄キツネ！！」

「ごめんなさい、なのは」

私を撫でてくれる久遠の手は、父様とは違って細々していて、でも  
代わりにその細々しい指で髪を梳かれる心地良さが、まるで昔、私

が私になる前、前世の母さんや母様に撫でて貰った時のように、子どもが寝付くまで髪を梳いてくれる心地良さを久しぶりに感じた。

「久遠……次にこんな事をしたら零距离でスターライトブレイカーを撃ち込みますからね！」

「うっ、なのはが可愛い……」

ピクンと跳ねた久遠の耳と5本の尻尾。

「当たり前です！一体どこぞのダフォックスの所為で2回もフェイト・テストロツサと戦う前に電撃浴びにやあなんのですか！！」

「クウ……ごめんなさい……」

しゅんとして垂れ下がる耳と尻尾。

かわいい。勢いが削がれてしまう程の破壊力ですが、ここは心を鬼にします！

「いいえ！タダじゃ赦しません！」

「クオン！？やだやだ！なのはが可愛い！！」

逃げようとする久遠ですが、がっちり固めている為、走っても振り解こうとしても、私は離れません。

「久遠……」

「クオン　！？な、なのは……」

私は久遠の耳元で久遠の名を呟く。

動きを止めた久遠の頬に手を添える。

「ク、クウ……く、くすぐりたい……」

「久遠、私の大切な久遠……」

私達の足下に展開する桜色のミッド式魔法陣

今は胸の苦しさも忘れる事が出来ます。

「なのは……？かぜ、ひいたの？」

こてんと首を傾げる久遠の愛らしさを脳内フォルダーに刻み込みながら、前世でも今世でも初めてを久遠に捧げます。

「くみゆ　！？！？」

目を見開く久遠を超至近距離で脳内フォルダーに保存しながら、瞳を閉じる。

舌を入れて縮こまって逃げようとする舌を絡める。

「んっ……あ……はあっ……んっ、あっ……あう……うん……」

空気を求めて開く久遠の口の中を舌で犯し続ける。

自分のと久遠の味がブレンドされて、甘露のような甘味を感じる。

そこに久遠の鋭い犬歯で傷ついた舌から流れた血が混じる。

「んく……コク……ふあっ……」

「ふう……」

離れる私達を紅い橋が繋ぐ。

もつと久遠を感じていたいですが、今は絶賛バトル中ですし、これ以上は18歳未満お断りになりそうなので、名残惜しいですが仕方がありません。

「久遠、貴女は私が死するその時まで、私と共に」

「なのは……は……」

使い魔契約

本当はする必要なんてないのかもしれませんが、祟りから久遠を引き剥がすのには、私の側に置いてしまっくらいした思いつきませんでした。

「なのは……」

「久遠」

大人から子どもサイズに戻った久遠を強く抱き締める。

久遠もぎこちなくても私を抱き締め返してくれた。

互いの心臓の音が間近で聞こえる。

私も久遠もここに居る。





『ラギアス式魔法陣！？』

「出だよ、デイスカッター！フレイムカッター！」

私の魔力変換資質は火、そして久遠の雷は魔装機神では炎系低位に位置する属性。

それで呼び出したフレイムカッター。

そして周りの精霊達が力を貸してくれたお陰で呼び出せたサイバスターモデルのデイスカッター。

「久遠を縛るすべての怒りも憎悪も悲しみも！！アカシツクレコードから消し去る！！！」

私はデイスカッターを頭上で振り回すと、それを地面に突き立てる。

足下に展開する青い輝きを放つラギアス式魔法陣　二重の円の中に星の刻まれた魔法陣。

そこにさらにフレイムカッターを突き刺す。

エーテルを伝い、魔法陣がその姿を変える。

正しい星の形が一部崩れた。

『エルダーサインだと!?!』

それは邪悪なる者を討ち被う聖なる印。

五芒星の結印の輝き。

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 我、脅威と敵意を被う者成り! コール・フェニックス! !」

五芒星に変換したラギアス式魔法陣から、巨大な炎の鳥が、不死鳥が顕れた。

炸裂弾刻印のされた弾丸をすべて宙に投げる。

弾丸は私の周りに滞空する。

脚にプラーナを込める。

「断鎖術式番号<sup>エクストラローション</sup>ティマイオス! 式号クリティアス! 術式解放、  
時空間歪曲。 爆裂! !」

足下が炸裂し、私は飛び出す。

後ろから弾丸を飲み込んだ炎の不死鳥が迫り、私を飲み込み、その輝きを赤からエーテルに溢れた青に変えた。

「アカシック！バスターー！！」

私達は飛翔 - と - ぶ、負の源を断ち切る為、未来の為に！

《あああああああ！！！！！！》

「でえええやあああ！！！！！！」

雷や稲妻で一種の結界を作る祟りだが、不死鳥を身に纏う私達には届かない！

アカシックバスターの直撃した祟りを突き抜け、私は祟りの真後ろに僅かに断鎖術式の勢いで地面を滑り、術式の解かれたディスクッターとフレームカッターを地面に突き刺す。

浄化の炎に焼かれた祟りは消え去った。

それと同時に私達の融合も解ける。

「なのは……」

「お帰りなさい。久遠」

「うっ、っつ、なのは……っ……なのはあ……うっ、あああー……」

「！！！！！！」

私に抱きついて涙を流す久遠を抱き締めて、久遠の頭をそっと優しく、慈しみと愛を込めて撫でる。

まるで私達の結ばれた絆を世界が祝福してくれるかのように、朝日が私達をただ暖かく照らしだしていた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第16話 結ばれる絆は (後書き)

こんな感じに終わってみました。

やっぱりとら八士郎と恭也は化け物か？

ようやくこの小説の趣旨の一片が書けました。

久遠×なのはの需要はあれど、久遠×シュテル風ってまたそそられませんか？

なんか弱いなのはの筈なのに勝手に強くなってく星光なのははなんなんだろう？

てーてれってー てれってー

久遠が支援に加わりました。 ムゲフ口風。

意見・感想、お待ちしております。

なげえなあ……まだ無印4話にもいかねえ……

第17話 デバイス達の想い……（前書き）

まだ先に進まないよ……

## 第17話 デバイス達の想い……

side：高町なのは

八束神社での戦いの後、プラーナの急な使いすぎと、久遠の電撃を浴びたダメージで動けなくなってしまった私は、久遠の背中に背負って貰って帰りました。

さすがにナイトファウルやロングトウム・スペシャル込みは重いと思ったので、それぞれを父様と兄様に持って貰いました。

ちなみにそれぞれを持って貰ったら

「なのはは力持ちなんだなあ……こんな重たい物、お父さんはあそこまで振り回せないよ」

「こんな銃身の長い銃で狙いが外れないのか？」

そんな感想を述べられました。

それは慣れと練習ですよ、父様、兄様。

それから私は1日休みを父様、兄様、ハーケンから通告されて学校も鍛練もお休みです。最近連続で休み過ぎです。

そんなわけでやることもなく、子どもモードの久遠と布団の中で寝

る事にしました。

「クウ……な、なのは……」

「久遠……」

脚を絡めて、ワイシャツ一枚同士の薄布一枚隔てた久遠の身体を抱き締める。

巫女服でわかりませんでした、久遠は私と近い年くらいにしては少し胸に膨らみがあるようです。

肌も白くてスベスベで、傷痕だらけの私とは大違いです。

「クン！な、なのは……はあ……」

「んっ……く、おん……」

互いに抱き締め合うだけなのに、この胸を掻き乱して、満たす感情はなんなのだろうか

幸せで、温かくて、愛おしく感じる。

親愛？友愛？

違う。



愛は愛でも違う、そういう愛と違う

でも今も昔も心から愛する、恋人と言った意味での愛し方をしたことの無い私は、久遠に抱く愛がどんな愛なのかわからない。

でも家族に想う愛とは違う事はわかる。

アリサとすずか、ユーノは友愛だというのはわかる。

ハーケンやアリス、レイジングハートは愛なんて次元は当に越えている一心同体の存在。

じゃあ久遠は？

「なのは…？あつ、んっ…クオン！？」

「久遠…」

久遠の尻尾を撫でながら互いの胸を突き合わせる。

速いリズムを刻む鼓動。

同じタイミングで鳴る鼓動。

私達の絆

「くみゆ!？」

我慢出来ずに、久遠の背中にまわした腕を力を込めて引き締める。  
さらに密着して隙間すらなくなる私達。

「やつ…あ…んん…あう…クウツ」

もっともっと、久遠を感じたい。

あの時、共に祟りを討ち抜いた時のように。

私が久遠で久遠が私で

あの時私達は物理の垣根を越えて一つだった。

「く、おん…やつ、んっ…だ、め…くお、ん…」

「な…のは…し、かえ、し」

「そ、しな、くてっ、やうっ!」

恥ずかしい程淫猥な声が漏れてしまう。

仕返しと、尾てい骨の辺りを撫でられて感じてしまう淫らな私は、

やっぱり高町なのはには相応しくない。

でも代わりに久遠との絆が深まるのなら、それでも構わないと私は思ってしまう。

私だけの久遠、私だけの絆、高町なのはには紡げない絆。

愛と勇気をもって世界を救った高町なのはの久遠との絆よりも、私達の絆は深い物だと胸を張っていえる。

「ずっと一緒ですよ、久遠」

「クウ……なの……は……」

今日一日中。私達はずっと布団の中で、互いの身体を弄りあいながら過ごしました。

|||||

side:ハーケン・ブラウンング

マイホームに帰った俺は、なのはの自室からユーノを連れて、レイジングハートとアリスの器のスケッチブックを持って家の縁側でたむろっていた。今頃ブラザーの部屋はストロベリー空間がオープン

中だろう。

「それにしても、なのははなんであんなにも必死になれるんだろう」

ビーストモードからトランスフォームしたユーノが蒼穹を見上げながら言った。

ちなみにヒューマンモードなのは久遠がヒューマンモードになれるのに便乗してヒューマンモードを晒せという俺の考えさ。

一応風呂は男の意地でファーマーや時々エルダーブラザーと入っていたらしいから、事情を話せばOHANASHIは免れるだろうさ。高町家は色々な意味でソウルハートがオープンだからな、恐ろしいメンタルティだぜ、まったく。

「なのはには、何物にも譲れない物があるのさ。それがあいつのメンタルを支える大黒柱、俺達が支えてないとポツキリ逝っちゃう細々したブラックツリーだがな。絶妙なバランスで成り立ってなんとか安定してるのさ、あいつの心は」

「ハーケン……僕はどうしたら良いんだろう。僕はなのはみたいに攻撃力なんてないから、なのはの力にもなってあげられない。それが悔しい」

「……OK、フレンズフェレットボーイ。良く考えてみるのさ。お前が他人にも誇れる要素を……な」

「僕が……誇れる要素……」

察しの良いユーノなら気づけるだろう。今出せるヒントはこれ位さ。

『そんで、とりあえずは修理の終わったレイジングハートの祝賀会と行きたいが、もう大丈夫なんだろうな？』

『Recovery complete・Condition green・大変お待たせしました。すみません、ハーケン』

『ウェイト。謝るのなら俺じゃないだろ？レイジングハート』

『はい。そうでしたね』

修復が済んだレイジングハートは、魔法系言語は翻訳魔法を使ったミッド語だが、日用会話はプログラムを書き換えて日本語をベースにしている。

理由は俺にあるんだとさ。ブラザーと同じ言葉でトークするのが羨ましいんだと。

マスターと同じ言語で喋りたいと思うのは更なる絆になる。

絆の結び付きは、時として限界以上の力を発揮する。

スーパードロイドのお約束展開だ。

そしてそれが今日起こったばかりだ。なのはも十二分に主人公をやつてるぞ。

「とりあえずはだ、アリスのソフトを治したいんだが、手伝ってくれるな、カムレード？」

「わかりました、ハーケン。私も友人を治してあげたいのは同じです」

「OK、フレンズカムレードデバイス。メカニカルの俺達でフレンズを治して、ブラザーを安心させてやろうぜ？」

「ええ、わかりました。ハーケン」

俺達メカニカルズは一蓮托生一心同体の関係にあるような物だ。

同じマスターの下に集い、共に戦い、随時データリンクしているお陰で、俺達は互いの状態や、誰か1人でもなのはに着いていれば、なのはの事が随時わかるようになっていいるからだ。

それを有利に戦闘に生かす方法も模索中だ。

元祖がレイジングハートとユーノだけで大丈夫だったのは、あれが物語で、元祖が寂しい思いをした過去があっても、良くも悪くも子どもであつたからだ。

だが俺達のマスターは良くも悪くも大人過ぎた。

自分の存在に苦悩し、元祖とはかけ離れた存在に苦悩して、レプリカのイミテーションを演じている事に苦悩する。

それ全部ひっくるめて俺達のソウルブラザーマスターなんだがな。俺の口から言ってるのは簡単さ。

これは正に分の悪い賭けだ。

ブラザーのハートがクラッシュするのが先が、自分は自分として生きていけば良いと気づくのが先か。

だから出来るだけ俺達で道を指し示し、導いて、支えて行くしかない。

すべてを選択するのは、なのはの意志なんだからな。

|||||

side:高町士郎

今日、初めて娘の戦いを体験しながら娘の戦いを見た。

俺も昔は相当危ない橋を渡ってきたものだけど、雷を直接撃たれたのは初めての経験だ。

銃弾と違って斬ったり弾いたり出来ないものだから死ぬかとも思っ





筐体自体は俺のボディと同じ時に完成してたが、ソフト面のアリスがああなっちまったからな。

A L I C E システムを積んだ機体にアリスが成る。

この希望もアリスによるものだ。

『システムコネクト。TC・OSアクセス、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSロード。機体駆動システム非常用電力で作動。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。メインシステムノーマルモード起動。全シーケンスオールグリーン。おはようございます。ハーケン、レイジングハート』

『グッドモーニング、不思議の国のアリス。新しい身体はどうだい？』

『おめでとございます。アリス』

『ありがとうございます。ハーケン、レイジングハート』

手の調子を確かめるように握っては開くをするSガンダムもといアリス。

『ええ、マイスターの想いが宿ったこのボディ、この上なく重畳です』

『そいつは良かったな、アリス。で、何やってんだメカニカルアリス』

『何って、変形ですが？何か？』

『いや、なんでも無いぜ、ファイターアリス』

アリスはGクルーザーに変形して俺達の頭の上を滞空している。

今はパーツが足りなくてちょいと不格好だが、驚きの再現度だぜブラザー。しかもカタログスペックには分離合体まで可能と書いてあった。

デバイスコアとリンカーコアの仕組みを基にして、なのはが造ったフルカネルリ式永久機関。

精霊の代用は俺達自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS。だから俺達の意志でパワーが変わる。まるでGストーンのGパワーだけ。

俺の試作フルカネルリ式永久機関のブラッシュアップグレード品だ。大きさは同じだがアップグレードのお陰で出力は段違いだ。それだけにそのエネルギーを普通に攻撃にも使える、いわばモバイル魔装機って奴だ。

羨ましいぜ、プリンセスアリス。



|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side:レイジングハート

ハーケンもアリスも、自由な身体が羨ましいです。

私も自由な身体が欲しいと思います。

でもそれ以上に今より頑丈な身体が欲しい。

何をしてても砕けず、何をしてても敵を貫く強固で頑丈な身体を

そう、最強の金属製の身体を！

T o b e c o n t i n u e d . . .

第17話 デバイス達の想い……（後書き）

とりあえずやっとなりアリス復活とアリスの予定の6割り方を消化出来た。

ハーケンも、レイジングハートも、星光なのは為にこれから頑張っていく予定です。

アリスの方も大体設定を組めてきました。

しかしどこで登場させるか……

第18話 アリサの告白(前書き)

アリサファンの皆様、ごめんなさい! ! ! ! !

## 第18話 アリサの告白

side:高町なのは

土日が過ぎ、ようやく月曜日です。

土曜日は夜まで久遠と寝倒し、日曜日はレイジングハートとアリスが治ったことを告げられ、アリスの筐体の最終調整とハーケンの筐体とナイトファウルの整備をしました。

他には使えるようになったプラーナの慣らしなどもしました。

久遠とユーノですが、子どもモードでこれから過ごして行くようです。母様は大喜びで、2人が動物だったのは二次のようです。とりあえずユーノ、骨は拾ってあげますよ。

月曜日、つまり今日の朝は御神流 貫と御神流 虎切の鍛練をしました。

そして朝食を食べて、ボロボロのただの屍のユーノと久遠を置いて、ハーケン、アリス、レイジングハートと一緒に学校に向かいます。

まだ所々道の舗装は終わり切っていない為、今日も歩きです。

「はあ……」

『どうかしましたか？マスター』

「いえ、今日は体育があるんですよ」

『あ、なるほど、だから』

私の溜め息に反応したレイジングハートに答えると、アリスが納得といった感じで言います。

『マイスターは体育の成績だけは悪いんです』

『そうなんですか？』

『何故かな、戦闘中で魔法を使えば普通に陸戦とか出来るんだが。普段は全力疾走ですっころんだり、ボールには遊ばれるは、跳び箱には尻をぶつけて跳べないわで、とことん運動音痴というか、体育に嫌われてるのさ、これがな』

「レイジングハートに余計な事を吹き込まないでください」

『事実でしょう？マイスター』

なんかALICEシステムのメインAIをアリスに入れてから思考がさらに人間のようになっただんですが、少し優しさに欠けているような気がするの私だけですか？それともこれが本来の人間的思考を確立したアリスの性格でしょうか？

擬似人格OSにはまだまだ未知の領域が沢山ある様ですね。まあ、



ALICEシステム自体、「Advanced Logistic  
& amp; Inconsequence Cognizing E  
quipment」の頭文字を並べてALICE 日本語訳で「  
発展型論理・非論理認識装置」という意味を持つとんでもシステム  
ですから、わからないだらけ、未知数なのは仕方ありませんでし  
ょう。

しかしこのALICEシステムや自己進化完全自立型擬似人格コン  
ピューターOSが、ひいては魔法世界に革新をもたらすものだと私  
は思います。

『とりあえず、急ごうぜブラザー』

『予鈴までまだ2時間もあるんですから、余裕では？』

『わかってないな、スクールって言うのは、朝早くに早めに教室に  
居る方が気分が良いんだぜ？それになにより静かだしな』

『なるほど、ほんの少しの利益はあるわけですね？』

『2人の話しに着いていきません』

『OK、置いてけばりハート。その内覚えて行くさ』

『ハーケンの言う通りです、レイジングハート。貴女も少しずつ、  
人間を学んでいけば良いんです。焦らずゆっくりと』

『わかりました、アリス』



何かあったのかとも思って、迷惑かとも思ったけど、翠屋の方に電話した。

なのはにメールや電話しても大丈夫だと言われそう、いや、絶対にそういう返事が返ってくるから、なのはのパパかママに確認したかった。

電話に出たのはなのはのパパ、土郎さんだった。

少し熱っぽいから大事を取って休みってわけらしい。

まあ、あんな戦いをしてれば普通身体の調子が悪くなって当然よね。

お見舞いに行っても良かったけど、止めた。それであたしが風邪ひいたらなのはは自分の所為だって自分を責めるのは火を見るより明らかだし。

火…か

《どうかしたのか？アリス・バニングス》

《ううん。なんでもない》

ふと頭に響いた渋い声に返す。

念話という、まあ、テレパスみたいなやつよ。

あたしの日常は、なのはが魔法使いであるのを知って

そしてあの赤い石を拾ってから変わった。

大きさはビー玉より少し大きめの三角形ていうか、矢の先のような形をしてる赤い石。

そこから声が聞こえたのは次の日だった。

そこからあたしも、なのはの居る非日常に身を置く事になった。まあ、なのはに比べたらまだまだ未熟で、曰く戦闘にはとても出せない。

自分でもわかってる。

今まで特に戦う為に特訓なんてしたことないあたしには、そもそも基礎の下地すらまっさらの更地の状態。

素質はそれなりにあるらしいけど、それも磨いていかないとならない。

なのはと一緒に戦える日はいつになるかわからないけれど、肩を並べる程じゃなくても良い。いや、目指すはなのはの前に立ってなのはを守ることだけだよ。

今はなのはの戦場に立てるように頑張るだけよ！

今のあたしにはそれくらいしか出来ない。

《焦ることはない、アリサ・バニングス。焦りはミスを誘発し、己のミスは味方をも危険に曝す事になる。焦らず、しかし早く、訓練をこなしていけば良い。その訓練を終えた時こそ、君は君の戦場に立つ事になる》

《わかってる。ありがとう》

そう、今は焦っても仕方がない。歯痒い蹴れど、一歩ずつあたしは強くなるしかないのよ。

「おはようございます」

「おはよう！なのは！」

待っててなのは！あたしもすぐに追いついてみせるから！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

「おはようございます、アリサ……その鼻、どうしたのですか？」

教室に着いて一番乗りかと思いきや、既にアリサが居ました。鼻筋

に絆創膏を付けて。

活発なアリサには変に似合いますが……。

「ああ、これ？ベッドから落ちてちよつとね。あははは」

「気をつけてくださいよ？かわいい顔に傷でも残ったら大変ですよ？」

「あんだこそ気をつけなさいよ」

私の言葉に言い返しながら、アリサは私の左頬　ゼルエルとの戦  
闘での傷痕に手を添えてきました。

「んっ…ア、アリ…サ…」

まだ新しい皮が張ったばかりで、くすぐったさがダイレクトで伝わってきます。

「一生残りそうな傷痕ばっかつけて」

今度は首筋。

インナーで隠しきれない傷痕。

これはあの鴉のかまいたちの時についた傷痕。

「ア、アリ、うっ……んんっ」

首筋から手を離したアリサは、無言で私を抱き締めて

「も、もし、もしも、もも、もらいて、居なかった、ら、あ、あた、し、が！なのはのこ、と、も、もらって！やるわよ！」

最初は耳元で囁くように、次第に大きくなって行った声

や、あの、えと、うえええっ　！！???

「ア、アア、アリアリ、アリササ！！」

離れたくてもアリサは離してくれず、私はいきなりのことであたふたして

や、わ、私ったら、小学生の女の子の告白されて、こっ、こんなに胸をドキドキさせるなんて、へへ、変態　！？ロリペド　！？

「……あなたの痛みも苦しみも悩みも悲しみも、半分あたしに超越しなさいよ」

「あうあうあうう〜」

もも、もう、どど、どうしたら良いんですか!?

『とんだ熱烈告白シーンに遭遇したな。アリス、ちゃんと』

『バッチリ超々高画質で録画中ですハーケン。ビームスマートガン、間に合って良かったです』

兵器をビデオ録画に使わないでください!!

しかもビームスマートガンは長距離狙撃も想定されてる分無駄に画質高いんですからやめてええええー!!!!!!

「アア、アリリササ」

「アリサ……よ。今更間違えるんじゃないわよ……バカなのは……」

「み、みい……だ、誰か助けてですよ〜」……」

『諦めな、マイソウルブラザー』

『おめでとつございます、マイスター』





ふざけ半分、興味半分です。ずかの読んでた難しそうな本を取り上げて遊んでたのが始まり。

横から本をぶんどっていったなのは、その本の背表紙であたしに脳天チヨップをしてきた。

あれは今思い出しても相当痛かったわよ。現にたんこぶになったし。邪魔されて怒ったあたしはなのはに殴りかかった。一步も動かずにそれを正面から受けたなのは、しかも良い具合に顔面直撃。

でもなのはは少し眉を顰めただけで、平然とこう言ったのよ？

「1回は1回ですから」

鼻血を垂らしながら無表情で言うもんだから、あたしは恐くて泣き出したのを覚えてる。

でもなのはは悪者のあたしを慰めてくれたの。泣き止むまで、背中を撫でていてくれた。

それがあたし達の始まり。

それも思い出して、気づいた。

あたしはなのはが好きで、あたしはなのはが傷ついて欲しくないから、なのはと一緒に戦って、なのはの負担を減らしたいんだと。

守るだなんて大層なこととは言えないし言わない。

なのはただ突き進むだけ、あたしはあたしの意志で、その背中を追いかけて、何時か隣りを走っていくだけ。

そう思ったら、それに気づいたら、胸のモヤモヤした物が消えて、ストーンと何かが落ちた。

多分あれはあたしがなのは好きだって自覚したからだと思う。

あたしは、なのはに墮ちたんだ。

あのいつも無表情に見える鉄面皮でも、僅かに表情を変えて自己表現してたなのは。

この前の、痛みに耐えながら、闘志に満ち溢れていた、絶望的な状況の中でも諦めなかった、レジセイアに限界を超えた一撃を叩き込む、なのはの顔。

ハーケンと楽しそうな、あたし達に秘密にしていることを言えなくて自分を責める、なのはの顔。

弱いなのはもカッコイいなのはも強いなのはも泣きそうなのはも、全部あたしは好きなんだ。

なのはは優しくてカッコイイから、すずかもあたしに近い いや、多分同じ気持ちを持ってるはず。それを自覚してないのは小学3年なら多分普通。

あたしは大分なのはに影響受けて染まってるから、そういう感情に





《さすがにアドバンテージを稼ごうと大胆になってるんですね。わかります。これが若さか……》

《全然話が見えません》

メカニカルズもメカニカルズで盛り上がっている様子。相変わらずひとりは置いてけぼりだが。

「すずか、あたしは保健室になのはを連れて行くから、先生に言っ  
といて」

「あ、う、うん。私も後で行くから、なのはちゃんお願いね？」

「任せなさいよ!」

足で教室のドアを開けたアリサは、私を横抱き、俗に言うお姫様抱  
っこで私を保健室まで運んで行きました。私ですか？

恥ずかしさのオーバーストレイクで縮こまっていましたよ。

「せんせー!……留守?」

また足でドアを開けるアリサ。行儀が悪いですよ。

保健室には誰の気配もありません。

「ま、いつか」

アリサは私を布団に寝かせると、布団の上に座りました。

「アリサ……貴女は……」

「あたしは本気よ、なのは」

「あう……で、でも、私達は女の子同士」

「ならあたしが男になったっていいわよ」

「な、なんで……そこまで……」

「それは秘密よ。こういうのは言わぬが花なのよ。知ってるでしょ？」

な、なんででしょう。アリサこんなに大人っぽかったですか！？

「まあ、良くも悪くもあなたの所為よ。元々8歳児の自覚なんてなかったのを、あんだだけアニメとからラノベとか漫画とか視たり読んだりすれば、表面も内面も価値観も変わるわよ、普通は」





音にしたらボンッ！

ていう音が出そうな程、今の私の顔は朱くて熱いはず。

ア、アリサが

アリサに、キス………された

「ふふっ、顔、真っ赤ね、なのは……カワイい」

「や、いわ、ない……で……」

「いゝや、なのはがカワイいのは、なのはがなのはだからだもん。何者にも出来ない、変えられない、なのはだからカワイいの」

「やあ、はず、かし……」

使い古されていそうな口説き文句なのに、アリサが言つと、どつしてこんなに胸がドキドキして

やっぱり私って変態なんですか!?

「アリサちゃん…!」

「今日はここまでね。おやすみ、あたしのなのは」

アリサはそう言い残して、ベッドから立って、ベッドを囲むカーテンの外へ出て行きました。

「アリサちゃん、なのはちゃんは？」

「うん。やっぱり熱がぶり返してるみたい。先生居ないから一応ベツドに寝かせたから」

「そう、じゃあ、私が着てるから、アリサちゃんは教室戻っても良いよ」

「ううん。あたしもなのは心配だし、ノートは後でハーケンに教えて貰うから、あたしもここにいるわ」

「そ、そう？それじゃあ一緒に先生待つてようか？」

「そうしましょ。っと、確かシヤナのヤツがポケットにあつた。これで暇潰しは出来るわね」

「それ、なのはちゃんと同じ……」

「そうよ。面白いから集めてるの」

「良いなあ……私の部屋はもう本置けるスペースがないから……」

「読み終わったやつなら明日貸してあげるけど？」

「ほんと？ありがとうアリサちゃん！」

「はいはい、病人居るんだから静かにね？」

「あ、ごめんなさい、アリサちゃん」

寝てしましましょう……。

なんか週明けからどっと疲れました

T o b e c o n t i n u e d . . .

## 第18話 アリサの告白（後書き）

なんで私が書くところもキャラがいつの間にか暴走してるんだろうか？

アリサがもはやアリサじゃなくなってるよ。

そして久遠には攻めなのにアリサには受けの星光なのがカワイすぎて死ぬる。

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

魔法少女バーニングアリサ、カウントダウン開始

第19話 キャプテンブラボーとアリサの道 憤る不思議の国のアリス そして

今回はアリサ視点メインで進行します。

こんなコンビもありですよ？中の人繋がりで



「い、つも、おも、け…ど、コレ…じゅ、な、ん…ガク」

「ブラボー。10分休憩後、いつもの特訓開始だ」

あたしがあの赤色の石　通称ヴァンシユジュエリーを拾った次の日。あの日曜日から始まった特訓。

あたしのイメージから生まれたキャプテンブラボー。

なんでアラストールじゃないのかなあと思ったけど、まあ、声は合ってるから良いとは思っただけ。

あたしはアラストールよりもブラボーの方が性に合ってるのかも。こう、厳しいけど柔らかくて、導いて見守ってくれるブラボーみたいなタイプは好きね。

でも私が昨夜に武装錬金を読んでたからかもしれないけど、毎回この柔軟はかなり堪える。

ヴァンシユジュエリー

なんでも古代に存在したベルカという文化で使われていた技術で造られた願いを叶える石なんですって。現にヴァンシユジュエリーは「ジュエルに変化したから嘘じゃなくて本当」。

ブラボーの人格とかその他諸々はあたしのイメージから生まれたらしいけど、その根底にはベルカの戦士の技術が沢山詰まってるって、プログラム体として実体化したらしたで、ブラボーみたいに、ブラボー拳とかブラボーラッシュとかブラボーチョップとか流星ブラボ―脚とかブラボー正拳とか、半分野菜人に片足突っ込んでるような

光景を見せられて、あたしはその日の内からブラボーに特訓をつけて貰ってる。

とはいっても、今は基礎的な体力作りと、初歩的な体捌きを教えて貰ってるだけ。

あとわかんないけど、あたしは魔力よりも生命エネルギーの方が活発で豊富らしい。あたしはそれをプラーナって呼んでる。

存在の力とかでも良いんだけど、ブラボーの非常識さとなにより身体の底から湧き上がる力に、あたしはなのはだったらこう呼ぶんだろうと思ってプラーナにした。

そんな訳だけど、超古代の戦士であるブラボーにも、プラーナは未知のパワーらしく、あたしはブラボーから魔力運用を習いながら、その感覚を応用して、あとは”気”を使って戦うネギま！を参考にしてプラーナの使い方を独力で勉強する事にした。

ブラボーのスパルタン特訓は尋常じゃないほど大変だけど、6日間訓練をこなしただけでも、以前とは全然全く違う程、景色の移り変わりとか足の速さとか体力とかが変わったのがわかる。

「ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…ぜえ…はあ…」

大の字で息を荒げてぶっ倒れる。

女の子としてなんか終わってるけどあたしは気にしない。とにかく疲れて気にする余裕もないし。



「よし、今日の特訓は終わりだ！」

や、やっと……終わった……。

「さて、この6日間特訓をしたわけだが、どうだ？ なにかが変わってるはずだ」

「はあ……はあ……っ、はあ……まあ、そりゃあ……ねえ……」

この一週間で一番は体力が増してることだと思う。1日目と比べて疲れのレベルが違うんだもん。1日目はホントに死ぬようにばっくんばっくんだったし

「明日はブラーボーな日曜日。すなわち休みだ。だから明日の訓練は休みだ」

「はあ……はあ……い、い……の……？」

「ああ、明日は友達の家にお茶しに行くんだろ？ 折角なんだ、明日はブラーボーな休みを満喫した方が良ささ」

「……はあ……でも……」

「……アリサ・バニングス、焦りは禁物だ。焦り過ぎて身体を壊して

しまえば事だ」

「…わかってるわ、キャプテンブラボー。うん。明日は休みを満喫するわ。あとおんぶして」

「あいわかった。それじゃあ帰るか、アリサ」

「あゝい…」

ブラボーに背負われて、家裏の庭から部屋に運んで貰う。

ブラボーの背中プログラム体なんて思えない程生身でちゃんと温かくて安心する。

パパは忙しい身だし恥ずかしいからおんぶしてなんて言えないから、なんかちよつと良いかな？

なのはがあたしの心の憧れとしたなら、ブラボーは戦士として憧れる。

カズキがブラボーに憧れるのもわかる。

だからあたしは、たとえあたしから生まれた擬似人格のブラボーでも、ブラボーに戦う術を教えて貰える事に誇りを持てる。

ブラボーに教えて貰った戦士としての技と誇りで、あたしはなのと一緒に戦う。それがあたしの今の目標！



『まあ、わからないでもないですが』

「なのはー？まだかー？」

「っハ！！は、はい！今行きます！」

『OK、悶えガール。エルダーブラザーがお待ちかねだ。早く行くぞうぜ？』

「ええ」

私はハーケンを肩に乗せ、アリスを連れて洗面所からリビングへ行きます。

「クウ……なのは……」

「お待たせしましたね、久遠、兄様」

駆け寄ってきた久遠を抱き締める。

久遠の外見なら普通に獣耳と尻尾をつけた子どもで通りますから、このまま月村家に連れて行く予定です。

ユーノも今日はさすがとアリスにちゃんと紹介する為に連れて行きます。

「それじゃあ、いつてくる」

「いつてきます」

「いつてらっしゃーい」

姉様に見送られて、私達は家を出てバスに乗って月村邸に向かいます。

『それにしても、バスで遠出は初めてですねえ』

『学校と家との距離と月村邸は離れてるからな』

「クウ……」

アリスとハーケンの会話を聞きながら肩に頭を乗せてきた久遠の髪を優しく梳く。

今日、月村邸でジュエルシードが発動して、フェイト・テストアロツサと戦う。

私に彼女に勝てる可能性はとてつもなく低い。フェイト・テストアロツサの技量がわからない上、私と彼女の魔導師ランク差は歴然。

でも負けない。負けたくない。負けるわけにはいかない。

私の意地とプライドと目的の為に



《あれが、そうなのか。ふむ。アリサと同年にしては鍛えられている身体付きだな。しかも兄も常人には見えん身体付きだ》

《まあ、恭也さんとはかく、なのははもう戦ってる戦士だもの。あたしも早く、なのはみたいに強くなりたい》

《ブラーボー。その心意気は評価に値するが、今日はリラックスリラックス》

《おっと、いけない。そうだったわね》

「おはようございます。アリサ」

「おはよう。なのは！」

なのはに手を上げて返事を返す。

「っと、そっちの2人は誰よ？」

私達と同一年くらいの男の子と、頭から獣耳を生やした、なのはの後ろに隠れている女の子。

「男の子はユーノ、女の子は久遠。わけあって今は家に居候していません。機会が良かったので連れて来ました」

ユーノ？ユーノ……ユーノ……ユーノオ　！？

「ユーノって……」

「あの…ユーノ……くん？」

「あ、あはは……ど、どうも……」

「「えええええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

こ、これにはさすがに驚いたわよ！！

てかなに！？あたし同い年の男の子の頭を撫でたり抱き締めたりしてたわけえ！？

うっわ！恥つつず！！

すずかもおんなじ考えに至ったのか、ちょっと頬が朱い。

「なのはちゃん、そっちの肩の上と後ろにキラキラした光りを出して浮いているゲシュペンストとガンダムはどうしたの？」

あたし達が衝撃の事実に戻まっている間に、忍さんはハーケンとアリスに興味が行ったらしい。



「ハーケン、アリス、忍さんに自己紹介を」

『OK、ブラザー』

ハーケンは返事をする、なのはから飛び降りて着々の瞬間にブースターを吹かして落下の勢いを殺してテーブルに着地。アリスも静かにテーブルに着地。てかアリスの推進ってエーテルスラスターなの？

『グッドモーニング、エレガントレディー。俺はハーケン、ハーケン・ブラウニング。ゲシュペンスト・ハーケンの管制人格で、マイソウルブラザーカルムレードパートナーなのはの造った自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS搭載のロボツツさ』

『同じくSガンダムの自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSにして管制人格兼ALICEシステムの中核コア兼ファミリアのアリスです。よろしくお願いします』

「自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS……言葉通りの物なら、スゴい物を造っちゃったのね、なのはちゃん」

「恐縮です。今この2人でデータを取りながらデチューン版の製作を検討中で、その内特許を取得する予定です」

「あら、それじゃあ商品化したら1機買おうかしら？」

「家族割引でご提供させていただきます」

「なのはちゃん上手いこと言うわねえ。恭也、結婚はいつにする？」

「なのはも忍も、からかわないでくれ」

なんの前知識無しにアレの凄さを名前だけで理解出来る忍さんって何者 ！？

|||||

なのはが来たから、あたし達はみんなで庭に移ってお茶を飲みながら魔法についてなのはから語られた。念話でブラボーから補足説明も入れられて、なのはの集めてるジュエルシールドがとっても危険な物だっというのは再確認出来た。でも同じロストロギアで似たようなヴァンシユジュエリーとは偉い違いよね。このヴァンシユジュエリーはあたしに師匠と戦う為の力をくれたのに。

「本当にごめんなさい！！僕がジュエルシードを見つけてしまったばっかりに、なのはどころか2人まで危険な目にあわせてしまった！！」

「なに言ってるのよユーノ。そもそもジュエルシードが地球にやって来たのはあんたの管轄外でしょうに、あたしはあんたの行動力を認めるし、好ましく思うわ」

それにジュエルシードのお陰で、あたしは自分の気持ちに自覚を持てたし、ブラボーという尊敬する師匠も得られた。

ジュエルシードがなかった、ユーノがジュエルシードを見つけなかったら、あたしは他の誰か、それこそ大人になって普通に男を好きになって結婚してたかもしれない。ブラボーとは逢わなかったかもしれない。ヴァンシユジュエリーも拾わなかったかもしれない。I Fのあたしはそういう選択をしたかもしれない。だからあたしはユーノに感謝こそすれども恨みなんてない。ユーノが居たからジュエルシードは地球にやって来て、あたしはなのはを愛してブラボーに逢えて、これからベルカの戦士になろうとしている。

運命の歯車が噛み合わさらなかったら、今のあたしはここに居ない。だからあたしはユーノを悪いだなんて思わない。むしろひとりでも被害を食い止めようと、一見無謀だけで見知らぬ土地に単身乗り込んで来たユーノの勇気をあたしは認める。

「私も、ユーノくんはスゴイと思う。同じ立場じゃ、私は何もしなかったと思うから……」

「2人とも……」

「だからしんみりするんじゃないわよ。ユーノが居たから、あたし達はまた友達が増えたんだもん」

「うん。アリサちゃんの言う通り。ユーノくん、久遠ちゃん。私とお友達になろう!」

「え、えつと、でも……」

「クオン！？久遠……も？とも……だち……？」

「うん！」

すずかもあたしと同じみたいね。

「よろしくね、ユーノくん、久遠ちゃん。私のことはすずかって呼んでね！」

「あたしもアリサで良いわよ？」

「……すずか……アリサ……ありがとう」

「すずか……アリサ……クオン！」

「あ、コラ！久遠重い！」

「クオン！アリサ、すずか、久遠のともだち！」

またあたし達に騒がしい仲間が増えた瞬間だった。

世に不思議は多けれど、どれほど奇天烈奇々怪々なデキゴトも、ヒトが居なければ、ヒトが視なければ、ヒトが関わらなければ、ただのゲンシヨウ、ただ過ぎていくだけのコトガラ

人、ひと、ヒト

ヒトこそ、この世で最も摩訶不思議なイキモノ

ユーノが居なければ、出逢うこともなかったコトガラの数々と縁の数々

この世には偶然なんてない、あるのは『必然』だけ

侑子さんの言う通りかもね。

この世界、この次元、この時空、この時間軸に居るあたしは必然に導かれて今の選択肢を歩んでいるのかもしれない。

必然かもしれない、でも自分で選択して納得して、今のあたしは居る。それは必然でも偶然でも運命でも宿命でもない。『あたし』自身の選択。あたしはそう思う、信じる。侑子さんが実際に目の前に居ても断言する。あたしはあたしの意志と選択でなのはと友達になつて、魔法と出会って、なのはを愛して、ブラボーに憧れて、ベルカの戦士になる！

なのはと一緒に戦う為に

ピキーンッ

「……………（今の……）」

「ッ　！？」

「どうかしたの？なのはちゃん」

「…いえ、少し御手洗いに行きたくなってきた…」

《ブラボー、今の感覚…》

《ああ、断定は出来ないが、高町なのはの反応から推察するに　》

《《ジュエルシード！》》

《ブラボー、場所はわかる？》

《聞いてどうする？まさか封印しに行く気が、アリサ・バニングス》

さっきまでのブラボーじゃない。

戦士・キャプテンブラボーがあたしに問う。

《お前はまだ訓練すら終えていない。武器もない、戦う術もない。そんなひ弱なお前が行った所で、高町なのはの邪魔になるだけだ》

《わかってるわブラボー。でもなのはが何をするのか、サーチャーくらい飛ばす許可は頂戴》

《……１機だけだ》

《…ありがとう、ブラボー》

私達が念話で会話している間に御手洗いを嘘を吐いてどこかに行くのはと、付き添いで飛んでいくアリス。

ハーケンはユーノを連れて散策に行くと言い出して、ユーノはハーケンを肩に乗せて席を立つ。多分後で合流する気ね。

「ごめんすずか、あたしも少しトイレ行ってくるから、久遠をお願いね」

「うん。任せてアリサちゃん」

すずかの純粹さに良心が痛い。

あたしはすずかから見えない距離まで行くと、物陰に隠れてベルカ式魔法陣を小さく展開する。なのはの行った方向とジュエルシードを感じた方向が一緒とブラボーが教えてくれた。

あたしは1つだけサーチャーを飛ばして擬似視覚を繋げてなのはを探した。

「（見つけた！って、何よアレ！？ネコ？トラ？何よ！？）」

なんかトラっていうかヒョウっぽい動物がなのはと対峙していた。

とりあえずなのはにちなんでジュエルシードの暴走体って呼称するけど、暴走体はなのはに爪を立てて襲いかかった！

でも暴走体が動いた瞬間に、なのはは一瞬姿を消した。視覚だけじゃわかんないわ！音声機能ON！

「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

いつの間にか飛びかかる暴走体の目の前になのは居て、脚には紫電を纏っていて、ある程度離れてるあたしでも強烈に感じるプラーナ。

「アトランティス！！ストライイイイクツ！！」

つてえ！！

なんてもん生身で放ってんのよあの子　！？

『GYAAAAAIIII！！！！！！』

顔面を2回回転し蹴りで蹴られ、さらに3撃目を後ろ回し蹴りで蹴られた暴走体は、痛々しい叫び声を上げながらなのはから見て右にすっ飛んで行った。



しかもダメ出しとばかりに、アリスがふっ飛ぶ暴走体にビームスマー  
ートガンを撃ち込んだ。

『トウソーソード版のアトランティス・ストライク。我がマイスター  
はなかなかどうして、エグいですねえ』

「それは貴女もでしょうか？アリス」

『いえいえ、マイスター程では』

「いえ、アリスも」

『私は要らない子ですか？』

『仕方がありません、レイジングハート。マイスターはまだプラス  
ターシステムの後遺症が残っていてミッド式は使えないんですから、  
今回は私達に任せてくださいな』

『……わかりました。アリス。マスター、頑張ってください』

「ええ、ありがとうございます。レイジングハート」

『いえ…っ！来ます…！』

『人が喋っている時は…！』

「静かに待つのがマナーですよ？トラさん」

復帰して牙を剥いて、背中に翼を生やして低空飛行して突っ込んで来た暴走体を、ジャンプで避けて上を取ったなのは。

アリスがビームサーベルで片方の翼の付け根を斬りながら、後ろにビームスマートガンの銃口を向けて前を向いたままもう片方の翼の付け根を撃ち抜いて、暴走体の翼を切断した。

ニュータイプかお前は　！！

そして上を取ってたなのはの拳の先には、環状魔法陣が展開されて、赤い光が集まって

「カロリックスマッシュ！！」

暴走体の背中を殴りつけて、赤い光は暴走体の身体を貫いて、地面で大爆発を起こした。

「なのは！」

「ユーノ！封印を任せます！」

「ええっ　！？」

「私はまだ魔法を使えません！封印出来るのは今、貴方だけです！」

「わ、わかった！」

やって来たユーノはなのはに頼まれて、足下に円形の翠色の魔法陣を　ブラボーによればミッドチルダ式魔法陣を展開した。

「妙なる響き　光となれ　許されざる者を　封印の輪に！ジュエルシード……封　うわっ！」

「ユーノ！？」

封印式を紡いでいたユーノを、黄色い光弾が邪魔した。

しかもその際にユーノに向けて翼を治した暴走体が飛びかかった。

そしたらまたなのはが消えた。いったいどんな移動法したらサーチヤーの認識領域外のスピード出せんのよ！？

「ねんころはねんころらしく　」

ユーノと暴走体の中に入ったなのは。右足にプラーナが集中する。

「コタツに入って寝てなさい！グラスヒール！！」

なのはが蹴りで暴走体の顎をカチ上げると、踵が爆発した！

蹴りと爆発で勢いのついた暴走体は、一番やわそうな懐をなのは晒していた。

『終わったな』

あたしはブラボーの言葉に頷いた。

なのはは腰溜めに両腕を引き絞っていた。そしてなのはの身体から視覚で見える程のプラーナが溢れ、その腕にはアトランティス・ストライクよりもさらに強力なプラーナを感じた。

「うおりゃあっ！！」

上から斜め下に拳を暴走体にめり込ませる。

『Gya』

「うおおおおお！！！！！！！」

ブラボーラッシュよりも残像の残るラッシュを暴走体の懐に叩き込む。

視ててこっちのお腹が痛くなるんだけど……。

『Gya、gyaa……』

「ふんっ!!」

身体をくの字に曲げた暴走体の顎を、プラーナの集中した右のアップで打ち抜くのは。

あ、牙が何本か逝ったわ……歯がむず痛い。

「貫け!! 覇龍!!」

覇龍　!?まさか!!

なのははプラーナの集中した振り抜いた右腕を再度腰溜めに引き絞って、それを空にカチ上げた暴走体に向けて正拳突き如く突き伸ばし放った。

覇気で出来た龍　覇龍を!

「これぞ奥義! 轟覇機神拳!!」

覇龍は暴走体を呑み込んで、暴走体突き抜けると、暴走体は大爆発。

なんていうか、地面に落下した暴走体は、表現出来ない程ボロボロなのにピクピクしてるから死んじゃあいならしい。

『あの技、どうやら非殺傷付きらしい。おそらくは不殺の念が込められているのだろっ』

心眼・ブラボーアイには驚くわよホント。

『さすがブラザー、スゲエシユラナツクルだせ。んで？フレンズフレットボーイを撃ったヤツはどこだ？』

『あそこに居ますよ。3時方向、林の先の電柱の上』

アリスがビームスマートガンを向ける先

金髪で真っ黒装束の私達と同年位の女の子が、斧っぽいやいデバイスをユーノの方に向けたまま、なんか小刻みにプルプル震えてた。目尻には涙が薄っすら見える。

やあ、まあ、アレはバイオレンスレベルがヤバすぎるわよね。普通に暴走体に同情するわ。

「貴女……ですか、ユーノを撃ったのは」

「ひっ！…っく、ロスト…ロギア、ジュエル、シード…いた、だいて、行き…ます…！」

涙眼で目的を言い切ったのは拍手だけど、はっきりビビってんのが丸分かりよ。

「ユーノ、封印を！」

「あ、う、うん！」

「っ、させない！」

「アリス…！」

『了解！スペリオルガンダム！目標を狙い撃つ…！』

ユーノを邪魔しようとした動きだそうとした女の子に、アリスがビームスマートガンを連続で撃つ。

正確無比の一発必中の射撃に、女の子はバリアでビームを弾く。

防御は出来るらしいけど、機動力がありそうなあの女の子でも一発一発をガードしなきゃならないアリスの射撃の命中がコワイ。

ホントにニュータイプじゃないの！？

でも女の子はさっきのなのはみたいに一瞬消えると、暴走体の目の

前に居て、斧が変形して魔力刃が出力して鎌になった。

「しまった！」

「ジュエルシード！封印！！」

女の子は地面に倒れていた暴走体に一閃、真つ二つに斬り裂いた。

暴走体は煙になって消え、後にはずかんちの子猫と青いひし形の宝石　ジュエルシードが残った。

『Internalize・No.16』

ジュエルシードが女の子のデバイスコアに吸い込まれた。

『横取り泥棒とは、何をされるのか理解してのことでしょうね』

「く、私は、ジュエルシードを手に入れないとならない。だから…  
邪魔はしないで」

『ふざけるのも大概にしなさい。貴女如きに私のマイスターの戦いの邪魔はさせません』

隠しようもない怒気を孕んだ声で言い放つアリス。しかもビームス



マートガンの銃身が震えている。ほとほと人間ばいわよね、あの子も。

「私も引けない……邪魔をするなら」

『5対1……本気ですか？』

「たとえ何人でも……私は負けられない！」

対峙するなのは達と女の子。

『マイスター、私がやります。手出しは』

「……わかりました。でも」

『ご心配は無用ですよ。私は貴女の最初のデバイスにしてファミリア。そして戦う為の力たるガンダムボディに、フルカネルリ式永久機関やALICEシステムを搭載する私のどこに負ける要素がありますか？』

『強気だな、不思議の国のアリス』

『フフ、当たり前ですよ、ハーケン。貴方にもいずれわかりますよ』

『OK、ハッスルメカアリス。頑張れよ！』

『OKです、ハーケン。さあ、死合いしましょうか？真っ黒ガール？』

「……フェイト……フェイト・テストロツサ……私の名前、真つ黒  
ガールじゃない……！」

『私はアリス！さあ、踊りなさい。私の奏でる永久円舞曲 - End  
l e s s W a l t z - で……！』

「行きます……！」

鎌を構える女の子とビームスマートガンを向けるアリス。

静寂の時間が、2人の間に流れる。

「ッ……！」

『狙い撃つ……！』

ビームスマートガンを撃つアリス。

女の子はまた一瞬消えてアリスの真後ろに現れる。

『それは見切っていますよ……！』

後ろに大きく退くアリス。

女の子　フェイトが振り下ろした鎌は、悲しく空を断つ。

『今日の私は、容赦ありませんよ!!』』

「キヤア!!」

アリスのビームスマートガンがフェイトの右脚と左肩に命中する。

でもフェイトにケガはなかった。

でもフェイトはバックステップでアリスと間合いを開けると、肩を押さえながら空に飛ぶ。

「くっ」

『ケガはしませんが、関節を撃ち抜きました。自然治癒で十分治りますが、30分程は動かせば痛みが走ることでしょう』

なのはもエグいけど、アリスも別方面でエグいわねえ……。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃!」

『Photon Lancer・Full auto fire・』

「エフィールド・バリアー……!!!!!!!!!!」



「バル、ディッシュ！」

『Arc Saber.』

フェイトがデバイス　バルディッシュを振ると、魔力刃がブー  
メランの様にアリスに飛んで行った。

『甘いですよ！』

ブースターを吹かして若葉色の煌めく粒子を放ちながら、アリスは  
あえて魔力刃に飛び込んでいく。

『相対速度2・2！バレルロール！！』

魔力刃を肩のスラスターを吹かしてバレルロールで回避すると、そ  
のままビームスマートガンを撃った。

『Sonic Move.』

『ッ！？…右いつ！！』

「なっ！？」



『っぐうう、あああああ！！！！！』

「ぐっ、ああっ！」

アリスが左手のビームサーベルをフェイトに向けて連続で振るう。

機械だからか、小さいからか、そのスピードは疾い

『もらったっ！！』

「しッ ！？」

アリスの連斬を捌き切れなくなったフェイトの隙を突いて、ビームサーベルを突き型の型でフェイトに突っ込む。

ちよ ！？サーベルはダメでしょアリス！！

「サンダースマッシャー！！」

『え？キャアアアア！！！！！！』

「アリスーーーー！！！！！！」





「レヴィー!!」

「フェイト!!」

「…うん!!」

目配せし合ったフェイトとレヴィって呼ばれた女の子。

「アインス!!」

「っ、くうっ!!」

レヴィと競り合っていたのはが、レヴィがデバイス　これまた  
フェイトのヤツとそっくりのデバイスを振り抜いて、競り負けたな  
のはが弾かれた。

そして弾かれた先にはフェイトが腕を突き出して、ミッド式魔法陣  
を展開して待ち構えていた。

「ツヴァイ!!」

『 Photon lancer · Full auto fire ·  
』

「キヤアアアー！！！」

零距离での直接連続射撃！？アレじゃあバリアジャケットだけじゃ！！

射撃を放ったフェイトはダメ押しとばかりに斧型になったバルディッシュでなのはをフルスイングで打ちつけた。

「がふっ！」

そしてレヴィは青い光に身を包んで、巨大な刀身が青い大剣 斬艦刀みたいな大剣に変形したデバイスを構えて、フェイトも身体に黄色い光を纏って、また鎌に変形したバルディッシュを構えて

「ツイン！」

「バード！」

レヴィは一直線、フェイトがレヴィの周りを複雑な軌道で、なのはに向かって飛んでいく。

ちょっと待ちなさいよ……。

その掛け声と2人で突っ込む技、あたし一個物凄く心当たりが



「『』なのは――！！！！！！！！！！」

飛び散る鮮血

木霊するあたしとユーノとハーケンの叫び声。

スローモーションで墜ちるのはとアリス

なのはが……………負け……………た……………？

第19話 キャプテンブラボーとアリサの道 憤る不思議の国のアリス そして

かなりの急展開に次ぐ急展開!!

やっと書きたかった初の山場にさしかかれたよ。

皆さんの意見・感想をお待ちしておりますよ!!

ちよいと誤字を修正しました。

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……（前書き）

いろいろと、かなりぶっ飛びまくって暴走激走の回です。

何がしたいんだるか、私は、つか弱い星光なのはどこ行った？

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……

side：アリサ・バニングス

サーチャーからの映像を片目、目の前の景色を片目で見ながら、あたしは駆ける。

なのははユーノが魔法で受け止めた。

アリスは途中で立て直したけど背中ของブースターから火を噴いて、着地はハーケンに支えられて無事だった。

「なのは！なのは！なのは！！」

「ぐっ、私は平気……です……でも、でも……レイジング……ハートが……」

胸甲のお陰で致命傷は避けられ、魔力刃でも非殺傷はかかっているはずだから、そこまで深い傷じゃないのかもしれないけど、肩と胴の裂けたバリアジャケットから血を流すなのは。でもその視線は、涙に溢れたその瞳は、なのはの血だらけの手に握られているレイジンググハートのデバイスコアに

「私が……私が不甲斐ないばかりに……また、貴女を、こんな姿に、こんな傷だらけにっ！！」

なのははデバイスコアを握る手、左手を胸に抱きながら、右の拳を地面を砕く程の力でめり込ませた。

「っ、くっ、レイジングハート……リカバリー…スタート…」

なのははレイジングハートのデバイスコアに口づけると、胸を掻き押さえながら、桜色の光に包まれたレイジングハートのデバイスコアをユーノに渡した。

「な、なのは……」

「ユーノ、結界強化をお願いします……」

なのははゆらりと胸を押さえながら立ち上がると、ハーケンに腕を引かれながら危うく飛ぶアリスを一目見てから、空を仰ぎ見上げた。

そして尋常でないプラーナ　　うっん。覇気が、なのはの身体から溢れ出した。

プラーナ以上に濃厚で存在感のある生命エネルギー　『覇気』。

プラーナが身体の生命エネルギーを表していると仮定すれば、覇気はその個人の身体と魂から溢れる生命エネルギー



でもあんなに覇気を使ったら子どもなのははー！

「私は愚かです……本当に、どうしようもないマスターです……」

髪の毛が逆立ち、その長さを増していく、いや、そればかりか

「な、のは……」

『マ、マジ……か』

なのはは身体から覇気を溢れかえらせながら、その身体が大きく  
否、身体を成長させた。

なのははから溢れかえる覇気は収まったけれども 代わりになのは  
の身体の中を異常な覇気 生命エネルギーが駆け巡っているのが  
離れていてもわかる。

バリアジャケットもいつの間にか元通りに直っていた。

『彼女は……ただものではないな。これ程の気迫……ベルカの騎士  
でもそうは居ないぞ……』

「なのは……」

大人になったなのは、少し伸びた前髪を掻き上げて位置を少しズラした。

あれが……大人のなのは……？

「変身……魔法？」

「わからない。でも全く魔力を感じなかった。油断しないで、レヴィ」

「わかってる、フェイト」

デバイスを構えるフェイトとレヴィ。

なのはは自然体のままで立っていた。

「バルディツシュ！」

「バルニフィカス！」

『Get set.』

また光を纏って、フェイトとレヴィはなのはに突っ込んでいった。

レヴィが正面から大剣を

「チエストオオオオツ!!」

フェイトが一瞬消えてなのはの真後ろに現れて鎌を

「はあああああつ!!」

振り下ろした

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 脅威と敵意を被  
うもの成り」

なのはは両腕をそれぞれフェイトとレヴィに向けた。

腕の先に現れたのは聖なる結印、五芒星の白い魔法陣。旧き印 - エ  
ルダーサイン -

「受け止めた!?!」

「でも魔力なんて感じないよ!」

火花を散らしながらせめぎ合う防御結界と魔力刃。

でもなのはは直立の自然体で腕を伸ばした体制から動いていない。

逆にフェイトとレヴィは腕に力を込めてるからか、腕や肩が、デバイスが小刻みに揺れている。

あたしはなのはを見て背筋が凍った。

今のなのはの雰囲気、気迫には怒りを感じる。

でも顔　　前髪で隠れて影になって分かり難い表情には、色がなかった。

無表情じゃない、無表情を通り越した本当に『無』の表情がそこにはあった。

|||||

あたしはアレを　　なのはの『無』の表情を見たことがある。

それはあたし達がそれなりに会話し始めて、それなりに仲良くなり始めた頃。

まだ気の弱かったはずかは、男子にもいじられる対象になった事もあった。でもその時は今思い出しても、や、今だからこそ臍物が煮

えくり返りそうだ。

すずかはなのはとは別ベクトルでまたカワイいからさ、その時は親が会社の社長でお金持ちで運動神経も良くて頭もあたしやなのは程じゃないけど、クラスでは10位以内でそれなりに良い。あ、ちなみにあたしは学年2位、なのはは学年1位の頭脳よ。あたしIQテストで200あったのに、なのははいくつなのかまだ聞いてないのよ。あとで訊こう。

つと、閑話休題

んで、顔も良い、ボンボンのお坊ちゃんが居ただけどさ。

そいつがまたウザいナルシでね、世界は自分を中心に回っていて、自分は何をしても許されるって言い張って、よりにもよってすずかを嫁にするって言い出して、しかも拒否権は無いつて言って、さらに断ったらパパやママが黙っていないぞ？家族がどうなっても良いのか？って脅迫までしてきたのよ！？

周りは余りの異常さに一歩引いて事態を見てたし、昼休みで近くに先生居ないし、すずかは怖がって泣くしで、あたしはせっかく出来た友達を泣かせるアイツが赦せなくて、堪忍袋の尾が切れそうだったんだけど。

「おやおや、これはこれは、学年筆記成績トップで唯一体育はダメダメの高町なのはちゃんじゃないか。いったいこの僕に何か用かい？」

「すずかが泣いています。謝って下さい」

「ふっ、何を言うかと思えば、彼女は僕の告白に感激のあまり嬉し泣きをしているんだよ」

「貴方の眼は節穴の様ですね、眼科医……や、精神科医をお薦めしますよ？幸いにも、兄の知り合いに医師が居るものですから」

「ははっ、学年トップも勉強は出来ても一般教養はやっぱり子ども相応らしい。謝るのなら今の内だよ？僕はこの世で一番偉いんだからさ」

「眼科医や精神科医より先に脳外科医に診せた方がよろしい様ですね。勘違いのボンボンのガキはこれだから困る。いったいどんな生活環境で育てばこんなにバカでアホでボケの脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気野郎が出来上がるんでしょうね？」

「キミは自分の立場がわかってないようだね？キミは何を僕に言いたいんだい？」

「学の無いガキはコレだから……人語を解せないのならば、言葉は不要ですね」

「…僕を怒らせて、どうなるかわかっているのかい？キミだけじゃない。キミも、キミの家族も破滅さ。そう言えばキミの家族には母と姉が居たね。容姿も良い。パパも喜んでくれるかな？」

「成る程、蛙の子は蛙。下衆の親は同じく下衆の人種でしたか……」

「……お前え……いい加減にしろよ！」

「ぐっ…」

「どうだい？僕の蹴りは？これでも空手をやってるからね」

「なのはちゃん！やめて！なのはちゃんにいじわるしないで、  
キャー！」

「ははっ、良い気味だな高町なのはちゃん。すずかちゃんもお  
母さんもお姉さんも、僕が貰っていくよ」

「……堪忍袋の尾が切れた……」

それがなのはの『無』の表情を見た、最初だった。

「すずかに手を出すには飽き足らず、母様や姉様にまで毒牙に  
かけようと画策しようとは。外道 断つべし！」

「やるのかい？体育はダメダメなのはちゃんが、この僕と？  
とんだお笑い種だね」

「喜劇と笑わば笑え、外道に話す舌など持たぬ、刮目するが良  
い」

「なっ ！？」

その時、一瞬だけなのはは消えて、アイツの懐に居た。

先ずは膝蹴り

「ぐえぶっ」

膝蹴りでアイツをすずかから僅かに引き離れたのは、そのまま曲げた脚を上には伸ばして、アイツの顎を蹴り上げ

「ぎゃぴー！」

「我が一撃は騎士のランス！爆裂！！」

回転回し蹴りの2連撃でアイツをさらに引き離れた。

声を上げなかったから、今だからわかるけど、顎の蹴り上げで気絶してたのね。んで続きだけど

そこから踵落として脳天を蹴り落とし、アイツは顎を打ち、浮き上がったアイツの顔面向けて3撃目の後ろ回し蹴り

「アトランティス・ストライク！！」

グキッって音がしたのも覚えてる。多分鼻の骨が逝った音ね、アレ。



いくら一年生で小柄で女の子のなのでも、後ろ回し蹴りはかなりの勢いと威力だったらしく、アイツは教室のドアまですっ飛んでいった。まあ、距離は1mもなかったしね。

「光射す世界に！汝等闇黒、棲まう場所無し！！渴かず！飢えず！ 無に還れええっ！！」

あの時のなのは厨二病全開だったわねえ……。正しくポーズもモーションも完璧だったし。

「レムリアア、インパクトッ！！」

また片足をバネにして飛び出したなのはが、右手の指を曲げた掌打をドアに叩きつけられてもたれ座ってたアイツに叩き込んだ。

「昇華！」

まるで衝撃があとからきた様に、アイツごと教室のドアが2枚とも吹き飛んだ。

あの時の後ろ姿

あの時のなのはは、白き王に重なって見えた。



「きえッ　！？」

一瞬なのはが霞み消えた。さっきより速すぎて残像が残る程速いんだ。

「え？」

「フェイト！！逃げ　」

「空円脚！でええいつ！！」

子ども体型とは全く馬力と威力も速さも違う後ろ回し蹴りは、フェイトを吹き飛ばした。

「かつはっ　」

木を数本へし折って、フェイトはようやく止まって、ぶつかった木の根本にもたれ倒れた。

「フェイトー！！！！」

「今のはアリスの分　」

「よくもフェイトを！！！！」

レヴィは右薙で大剣を振るった。でもなのははその大剣を、覇気を纏った脚で踏み潰してブチ折った。

「ザンバーが！？」

「そしてコレは」

なのはの右手に禍々しくも力強い、でも正しい赤い覇気が集中する。

「真覇！剛掌閃ッ！！」

「があああっ！！」

モロに右ストレートの直撃したレヴィの方は、フェイト以上の勢いで、バカみたいにすっ飛んで、フェイトの隣りにあった岩も砕いて、その後ろの木に当たってようやく止まった。

「コレが レイジングハートの分です」

片膝を着いて、右腕を押さえながら、なのはは呟いた。

「なのは……」

『彼女は……危ういが、凄まじい戦士だな』

ブラボアの言う通り、なのはは危ういが、凄まじく強い。

でもそれが、身を削り、魂を削り、心を削り、生命を削って引き出しているような強さに思えて、あたしは気が気じゃない。このまま、こんな調子で戦い続けてたら、なのはは

「…よ、くも……」

ふとサーチャーが拾った声。これはフェイト？レヴィ？

「…よく、も…よ、くも…よくも…よくも…よくも、よくも、よくも、よくも、よくも…よくもよくもよくもよくもよくもよくも　よくもっ！！」

声の主は、口から血を流しながら、バルニフィカスを杖に立ち上がったレヴィだった。

「くっ……」

身体を青い光

レヴィは魔力、なのはは覇気で身を包んだ。

「よくもフェイトを！お前は絶対、ボクが倒す！！」

折れた大剣を再生成させたレヴィが、なのはに切っ先を向けながら突進する！

「突き破れ！ボクのバルニフィカス！！」

「第4の結印よ！！」

レヴィの突撃をなのはは防御結界でガードした。

「ぐっ！！」

「いつけええええー！！！！！！！！！！」

火花を散らしてせめぎ合う結界と切っ先。

なのはは突き出していた左腕だけじゃなく右腕も伸ばして、さらにブラーナを　覇気を込めた。

防御結界の内側に薄く張られた青い障壁。

レヴィのバルニフィカスは、先端のほんの数ミリが結界を突き抜けてきていた。内側の障壁はそれをガードして押し返す為に張ってるらしい。

ようやくなのは達のもとに着いて、擬似視覚から本物の視覚で、なのはの戦いを焼きつける。

日常のすぐ裏にある非日常で、いつも命を賭けて戦うあたしの想い人の勝利を願いながら、あたしはなのはとレヴィの戦いに刮目する。

「ッ……はっ！」

「ぐあっっっ！」

覇気で気当てでもしたのか、レヴィが急に後ろに吹っ飛んだ。

「くっっ！」

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

空中で宙返りして着々するレヴィ。

なのはは傍目から見てももついっぱいいっぱいだ。

「強いんだね……フェイトやリニス以外に、こんなに強い人と闘ったの、初めてだよ。でも　だから負けられない。ボクはこの力をフェイトの為に使う事を、フェイトの為に振るう事を、フェイトの邪魔をするヤツを粉碎する為にとって！ボクは決めたんだ！！」

あの子　あたしと同じなんだ。

「だから　バルニフィカス！！」

『G a t s e t .』

「リミット解除！マキシマムドライブ！！コード「雲耀の太刀」！！」

レヴィの魔力が爆発的に高まって、足下に魔法陣が展開される。それは三角形で頂点は円形の魔法陣　ベルカ式魔法陣。

《あの子、ベルカの騎士なの！？》

《確かにベルカ式だが……何故だ、構成式にミッド式の物が混じっている。あの魔法陣はなんだ？》

あたしとブラボアの疑問を余所に、バルニフィカスの刀身がさらに倍に延長する。



「ミッド式を内包したベルカ式魔法陣：近代ベルカ式ですか。そしてこの魔力の高まり方……あの子、独力でブラスター1を使った……？ならば私もそれに応えなければなりませんね」

ぶつぶつ言いながら、なのははなのはで右腕を突き出して、その先にあの青い魔法陣が現れる。

「出でよ、デイスカッター！」

若葉色の粒子が魔法陣に集い、抜き身のサイバスターのデイスカッターが現れ、それを手に取るなのは。

「我が名はレヴィ。レヴィ・テストロツサ！我こそは、フェイトの剣なり！！」

「霊燃機関全力稼働！超攻勢防御結界！！」

レヴィの身体から魔力が

なのはの身体からプラーナが

鉄砲水の如く溢れ出して、それぞれの剣へと集中する。

「刮目せよ！これが我が太刀筋なり！！届け！雲耀の疾さまで！！」

「はあああつ!!」

レヴィは、その身には不相応な程巨大な大剣　　斬艦刀を肩に担いで天に飛ぶ!

「靈巖荒かなる刃よ!我に仇なす諸悪を尽く殺戮せしめん!!」

ディスクッターを地面に突き刺したなのは足下にはまた青い魔法陣が現れて、突き刺したディスクッターが分身。それはすべてで1本存在し、なのはの周囲を取り囲んだ。

なのはが左手を上げると、最初に地面に突き刺したディスクッター以外の分身したディスクッターが宙に浮き上がる。

「一刀両断!!」

「往け!!」

上から斬艦刀を振り下ろしながら、落下速度も味方につけたレヴィへ、分身したディスクッターが次々と射出されていく。でも斬艦刀はそのことごとくを両断し、粉碎していく!

「チエストオオオオ!!!!!!」

「久遠の虚無へと還れっ!!」

振り下ろされる斬艦刀に、なのははディスクッターといつの間にか左手に握っていたバニティリッパーに覇気を込めてクロスの斬撃で応戦した。

「はああああああああああっ!!!!!!!!!!」

「でえやああああああああああっ!!!!!!!!!!」

魔力で出来た斬艦刀と、覇気でコーティングされたディスクッターとバニティリッパー。

両者のサイズは歴然だが、使い手の体格差か、威力は拮抗していた。

「ボクは負けられない!!フェイトの為に、負けられないんだー  
————!!!!!!」

「っぐ!!」  
ピキッ

ディスクッターとバニティリッパーに僅かに罅が入った瞬間。光の柱が、なのはとレヴィを包んだ。



自分の為でなく、人の為に振るう。ただその一心で振るわれた力は  
有史より、その力は無敵無敗

「相討ち　と、言いたいところですが、私の負けですね」

胸甲が砕け、バリアジャケットもインナーも斬り裂かれて、僅かに  
血が流れ出した。

そう、レヴィの刃は　私に届いていた。

「なのは……ボクは別に」

「互いに引けない物を持つ者同士、衝突は必至です」

「なのは……ボク、ボクは……」

「頑張りましたね、レヴィ。貴女の強さ、しかと胸に刻み込みまし  
た。文字通りに……ね？」

「うっ…ひっ…っ……ごめ、ごめ、な…さ、い…」

「ほらほら、負けた私がこんなにも清々しいのに、勝った貴女が泣  
いてしまっただうするんですか？」

私はバリアジャケットのアウトスカートの裾でレヴィの涙を拭いていきます。

大人の身体になったからでしょうか？

なんかこう、守ってあげたくなくなるんですよ……。もしやこれが俗に言う母性本能という物でしょうか？

私はまだ泣き止まないレヴィをそっと抱き締めると、背中を優しく軽く叩く。

撫でるよりもこっちの方が個人的には落ち着くので。

「な、のは……」

「なんですか？」

「もっと……名前、呼んで……ボクの……名前」

「…レヴィ」

「ん……」

私がレヴィの名前を囁くと、レヴィは嬉しそうに私の胸に顔を埋めてきました。

いつの間にかケガも治ってバリアジャケットも直って

なんなんですかね？この空間？

トランザム・バーストによる意識共有空間のように、エーテル版の意識共有空間なんでしょうかねえ？

まあ、どうでも良いですか

「レヴィ……そろそろ時間のようですよ？」

「やだ！なのはから離れたらまたなのはと戦わなくちゃならなくなる。そんなのやだ！！」

「わがままを言うてはいけませんよ？レヴィ。貴女はフェイトの剣なのでしょう？あの言葉は、偽りなのですか？」

「ウソなもんか！！ボクはフェイトの剣だもん！！でもなのはと戦うのもやだ！！」

「レヴィ、私も貴女も互いに引けない理由と想いがあります。私達の目標が共通である限り、私達は戦わなくてはなりません。それは互いに譲れないものを背負っているから」

「……やだよお………そんなの……」

「レヴィ。貴女はフェイトを守る剣なのでしょう？自分の言った事を貫き通せない貴女には、力で勝てても、心では私には勝てません」

「べ、別に、ボクはなのはに勝ちたいわけじゃ」

「私を倒す。そう言ったのは貴女ですよ？」

「そ、それはほら！い、勢いだよ勢い！フェイトがやられて、ボクもちよつとアタマにきてたから」

「自分の発した言葉には責任を持ちなさい。良いですね？」

「うっ……はあい……」

はて、なぜ私はレヴィに説教紛いの事をしているんでしょうか？

まあ、良いでしょう

「レヴィ、ひとつ言葉を教えます。私が好きな言葉のひとつです」

「なのは好きな言葉？どんなのかな？」

「慌てない慌てない。コホン 善でも悪でも、最後まで貫き通せた信念に、偽りなどは何一つない」

「善でも悪でも……」

「最後まで貫き通せた信念に」

「偽りなどは何一つ」

「「ない」



「カッコイイ！！カッコイイね！なのは！」

「カッコイイと感じるだけではダメです。この言葉の意味を、胸に刻みなさい、レヴィ。たとえ私達が今日明日にも再びぶつかり合うとも、私達は互いの信念を貫き通して戦わなくてはなりません。私は自分の信念を貫く為ならば、貴女とも、フェイト・テストロツサとも、戦います」

そう、私の行いが自己満足だろうとも、私は私の意志を貫く！

「たとえ相手が誰であろうと自分の信念を賭けて戦うコトに、悔いなどありません」

「……なのははスゴいや。ねえ、なのは何歳なの？」

「精神的には9歳ですが、身体は25歳くらいでしょうか？」

私があの時イメージしていたのは、最強の肉体。高町なのはとしての最強像は、やはり25歳の高町なのはですから、多分そんな感じになっているはず。それなら母性本能も湧いて当たり前ですか、ヴィヴィオを育てていっばしのお母さんをやってるんですからね。

「すっごーい！オトナだオトナ！」

「まあ、それ云々はともかく、レヴィ。貴女も、貴女の信念を貫き

なさい。たとえそれが険しい道でも。そしてその道の果て、その道の先が私と交わることあらば、私達は互いに戦うのではなく、共に戦う未来もあるでしょう」

「ほんと？ボクとフェイトとなのはと一緒に戦えるの？」

「貴女が自分の意志と信念を貫き通した先、貴女がその未来を信じるならば、いつか必ず」

「……わかった。それじゃあなのははその時までボクのライバルに認定！！うん、ボクってば天才だね！！」

「ふふっ、次は勝ちますからね、私が 私達が」

「ボクも ボク達だって負けない！！」

私達は互いに拳を突け合い。意識がまた真っ白に染まっていった。

「大切な存在を死守せんとする強い意志 言葉の意味が少し通じませんが、あの子も、そういう子なのでしょうね」

羨ましい。私には出来ない戦いです。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

「うっ……」

「なのはー!」

アリサ?

目が覚めたら、アリサの声が聞こえました。

「……あの子達は……?」

「行っちゃったわよ。次もボク達が勝つ!」って伝言残してね」

「そうですか……」

「……あんだ、こんな戦い方続けてたら何時か」

「ウェイト。それ以上は言わぬが花ですよ?バーニングアリサ」

私は立ち上がって朱色に染まり始めた空を見上げる。

「アリス、身体は平気ですか?」

『私よりご自分の心配をなさってくださいよ。バカマイスター』

「ふふつ、私は大丈夫ですよ。でも、どう説明しましょうかねえ…  
…これ」

未だにバリアジャケットのままの自分を見る。肩と胸部に掛かる重量感がなんとも

「戻れないの？なのは」

「つい勢いでやっちゃいましたからね。戻り方がわかりません」

「あんた非常識も程々にしなさいよ……」

『俺は今のナイスレディブラザーの方が好みだがな』

『黙れエロ助』

『ウエイト。不思議の国のアリス。頼むからサーベルはやめてくれ』

「まあ、なんとかなるでしょう」

「……あんた寿命縮んでるかもしれないのに、本人がそんなに暢気で良いの？」

「慌てても仕方ありませんよ。アリサ、とりあえずは状況をどう上手く話せば良いのかを考える時ですよ。とりあえずはすするかへの謝罪文でも考えておかないと、月村ライトニングボールテックスが落

ちてきますよ?」

「ううっ!!--ちよ、ちよっと!」コワいこと言っんじゃないわよなのは!!--」

「.....私も自分で言っつて恐ろしく思いました」

すずかは母様に似た、静かに怒るタイプですから、メンタルの弱い私には非常に恐怖を感じる怒り方なんですよ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第20話 互いに譲れぬ信念を胸に……（後書き）

レヴィがカワイくて死ねそう……

ちなみに25歳星光なのはさんは、サイドポニーテールとかそんなんでなく、普通に垂らしたストレートで、前髪が目元に掛かるくらいに延びてます。

まあ、イメージ湧かないなら普通に25歳なForceなのはさんのイメージで十分です。

第一の山場の75%が消化出来てホント良かった。

皆さんの感想をお待ちしております。

ちよいとアンケートです！

もしもレイ八さんをハーケンやアリスのようにロボットボディにするならどんなのが良いでしょうか？

まあ、あまりコアとかマイナーなのでなければ大体わかるので、皆さん意見をじゃんじゃんください！

第21話 その心の内に秘めたるものは…（前書き）

こんなにも大勢の方に支えられていることを有り難く思います。

これからもよろしくお願いします。

## 第21話 その心の内に秘めたるものは…

side：高町なのは

「はっ！せい！てい！やっ！」

私は道場で本物の小太刀を振るっている。

身体の寸法が変わってしまった為、間合いの確認と、真剣を振るっても良いと、父様が許可を出してくれたからです。

あ後は色々と大変でした。

忍さんに私のおかれている状況を1〜10まで話したのですが、そのあとノエルさんと両脇を掴まれ、風呂に投げ入れられ、身体中を色々と洗い尽くされました。もうそれは色々

家に帰れば帰ればで、母様と姉様にも忍さんと同じ説明をしたのですが、姉様はシヨックに真っ白に燃え尽きてしまいました。何せ末妹が1日にして外見的には第一子長女になってしまったわけですからね……しかも復活して人の胸を鷲掴みしたかと思えば今度は真っ白を通り越して塵になりました。そうなるくらいなら見るだけにしておけば良かったものを、姉様は相変わらずです。

母様のリアクションは特に、むしろいつも通りの笑顔で「あらあら、なのはがちょっと早く大人になっただけでしょ？ 土郎さん、明日はなのはの成人式祝いにしましょう」といいやがりました。母は強し



です。一度母様の思考パターンとかメンタル耐久指数が知りたいと本気で思いましたよ。

しかし困ってしまいました。

外見的には25歳高町なのは。

密かに楽しみだった父様や兄様との入浴が出来なくなってしまったからです。

どうやっても元男の私には、父様や兄様の人生経験を語り聞く風呂という場所は私の1日の楽しみのひとつの場だったのですが、残念です。

さらには学校にも行けないことです。

戻る方法を模索してはいますが、ハーケンとアリスに調べて貰った限りでは、私は普通に人間の25歳になってしまっているようです。胸部が少々たわわに実っていますが

変身魔法を使うという案もありますが、魔力量に余裕がない私には変身魔法を連続して使っている余裕はありませんし、ミッド式魔法はまだ念話以外は使うだけでもリンカーコアから胸苦しさを痛みがフィードバックしてきます。

そんなわけで当分はこの姿で過ごすことを決意し、今日は姉様が一緒に新しい服や下着を買いに行ってくれるそうなのです。

何回真っ白になったり塵になったりハートブレイクするのか私には想像つきません。

「……改めてみるとナイスボディですね……本当に25歳ですか？  
この身体」

しかし23歳や19歳は一片たりともイメージはしていなかった為、  
やっぱり25歳なのでしょう。

「……重い……」

柔らかに変形する胸を手で持ち上げてみましたが、なんとという重量  
感でしょう。とても言葉では言い表しきれない重みなのに柔らかい  
という不思議物体です。

「しかし珠の肌は傷物だらけですね……」

身体は成長しても傷痕は消えてはいません。いや、消す気もありません。

これは私が戦ってきた証。私にしかない、高町なものにはない『私』  
自身の証。

軽いシャワーで済ませて、長い髪の毛をいつもよりかなりの時間を  
かけて乾かします。

長さは前は少し、脇は肩や胸にかかるくらいですが、後ろ髪が尋常でないほど長いのです。腰より下、太腿辺りまで伸びてますから。

一応髪型は肩辺りで一度ゴムで縛って後は垂れ流しで放置ですね。

ショートカットも良かったのですが、せつかく長いのですから、このままにしておくことにしました。

「お待たせしました、姉様」

「待つてましたあ!!……くっ、なんと滲み出る卑しきオーラか……」

「バカやってないでたつたとききますよ？姉様」

服はサイズ関係から兄様のワイシャツや上着にスラックスを借りていますが、さすがにブラは姉様のは小さく、母様のは大きくて合わなかったのだ、さらしを巻いて対応しています。ちよつと息苦しいですが。

「ああ、あの愛くるしくて優しいかわいい妹は何処へ……」

「…25歳はどうせババアですよ」

「す、拗ねないでよなのはあ」

「姉様もあと数年したら私の気持ちが解るでしょう。ではいつてきます」

「ちよ、待ってよなのはー！」

スタスタと私不機嫌です！っていうオーラを引き連れて、私は玄関から作業部屋へ向かいます。

『グッドモーニング、ビックブラザー。なかなかビッグスタイルもオシャレじゃないか』

「おはようございます、ハーケン」

作業部屋の2階の縁側で座っていたハーケンの挨拶に応えます。

「おはよう、なのは」

「おはようございます、ユーノ」

さらに下からは見えませんでした。身を乗り出してきたユーノにも返します。

私はジャンプして、2人の居る縁側まで飛び乗ります。高さは約2m強くらいです。

「な、なのはー！」

『ヒュウー こいつはたまげたぜ。ビッグになって運動神経も変わったらしいな』

「いえ、これは私のレアスキルですよ」

「『レアスキル?』」

私の言葉に2人して首を傾げられます。

「最近、この身体になって2、3日、色々やってみてわかったことですが、この運動神経のすべては私のレアスキル 造称イメージトレースのお陰です」

『OK、ブラザー。詳しく聞こうか?』

イメージトレース

なんのひねりのない名前ですが、名前が能力を表してもいます。

イメージする事によってその動きを再現する。イメージは鮮明であればあるほど、トレース効力が増すレアスキル。

あの空円脚も剛掌閃も、勢いでやっていましたが、最近明確にイメージしてみたら他にも色々と出来る事が増えてきました。

ただ、このレアスキルには制限があり、トレース出来るのは身体の動きのみと、その身体で実行しゆる動きのみ。

今の私は大人の身体ですから色々と出来ませんが、子どもの身体で出来ないことを調べられれば良かったのですが

「成る程、なのはは頭で考えながら戦っているから」

『戦闘の時だけあんなに動けた理由がこれで解決だな。だがもっと早く気づいてたら体育の成績だって良かったんじゃないか？』

「さあ、どうでしょう。体育もそれなりにイメージしてやってたんですがね。どうやら私は体育の神様に嫌われているようです」

『んな体育限定の神様が居るかよ』

「わかりませんよ？私達が認知出来ないことなんて世界には山ほどあるのですからね」

私はハーケンにそう言つと、縁側から作業部屋に入ります。

「おはようございます、アリス。調子はどうですか？」

『すぐぶる良好で重畳ですよ、マイスター』

「そうですね。姉様と出かけるのですが、一緒に来ますか？」

『はい！喜んで！』

作業台の上に居たアリスは、背中の前回フェイト・テストロツサとの戦いの為に急遽用意して装備したZZのヤツからSガンダムのヤツに戻したブースターから若葉色に煌めくエーテル粒子を放ち、柔らかに飛び上がると、私の方まで飛んできました。

GN粒子とかないか、あとで調べてもみたいですな。

『マイスター、最終調整はあと12%で終わる見込みです』

「なら明日辺りに起動実験が出来ますね」

『ええ、苦節一年8ヶ月、ようやくですな』

「ジュエルシードが手元になれば一生完成しなかったでしょうがね」

『そうかもしれませんね。でもお陰で私はまだまだ強くなれる。フェイト・テストロツサなどに負けてたまりますか!!』

フェイトに負けた所為か、変に熱の入ってしまったアリス。

既にEXパーツ製作も最終段階に差し掛かり、あとは頃合いをみてアリスの筐体であるSガンダムに取り付けて最終調整をすれば実戦配備です。

あとはそろそろハーケンも自衛を出来るくらいには改良をしなければ。





そこまで話しが進んだところで、姉様は急に黙り込んでしまいました。

「姉様？」

「……私、ストーカーされてるかも……」

「……………は？」

いくら天然ボケのある姉様でも限度って物がありますってば。

「ホントだって、時々視線ぼいの感じるし」

「姉様、ご自分の容姿を理解してますか？」

「だからそういうんじゃないのってば、なんかこう、ねっとり絡みついて気持ち悪い感じで……」

姉様、それはおそらく男の穢れた欲望の眼差しですよ。

「まあ、なにかあれば……姉様ですから自力でなんとかでも出来るとは思いますが、手に負えない時は言ってください。私がガツンと一発、必殺顔面整形パンチをプレゼンツフォーユーに行きますから」

「なのははいつの間にか、どんどん遅しくなってるっちゃんなあ……」  
私が胸の前に右腕を引き寄せて拳を作ったと言った、姉様はそう言っ  
て私にぽてりと寄りかかってきました。正面から。

ちなみに私は兄様と身長が同じくらいですから、姉様の顔がすっぱ  
り胸にジャストなんですよね………恥ずかしい、周りの視線がイ  
タい。

私と姉様は親が違う為、不破系の血は流れていて面影はありますが、  
不破の血の濃い姉様と高町の血の濃い私では、一目では姉妹に見る  
のは大変でしょう。

つまりなにが言いたいのか。

周りからは禁断のカップルに見えているのではないかと

だあああああ————！！！！！！

こんな思考に至るのも！どれもこれも全部アリサの所為ですよ！！

お陰で姉様相手にも最近ドキドキして堪らないんですよ！！

もう私ったら本当にどうしてこうなった……！！

「ね、姉……様……」

「……ごめんね、頼りないお姉ちゃんで……」

「……そんなことはありませんよ、姉様」

私は姉様の背中に右手をまわして、空いている左手は姉様の髪を梳いて

「私は姉様をととても尊敬しているんです。そんなこと、言わないでください」

「……でも私、恭ちゃんどころか、なのはにだって敵わないよ……」

「そんなことはありません。私は魔導というズルをしているから強いだけで、純粋な御神流剣士としては、姉様には到底敵わない見習い剣士なのでから」

「……でもなのはは命懸けの戦いを続けてるんだよ？私なんて、すぐに追い越されちゃうよ」

「私は拳と槍が主体ですから、姉様レベルに辿り着くには、姉様と同じ時間をかけていくしかありません。だから姉様が卑下に思うこととはないのですよ？」

「……なのは、かーさんみたいだね……」

「まだ二十代です」

「ふふっ、それ聞いたらかーさん怒るよ？」

「ですので黙っててくださいね？」

「どーしよっかな？」

「きたない、さすが姉様きたない」

「うう、妹が虐めるよお……あ、なのはのショートケーキ食べたい」

「……よりもよって手間暇掛かるものを……わかりました。行き  
ますよ姉様」

「あいあいー」

急に元気になった現金な姉の手を引いて、私達はショッピングモ  
ルへ繰り出します。

『……………』

「どうかしましたか、アリス？」

『いえ、なんでもありませんよマイスター』

未だ動かなかったアリスに声を掛け、早足でその場を去ります。

だって、恥ずかしいんですもん！



来るのになあ……。

それに

「なんで私より胸おつきいくせにヒップが細いなんて反則よ！」

「いや、反則とは言われましても……困るのですが」

胸は私よりポインなのにヒップは小さいのは。なんか理不尽よ！

やっぱりこれも実戦経験の違いなの！？

「私は材料を買いにいきますけど、クリームは何にします？」

「そーねえ、ココアチョコが良いかな」

「はいはい、わかりました。行きますよ、アリス」

『はい、マイスター。先行してココアとチョコパウダーをゲットして来ますね』

「あとトッピングのチョコも適当に見繕ってきてください。私は生物からまわっていきますから」

『オーライ！スペリオルガンダム、アリス・ストラトス！狙い撃つぜー！』



side：高町なのは

とりあえず姉様の分量ですから、そこまでは量は要らないでしょう。他にも色々と見てまわってはカートの中に物が追加されていき

この辺りは、前世持ちは便利ですね。

どれを買えばいいのか、安く多く買うのはニートの必須スキルでしたし。

ただの一般人が、今はこうやって他人の身体を奪い取って、他人を演じて、のうのうと暮らして、とうとう身体まで作り替えてしまつて

「私は、本当に愚かでダメな人間だ……」

『マイスター……』

カートの前部に立って前を向いていたアリスが、こちらを向いて呟いた。

アリスやすすかを巻き込んで

レイジングハートを何度も壊して

アリスには頼ってばかりで



ハーケンには甘えて

ユーノにはフォローして貰って

兄様や父様には手伝って貰って

私ひとりでは何も出来ない！

そんな自分が　私は大嫌いだ！

レヴィに偉そうなこと言ったけど、結局私は大人を演じるただのズルイガキだ。

偽善者だな、私は

子どものような意地と世界を天秤にかけて、一丁前に悩んで苦しんでるフリをする。偽善者だ。

最低だな

T o b e c o n t i n u e d . . .

第21話 その心の内に秘めたるものは…（後書き）

さて、次は温泉だったか

大丈夫か？色んな意味で？

別な意味で死ぬんじゃないか？星光なのは……

そして皆さんはレイ八さんをどうしたい！？

皆さんの意見・感想を待っています。気軽にどうぞ。

第22話 過去からの魔の手……（前書き）

アリサファンの皆様！再びごめんなさい！！

## 第22話 過去からの魔の手……

side：高町なのは

「結構買いすぎてしまいましたね」

『後先考えずにバンバカ入れるからですよ』

少し大きめのパンパンの袋を両手に持って、スーパーから出る。

久しぶりに食品の買い物をしてしまった所為で少し調子に乗って色々買いすぎてしまいました。

とりあえず大人の身体で台所の高さもちょうど良いことですし、夕食当番は私がやりましょう。

「あ、やっときた、んげ！ちよ、ちよっと！そんなに買ってなにすんのよ！？」

「決まっていますよ。今日の夕食にでもと」

「うう…料理良し、容姿良し、器量良し、なにこの完璧奥さん」

「落ち込んでないで行きますよ？」

~~~~~

「ん？アリス、私の携帯を」

『はい、マイスター』

兄様から借りたジャケットの内側ポケットから携帯を取り出して私の耳に当てるアリス。

携帯の表示は忍さんのケータイ。

「はい、高町なのですが」

「なのはか！？」

「兄様？どうしたのですか？」

なんと、忍さんかと思えば相手は兄様でした。

しかも声色に焦りが見えます。兄様が焦る事態とはいつたい

「良いか、落ち着いて聞け？」

「……ええ」

ただこどでない兄様の様子に、私も気を引き締める。

「……すずかちゃんとアリサちゃんが、何者かに誘拐された」

「……そうですか」

これで取り乱す程、今の私は子どもではありません。やはり大人の心に大人の身体が合致して、以前以上に頭も冷静にはなっ

ています。

「忍さんは、大丈夫なのですな？」

「……ああ。一応俺がガードしてるからな」

「それは重畳です。で？相手方はなんと？」

「……高町なのはを寄越せと言ってきた。あと、現金3億」

「ひとり頭1億ですか、私とはかく、アリサとすずかを1億程度で計るとは、それで、警察には？」

「まだ知らせてはいない。一応、アリサちゃんのお父さんには知らせたが……」

「重畳です。兄様。引き渡し方法は如何に？」

「……まさか、向かうつもりか？」

「当たり前でしょう。友人救えずして何が友人ですか？御神流を習

う私には、2人の友人である私は、その責務と義務、そして私の想いで、私は2人の救出作戦を行います」

「……わかった。俺にもなにかやる事はあるか？」

「とりあえずは、高町家、私の作業部屋に集合しましょう」

「わかった。なるべく速く」

「迅速に」

警察をアリスが耳から離して、通話を切る。

姉様も途中から聞き耳を立てていたのでしょう。顔つきが御神流剣士に変わっていました。

「なのは……」

「家まで全力疾走、やれますか？姉様」

「愚問だよなのは。私はそこまで弱いつもりはないから」

「わかりました。行きますよ」

私達はまるで疾風の如く、駆け出した。





《状況的に誘拐されたのは小学生でもわかるわよ》

それよりもあたしと一緒に居たはずかは？

「って、ガキだから無拘束ってのは無しか……」

手と足は縄か何かで縛られて、殆ど身動きが取れる状況じゃない。ただ縛られているだけだからまだなんとかなる。

《生体反応は感じるが、今の俺ではこれが限界だ》

《別に良いわよ》

ブラボーの実体化にはかなり魔力をまわさないとならない。

あたしはそこまで魔力がある方じゃないから、ブラボーの実体化は、朝と夜の特訓の間しか出来ない。

《最短でもあと2時間は実体化は出来ない。すまない、アリサ・バニングス》

《ブラボーの所為じゃないわ。あたしの魔力量の所為だもの。それより、これからどうするか……》

考えるのよアリサ、なのはならどつするか考えるのよ！

ガチャ、ガラガラガラ

「……………」

重い扉を開くような音。

あたしは身体を起こして開きゆく扉を睨みつける。

「ようやくお目覚めかい？アリサ・バニングスちゃん？」

「……………アンタッ……………」

黒服の男達にガードされて部屋に入って来たのは、醜い面をした、でも二度と拝むことはないと思つてたヤツの面影のある顔。そして人を小馬鹿にしたような声。

「久しぶりだね、アリサ・バニングスちゃん。ちょっと見ない間に、かわいくなつたね」

「…アンタに褒められたつて反吐が出るわよ。このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎がッ！」

「フッ」

私の嫌味を鼻で笑って髪を手で掻き上げて払う。

ウゲエ……………目に毒よこれエ……………。

「ずいぶんと、彼女に影響を受けているようだね？そんなに高町なのはが大事かい？」

「うるさいわよ。アンタには関係ないでしょ」

「高町なのは高町なのは、あんな普通の子がそんなに良いのかい？」

「黙れ。…なのはの何を何も知らないアンタが、なのはを語るんじゃないわよ変態。それ以上喋るな……………」

「まあ、禁断の恋心を抱くくらいだ。僕も人を愛する身、キミの気持ちも少しばかりは理解出来るよ」

「……………もう一度言う。それ以上喋るな、同じ空気を吸うな、息をするな。クサいんだよ、このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎ツ！！語るに落ちたわねえ！盗撮なんて最っ低！それにアンタ愛の意味を吐き違ってんじやないわよ！！一度広辞苑で『愛』って意味を調べてきたら！？」

「強気だねえ……………自分の立場、わかっているのかい？」

ニヤニヤと気持ち悪い不細工面をさらに気持ち悪く歪ませる。ホント反吐が出るわ。

「…すずかは無事なんでしょうね……」

「キミが知る必要はないな」

パチンと指を弾く音が鳴ると、部屋に覆面を被った男達が入ってくる。数は全部で4人。

「じゃあ、キミは処女を散らす宴でも楽しんでくれ。良い絵が撮れるのを期待しているよ」

ビデオカメラをセッティングする男達を見ながら言うアイツ。

「…この陵辱プレイ強姦指揮者野郎が……アンタはあたしが絶対ブチのめしてやるっ!! そのツラア、眼が開けられない程ボコってやるから、顔洗って待ってなさいよ……」

「ボテ腹になった幼女っていうのも、背德的でソソるものだよ」

「魂まで腐ってるようね、この腐乱思体」

あたしは怒りと憎悪と殺意を込めた眼差しで睨みつけた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第22話 過去からの魔の手……（後書き）

アリサのキャラが回を重ねる度にブレイクしていく……

大丈夫かな？こんなアリサで……

受け入れて、貰えるかな……

ちなみにこのウザイナルシの名前が思い浮かばなくて困ってる。――  
応日本人だけど

戦隊物とかスゲエよ。毎回毎週敵の名前考えるんだから

皆さんからの意見・感想をお待ちしています。

皆さんの一言が、私の励みになります。心がホカホカするんですよ。

第23話 断罪者魔を断つ剣T W O S W o r d / T W O G u n 高町なのは 生誕

好き好きが別れる回です。

一応17・99歳くらいか……？

第23話 断罪者魔を断つ剣T w o s w o r d / T w o G u n 高町なのは 生誕

side:高町なのは

高町家敷地内

私の作業部屋は木造の高床式ですが、中は地球文化レベルを超えた科学技術の部屋になっていて、地球レベルのなら耳も眼も通さない。

そこに集うは、父:高町士郎、兄:高町恭也、姉:高町美由希は道着を身に纏い、腰には2本の小太刀。服には鋼糸や飛針を仕込んである。

私:高町なのはは父様から黒い防刃防弾コート、父様の昔の仕事着を借りています。

さらに誘拐された月村すずかの姉:月村忍。

そしてゲシュペンスト・ハーケンの自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSのハーケン・ブロウニング、スペリオルガンダム  
の自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSにしてALICE  
Eシステムの中核コアたるアリス・ストラトス

魔法を知る高町家最強戦力が一同に揃っていた。

ユーノと久遠は、念の為に高町家の母:高町桃子のガードに着いている。



各自の前には小型の空中投影モニターが浮かび、私の周りには多数の小中のモニターが浮かび、入力端末にはせわしなく動く10本の指。

「アリサとすずかが消息を断ち、誘拐されたのは午後15時半過ぎ  
衛星にハックしてアリサとすずかの携帯電波を辿った結果。2  
人は現在、鳴海埠頭近隣の廃倉庫に監禁されていると推察されます。  
アリサ」

「イエス・マイスター 現在某国の軍事スパイ衛星を管理下に置き、ミッション領域内を可能な限り調べてみましたが、確認される敵兵力は最低でも100人規模。最大数不明、武装は手持ち小銃や警棒、鉄パイプやナイフで武装。周囲のはごろつきでしょうが、メインディッシュの規模、装備、その辺りは不明。熱紋照合も不可。RPGの5、6本は覚悟してた方がよろしいかと。しかし慢心する気もありませんが、御神流剣士のお三方で既に300人規模の兵力。そこにマイスターと私が加わるとなれば、戦車の10台20台でもない限りは、止められないと私は思います」

「OK、マイスター。それで、具体的なミッションプランは？」

「まずはハーケンがハッキング、クラッキング、ジャミングを駆使して敵の目と耳と鼻を潰します。次に士郎様と恭也様が敵を西と東から強襲。敵戦力を分散し、私とマイスターで正面から強行突破、アリサとすずかを確保して一時離脱。その後は殲滅戦に移ります。万が一の別働隊を考えて、美由希様には自宅にて桃子様と忍様のガードをお願いします。以上が本作戦の概要になります。何か質問は？」

誰にも反論はない。

僅かな静寂が部屋に流れた。

『では現場に向かいます。警察を呼ばれる前に決着をつけなければなりません。事は慌てず迅速に、そしてケガの無きように』

全員が頷いて部屋を出て行きます。

私は金庫からナイトファウルとロングトウム・スペシャルを取り出して、仕事着のズボンに巻いたベルトのホルスターに収め、コートの中にはいくつもの予備弾倉とスピンドローターを入れていきます。飛針や鋼糸も一応仕込んであります。あとは真剣の小太刀を後ろ腰に挿します。

今宵私は、自分の意志で人を殺す。

身の代金を要求してきた主犯の声紋を確認して、相手が誰だかわかりましたから。

仏の顔は三度まで、とは言いますが、冥府魔導の閻魔大王・ブルト・には、慈悲などは無いのです。白黒ハッキリさせます！

そして黒には容赦のない地獄を

「なのは…」

「姉様」

部屋に再び姉様が入って来ました。忘れ物でしょうか？

「気をつけてね、なのは」

「重々承知していますよ、姉様。私は大丈夫です」

「……でも、心配だよっぱり。お姉ちゃんなのに、やっぱり私、何もしてあげられない」

俯いて腕を抱く姉様。

私は姉様に歩み寄って、姉様の身体を抱き寄せる。

「な、なのは…？」

「私は、私達は、家を任せられる人が居るから、安心して、征けるのです……」

「なのは……」

少しだけ身体を離して、私を見上げる姉様を見つめる。

目の端に浮く滴を、人差し指で優しく拭う。

姉様は決して弱いというわけではない。

「姉様が居るから、家を護っていてくれるから、私達は後顧の憂いもなく戦えるのですよ……?」

「なのは……私、バカだよ。こんなにも信じてくれる妹が居るのに、私、私い……なにも、わかって……」

涙を流す姉様を再度胸元に引き入れて、髪を優しく梳く。

「姉様、一つお頼みしてもよろしいです?」

「ひっ……う、……う、うん。お姉ちゃんに出来ることなら、なんでもするよ」

「では、後ろ髪を三つ編みにしてください」

私は姉様に紅く細いリボンを手渡す。

「わかった。少し座ってくれる?」

「ええ」

私は作業機のイスに座って、姉様に背を向けます。

「なのははさ、なんであんなに痛くて怖い思いしてても戦えるの？」

「……私は、私が私である証拠が、確証が欲しかったのです。世界に私を認めさせる為に、私は今まで、そしてこれからも戦って征く。それが私の悲願成就の為の道。出逢いは偶然、でも世界を救えばセカイは私を認めてくれる。私はそう思っていた。でもそれだけじゃないことを、最近思うようになってきました」

このセカイの特殊性。

とら八の混じるこのセカイ

敵のインフレの起こるこのセカイ

そんなセカイで、あのただの9歳だった高町なのはが生き残れるか？

そう考えれば答えはNO！と私は言い切れます。

実際に戦っていた私だから、何度もシミュレートした私だから言える。

高町なのはの力技では今までの戦いは乗り越えられなかった。

遠距離主体の大火力砲撃。

面に強い分、点には対応仕切れない。

久遠と鳥と猫はともかく、ゼルエルとレジセイアは、何度もアリスやハーケン、レイジングハートも交えてシミュレーションしても高町なのはの大火力砲撃では、待つのは死！

ゼルエルもレジセイアも、点の撃ち貫く零距离だから勝てた。

出力的にも、ブラスタースystemを2まで使った私は魔力ランクはSS、3を使えば前人未到のSSSを叩き出せる計算です。

そのバカ魔力を限界まで使い切る程の零距离一点集中大出力貫通攻撃でなければ破れなかった。

高町なのはのスターライトブレイカーでも、レジセイアのバリアは何度やっても破れなかった。

砲撃魔法の分、収束砲撃でも拡散されて効果範囲が広く、バリアの全体に負荷を掛けられても、破れず減衰するだけでお終い、そのままお陀仏、地球滅亡。

しかもあの時期の高町なのはは砲撃魔法すら放っていなかった。負けは必至。

だから閣下は私をこの世界の高町なのはへと転生させたのではないかと思に至った。

高町なのはへの憑依で助言者だとしても、小学生に私の言うことが100%伝わるとは思えない。

まあ、今のアリサなら120%伝わるのですが。

とにかく！

私が高町なのはとなって勝ち進み、PT事件を終結に導けば、高町なのはの死の未来を回避し、新たな分岐と未来が始まるのではないか？

そうすれば高町なのはは戻ってくるのではないか？

そう私は考えたのです。

希望的な観測で、偽善者の言い逃れかもしれませんが、私はそこに一筋の光明を、希望を見いだしました。

たと思いい込みだとしても、その希望を信じて戦っていこうと思っただのです。

一人の女の子の運命を変える為ならば、この身の痛みも、心の苦しさも、運命を変える為の対価ならば安い物です。

だって、私が我慢すれば良いだけなのですから。

痛みも苦しさも全部私が引き受けていく。

だからPT事件が終わって、私が不要になっても、私が『私』で居られ、存在出来るようにセカイに『私』を認めさせる。

身体は高町なのはお返ししても良い。元々彼女の物ですからね。

だが『私』は私のまま、私で居たいのも本心。

それを成す奇跡を与えてくれる、与えてやるつもりで、私はセカイに訴える。

私の全身全霊全生命を賭けて!!

「はい、出来たよなのは」

「ありがとうございます、姉様」

三つ編みに纏められた茶髪の髪。リボンは毛先を縛るように蝶結びで

「私の思い描いた通りです。姉様はエスパーですか？」

「まあ、なんとなくね？気に入ってくれて良かった」

私は立ち上がると、机の引き出しから紅いマントを肩に掛ける。これで返り血や血糊もある程度誤魔化せるでしょう。

「なのは…」

「いってきます、姉様」



歩き出そうとした私ですが、クンっと、服の袖を掴まれました。

私は後ろを、姉様に向き直る。

すると姉様は今度は自分から私の胸に飛び込んできて、慌ててたたらを踏んだ私の唇に当たる柔らかくて温かい感触と、目の前にドアップで映る姉様の顔に思考回路がエラーとフリーズを大量に叩き出し

「なのはがケガしない為の御守り。私のファーストキスだから効力は抜群だと思うけど、絶対無事に帰ってきて。なのはのショートケーキ、楽しみにしてるから」

「…姉様……はい。高町なのは、行って参ります」

「いってらっしゃい。なのは」

私は姉様に別れを告げ、窓から飛び出して地に脚を踏み出す。

此処からは魔導師高町なのはでも魔法少女高町なのはでもバウンティハンターナノハ・タカマチでも御神流剣士見習い高町なのはでもない。

魔術師      T w o S w o r d / T w o G u n 高町なのはが征く、修羅の夜道。

復讐者よ、覚悟は良いか？



人の、誰かの為に戦っているように私はなのはの言葉から感じた。

直接的な血の繋がりのない私でも尊敬しているって、心から言ってくれるなのはに、一緒に行けないけど、せめて思いだけは一緒に連れて行って欲しかったからあんなことしちゃったけど

「なのはの唇……柔らかくて、ほんのり暖かったなあ……」

唇に指を添えながら、着地して門に駆けて行くなのはの背中を見る。

胸は大きいせに、私よりお尻小さいくて

「肩、小さかったな」

私より広い肩幅に見えたのは多分、おとーさんの服の所為。

なのはは、あんな小さな肩にいつたいなにを背負って戦っているのか私にはわからないけれど

「気をつけてなのは、家は私が護るから」

眼鏡を外して、なのはの座ってた机の上に置く。なのはが帰ってきたら、ここに眼鏡を取りに来よう。



屋の4人の男を黙らせたけれど、反撃も受けたから服が少しボロっちくなっちゃった。

少し血も流れてるし、シミになっちゃうだろうなあ。

「ペツ！……歯も1本うつ欠けちゃった。子どもの歯だったら良いなあ」

脚技なんて習ったことなんてないから、プラーナを込めて回し蹴りを叩き込んでやったわ。

「まったく、無駄にキツく縛ってくれたわね……」

いくら力を入れても外れない切れない縄。ビニル紐だから無駄に頑丈なのよね。

「ブラボー、すずかの居場所はわからないの？」

《……聞いてどうする》

「そんなの決まってるでしょ？すずかを助けて逃げんのよ。あとアイツをボコる」

《自惚れるなアリサ・バニングス。今のは相手の油断があったからこそ、次はこう行くとは限らないぞ》

「わかってるわよ。別に自惚れてもいない。でも友達も助けられないで友達なんて言えない。少なくともあたしはここですずかを助けに行かなかつたら一生後悔する」

《死ぬかもしれないぞ?》

「あたしは死なないわよ。あたしにはなのはと添い遂げるって夢があるもの」

なのはとイチャラブするけど、その私の思い描く未来には、すずかの居場所もある。

すずかになのはのあんな姿やこんな姿、はたまたそんな姿の写真を見せびらかしてやるのよ。

んで、あとで2人してなのはをからかって遊んだりする。

あたしの未来像には頼れる親友のすずかが必要なのよ!

あんなバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎にくれてやるすずかなんてこれっぽっちもないわ!!

《……わかった、俺の負けだ。ただし、人質救出後は可及的迅速に撤退脱出、警察に駆け込むのが条件だ》

「わかったわ」

あたしはブラボーに返すと、息と音と気を潜めて歩きだした。

サーチャーを2つ飛ばして、ルートを割り出して進んで行く。

なのはがどう考えてどう行動するのかを思えば、あたしが普段出来ないような思考展開と状況把握が出来る。

いつもなのはを見てきたのよ。これくらいなのはを真似するのはわけないわ。

《そこを曲がった先の方に、月村すずかの魔力を感じる。気をつけろ》

《わかったわ》

まさかすずかが魔力持ちだったなんてね。

ブラボー曰わく生き物はみんな強なり弱なり魔力を持ってるらしいけど、それを運用するにはリンカーコアが必要なんだって。まあ、その辺りは今度ね。

角を曲がる前にサーチャーを先行させる。

行き止まり、横にドア、見張り無し。

「この先……」

結局縄は解けなかったけど

やるしかない。

脚に力を込める。たった10日しか戦士としての特訓してないけど、毎日毎日ブラボーにボコボコにされてないわよ！

「新撰組だ！！御用改めである！！」

ドアを蹴り飛ばすどころか蹴り碎いて、あたしは中に入った。

「…アリサ……ちゃん……」

「すすか！」

部屋の中には天井から垂らされたワイヤーみたいなヤツに腕を吊さ  
れているすすかが居た。

「…アリ…サ…ちゃ…にげ……」

「誰が親友置いて逃げる莫迦が居んのよ」





あの時のなのはの気持ち、今のあたしになら二十分に解る。

このバカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎は、生かしておくわけにはいかない。

「さあ、あとは好きにして良いよ」

「マジですかい!?!」

人の気配が増えた。チツ、不覚を取ったわね。

「ああ。僕はすずかちゃん以外要らないから。あ、でもビデオはよろしく、処女モノは売れるから」

「フン、女を食い物にして生きてきたようね、男の風上にも置けないわ」

「なんとでも言うのが良いさ。キミは今日から男のオモチャとして生きて行くんだから」

「んな人生なんて前世も来世も今世も願ひ下げよ……」

「くくく、はは、あははははははは……!」

「な、なにがおかしいのよ!」

アイツは顔に手を当ててお腹を抱えて大笑いし始めた。

「いやいや傑作傑作。前世はもしかしたら、男に犯されて死んだかもしれないのにねえ……アリス・バニングス……いや、アリス・ローウエルちゃん」

「ついに頭のネジが全部抜け落ちたようね。アリス・ローウエル？ 誰よそれ？ 妄想彼女なら引きこもってやってなさいよ。てかあたしの名前を呼ぶんじゃないわよ鳥肌が立つわ」

「いやはや、無知は恐ろしいね」

アイツはそういうと、部屋の明かりをつけたらしい。生活感のある部屋のパソコン。そこに近寄ると、何かを持って戻ってきた。本…？

「これによれば、高町なのは御神流剣士の高町士郎と高町桃子の間に産まれた子どもで、高町恭也、高町美由希とは血の繋がりはないらしいね」

「は？ あんたなにいつてんの？」

「さらにここではすずかちゃんのお姉さん、月村忍は夜の一族っていう吸血鬼一族らしいね。てことは、すずかちゃんも吸血鬼かもねえ。つまりキミ達を今まで騙してたのさ」

「いやあああああ……！！！！！！いや、いや、いやあああ



まあ、やることに変わりはないんだ。せいぜい楽しませてくれよ」

バチバチと聞こえる音。なるほど、スタンガンか何かだったわけね。

「くぐ、あああああぁー……！！！！！！！！！！」

っ、ブラボーのパンチ程じゃないけど、きくううう。

「げへげへ、さあ、楽しもうか？アリサちゃん」

「くっ」

男の怪力で着ている服がビリビリと悲鳴を上げていく。

くっ、こんなヤツ等、腕が動けば瞬殺してやるのに！！

「やめてえええ！！アリサちゃんに手を出さないでええっ！！」

「さあ、僕達は僕達で楽しもうか、すずかちゃん？」

「いやあ！！来ないで！！来ないでよおお！！助けてお姉ちゃん！  
フアリン！！なのはちゃああああんっ！！！！！！！！！！」

「フフ、直に高町なのはも仲間に入れてあげるから、寂しくないよ。」

「……なのは呼んだの？」

「なんだい？知らない男に下着まで取られても悲鳴すら上げないつまらないアリサちゃん？」

「……あたしの質問に答えなさいよ。呼んだの？なんなの？」

「そりゃあ呼んださ。彼女は僕の人生を台無しにしてくれたからね。僕自ら殺して犯してあげないと気が済まないんだよ。それにあの子の母親や姉を困んで親子井とかロマンじゃないか？」

それを聞いたあたしの中で、何かが唐突にキレた。

「ぐぎゃあ ああ ああ あああああ！！！！」

あたしはあたしにのしかかる男の露出してグロい棒引っさげる股間を蹴り碎く。

男は泡を破棄ながら失神してピクピク震えながら倒れた。

「……ごめんブラボー、あたし……約束守れない悪い子だ。でも！！」

『気にするな。友を助けられずして、さらに友に降りかかる毒牙を

目の前にしてみすみす見逃す者に、ベルカの戦士は務まらない。自分の戦いをしろ、アリサ・バニングス!!!」

「ありがとう、ブラボー」

「あ、りさ、ちゃ」

「誰と話しているんだい……」

「あたしの」

あたしは今ある魔力を有りつ丈ヴァンシユジュエリーに変化した」  
ジュエルに込める。

なのはの事、言えなくなるなあ……あたし、でもコイツだけは!!

「人生の師匠・せんせい・よ!!」

」ジュエルから溢れた」パワーで身体を強化して無理やり縄を引きちぎった。

「っ、少し痺れるし、痕になんきや良いんだけど……」

「な、ワイヤーを仕込んだビニル紐だぞ!? それを引きちぎった!?」

「ひとつ教えておくれ、バカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫  
変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎」

「パワーが身体に浸透する。」

「ジュエル」

Gストーンをベースに造られた戦闘特化型Gストーンとも言える代  
物。勇気ある戦士に力を与えてくれる高エネルギー結晶体無限情報  
サーキット。

「ヴァンシユジュエリー」

古代ベルカ時代に造られた人の真摯の想いによって力を発揮し、物  
理的、超自然的な力を与える宝石。

どちらの2つも、人の想いに応えて力を貸（化）してくれる宝石

あたしは手を胸に当てる。

あたしはまだ10日しか特訓を受けてない駆け出しの存在。

なのはの足下にも及ばないけど、友達を、親友を助けるくらいの力  
ならあるー！！

「なんだっただ……今の光りは……」

「アリサちゃん……？」

「今日のあたしは……阿修羅すら凌駕する存在よー！！」



あたしは指を指して宣言する。

「ふ、ふは、ははは、なな、なにを言い出すかと思えば、この人数にひとりで勝つ気かい？」

部屋の中に押し入っているのはだいたい2、30人、チツ、暇人共が。

「あら、どうしたの？震えてるじゃない？トイレなら漏らす前に早く行った方が良いんじゃないかしら？」

「…散々僕をバカにしてエ……死体処女姦も売れるんだよ。ヤチャえ！！」

「アリサちゃん！！やめて！すぐやめさせて！！私なんでもするからアリサちゃんだけは助けてえええええ！！！！！」

アイツが言うが否や、男達は襲いかかってきた。

「大丈夫よ、すずか」

あたしはすずかを安心させるように優しく呟く。

胸のヴァンシユジュエリーから産まれるあたしの戦う力。

掌に収まりきらない、冷たい重さを……でも力強い温かさを感じる六角形の金属

真ん中には『A』に似た文字が彫られ、その下には『C』が刻印されてる。

「力を借りるわ、キャプテンブラボー」

『ああ、俺の力、そしてお前の力を存分に振るってやれ！アリサ・バニングス！！』

「あたぼうよブラボー！！いくわよ！武装錬金！！」

六角形の金属がカシャッと音を立てて展開すると、そこから青い光と一緒に生まれた小さな六角形の金属片があたしを包み込む。

「な、なんだ　！？」

「知らないの？じゃあ、今日は気分的に蝶・サイコーだから特別に教えてあげる」

光が晴れたあたしの格好は殆ど素っ裸から全く別の物に変わっている。

黒いインナーの上からなのはと同デザインの銀色の胸甲を着け、黒いコートを纏った上に襟元を開いたジャケットを纏っている。両手にはあの六角形の金属　核金に彫られてた『A』に似た文字をあしらった青い手袋に、下も見るからにちよつと頑丈そうなレギンスブーツを履いてる。

羽の様に軽いけど、防御力は並みのバリアジャケットや騎士甲冑より頑丈に出来ている。以上あたしの脳内設定！！

これが

「防護服・メタルジャケット・の武装錬金！シルバースキン・夜笠  
！！」

「アリスちゃん！！逃げてええええー！！！！！！」

男のパンチや蹴りやナイフがあたしを襲う。でも

「ぎゃああああああー！！！！！！！！！！！！」

「指が、指の骨がアあ……………！！！！」

「いでえ！！いでえよお～～！！！！」

「嘘……………だろ、ナイフが…………折れ…………」

「アリサちゃん！」

男達のドブ汚い声と、すずかの安心した雀みたいな声が聞こえる。  
実はちよつと恐かったのはヒミツ

「衝撃に対して瞬時に金属硬化。そして再生！伊達や酔狂でこの格好をしてるわけじゃないわよ！！！」

キマった……。このセリフを生で言える日が来るなんて

あたし、なのはの旦那でシアワセよ……。

「くつ、だ、だけど、所詮固いだけの服だ！！攻撃する武器がないんじゃタダの役立たずだ！撃て！銃で離れて八子の巢に」

「武器なら　ある！」

「え」

「な」

「へ」

呆ける阿呆面の男達にガンメン整形パンチを一瞬で1人に3、4発  
ずつプレゼンツフォーユー

「ぐえ」

「ぎゃぴ」

「ひでぶ」

「あ、ああ、あ……」

「鍛え抜いたこの戦士の肉体 - からだ - があたしの武器よ！」

あたしは脚に力を込めてプラーナをまわして、破裂させる感じをイメージして放つ。

視界がゆっくりに流れる。

身体が、戦士として、闘うあたしにシフトした。

「直撃！ブラボー拳！！」

「ぎゃっ」

あたしのパンチを受けて吹き飛ばす男が壁にぶつかると、その壁すらブチ破って行った。

や、タダの「パワーを纏ったパンチだけど技名あった方が威力が変

わる気がするし。

「な、はっ、ははは、ば、バカかいキミは、わ、わざわざ技名を言  
つてくれるならこっちが有利だ！」

「別に構わないわ。だって避けっこなから。それに 何故ならそ  
の方がカツコイイから!!！」

「このガキい!!！」

後ろから鉄パイプを振り下ろしてくる男。

その鉄パイプを腕をクロスして受け止める。そしてそのまま後ろを  
向きながら鉄パイプごと

「撃砕！ブラボーキック!!！」

「ぎゃへら!!！」

蹴り砕く!!！」

「アトランティス・ストライク!!！」

「びゃびゅ!!！」

あたしが蹴りで吹き飛ばした男を、ちょうど出入り口から入ってこようとしたなのはに向かっちゃったけど、なのはは紫電を纏った後ろ回し蹴りで打ち蹴り返してきた。

「飛天！ブラボー！スカイアツパーー！！」

「うっええ！」

それをあたしがアツパーでカチ上げてフィニッシュ。

「なのはちゃん！！」

「なに！？高町なのはだと！？そんなバカな！！」

「高町なのは、冥府への道案内、地獄の閻魔大王・ヘルズブルート  
-より仰せ仕り参上した。諦めろ、罪人よ…」

「なのは！あんた血まみれじゃない！！」

「気にしないで下さい。すべて返り血ですから」

パチンとなのはが指を鳴らすと、身体を染めていた紅がなくなった。

「高町なのは……」

「…貴様と語る舌など持たぬ、バカでアホでボケで不細工面脳味噌ウジ虫変態淫語製造機乱痴気精神的ブラクラ野郎……今日今宵今此処で滅してくれよう……」

「くそっ！シネエー!!」

どっから出したのか、アイツが身丈に似合わない長身のライフルを持ち出してなのはに撃った。

「ロングトウーム・スペシャル!!」

なのはは長身のリボルバーを一発撃って、ライフル弾に中てた。そして爆発。

ライフル弾って爆発するものなの？

「アリサ、その格好はどうしたのですか？イメチェンですか？」

「あんたこそ肩にマント乗せて三つ編みなんて、イメチェン？」

「これは魔を断つ剣TwoSword/TwoGunたる私の姿  
牙無き人々の刃、人間の為の魔を行使する姿です。貴女は？」

「これはあたしの魂の姿よ！なんか文句ある？」



「いえ、とてもお似合いですね。アリサ」

「あんたも、まあ蝶・サイコーなんじゃない？」

「ふふっ」

「な、なによ？」

「いえ、なんでも」

「あ、そ。あとひとつ言わせて」

「なんですか？」

「今のあたしはただのアリサ・バニングスじゃないわ  
ンアリサと呼びなさい！！もっと敬意と愛を込めて！」

キャプテ

ちなみに会話しながら手は動かしてるわよ？ちゃんと。

てかその間に戦闘員の皆さんは片づいちゃったわね。

「さて、と、次は」

「貴様の番だ」

「くっ、くっそおおお………」

「ひっ!？」

っ、よりもよってアイツ、すずかかに銃口向けたわねええつ。

「それ以上動くな!!動けばコイツを殺す!!」

「この外道があ……………」

「フツ、良い顔だな、高町なのは。だが僕の味わった屈辱はこんなものじゃない!」

「うっ!」

ライフルの銃口をすずかに押し当てたとき、すずかの顔が歪んで肉を焼くような音が聞こえた。

「すずか!貴様ああ……………!!」

ダメだ、あたし爆発しそう。

「つつ……………なのはちゃん!アリサちゃん!」

すずかがあたし達を見て叫んだ。

「私に構わないで!!」

「な、何を言い出すんだよ!? 黙れよ!!」

「私に構わないで!!… やっちゃえ!!」

すずかの言葉が届いた瞬間、あたしは飛び出していた。

「両断! ブラボー チョップ!!」

ガシャンッ!!

「う、そ…」

あたしはチョップでライフルのマガジン部分を上から真っ二つにした。これなら撃てないでしょう!!

「騎士の魂は弾丸に宿る!!」

「ひいッ!!」

あたし達の間言葉は不要だった。

なのはナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルを構えていた。

「我、視線は敵を射抜き」

ナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルから弾丸を撃ち出すなのは。

「殺意は引き金を絞り」

半身を回転させながら残りの弾を撃ったなのは、ナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルを頭上に投げた。

抜け落ちる弾倉と薬莖。

そして予備の弾倉を落ちてきたナイトファウルに込めながら右手に握り締め、スピードローターをロングトゥーム・スペシャルに込めてリロードしながら左手に握る。前とはさらにスゴい曲芸を垣間見た。

「魂は弾丸に宿る……！」

2挺から一発ずつ撃たれた弾丸は、アイツの両肩にヒットして身体が浮かび上がった。ちなみにアイツは頭と胸周り以外は八手の巣に

は なってないけど弾痕はあるのに出血ゼロ。どんな弾使ったのかしら？

「詠え！ Blast Bullets！」

アイツの前に急接近したなのはは

「Cry Cry Cry!!!」

また残りの弾丸すべてをアイツに撃ち尽くした。

最適の攻撃位置・マキシмум・キルゾーン・から最多の敵目標・マキシмум・ナンバー・に対する最大威力の攻撃・マキシмум・ダメージ・

未来予測に近い計算能力が可能にする銃舞・ガンブ・

それから繰り出される連撃弾すべてを、なのははアイツに叩き込んだ。

なんて贅沢、なのははに撃たれたこと、地獄で自慢して来なさい。でも、次はあたしのターンよ！！

あたしはなのはに撃たれて浮き上がったアイツの斜め下に回り込む。そこにはアイツの醜く歪んだツラ。待ってたわ……この瞬間を！！

「粉碎！ブラボーラッシュュッ！！」

怒濤の迅速連続ラッシュュ。もちろん「パワー」の出力だって有頂天の鰻登りよ！！

ボコボコに空中コンボを打ち込み、真正面に降りてきた顔面にガンメン整形パンチ

「一・撃・必・殺！ブラボー正拳ツ！！」

「ぐぼろお……」

歯や骨や諸々を粉碎して、なのはにパス！

だって弾のリロード終えたのはが構えて笑ってるんだもん。トドメはやっぱり旦那よね？

「銃神 仕る！」

あたしのブラボー正拳で飛び込んで行ったバカ以下略をナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルで滅多撃ちにするのは。それで勢いの緩んだバカ以下略に、後ろ腰から2刀の小太刀を抜いて

「受けよ 剣聖の舞っ！！」

それは双刃を構えた彼の白き王の息子が放つ必殺技。半人半書の身に流れる魔力が成す事のできる、身体強化による必滅奥義がき  
剣聖銃神騎行曲。

それを知らないアリサにも、なのはの身体を流れるプラーナの高まりだけはわかった。

「斬魔！」

横薙ぎ一閃が

「破邪！」

交差一閃が

「天魔覆滅！」

左右の同時一閃が爆砕する大気を伴い四駆を駆け抜け、切り刻む。

「銃神：剣聖の意志の下。此処に処刑す……」

細切れになる事はしなかつたみたいだけど

「死んだ？」

「や、急所はギリギリ外しておきました。でなければ忍さんに私達が殺されます」

「あー、わからなくないかも……」

とりあえず怖いから考えるのはしないけど。

「なのはちゃん」

なのはは小太刀ですずかが繋がっていたワイヤーを斬る。

「なのはちゃん!!」

すずかはなのはの胸に飛び込むと泣き出した。

なのははすずかを抱き締めると、頭を撫でたり背中を軽く叩いたり、髪を梳いたりして落ち着かせようとした。

ま、今日くらいレンタルしてあげても良いわよ。





「私とアリサでとりあえずボコっておきました。あとは忍さんと一緒に煮るなり焼くなり斬るなり東京湾に沈するなりお好きにどうぞ」

「アリサちゃんか？」

恭也さんと土郎さんの視線が私に移る。私は胸を張ってそれに答える。ま、なのはに比べたらペタンコだけぞ。

「コスプレ？」

「ちやうわ　！！」

もうなんか血が繋がってなくても家族だわあんたら。

アイツが持ってた本を取り出す。

「それは　！？」

「アイツが持ってたのよ。まあでも、あたしは幽霊じゃないし。関係ないわ」

指パッチンすると、手袋が擦れて火花を散らして、本は焰に包まれて塵になった。

「錬金術…まで…」

「同じ錬金術だから、まあ、なのはお得意の勢いってヤツ？」

私はなのはに薄笑うと、なのはも口元だけで笑った。

「ミッションコンプリート。帰って夜ご飯にしましょうか？今日は私が当番ですから」

「ホント！やった、なのはの料理久しぶり！！」

「ケーキもありますよ。姉様のリクエストでね？」

「ブラボー！！蝶・サイコーよ！なのは！！」

「シートですよ、アリサ」

「あ、う、ゴメン」

「ふふつ。あ、あとですね」

「なにになに？まだなんかあるの！？」

「真っ裸ははしたないのでもう一度武装錬金した方が良いでしょう」

『武装解除されてますよ？』

「え？」



第23話 断罪者魔を断つ剣T w o s w o r d / T w o G u n 高町なのは 生誕

やっとできた我がバーニングアリサもとい戦士・アリサ!!  
しかしもはやアリサのキャラが完璧に粉碎してしまった。

だが今回はまだ急場凌ぎです。これから戦士・アリサは星光なのは  
と共に成長していきますので、見守って下さい。

皆さんの意見・感想お待ちしております。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！（前書き）

アリサの簡単な設定を纏めて書いてみた。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！

アリサ・バニングス

魔法を知り、星光なのはの戦いを知り、古代ベルカの魔法の遺産との巡り合わせでベルカの戦士として日々猛特訓中の厨二病爆裂中のさり気にIQ200持ちの蝶・天才。

感激したりするとブラボーが口癖になる程、師匠たるキャプテンブラボーを尊敬している。曰わく人生の師匠・せんせい-。

『ちよう』と付く部分はノリで『蝶』に変換しているが、あそこまで変態じゃない。しかしシルバースキン・夜笠を纏っている間はキャプテンアリサと呼べだの言うからどっこいどっこいか？

なのはに影響されて原作よりおとなしめだが心の中はブラボーの影響でバーニングソウルを秘めている。

心の中ではなのはを旦那扱いしているが、現実的には自分が旦那になるうとしている。必要あらば自ら男になる心構えすらある程なのはにぞっこんラブ。

ブラボー技を見様見真似や勢いで使ったりしての辺り主人公補正でもかかっているのかもしれない。

アリサ・バニングス

魔力ランクB プラーナランクAAA 空戦適性B 陸戦適性AA

+ 総合魔導師ランク推定A

シルバースキン・夜笠

アリサの使う防護服の武装錬金。

その特性はシルバースキンと同じ。しかし夜笠の部分で全く別の特性を持つ。今のところ出来るのは生体エネルギーで火を操るくらい。ただ某焔の大佐のように雨の日でも無能にはならないという素敵設定。リバースにするとシルバースキンの部分だけ飛んでいくが、夜笠の部分にもシルバースキンの特性が適用されている為、護って良し捕まえて良し攻めて良しの万能スーツである。

キャプテンブラボー

古代ベルカの遺産：ヴァンシユジュエリーよりアリサのイメージを受けて生まれた管制人格。実体化すると本家ブラボー同じく激強のベルカの戦士。アリサの人生の師匠。

実体化する時はシルバースキンとつなぎ作業服とかで出て来る。偽名で防人 衛と名乗る事もある。

キャプテンブラボー

魔力ランクAAA プラーナランクSS+ 空戦適性A 陸戦適性

SS 総合魔導師ランクAAA+

ヴァンシユジュエリー

アリサが拾った願いを叶えると言われている古代ベルカの遺産。形も色も別々。聖王協会に存在するのは四角い六角形の緑色。アリ



サのは矢の鏃に似た三角形の赤。アリサは普段、レイジングハートの待機モードの様に首から下げて所持している。

アリサの願いから「ジュエル」に変化、右腕に「ガントレット」という腕甲を装備し、その腕甲と一体化して展開するのがデバイスモードで、そこからプラズマソードを出力出来る。管制人格も持ち合わせ、アリサのイメージから生まれた武装錬金のキャプテンブラボーが管制人格。

守護騎士プログラムも兼ねていて実体化も可能だが、システムの問題がキャプテンブラボーだからか、実体化・維持にはそれなりに魔力を使うが、実体維持だけならばなのは技術協力によって半永久的に可能となりシステムの見直しもされ、実体化に必要な魔力も減った。

これが我が家のアリサ・バニングス！もといキャプテンアリサだ！！（後書き）

質問があれば気兼ねなくどうぞ。

第23・5話 無事で良かった (前書き)

事後処理的な回になります。

## 第23・5話 無事で良かった

side：高町なのは

初めて人を斬った感触は、骨のある分、肉よりかは固かった程度です。

Two sword / Two ganはまあ、厨二病と言うよりかは、私がブチギレるとあぁなってしまうようです。まあ、それは置いておいて

アリサとすずかは1日様子見で入院させました。

アリサはともかくも、すずかには軽度のPTSDの兆候と他人依存症が出てしまい。検査中は唯一今一番暇の私が付き添っていました。

忍さんにはバカ以下略の処分を任せてありますから、適材適所です。

それにすずかの症状の何割かは私にも責任がありますから

しかし

「すずか、少し格好変えませんか？おんぶとかの方が楽なのですが

…」

「えっ……だ、だめ…なの…」

私が言つと見る見るうちに目尻に滴を溢れさせるすずか。

「うっ、だ、大丈夫ですよ。だから泣かないで下さい、すずか」

「…うん……」

すずかは返事をする、私の胸に頭を預けました。

私はすずかが移動する時はずっと横抱きで抱えて移動しています。

歩きとか車椅子だとグズって動かなくなってしまう為、私が横抱きで移動しています。看護師の方々が申し訳なさそうな、でも微笑ましい光景を見る目をしていて、しかもすずかも嬉しそうに胸に顔を埋めるものですから、精神的にかなりキツいです。

検査を一通り終えて、私は結果を月村家御用達の担当医から聞きます。すずかには辛いこともあるかもしれないので、アリスとハーケンとアリサにすずかを任せて、今は離れています。

「すずかさんですが、やはり精神的にかなり追い詰められてしまっているようです。高町さんにああも依存傾向にあるのも、ご本人の無意識が心を癒やそうとして出ているサインだと思えます。出来る事ならば、症状が落ち着くまでは引き離さない方がよろしいのですが」

医師の話しを聞き終えた私は、携帯で忍さんへ連絡を入れました。

「はい、月村です」

「忍さん。なのはです。今一通り検査が終わって結果報告でもとお電話したのですが、大丈夫ですか？」

「ええ、今休憩中だから平気よ」

何の休憩中かは語るに非ず。

私は医師から聞いたすずかの症状を教え、アリサから聞いた事情と私の憶測を絡めて、忍さんに伝えました。

「そう……」

「すみません。私の配慮が足りなかったばかりに」

「いいのよ。なのはちゃんとアリサちゃんが居たから、すずかも無事でいられるのよ。ありがとう、妹を護ってくれて」

「いえ、親友を守り助けるのは親友として当然の事をしたまです」

「ふふ、あの子も良いお友達が一緒に、幸せね。……すずかの状態はある程度予想してたから、私は平気よ。ただ、しばらくあの子をなのはちゃんに預けたいのだけど」

「何かあったのですか？」

「いいえ、大したことじゃないけど、ゴミ掃除に少し時間がかかりそうで、ノエルもこっちだし恭也も手伝ってはくれるんだけど、手が足りなくてファリンも出突っ張りなの。だからすずかをまともに構える時間がなくて。これじゃあ姉失格ね」

「……私はそうは思いませんよ。妹の為に尽力する。なんと妹想いの姉が、私の電話の向こう側に居るではありませんか」

「なのはちゃん……」

「すずかは任せて下さい。騎士の誇りと親友の想いと高町なのはとしての全身全霊全生命を賭けて、すずかを護ります」

「羨ましいわね。恭也はそういうことは言わない方だから」

「兄様は口より背中語る方ですからね。でもつらつら並べ立てる言葉より少しの一言の方が、効果は抜群でしょう？」

「……時々、なのはちゃんが9歳なのを忘れそうになるわ」

「伊達や酔狂でこんな身体はしていませんよ。それにギャルゲやラノベのお陰です」

「ふふ、頼りにしているわ。それじゃあしばらく妹をお願いします」

「委細承知」

その一言を残して、私は電話を切る。

「誰と電話してたの？」

「忍さんと、少し……ね」

「ああ。まあ、ゴミ掃除するのと治療の為にすずか預かってーって  
いう内容でしょ？」

「ビンゴ。さすが天才アリサ」

「天災に言われてもねエ……それにあたしは天才じゃなくて、『蝶』  
・天才よ！」

「ふふ」

「な、なによ」

「いえ。アリサも遅くなりましたね」

「当たり前じゃない。すごぶる強いけどすごぶる脆い旦那の奥さん  
になるんだから、これぐらい遅しいのが丁度いいってことよ！」

「ええ、ちょうどいいですね。抱き心地とか」

「ちよ、そういう意味じゃないっての！」

「はいはい。すずかを連れて帰りましょうか。アリサは先に玄関ホ  
ールで待っていて下さい」







「つと……」

「きゃっ」

足の踏み場を選んで入ってきたアリサを受け止めて、すずかの横に降ろします。

「すずか平気……なわけないわよね。ごめん」

「うう……ん。アリサちゃんが、助けてくれたから……。カッコよかつたよ、アリサちゃん」

「あつたりまえでしょ？キャプテンアリサはカッコイイのが当たり前なんだから！」

すずかに胸を張ってみせるアリサ。

そんな様子が可愛らしくて、私はアリサの頭を撫でる。

「ん……」

猫みたいに目を細めて気持ちよさそうにするアリサ。すると服の裾を引っ張られ、私はもう片方の手を、すずかの髪を梳く手を再会する。

「んあ……」

アリサとすずか

本当に無事で良かったですよ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第23・5話 無事で良かった (後書き)

皆さんにアンケートです！

すずかの相棒とか武器とかをどうするのか決め悩んでいます。

夜の一族＝吸血鬼と、本の虫から一応こんな相棒かつてのは漠然と  
考えてはいます。

しかしすずかは、なのちゃんと肩を並べる程優しい、争いごとを好  
まない子ですので、正直どうしようか悩んでいます。

皆さんの意見をお聞かせください。

あ、感想も待っています！

第24話 同土達よ！（前書き）

ギャグパートかな？

## 第24話 同士達よ！

side：アリサ・バニングス

「武装錬金ー!!」

核金が展開して、あたしを刃金と鋼鉄の鎧が身を包む。

「スウ……はあ…ブラボー」

あたしの首からさがるヴァンシユジュエリーが輝きを増して、ブラボーがつなぎ姿で実体化する。

526

「よし、今日も柔軟から始めるぞ!」

「うっ、わ、わかったわ。こい!キャプテンブラボー!」

「ブラボー!良い度胸だ、アリサ・バニングス!」

シルバースキンを着てるんだから今日からは大丈夫よ!

「ブ・ラ・ボー!バックブリーカー!!」

「にゃあ、あ、あ、あああああ……!!」

バキ、メキ、ボキ、グキ　ポキ……  
せ、背骨がああ……!!

「ブラボー！オクトパス、ホールド！」

「いたたたた！た！た！あ……!!いたい!!いたい!!いたたたたあああ……!!」

「ブラボー！巴投げえい！」

「キャアア……!!げふっ！」

「よし、柔軟終わり」

「い、つも、おも、けど……コレ……じゅ、な、ん……てか、……シル、バー……スキン越し……なの……ガク」

「ブラボー！ベルカの戦士ならば防護服の一枚や二枚は服も同然！10分休憩後、いつもの特訓開始だ」

「り、理不尽……だ……」

とりあえずブラボーが色々おかしいのを再認識した。



「よし、今日の特訓は此処までだ」

「……………」

シルバースキンで耐久力が上がった所為か、ブラボアの勢いが何時もの比じゃなかった。

あたしは地面に大の字で屍を晒していた。

「ブラボア……」

「どうした、アリサ」

「あたし、強くなれてるのかな？」

「……………どういう基準でなんと強いとするかは、俺にはわからないが、もし自分を疑うならば」

「解ってる。あたしはあたしの戦いを続ける」

「ブラボアだ。その意志を貫き続ける限り、お前もまた戦士だ。アリサ・バニングス」

「うん」

んつとに、あたしはブラボアに師事出来る事を誇りに思う。



Sガンダムやゲシュペンスト・ハーケンを造り始めた私は、その動力源に悩んだ。

今はフルカネルリ式永久機関が実用化出来ましたが、当初は他の物も研究し、今ではジュエルシードが手元にあり、四六時中調べ上げたお陰で、研究していた一つが今、完成しました。

ハーケンもアリスも自衛するだけならば十二分の戦闘力は持ち合わせていますが、それはあくまでも自衛レベル。

以前アリスがフェイト・テストロッサと戦えたのは、アリスのフルカネルリ式永久機関が正式採用版であったのと、ALICEシステムによるところが大きかったのですが、それを攻勢に転化させるにはさらなる武装とそれを使う為に機体出力を確保しなければなりません。

それが今回、アリスの新たな力です。

『マイスター、一つ我が儘を聞いてくださいますか？』

「わがまま？ですか？」

『はい。私はフェイト・テストロッサに敗北しました。それは私の未熟故です。ですがもう一度チャンスがあるのならば、私はフェイト・テストロッサとの決着をつけたい。その為には』

「……………わかりました。プランを提示してください。貴女の気持ちは、良く解ります」

『ありがとうございます。マイスター』

空中投影モニターに表示される各種データ。

「これは……本気で？」

『本気と書いてマジです！』

「演算回路が焼き切れますね。一度バラしてグレードアップさせないとダメですね。少し時間を貰いますよ？」

『わかりました。それではしばらくはドライの中に入りますね』

「ではアインとツヴァイの調整を頼みますね」

『はい。彼女達も、やっとな』

「本来ならばもう少し先の予定になるはずでしたが、あんな事があったあとですし、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSは、今のすずかのような人々にも有用なように設計・開発をしてきました。場合によってはすずかを置いて征かなければなりません。もしもに備えて、戦力の充実化と万全化は火急の課題です」

『ええ…』

ショーケースの様なアクリル箱に入っている3体の影。



「クオン！なーのは！」

「ふふ、はいはい。今行きますよ」

私は今、久遠とすずかと一緒に散歩に出ています。もちろんすずかは横抱きです。

ただ、修復中でユーノに預けているレイジングハートはもとより、アリスもハーケンも居ず、私達3人だけの散歩です。

「フェイトー！！」

「ま、待ってよレヴィ…！あっ」

そんな散歩の日に、まさかエンカウントするなんて

「あ！なのは！おーい！なーのはーっ…！」

「あ、ちょ、レヴィ！」

戸惑うフェイト・テストロツサをそっちのけで、彼女の手を握りながらやって来るアホの子。

この子はライバルとか競争相手とかでも友達感覚なのでしょうか？

「なのは、その子どうしたの？ケガでもしてるの？」

「レヴィ」

レヴィが手に魔力を宿しながらすずかに触れようとするのを言葉で制する。

「ここは管理外世界です。不用意に魔法を使うべきではありません」

「でも、ケガするのはイタいから早く治した方が」

この子はほとほと純粹というか、主人公まっしぐらというか

「すずかは身体にケガはありませんよ。ただし、私がすずかの心にケガを負わせてしまったのです」

「なのはが…？嘘だ！！」

「なのはちゃんの所為じゃないよ。私の心が弱いから」

くわっ！っと目を見開いてずいっと身を乗り出して言うレヴィと、私を見上げて言うすずか。

「いえ、あの時はさすがの心を推して計るべきでした。私はそれもせず」

ふと温かい物が私の頬に触れた。

それは小さな手。

以前は大きかった手。

「すずか」

「なのはちゃんの所為じゃないの。なのはちゃんの所為じゃないの」

「……ええ……ありがとうございます」

自分に出来る優しい笑みを浮かべてすずかに告げると、すずかも笑ってくれました。

「むう……」

「クウ……」

レヴィと久遠が頬を膨らませて、不機嫌です！って顔をしています。



「ふう……OK、不機嫌ガールズ。私とお茶でもしますか？」

「じゃあなのはおしりー！」

「ふふ、はいはい。貴女もどうですか？フェイト・テストロッサ」

「……どういづつもり……」

「ダメだよフェイト。なのはがせつかく誘ってくれたんだよ？」

「レヴィ、でも私達は互いに敵同士なんだ。あまり干渉しあわない方がいい」

警戒を解かないフェイト・テストロッサの言葉は正論ですが

「別に私は特にこれといった意図はありません。ただライバルとお茶してはいけないという法律は聞いた覚えはありませんが」

「そっだよフェイト？ボクたちは『ライバル』と書いて『友』って読むんだよ！」

「普通はそうは読まないよ、レヴィ」

苦笑いするフェイト・テストロッサ。

レヴィはやっぱり純粹ですね。

「ハンバーガーが食べたいな！Aセットがあるところでコーヒー2つ！あ、4つかな？それでそこになのはがまたAセットを頼んでビルが学校の屋上で食べようよ！」

なんか弧線に触れるフレーズですが、まあ、良いでしょう。

「すずか、歩けますか？」

「う、うん。が、がん、ばる」

すずかを降ろしそのまますずかと手を繋ぎます。

「クウ……なのはあ」

耳をぺたんとして尻尾をふりふりしてもじもじする久遠。なんなんです？この素敵カワユス生物は？

「おいで、久遠」

「クオン！」

私が相手いる左手を出すと、久遠が飛び込んでくる。その久遠を抱き止めて降ろすと、久遠は私の左腕に抱きつく。

「ク  
」

尻尾が千切れそうな程ふりふりする久遠。犬でなく狐でしょうか？貴女。

「うう、ずるいズルいい！ボクもお！！」

「キャッ、ちょ、レヴィー！」

レヴィーがロケットずつきよろしく突っ込んできて、私の首に腕をまわしてぶら下がる。

く、首が……！！

「なのはおつきいなあ。リニスよりおつきいかな？」

何がとは語るに非ず。

「ちょ、レヴィー！止めな、さい、」コラ

「えへへ〜…キャン！…ちょ、誰だ!？」

「ク ……なのはを離して…」

軽く電気をバチバチと玩具のスタンガンの様に指に纏う久遠。

「いったく、このボクに電気で挑むなんて…その勝負受けてたー  
ーっ!！」

「クウ…負けない…!！」

「やめなさい!！」

一触即発の空気に、私は世の中のお母様方の偉大さを知る。

子育て子守って、大変ですね。世の中のお母様方、いつもご苦労様  
です。

side:ユード・スクライア

なのは家の庭で、僕はハーケンに相談に貰っていた。

この前の答えが、なんとなく見えてきたから

『成る程な。それがお前の答えか、ユーノ』

「うん。僕が自信持つて言えることは少ないけど」

『いいや、全く無いよりかはマシだ。わかっている分、あとは突き詰めていけば良いんだからな』

「でも、僕には今以上の力なんて　なのはみために思考展開能力や状況判断能力や努力出来る才能なんてないし」

『それはガッツで鍛えればどうにかなるもんだろ？ユーノ、お前は男だろ？男だったら当たって砕けるの勢いでまずやってみろ』

「いや、砕けたらマズいんじゃない」

『比喩だ比喩。まあ、男は勇気と努力と根性とガッツで補え！』

「それはゲームやアニメの話しだつてば……」

『わかってないな、マイフレンズ。既に魔法という物からしてコッチでは空想だ。だが、なのははその空想から力を得て戦っている。もっと頭を働かせよ？フェレットボーイ』

「う、うん……わかった」

やっぱりハーケンがAIなんて未だに信じられない。本当に大人の  
人に相談しているように感じる。

『まあ、自分で手詰まりなら、ファーザーに訊いてみるのもアリだ  
ぜ？御神流・不破の剣士だったファーザーだ。俺よりも頼りなアド  
バイスをくれるかもしれないぜ？』

「う、うん……」

士郎さんにか……

ただでさえなのは戦いの日常に引き込んでしまったから、話し掛  
け辛いんだよね……。

|||||

side:高町なのは

こんな近所というか、この世界にまさかウマカバーガーが本当に  
あって少しびっくりしたのですが

トイレに行くと言って戻ってきたレヴィなのですが

エンドレスフロンティア在住のドツンデレ妖精プリンセスの格好（魔力を感じるのでおそらくはバリアジャケット）に蝶々仮面をつけて帰ってきました

しかもなんか私までとはいきませんが、大人の身体で

「レヴィ……」

「ハア……………」

言葉の無い私と、額に手をやって溜め息を吐くフェイト・テストアツサ。

アホの子はやっぱりアホの子でしたか

「店員さん！ハンバーガーセットAを1つ。それとコーヒーのMをふた…あ、四つ」

「こ、こちらでお召し上がりになりますか？それともテイクアウトで……」

「こちらで……」

「ハイ、どうぞゆっくり……」

「ご苦労様です見ず知らずの店員さん。」

「レヴィ…貴女何をやっているのですか……」

「え？ウマカバーガーでハンバーガーセットAを頼む時はこうするんでしょ？」

なに言ってるの？って真顔で言うアホの子。

「…フェイト・テスタロッサ……」

「何も知らない何も見てない何も聞いてない何も言いたくない」

凄まじい拒絶反応です。

「どっどっなのは？オシャレでしょ！？」

「まずはそのセクシャルバイオレットな衣装と仮面を外しなさい。」

O H A N A S H Iはそれからです

「え〜！このまま舞踏会に直行できるくらい結構イケてる一張羅でしょっ？」

くるくる回るレヴィ。



ドギリギリなスカートというか、既にマルダシのモロダシですね、この格好は

ほら見てみなさい。周りの男性客が腰を引かせてしまっているではありませんか

「甘い甘い！甘いわよレヴィー！」

「この声は？」

「真逆……」

入口には全身シルバーコートで身を包んだ女性。髪の毛色はひどく見慣れた色。

「誰？」

「キャプテンアリサちゃん！」

「アリサまで……」

「うわぁー……レヴィー二号が居る……」

キャプテンアリサの登場に、何人かの客が逃げる。

「店員さん。あたしにもハンバーガーセットAを1つ。ポテトLで」

「こちらでお召し上がりですか、それともテイクアウトで？」

「こちらで」

「テンチョー!!」

店員さんが叫ぶと、ボックスやら調理場にいた店員一同の皆様がカウンターの前に出て来て

「代金は一切要りませんから!どうか1つテイクアウトで!!」

「なんと!サービスのいい!ブラボーだ。しばらく通いませよ」

「ボクも蝶サイコー!」

「「「「ひいひい!」」」」

悲鳴を上げる店員さん一同方。

「キャプテンアリサ」

「レヴィ」

ガシ　！！

互い腕をクロスさせ合う厨二病バカ2人。

なにやら間違った友情が芽生えてしまったようですが

「いい加減にしなさいっ！！」

ピンポーン

でもちゃんと代金は支払いました。

||||||||||||||||||||

とりあえずバカ2人を断罪して普通に公園で昼食です。

ちなみにレヴィの格好は、私がバルニフィカスにイメージトレースをさせてstsのフェイト・テストロツサのバリアジャケットに短パンを追加した格好に変えさせました。

というより魔法を遊びに使うのではありませんよ……。

「すみません……」

「貴方の所為ではないでしょうか？バルニフィカス」

イメージトレースの所為か、バルニフィカスの言語が日本語にベリシック設定されてしまったようです。まあ、会話しやすくはなりませんが

「アリサ、貴女ですよ……」

「いやあ、風に呼ばれた気がしたのよ。これぞブラボー技の1つ！  
的中！ブラボー直感！！」

「ハア……」

重なる私とフェイト・テストロッサの溜め息

ひしっ

「お互い、苦労しますね……」

「…うん」

荒んだ心を互いに人肌で癒やします。

「はい、久遠ちゃん」

「あーん くもん！」

すずかはすずかで久遠に餌づけ中のようです。

なんか疲れました。激しく

ドクンッ

「ッ  
」

「これ！」

「まさか！」

「くっ！」

「クオン！」

「え？」

私はすずかを抱えて後ろに大きく飛ぶ。

座っていたテーブルベンチが壊れ、そこから黒くグチャグチャしたモノが現れる。

「ジュエルシード!!」

私、アリサ、レヴィ、フェイトが同時に叫ぶ!

「レヴィ!」

私は会話していたバルニフィカスをフェイトへ投げる。

「よし!!なのはに造って貰ったニュージャケットのお陰で、ボクのハートは有頂天!!行くよバルニフィカス!!」

「バルディツシュ!」

『Get set.』

「久遠!すずかを!!」

「任せて!」

大人モードになった久遠にすずかを預け、プレーナを練り上げ、ラギアス式魔法陣を展開する。

「セツトアップ!!」

「武装錬金!!」

「出ですよ!デイスカッター!!」

全員がそれぞれの武器を手にする。

「ボク達のごはんを邪魔した罪は重いんだぞ!!食べ物への恨み、思  
い知れ!!」

「いくよ、レヴィ!!」

「任せて!ザンバーモード!!」

「バルディツシュ、シーリングモード!」

2人のデバイスが変形する。

「アリサ、私達で外装ひつぺがえしますよ!!」

「オツケー!まずはあたしからよ!!」

パチンツ!!

ジリ…ズドオオオオ…ンツ!!……!!





「ジュエルシード、封印!!」

『Sealing』

雷光の帯となったフェイトがシーリングモードもバルディッシュを構えて突撃!

暴走体に直接バルディッシュを突き刺してジュエルシードに封印を施した。

四散する暴走体。封印されたジュエルシードはバルディッシュの中へ消えた。

「意外にあっけなかったわね」

「今回は異相体でしたからね」

「やったー!!!!ボク達の完・全・しょーり!!!!あ!しょーりのポーズ!!!!ブイブイ!!!!」

「ブイ……」

「ブイ!!」

「うん……」

「カツコイい……」

「クオン!!」

さて、警察が来る前に退散です！

「ハッハッハッ！サラダバー！！」

「さらば……じゃないの？」

「しからばー！」

「逃げろ〜！！！」

私はすずかを抱えて、私達はダッシュで退散しました。

そして結局家にまで着いてきてしまったテストロッサ姉妹は、母様にとっつかまってわいのやいので夕食を食べて帰っていきました。

とりあえずジュエルシードは取ったもの勝ちなので、フェイト・テストロッサに今回は預けます。

「今日からあたし、ここに住むからー！！」

「……………は？」

To be continued…

第24話 同土達よ！（後書き）

面白かったですか？

どんどんりりカルマジカルから離れてく……

需要あるのかなあ……こんな駄文。

第25話 ぶらり温泉湯けむりの旅 前編（前書き）

皆さんお楽しみの温泉回です!!

## 第25話 ぶらり温泉湯けむりの旅 前編

side：高町なのは

まるで押し掛け女房のように高町家にやってきたアリサ。

しかも私だけが知らないだけで、父様と母様は知っていた様子。

なんで言ってくれなかったのでしょうか。

まあ、今は良いでしょう。

それよりも温泉です。

全国的に約一週間休みの今月最初の週。

高町家や月村家、そしてアリサと一緒に何処かへ出掛けるのが通例なのです。

しかし今年はユーノや久遠、それなりにスペースを取るアリスとハーケンが居る為、車二台では狭いと言うことでマイクロバスを借りて行くというこの話だったのでありますが

「さすが月村家、金銭感覚が二桁位違いました」

私は端席でボディが灰色のEX-Sガンダムの最終調整をしていま

す。

Sガンダムtype-?

メンテナンス時の非常待避用筐体です。

今は中にアリスが入っています。

ムーバブルフレームでもかなり複雑であるSガンダムは、かなり調整が難しく、しかもアリスの癖にあわせての調整は、一度調整してしまえばあとは整備や微調整で済むのですが、この温泉旅行でもフエイト・テストロツサやレヴィと鉢合わせするかもしれないし、ジュエルシードの暴走体と戦うことになればまったくさらな状態のtype-?では、アリスは十全に戦うのは不可能。故に今の移動中に調整をやっています。

「それにしても、ここまで大きなバスが自家用なんて、さすがん家はスツゴいわね相変わらず」

「ですね」

私は普通の前向きの席に座っています。しかしその椅子でも大人2人分のソファーのような椅子でスペースに余裕がある為、真ん中に私、左右にアリサと久遠、私に寄りかかるようにして膝の間にすずかが座っています。

月村家が用意したバスは…中にカラオケが用意しており、席も通常のバスとは違い真ん中に窓に沿った大きいソファーが置いてあり…

冷蔵庫までついている、おおよそ家族旅行に使うには気が引けてしまう程のかけ離れたものでした。ちなみに運転はノエルさんです。

後ろで母様や忍さんが歌う声をBGMに作業を続けていきます。

「BMセレクター調整完了。ハーモニクスアジャスターセットアップ。フルカネルリ式永久機関クォータードライブ。アリス、調整が終わりました」

『……やっぱり慣れた身体と比べると若干違和感湧きますね』

「慣れた身体って、アリスにE×パーツ取り付けて色変えただけじゃないの？」

「今AIの演算処理能力を上げる作業をやっているのですが、ALICEシステムを直接いじる必要があるので、メンテナンス時の待避用筐体のコレにアリスを移したのです」

「へー、そうなんだ」

『マイスター、右腕部関節のマグネット・コーティングの反発指数をあと0.00023程上げて下さい。あと左足足首のオートバルンサーを+0.3程』

「わかりました。マグネット・コーティングの項目は…っ」と

「うわ、見てるだけで頭痛くなりそう……」

「アリスも覚えればすぐに出来ますよ。IQ200もあるのですか





そんなこんな騒ぎをしている内に、バスは目的地、鳴海温泉宿に到着しました。

ここで2泊3日なので、今年は母様へのサービスが行き届いていますね。

私はあとからバスを降りてきた父様に小さくサムズアップを送るgood jobですと。

するとさすがは父様。

私の意図を瞬時に理解して小さくサムズアップを返してくれました。やっぱりこつこつやり取りを良いと思う辺り、私もまだまだ男ですね。

「あ、ユーノ！」

「え？なに、アリサ」

「これ、お風呂に入ってる間預かってくれる？」

「この宝石……」

アリサがユーノに手渡した三角形　鍬に似た形の宝石。アレがアリサの

「あたしは女湯で連れてけないから、頼んだわよ？」

「え、あ、う、うん」

ちよつと意味がわからないというユーノに宝石を預けるアリサ。

「ハーケンもユーノに着いて行って下さいね？」

『OK、ブラザー。俺もスクラップにはなりたかないからな。と言  
うわけだシスター、そのダブルスマートガンを下ろしてくれ』

ハーケンの後ろでオーラを放ち両小脇にビームスマートガンを構えたアリサはゆっくりと砲口を下ろした。

『命拾いしましたね、ハーケン。行きましようか、マイスター』

先に飛んでいくアリサ。

後ろから見ている分には問題はなさそうですね。

肩の力を落とすハーケンに別れを告げながら、私はさすが、久遠、  
アリサの下へ歩いていく。

とりあえず温泉にできればまず一番最初にやることは温泉に入ること  
です。

女湯の脱衣場でちよつとずつ服を脱いでいくのですが

「あのお……脱ぎにくいのですが……」

久遠以外の全員が私をガン見するので脱ぎにくいのですよ。

「やっぱりあたしが言っても手遅れだったか……」

なにやら訓練を受けているようなアリスの目なら、私の傷痕が見えるのでしよう。

あと姉様は言わずもがな、忍さんやすすかは夜の一族でしょうし

ブラとスパッツとパンティーを脱いで、前を隠すようにタオルを持ちます。

「では、私はお先に。行きましようか、アリス」

『はい』

プロペラントタンク、両腰のビームキャノン、胸部フィールド・ジェネレーター、2挺のビームスマートガン、背中の4門のビームキャノンといった装備品を外したアリスが着いてきます。

自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSは介護・看護も視野に入れている上に、私の技術者根性によって満足する再現度を実現しているSガンダムは完全防水性。アリスも味覚以外の感覚がある為、こうしてお風呂にも入っても平気です。

「温泉に入る時の約束その一」

『必ず身体を洗ってから入りましょうね？マイスター、お背中流しますね』

「お願いします」

椅子に座って髪の毛を解く。

そこから解けて背中に広がった髪の毛を前に持ってくる。

「さ、アリス」

『　　グハッ！』

ガシャンッ

「え？アリス…？」

『な、なんでもありません……（マイスターの白い肌、白い項、白い脊髄……）……ゴフッ』  
ガシヨンッ

「ア、アリス…？」

「アリスって、本当にロボット？」

「マスクから水銀が溢れ出るわね……わからないでもないけど…」

「なのはちゃんの造る子達は本当にスゴいわね。1回解体・バラ  
…してみたいなあ………」

「久遠ちゃん、背中流しっこしよ」

「クオン！」

アリスが背中を流してくれる間に、私は髪の毛を洗います。

長くなった分、洗うに時間が掛かるんですね。それだけが少しネ  
ックです。

「なーのーは」

「姉様？」

「フフン 前は私が洗って上げる」

「や、自分で洗えますよ」

「良いから良いから。なのはは髪の毛洗ってなって」

「そうですか？ではお願いします」

「オツケー では、洗わさせて頂きます、お嬢様」

「お嬢様は向こうですよ、綾崎くん？」

「あ、洗うなら早くしろハヤテ！」

「えうえ！？わ、わかりましたお嬢様！」

サムズアップをアリサに送りながら頭を洗うのを続ける。

『感無量……くっ』

「あ、ちょ、姉様！」

「くっ、この無駄にデカイ脂肪の塊が……」

「や、んっ、あはっ、ね、ねえ、さ、キャっ」

「この無駄に細いわき腹がああああ……」

「ひっ、ああははは、ちょ、姉さ、キャハハハハハ」

「偶にはその鉄面皮を歪ませてみせなさいお嬢様！」

「だ、だ、から、ら、や、やめ！」



「気持ちいいわねえー」

「うん」

「クー……」

温泉はこれですよね。

「私は露天風呂にいつてきますね」

「あ、それなら私もいくわ」

「ではいきましょうか、忍さん」

「クウ！まってー」

私は忍さんと久遠を伴って露天風呂へ。

「ここの露天風呂も広いわね」

「外は混浴の分余計にだと思えますよ」

とはいえ、男風呂には兄様とユーノの気配しかないので、大丈夫でしようね。





「ちょ！お前達！！」

狙い通り、兄様が1人で露天風呂に居ました。

「恭也あゝ」

「兄様あ……………」

私と忍さんで兄様に絡み付き、久遠は我介さずにいます。

「ふふ、どう恭也あゝ？」

「恋人と妹のサンドイッチです」

「彼女ならともかく、妹に反応はしないわよね？」

「お、お前達……………」

必死で心頭滅却する兄様が楽しいですね。

「恭也……………」

「恭也…兄…様」

少し色っぽい潤んだ瞳を作って、ゆっくりと兄様に近づいて

「ちよ、ま、忍はともかくお前はまで!」

「やん……」

「あ……」

元私は男なのでそれ程気にしないのですが

「すまん」

「……兄様のえっち」

私は兄様が触った胸を隠しながら少し下がります。

「や、もとはお前」

「恭也のバカー……!!!!」

ガンッ!

「ぐほっ!」

割と本気で殴られた兄様。

そのまま忍さんに男風呂へ放り込まれました。

「忍さん…」

「…なのはちゃん」

戻ってきた忍さんと向き合って

「いえ〜い！」

「いえーい」

ハイタッチを交わしました。

姉様が漫画で兄様をからかうと面白いという意味がわかりました。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第25話 ぶらり温泉湯けむりの旅 前編（後書き）

次はフェイトやレヴィ達との戦闘か……

水辺でべらぼうに強い敵が浮かばないなあ……。。

第26話 ぶらり温泉湯けむりの旅 後編(前書き)

今回はまたスゴいです！

第26話 ぶらり温泉湯けむりの旅 後編

side：高町なのは

温泉からでた私は、ひとりで部屋に居ました。先ほどまで兄様が居ましたが、忍さんに引っ張られていきました。

「のどかですね……」

ジュエルシードが発動するのは夜。

それまではお休みです。

こっそり買ったビールをひっそりと飲みながら、片手で空中投影入力端末へ指を走らせる。

今回の旅行でアリサとすずかに渡す予定のものの仕上げの為です。

あんなことがあったあとですし、アリサには要らないかもしれませんが、万が一を考えて渡しておいて損はないでしょう。

「たっだいま」

「お帰りなさい、姉様」

「ただいま、なのは。って、それビールじゃない！」

「姉様も飲みます？」

「まだ未成年よ私はって、あんたも未成年よ！！」

「私は身体的には25の立派な成人です。なので問題ありません」

残っていたビール缶の中身を一気に煽る。

ああ、この喉や食堂を通る熱さがなんとも……

「ふう……」

飲み干した缶は捨てずに量子分解して回収。

こういう金属系の物は多かれ少なかれ作業部屋の設備に使っているので、ゴミは宝の山です。

「ハア、おとーさんやお母さんに見つかっても知らないからね」

「母様なら既に知っていますよ？程々には言われましたが」

「ダメだ……お母さんはある意味一番ダメだ」



そつでしようか？一番高町家で強いのは母様なのですが。

「とにかく！ダメなのはダメ！お馬鹿になったらどうすんの！」

「ちよつとくらいならダメにはなりませんよ」

今度はカルピスと炭酸アルコールを混ぜてサワーを造ります。こつちは持ち込みです。

「なのは、それも」

「カルピスサワーです。飲みます？」

「だからお酒はダメだつてに！」

グラスをフラフラ揺らす私を、姉様は両肩を掴んで止めますが

びしゅ

「「あ……」」

フラフラ揺らしていた為、元々零れ易かったカルピスサワーが、私の胸元へダイレクトアタック。ちよつと冷たいです。

「あ、っと、ごめん。今拭くから」

「いえ、もう一度風呂に入ってくれば良いので、大丈夫ですよ」

とりあえず胸に零れたカルピスサワーを指で拭って味具合を確かめます。ちょうど良い味ですね。

「……なのは」

「はい？」

「……あんた無自覚かもしれないからいつておくけど、最近ガードが緩いんだから気をつけなさい。自分が大人だって言うんならなおさらね」

「……？」

はて、姉様の言うガードとはなんなのでしょうか？

「でない」と

「ひゃっ、んっ、あ、ねえさ」

「悪いオオカミに、食べられちゃうんだからね」

私の胸元の零れたカルピスサワーを舐め上げてから、耳元で囁く姉様

「……そんなに…緩い…ですか？」

「緩いよ。そんなだと襲われちゃっても文句言えないよ？」

「そ、そうですね？」

さすがに家で一番天然な姉様に言われてしまうと、気を引き締めざるえませんが。

「さ、早く流しにいこう！」

「ひ、ひとりで行けますって」

「ダメダメ！今のなのは酒まわって色っぽいんだからそれこそ襲われるって」

「私がタダの暴漢に負けるタマですか？」

「良いから良いから、私ももうひとつ風呂行きたいしさ」

「わかりました」



「ふうん？なるほどねえ。あんたが家の子をアレしてくれちゃったヤツかい？」

なんだかなのはを見定めているように言うオレンジ色の髪の毛の女。浴衣だからわからないけれど、殺気の程度からそれなりに修羅場は潜ってるみたいだけど、なのはの方がもっと怖い殺気を出す。なのはよりは修羅場は潜っちゃいないだろう。

「あまり公衆の面前で殺気を振り撒くのは感心しませんね。私が殺気に向けていれば、あなたは5、6回は死んでいきますよ？」

「…なんだって……っ！？」

さらに殺気が膨れた時点で、私から3本、他の私から見て1時と4時の方向から3本ずつ、計9本の飛針が女を掠めて床や壁や柱に当たった。

「うちの娘に手を出すのなら」

「容赦はしない…！」

いつの間にか 十中八九神速を使ってだけど に女の後ろに立って小太刀の刃を首筋に当てるおとーさんと、女の前で片膝をついて腹部に小太刀を突き立てる恭ちゃん。

一歩でも動いたら即ブチ殺す殺気だ。

私も飛針を逆手に持って準戦闘体勢に入る。

「あ、あんたら、なにものだい…普通の人間があたしを……」

「ただの父親だ」

「しがない兄だ」

「妹が大切な姉だ」

「わかりましたか？あなたが死ねばフェイト・テスタロッサやレヴイは悲しみます。それにここは湯治施設。互いに争い事は不利益です」

「くっ」

女が警戒はしながらも殺気は引かせたから、私は構えを解いて、おとーさんと恭ちゃんも小太刀を納刀する。

「あの子達の邪魔するんじゃないよ。でないと、ただじゃすまさないよ」

女は捨てセリフを残して歩いて行った。

「大丈夫だったか、なのは？」

「ええ、私はなんとも。ですが父様兄様、お二方の番は如何つがいしましたか？」

「桃子なら風呂だぞ」

「忍も同じくな。だからそう目くじらを立てるな、なのは」

「別に、自分の一番大切な人をほっぽりだしてくるような最低の男でないのを確認したかったので」

「手厳しいな」

「だがなのは、俺にも恭也にも、なのはは大切な娘で妹なんだ。なのはに何かあれば、俺や恭也だけでなくみんなが悲しむんだ。それだけは忘れないでくれよ？」

「心得ました、父様。ではいきましょうか、姉様」

「う、うん」

「って、おいそっちは」

「姉様の所為で飲み物を零してしまったので、洗い流す傍ら、もうひとつ風呂浴びてきます」

「そっか、気をつけるよ？」







「だってなのは、スゴく悩んでる上にコワイ顔してた。お姉ちゃん  
で良かったら、相談に乗るよ」

「いえ、本当になんでもありません。これは私の問題で」

「やっぱり、私みたいな弱いお姉ちゃんじゃ、話しにならないよね  
」

「姉様！」

私は振り向いて姉を見る。

姉様は私を見上げて、その瞳は凄く辛そうで

「私ね、なのはの力になれば良いって思ってたの。ずっと、あの  
日の夜から　なのはがスケッチブックを抱いて帰ってきたあの日  
から。でもいつの間にか、なのはは私なんかよりずっと強くて、辛  
い事も全部自分で背負い込もうとしてて……私は、私が姉であるの  
が、こんなにも不甲斐ない。悔しい。弱い自分が大嫌いだ！」

「姉様……」

私は姉様の目を知っている。

発端は違っても、それは私と同じ、自分が嫌いな瞳だ。

「でもなのは力にはなりたいたいから、頑張って頑張って頑張って頑張って、さらに頑張ってるけど、恭ちゃんにもなのはにも追いつけてる気がしない。最近恭ちゃんもまた強くなってきたて、おとーさんも昔の感覚を取り戻そうと最近恭ちゃんと良く打ち込みやってるし、お母さんは翠屋のマスターだけで良いおとーさんの背中を見ても笑って送り出すだけだし。家の中で一番弱い自分が……赦せないよ」

「姉様……」

私は後ろ手で湯を温かく温度を変えると、そつと姉様を抱き締めた。

「なのはあ……」

「姉様は強くて優しい、私の自慢の姉です。私は魔導を使えばこそ強いだけの人間です。私は姉様の様な本物の強さには程遠い強さしか持っていません」

私は姉様の胸の中央に手を添える。

「姉様は剣士として、そして人間としても強い方。私には……世界と意地を天秤に掛けている私には持てない力をちゃんと持っています。最弱だからなんですか？諦めなければ最弱は最弱無敵となる。私が身体を張って証明してきた論理です。だからそうなのかとは断言出来ませんが、姉様は決して弱いわけではありません。ただ世界



飲み物を飲み交わす大人組みに混ざって、私は1L牛乳パックをラッパ飲みで少しずつ飲みながらまた指を忙しなく動かしていました。すると遠くでジュエルシードが発動したのが確認出来ました。

私が端末を閉じて立ち上がると感じる四つの視線。

「少し、出てきますね」

「……いつてらっしい」「……」

「いつてきます」

私は家族の言葉を背に、旅館から出て走ります。

『マイスター！』

『こんなナイトにマラソンランニングとは、ご苦労様だな、ブラザー』

「ユーノは？」

『ファーザーに酒飲まされてダウンして寝たぜ』

『意外にダメでしたねあの子』

「ははは……」

つまりは結界師は抜きですか。

「ハーケン、結界は任せますよ」

『OK、ソウルブラザー。存分に暴れてくれ』

「わかりました。レイジングハート！」

『All right』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready! Setup!』

私から溢れる桜色の魔力光が私達を包む。

変形したレイジングハートを手に取る。

『Barrier Jacket・Setup!』

着ていた服が分解され、バリアジャケットが精製される。しかし唯一違うのは、後ろ髪を頂の辺りで白く細いリボンで2本に別れたツインテールにした位ですね。

レイジングハートを頭上で振り回してから小脇に構えて変身完了です。

そのままホバーフェザーを展開して、林の中を駆け抜けます。

感じるのはフェイト・テストロッサの魔力。

フルブーストに切り替え、木の林の上に飛び出す。

「レイジングハート!」

『Mode change! Lancer mode!』

ランサーモードに変形したレイジングハートを構える!

「シュテルンアクセラレーションフルブラスト!!! デイバインブレイカー!!!」

視界が一気に加速する！狙うはジュエルシードただ一点！！

「ジュエルシード！封印！！」

「っ、させません！アルフ！！」

「ち！邪魔すんなああー！！！！」

アルフと、もう一人が張ったバリアに阻まれた。

アルフのバリアで勢いを削がれ、もう一枚のバリアに矛先をいなされ、私はジュエルシードの僅か隣りを過ぎ去り、川に盛大に突撃してしまった。

「ぐっ！！」

「なのは！！」

「つつ、敵の心配は無用ですよレヴィ……」

「でもボクは」

「貴女の信念を貫き通しなさい！レヴィ・テストロッサ！！」

「つつ　！！！！」



私に飛んで来ようとするレヴィを言葉で制する。

私を睨むアルフ。

どうしたら良いのか揺れているフェイト・テストロッサ。

私の言葉にバルニフィカスを構えるレヴィ。

そして出来れば戦いたくはないと目をしている私の突撃をいなした女性　フェイトの教育者にして魔導の師、プレシア・テストロッサの山猫の使い魔リニス。

よりもよって頭脳プレーの出来る、使い魔として魔導師として優秀な彼女が存命とは、供給魔力の程度によればstsの中遠距離型フェイト・テストロッサとも言える存在。4体1　普通の人間なら撤退を考えるのでしょうか。

私はレイジングハートを構える。

「おやおや、やる気満々ってかい？4体1なのにさ」

「たとえ何人が相手だろうとも、私は退くわけにはいかない!!」

『Devine Lancer!!』

私の周りに滞空する6つのスフィア。

まだ十全とはいきませんか

「私はレヴィから貴女の話しを聞いています。貴女程の人が相手では、話し合いで解決するのは無理なのでしょう」

「それがわかっているのならば、問答手加減容赦一切不要です」

「4対1でボコボコにするのはイヤだけど、ボクはなのはのいう通りに、ボクの信念を貫く。いくよ　なのは！」

「…いきます」

私達が戦闘へ移ろうとしたとき、空からいくつもの光の筋が私達の間降り注いだ。

『おっと、ウエイトだマジシャンガールズ』

『ファミリアはファミリア同士仲良く死合いませんか？』

水しぶきの中から出て来たのは

「ハーケン！アリス！」

拳を構えるハーケんと、2挺のビームスマートガンを構えるアリス

だった。

「機械人形？」

「うわー！ー！スゴい！ゼータプラスカラーのEX-Sガンダムにゲシュペンスト・ファントムだ！ー！」

『OK、ブルーガール。少し久しぶりだな』

「え？ボクってキミとどつかで逢った？」

『俺もMSすずかの家に居たんだがな、まあ良い。そのセクシャルウルフガールアンドセクシャルキャッツガール。悪いがお前達の相手は俺たちさ』

『2対1ならば、マイスターもそうそう簡単には墜ちませんよ？』

「……そんなちっこい身体で、あたしらとやるうってのかい？」

不敵に2人を明らかに見下して言い放つアルフ。しかしそれは油断大敵。私の造ったこの子達は

『『身体のサイズ差が戦力を分かつ絶対条件ではないという事を教えてやる！ー！』』

そんじよそこらの魔導師なんかの数段は強いですよ？

ハーケンとアリスがそれぞれアルフとリニスへ駆ける！

『フロントムリイイイングツ、プラス！！』

ハーケンの胸部が開き、中から金色のリングが現れ、それに左腕を通す。

『ブロウクンツマグナアアムツ！！』

「くうっ！！こ、こいつう！！」

シールドで防御したアルフだが、1/100とは思えないパワーで、ハーケンはアルフを推す。

『はあああああっ！！』

そのままハーケンはアルフを押し込んで、林の中へ。

「アルフ！！」

『貴女の相手は私です！いきなさい、インコム達！！』

頭部のインコムと脚部のリフレクターインコムを射出したアリスは、両小脇のダブルビームスマートガンと両腰のビームキャノンからビームを連射してリニスを牽制し、しかも何発かはリフレクターインコムに中って跳ね返る。しかも跳ね返るビームの合間にインコムのビームを入れ、擬似的なオールレンジ攻撃を使い、橋からリニスを遠ざける道を作っていった。

「リニス！アルフ！」

「フェイト、追っちゃダメ！」

「レヴィ！？」

「ボクたちの相手はなのはだ。ファントムとEX-Sガンダムの行動に報いなくちゃならない」

「そんなこと」

「でないとボクたち、本物の悪者になる。ボクは悪は悪でも貫き通してみせる！それはボクがなのはと交わした約束だから！！でもボクが貫き通したいのはただの悪じゃない！誇りある悪だ！！」

フェイトに宣言したレヴィは、バルニフィカスをザンバーモードに切り換える。

「槍対剣！1対1じゃないけど、遠慮しないよ！..！」

「ならば私も、フェアでなければなりませんね」

私はミッド式魔法陣を展開して、レイジングハートの石突を突き刺す。

桜色の魔力光が身体を包み込んで、視界が低くなる。

レイジングハートが大きく感じる。

使ったのは変身魔法。子どもの身体へ。

「これで、負けても文句言えませんか？」

「上等！なのはこそ言い訳なしだよ！！」

「望むところ！！ディバインランサー！ファイア！」

私は駆け出しながらディバインランサーを放った。

「フェイトいくよ！」

「…わかった！」

ここに私とレヴィとフェイトの第二戦の幕が切って落とされた。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

第26話 ぶらり温泉湯けむりの旅 後編（後書き）

美由希回でありながら、後半は蝶・主人公体質のレヴィの回でした。

なにこの姉？こんな姉が欲しい！！

そしてレヴィがカッコいい！！

そしてリニスが生きてる！お持ち帰りして久遠とセットで愛でたい  
！！

次回もお楽しみに！



第27話 敢えて言わせてもらおう！（前書き）

今回は色々頑張った！

でも所詮私の書く駄分なんて……

## 第27話 敢えて言わせてもらおう！

side: - -

『うおおおおっ！！』

「こんチクショーがあああー！！」

ハーケンとアルフの殴り合いは熾烈を極めていた。

ハーケンは体格故に一撃のパワーにだがアルフに劣る。

しかしサイズ差を生かした戦法によってアルフを押ししていた。

逆にアルフは小さいハーケンにイライラしていた。

「こんのバカ力のクセにちょこまかと！！」

『ゲシュペンストキック！！』

「くっ！バリアはガラスじゃないんだよ！！」

アルフはハーケンの蹴りをバリアで受けるが、バリアブレイクではなく、貫通のプログラムが組んであるゲシュペンストキックは、出力に劣るバリアであれば即貫通が可能なチート技である。

『フロントムリング』

「それはさせるか!」

胸部ハッチを開いて一瞬動きの止まるハーケンの隙を狙い、アルフは飛び蹴りを放つ。しかし

『グランスラッシュリッパ―!GO!』

ハーケンは右手で背中の中のコンテナのグランスラッシュリッパ―を抜いて投げ放つ!

「こんなオモチャ!」

アルフはグランスラッシュリッパ―を蹴り碎いて、そのままハーケンに向かう。

『ブロウクン!マグナムツ!』

「あああああっ!」

かち合う拳と蹴りだが、質量の差からハーケンが押し負けた。

『ぐあああああ！！』

地面を数回バウンドして、木に叩きつけられようやく止まる。

先ほどから何度も同じ方法でダメージを負い、ハーケンの身体から火花が散っている。ボディもそこかしこボロボロである。

『フツ、こりゃあ、ブラザーに、怒られっかな……』

「もう諦めな！あんたにゃ悪いが、勝ち目はないね」

『フツ、誰が諦めるかよ……』

ハーケンは立ち上がる。

そのセリフはかれこれ10回は聞いている。だが10回ともハーケンは折れずに立ち向かう。

『俺はな、アイツのソウルカルムレードブラザーパートナーファミリアなんだ。アイツが諦めない限り、ファミリアの俺が諦めるわけにはいかないんだよ！！そしてええ！！』

ハーケンの身体からエーテルが溢れかえり、その身体を緑色に染めていく。

『見せてやるぜ！！アイツと俺がスーパーハイパーミラクルスペシャルベリーファイヤーラブハートボンバーの勇気の力ってヤツをなあああ！！』

「な、なんだいあの光、それにこのプレッシャーは……」

謎の発光現象とハーケンの光景とプレッシャーに数歩下がるアルフ。

『ガジェットツールツ！！』

ハーケンの背中、グランスラッシュリッパのコンテナの両脇のコンテナとブースターの上から、キューブ状のパーツが分離して、ハーケンの頭上を円状に回り、粒子に分解し、ハーケンの両手に纏わり付き、形をナックルガードに変える。

『ヘル・アンド・ヘブン！！』

左手に赤い光、右手に黄色い光が集まる。本家と左右逆なのはハーケンの手の役割が左右逆だからだ。

『ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフオ……』

「アレを打たせたらヤバい！！バインド！」

ハーケンを拘束するアルフのチェーンバインドだが、ハーケンは軋み上がる四軀を無視して、反発しあう2つのエネルギーを一つにする！

『はあああああ！！』

反発しあう力は指向性を得て、竜巻となりアルフへ向かう。

「くっ、ああ！」

バリアで防御したアルフだが、バリアなどお構いなしに、バリアごと竜巻はアルフを包み込んで種も仕掛けも不明な力で拘束した。敢えて言わせてもらえばそれは

『俺はバウンティハンターだからな。俺には勇者を名乗る資格なんてないだろうが、俺を産んでくれたアイツの為ならなあああ！！』

ハーケンはブースターに点火して合わせた両腕を突き出しながら突撃する。



「コイツ……」

アルフは壊れて動かなくなったハーケンを見ながらしゃがみ込んだ。

「あたしと同じか……」

空を見上げると、星の煌めきのように2カ所で光の華が咲いていた。

その空中ではリニスとアリスのドッグファイトが行われていた。

「オールレンジからの変幻自在の狙撃攻撃。この機械人形、強い！」

『さあ！演じ狂い死に果てなさい！私が奏でる死凶円舞曲 - Des  
u Waittz - で！！』

ビームキャノンとビームスマートガン、リフレクタービットが増えた事による手数が増えにより、取れる戦術幅の広がったアリスは、なのは譲りの戦術展開とALICEシステムの思考演算能力を駆使してリニスを押していた。

それはリニスとアリスの相性が見事に合致した結果だ。

アリスの計算され尽くされた弾幕に、リニスは近寄れず、逆に遠距離に下がれもしない。中距離での戦闘を余儀無くされている。ビー



ムはインコム以外のAクラス射撃魔法の威力があると見たリニスは、受けるより避けるを優先していた。しかも射撃魔法を放つても、アリスのフィールドの前には四散してダメージが通らない。通つても軽く煙りが出る程度、効いているようには思えない。しかし足を止めて砲撃を放てば確実に集中砲火で削り落とされる。

フェイトとの戦いから学んだアリスの戦術は、その師であるリニスにとつても効果絶大だ。

『脳髄と銃身が焼き切れるまで！撃ち尽くしてあげます！！耐えられますか！？この華麗なる弾幕が！！』

アリスの身体から 胸、コックピットから緑色に包まれた虹色の光が……ヒトの心の光が溢れ出し、アリスを包み込んだ。

『負けられない！私の愛しのマイスターの為に、私は、負けられないんだああああ！！！！』

アリスのツインアイが緑色から赤に変わる。

頭部のツインバルカン 弾のスペース問題からフォトン粒子を撃ち出すフォトンバルカンからも撃ちながら、リニスに迫る。

ビームスマートガン捨て、ビームサーベルを抜く！

空いた弾幕の切れ目に余裕の出来たりニスは、しかし距離から、ス

テツキ型のデバイスで防御する。

『切り捨てええええ！！御免ええええんっ！！！』

2本二刀流のビームサーベルを上から振り下ろす。

それは敢えて言うのなら、それは愛の成せる命を賭けた痛烈な一撃。

「くっ！あうっ！」

『マイスター……あ……とは……』

デバイスを切り裂いたアリスは身体のおちこちが爆発し、AパーツとBパーツは分離させ、Gコアだけを分離すると再度合体。Gコアを抱き締めながら林へ落ちていった。

「あの機械人形……」

リニスとはデバイスをやらね、飛行能力の落ちた機動を危なっかしく安定させながら、アリスの近くに降りた。

「あんなに強く想われる主……レヴィが友達と言った子……良い使い魔に恵まれているんですね」

効くかどうかはわからないが、リニスは片膝を着いて、回復魔法を掛けた。

「リニス、勝てたのかい？」

「アルフ、ケガはありませんか？」

「ああ、あたしはね。でもこいつは」

アルフの手にはボロボロになったハーケンが握られていた。アルフはそれをアリスの隣りに置いた。

「コイツ、悪い奴には思えなかったよ。あたしと同じだった」

「こちらも、似たようなものでした」

リニスは空を見上げた。

時間的にはそろそろ彼女達も限界にきてるはず。

「私はこの場でこの子達を診ていますが、貴女は？」

「……あたしもここに居て、サーチャーで観戦するよ。同じ使い魔のよしみってヤツさ」

「そうですね」

そしてなのは達の戦いも終盤に近づいていた。

「空も飛べないのにこんなに粘られるなんて」

「飛行の是非が戦闘を分かť絶対条件ではありませんよ！」

「やっぱりスゴいよなのは！これで空を飛んだらボクたち絶対負けちゃうよ」

「なら早く墜ちなさい！！」

空へ飛び立ち、レイジングハートをレヴィへ振り下ろす。

それをレヴィはバルニフィカスで防いだ。

なのはは環状魔法陣を展開した拳をレヴィに打ち込む！

「ディバイン」

「アークセイバー！」

フェイトからのアークセイバーを、急遽標的を変更してディバイン





「はあ　！？」

なのはがデイバインバスターを零距离で放った瞬間、フェイトは、  
なのはがデイバインバスターを放ったレイジングハートを持つ左手  
に、自分の左手をバリアジャケットがボロボロになっても押し当て、  
零距离でトライデントスマツシャーを放った。

「あああああー！ー！ー！」

「ぐっ、はあああー！ー！ー！」

零距离でせめぎ合う砲撃と砲撃。だが徐々になのはの腕が押し負け  
る。

「後ろからなんて卑怯千万だけど、ごめん！」

なのはとフェイトがせめぎ合う中、なのはの後ろにまわったレヴィ  
が、デバイスモードに戻したバルニフィカスを振り下ろす。

「（物理ダメージで軽く気絶させれば　）」

『マスター！』

「くっ、ネコの手も借りたいくらいですよー！」

なのは振り下ろされたバルニフィカスを靴底で受け止める。

「フェイト!!」

「これで…!!」

「くそっ!!」

フェイトがバルディッシュをサイズフォームからデバイスモードに切り替え、身体を一回させながら振り抜いてきた。

未だに砲撃同士でせめぎ合う左手は使えず、ケガをした右手はそこまで反応は追いつかず、今の体勢から足は間に合わない。完全な詰みの状態だった

「（私は……負けるのですか…私の魔導は、この程度なのですか…!?!）」

スローモーションに映るバルディッシュがヤケに遅く感じるというのに、今のなのは打つ手がなかった。

『どうした？身持ちが堅いな……我が友よ』



「「え？」」

突然の声に声の被るフェイトとレヴィ。

バルディッシュの前に現れる漆黒の影。

その影は青白い光の剣を用いてバルディッシュを受け止めた。

「あ、貴方は……」

「誰だ……！」

「も、MS……なの？」

『ふむ。そちらのレディ達は私を知らないようだな。まあ、無理もあるまい。本来ならば私はまだ、この世には存在しえない存在・モノ・だからな』

黒い影の人型はバルディッシュと鏢競り合いながら余裕に言葉を紡いだ。

人型の大きさは約180cmはあるだろうか

その四駆は機械というか、正しく身体すべてが機械だ。

なのはは目を見開いていた。

「貴方は、まだ調整段階のはず、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSもロード前だったのに……」

『我が盟友の危機と願いにより参上仕つたまでだ』

「くっ」

フェイトは人型を警戒して距離を取った。

レヴィもバルニフィカスを引いて下がる。

「貴方はいつたい……」

『フッ、ならば敢えて言わせてもらおう！！少女よ！私の名をしかとその胸に刻みつけるといい！！』

「ぐっ、重い！」

人型は光の剣でフェイトに斬り掛かった。フェイトはそれをバルデイッシュで受けるが、体格差と力の差から明らかに圧される。

『フラッグを愛し、ガンダムを愛し、この蒼穹・そら・を愛し、この地球・ほし・を愛し、我が盟友を愛するユニオンのトップガン！カスタムフラッグが自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS、グラハム・エーカーであると！！そう、私がフラッグだっ！！』

ヒューマンスケール：カスタムフラッグ

なのはが1/100や1/60では対応出来ない状況を想定して造った人間サイズのMSだ。カスタムフラッグはその栄えある1号機であり、サイズは178cmである。

サイズがデカイ分それなりに内装も高性能に造れ、機体出力もデカイ分パワーも余裕がある。

「貴方はまだ未調整でライフルも無いのですよ！？戦闘行為など無茶にも程がありますよ！グラハム！！」

『盟友の危機、そして同士に万が一を託された身とあっては黙っていられん程、私は我慢強い男だ。そして！！』

「く、あああ！」

グラハムはブースターの推力を上げ、フェイトを押さえ込むが、フェイトも負けじと押し返すが、やはり力の差で抑え込まれる。

『そんな道理、私の無理でこじ開ける！！』

「キヤアッ！」

グラハムはフェイトのバルディッシュを斬り払うと、空いている右

手にもう一本プラズマソードを抜く。

『スサノオやシラヌイ、ウンリユウで無いのが些か口惜しいところだが……グラハム・エーカー！推して参る！！』

「速い！！」

若葉色の煌めく粒子をブースターから放ち、急加速したグラハムは息を吐く暇もない速度で、フェイトに迫った。

『斬り捨て！御めええええんツ！！！』

2本のプラズマソードを束ねてグラハムはフェイトに振り下ろした。

しかしそれを受け止めたのはザンバーフォームのバルニフィカス、レヴィだった。

「レヴィ！？」

「流れが悪い、撤退するよ！……なのは、この勝負は預けた！」

『待てい！！』

「いい、グラハム。追わなくても良いです」

『……キミがそう言うのなら、私はそれに従おう。手を貸したまえ、滞空時間も魔力も限界だろう』

なのはを横抱きしながら、しかしグラハムの眼光はフェイトとレヴィに鋭く向けられていた。

アルフとリニスが上がってきた。

そして2人がなのはの方に来ると、ボロボロになって機能を緊急停止させたハーケンとアリスを、申し訳なさそうな辛そうな表情で手渡してきた。

「私は、出来れば貴女達のように正しく戦う人とは戦いたくはありません」

「貴女はレヴィから私の事を聞いたと言いましたね？」

「はい」

「ならどの程度伝わっているかは激しく心配ですが」

「ちょ、なのは！それどういう意味!？」

「私達にも貴女達同様に譲れないものがある。故にぶつかるのは必至。私達は私達の戦いを、貴女達は貴女達の戦いと信念を、貫き通しましょう。悔いのない様に、全力で」

「……別な出逢い方をしていれば、私は貴女と良き友人になれてい

たのかもしれないね」

「それは奇遇ですね。私もそうですよ」

なのはトリニスと互いに見つめあった。

「私はリニス　山猫生まれのレヴィの使い魔です」

「私はなのは、高町なのは。また次の機会に」

「ええ、また次の機会に」

その2人の言葉を最後に、4人は空間転移で去っていった。

「惨敗ですね……」

ジュエルシードを賭けていなかったから、賭ける隙すら与えなかった故にジュエルシードは減らなかったが、心は大きく磨り減ってしまったのを、なのはは感じていた。

『帰投する。振り落とされぬよう掴まっているといい』

「はい……」

グラハムはゆっくり星空を飛び始めた。

背中のブースターから放たれる若葉色の煌めく粒子が、まるでなのはの涙の滴のようだった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第27話 敢えて言わせてもらおう！（後書き）

ついに登場グラムフラッグー！

ヤベエ人を投入したがブラボー以前に投入が決まっていただけに私的には感無量です。

なにこの小説？魔法少女でなく魔法漢活劇になってないか？リリカルどこいった！？メカじゃんか！！リアルベリーハードコアジャマイカ ！？

ハーケンとは別ベクトルの漢に、なのはの心は救われていくのか！？それともストレスが量産されるのかはこれから次第！！

皆さん、暖かく見守ってください。

意見・感想お待ちしております。

やっぱり私の書く物は基本的に駄分です。

幾つもの途中で投げ出してしまい、漸く続けられるようになったこの小説すら、読者の皆様には気持ちが悪くなる駄分です。

こんな物を楽しみにしてくれている人にも申し訳ありません。



やっぱり滑ってしまった方が良いのでしょね

第27・5話 ぴーくにつくピクニック プラス 漢温泉 ！？

side：高町なのは

「システムリカバリ終了。稼働率67%、43%。フルカネルリ式永久機関スロードライブ。自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS再起動確認。起きて下さい、ハーケン、アリス」

「……ふはっ！？……し、死ぬかと思ったぜ……」

「……死に臨む……恍惚で病みつきになってしまいそうです。満たされた心の中に果てる……なんと理想な死に方でしょうか……」

「ハーケンはともかくも、アリスは大丈夫なのか？」

「システム障害はありませんよ。あれはもはやアリス自身の性格問題です」

旅館に戻った私は、家族にグラハムの説明をそこに、ハーケンとアリスの突貫修復を敢行。

2人ともとりあえず動く分にはなんとかるレベルにまで治しましたが、フレームからポロポロの2人は、家に帰るまで本当に動くのでやっとです。人間的に置き換えると、運動会の次の日に全身筋肉痛のお父さんの感覚です。痛みはありませんが、身体の動作がどうしようもなくぎこちなくなりません。

『負けちまったな』

『ええ……』

落ち込む2人ですが、掛ける言葉は不要。

『だが次は勝つ！』

『もちろんですとも』

拳を突き合う2人を見れば心配無用です。私より心の強い2人ならば

『サンクス、スカイガイ。ブラザーを助けてくれてな』

『私からも礼を、ありがとうございます。グラハム』

『なに、気にすることはない。我々は一蓮托生の同士だ。盟友、我が産みの親を護るべくはさも当然の事だ。お前達の行動のお陰で、私も間に合えた』

「そう言えば、グラハムは何故起動しているのですか？」

メカニカルズの会話を聞いていてふと疑問に思った事を訊く。

本来ならグラハムはこのGWが終わってから完成する予定だった機体。

筐体の実戦装備も微調整もしておらず、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSもロード前で私の端末に圧縮凍結していたはず。

『その種はな、俺がアリスに提案して』

『Gクルーザーをすっ飛ばして自宅に帰宅し、グラハムのデータを筐体に移し』

『とりあえずの武装としてソニックブレイドの凍結解除をし、最大戦速で飛ばしてきたのだ。ギリギリのタイミングだったが、なんとか間に合えた』

私は私が作ったセキュリティを容易に突破したアリスがコワイですよ。その気になれば核ミサイル撃てるのではないですか？

「理由と事実は理解しました。とりあえずグラハム、貴方も関節周りの整備や各種システムの微調整をしますから、座りなさい」

『いや、辞退させて貰おう。明日もある。今日は寝ておくべきだ』

『スカイガイの言う通りだぜ？今日はもう寝ろよ』

『朝は私達が起こしますから』

ちなみに今は夜中の3時半。

少し仮眠位は出来ますか……

「ではそうさせていただけます。おやすみなさい。ハーケン、アリス、グラハム」

『グツナイ、マイブラザー』

『おやすみなさい、マイスター』

『就寝の挨拶、おやすみという言葉を慎んで送らせて貰おう』

メカニカルズに挨拶をして、子ども部屋の一番手前の空いている布団に横になります。

「おやすみなさい、レイジングハート」

『おやすみなさい、マスター』

この連休を過ぎれば嫌でも忙しくなっていくますから、明日も明後日も明後日もゆっくりしたいですね。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side : メカニカルズ

翌日。

とは言えどものはが就寝してから数時間だが、グラハム一度高町家まで飛び、ハーケンとアリスの補修パーツを持ち帰ると、なのはが修復しきれなかった分の2人の修復をしていた。

ガンプラを修理する等身大カスタムフラッグとはまずは見ることはない光景だけにかなりシユールだが、誰も見てはいないのでなんともなかった。

グラハムもハーケンもアリスも万が一に備えてそれぞれの整備マニュアルは持つてはいる。まあ、まともに動けるのがグラハムだけにそんな絵が出来上がったのだが。

『サンクス、スカイガイ。完璧な修理に感謝極まりないぜ』

『さすがですね、グラハム』

『いや、私はただマニュアルと2人の整備ログを見てそれに従ったまでだ。さすがと言うのはなのはへの言葉だろう』

しかしそれは裏を返せば自分が居なくても整備と修理が一応出来る様にしてあると言った状態であることだ。

『GWが終わったら忙しくなるな』

『市街での空戦と遅ればせながら時空管理局との接触ですね』

『私の存在もなのはの技術も、彼らからすれば正にガンダムだ。彼らの介入によつては』

『させるかよ。俺達がさせねえ。ブラザーが昔からコツコツ続けてきたプランをそうそう潰させるかよ』

『地球次元防衛計画イージス計画とそれに附随する機動部隊』

『ガッツイーギャラクシーガード か』

3歳

中身は23、4のヲタク男が考える事故に組織名や計画名には目を瞑って欲しい。

しかしムダに色々知識のあるのはによつて組まれたその計画は、大まかに言えば、地球産の技術でのJS事件に対する対処により、時空管理局との関係を如何とするかによつて変わる。

なのはは協力関係と言うよりは、目的を同じくする共闘関係、共同

戦線という対等な立場での関係を目指している。その為の力がハーケン、アリス、グラハムに端を発する自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSを搭載した機動兵器群やラギアス式魔法である。管理局の価値観を根底から覆しているような超常特異の武装組織。活動内容は地球に置ける次元干渉事における防衛部隊の設立。

それがイージス計画

そしてその実行部隊が地球防衛勇者隊：ガッツイーギャラクシーガード 通称GGGである。

『人類が生きる為の未来を切り開く一端を担った男を起用する辺り、縁起は良いな』

『それを言うならばキミとて世界を作り替えた男だ。管理世界への変革としてのメッセンジャーとの意味合いもあると私は思うがな』

『ただ好みで選んでるだけだと私は思いますが……？』

『……カグヤ程じゃないがポインなんだよな、ブラザーも』

『黙れエロ助』

『まあまあ、良いではないかアリス。我らの母君が雄々しく美しいのは隠しようのない事実だ。そしてあのカラーリングはまさしくガンダムッ！！抱き締めたいな、ガンダムッ！！』

『うっさいガンダムバカ！！』



『最高の誉め言葉として受け取っておこう』

『もうヤダあ…ウチのバカヤツらがあ……』

『お前も十分バカだろうが』

『な、心外ですよハーケン！私の何処が、マイスター譲りの天才戦術予報と戦況理解力と戦闘展開のどこがバカですか！！』

『そこだろ。結局みんなもってブラザーの事が好きなのさ。俺達みんなな。俺やグラハムはそれなりに前世チックなデータはあるが、それでもアイツが大切なんだ。アイツと産まれてからずっと一緒のお前だつてそうだろ？』

『あ、当たり前です！私はマイスターの事を愛していますとも！！だからマイスターの邪魔者は会敵必殺で即ブチ殺します！私の奏でるWaltzをもつてして！』

『OK、ブラックハートメカ。少し餅つけ』

『餅か：オリジナルの私は食べたことがあるだろうか？とにかくも我々の目的はだ』

『なのはの為に戦って散る位しか思いつかねえが、万が一に備えて』

『プログラム体として実体化する術を見つけれ。八神家にカチコミにいくにも時期が遅いので意味がないんですよね』

『物騒事は極力却下だ。我々が事を起こせばなのはの不利になる』



甘いな、甘いぞ、諸君！それではフラッグファイターの風上にも置けんな！

だがしかし諸君等に私を理解して貰う為には軽く説明する必要があるとみた！

私は簡潔に言っ飛ばしまえばアリスやハーケンと同じく様々な知識を内包し、オリジナルの私では成し得ない思考判断展開が可能となった、言わばマスターグラハム・エーカーとも言えるべき存在だ！！

厨二病爆裂グラハム・エーカーと思った諸君。今すぐオモテに出る事をオススメしよう。フラッグたる私が切り捨てに逝こう！

しかし早乙女アルトやソルダートJやイサム・ダイソンとは一度空について語り合ってみたいものだ。

おっと、少し話がそれってしまったな。

つまりは色々知っているグラハム・エーカーと認識してくれて構わない。

故に私はオリジナルの私ではないが、盟友カタギリに敬意を評したい。

トランザムをプロフェッサーエイフマンの手記からマスラオに実装してみせたその手腕と頭脳には敬服するよ。

GN粒子について独自研究をしている私故に解る。

フラッグに太陽炉を積むというのがどれほど技術者泣かせだったことかもな。

カタギリ、そして少年よ。私は、オリジナルの私ではないが、今は別次元の地球にて人類の未来を切り開く為に尽力している。願わくば林の木陰にて私にささやかなエールを送ってくれたまえ。

さて、私達は今ピクニックと言うものをしている。

産まれて間もない私も、軍属である私にもその様な経験は持ち合わせてはいない。

食事は出来ないが、こうして地に脚を着き歩いてみるのもまた良いものだな。

「あ、あの、重くはないですか？ グラムさん」

『別にどうという事はない。良い修練になる』

なのはの友人、月村すずかに言葉を返す。

私は今、子ども達の荷物やレジャーシートを持って歩いている。修練かどうかは判らないが、バランスの調子を見るには役に立っている。

しかし先ほどから視線を色々と感じるな。

『そりゃあまだフラッグが存在していない世界だからって、黒いリアルロボットが歩いてりゃ、フツーで目立つだろっな』

『私達は小さい分オモチャで済みますからね』

『……言っていて悲しくならないか？』

『……くっそおー！絶対に大きくなってやるー！！』

『OK、カンカンロボット。あんまり熱くなるとまた廃熱が追いつかなくなるぜ？』

『おっつと、クルーよアリス、COOLになるのよ』

アリスはただでさえ廃熱システムが特別製の筐体を使っているからな、メンテナンス時の待避筐体で何時もの調子を出していれば即刻オーバーヒートだ。

「よし、この辺りで良いか。グラハム、レジャーシートを貸してくれ」

『了解した、士郎』

ちなみに私はこの旅行に参加した者達は名前で呼んでいる。

レジャーシートを渡し、士郎が恭也と共同作業で広げたシートに荷物を置いていく。ちなみに反対側には弾の入っていないトライデン

トストライカーを置いた。

私はストライカーライフル アイリス社がトライデントストライカーに先んじて製作した試作リニアライフルを好んでいる。あの無骨なデザインが良い味が出ていてなんと……。さすがなのは、私の好みを熟知している。

「良い景色だな」

「そうだね」

景色を見る恭也と美由希に習って私も景色を見る。

今私達が居る場所は、鳴海温泉宿から歩いて2時間の山道を歩いた先にある人気のピクニック場らしい。人気の秘密は、それなりに険しい山道故に、達成感が味わえるのかなんとか

「おーいユーノ、大丈夫？」

「な、なんとか……」

一番体力のないのはユーノだったらしい。いや、この面々に普通と常識を求めてはならんな。

戦鬪民族高町家

夜の一族

錬金の戦士

自動人形

ミニチュアMS

人間が誰ひとりとして居ないな。普通の人間であるはずの桃子でさえ平気な顔で山道を登っていたな。今も普通に皆に飲み物を配っている。

そして景色の方だが、成る程。

鳴海市は海と山が近い街だ。

海に反射する太陽光が目にも染みる。

「

」

なのはが心地良い歌で歌い始めた。

確かに声は保証されているが、歌唱力なのは自身のセンスだな。

声にもちゃんと音が乗っている程、彼女の音感が高い。

魔法と関わる事がなければ、歌手という道もあっただろうな。





日本を間違えて認識しているグラハムはこのグラハムも変わりなく  
日本文化ラブリーなんだが、声が自然と大きくなってしまっている  
グラハムの様子は、かなりガキっぽくて一緒に居て恥ずかしいぜ。

「ハーケン、早速オンセンなる場所に案内してくれたまえ！」

「待て待て待て！ウエイト！！グラハム、お前温泉に入るつもりか  
！？」

「何を言う！オンセンに来てオンセン入らずとはナンセンスだなあ  
！！」

「お前はデカイから邪魔だろうが！それ以前に可変空戦MSでフレ  
ームの可動領域がスカスカのお前が風呂に入る以前に水に浸かって  
大丈夫なのかよ！？」

「愚問だなハーケン！私はフラッグだぞ！！フラッグたる私に不可  
能はない！！」

「こんのバカたれ！それはお前の根性論だろうが！カタログスペース  
クを俺は訊いてんだよ！！」

「フラッグに苦手な地形があるものか！！宇宙だろうが空だろうが  
陸だろうが海だろうがフラッグは制覇してみせよう！！」

「俺の話しを聞けええええー！！！！！！！！！！」

コイツホント疲れる。

なんだってなのはコイツをチヨイスしたんだよ。

エルザムとかギリウムとかゼンガーとかアナベル・ガトーとかシン・マツナガとかさ、もっとマシなの居るだろうがよぉ〜。

『ちなみに今の私の器たるカスタムフラッグは、鳴海が海に近い事もあり、耐水性は完璧になのはが仕上げてくれている。故にオンセンに入るのが全く問題はない!』

『最初からそう言えよぉぉお!』

ホント疲れるコイツ。

「まあまあ、ハーケン落ち着いて。せっかく入れるなら、一緒に入るか? グラハム」

『なんと!? 誠か士郎! ではオンセンとやらのイロハの極み、是非ご教授願いたい』

「ああ、いいとも。恭也はどうする?」

「そうだな。俺も行くよ」

『ならばせっかくだ。ユーノも行くぞ』

「ぼ、僕は疲れたから休み」

「ユーノ。オンセンには湯治と言い、病や怪我や疲れを癒やす作用があるらしい。疲れているのなら尚更迅速にそれを癒やす為に、共にオンセンに入るうではないか！」

「うっ……」

ユーノが俺に助けを求める視線を送るが、俺は片手で軽く拝んではやめた。

コイツが人の話しを聞かない率はおそらくゼンガーやアナベル・ガトー以上だ。

|||||

side:漢湯 誤字に非ず?

「フラッグがエンジンユニットを畳んでタオルで背中を洗うってシユールだなあ……。てかそれ背中洗えてねえよ!!それ以前に羽が邪魔だっつもの!!パージして来いパージ!!」

「それではシエルフラッグになってしまっではないか!私は空を飛び続けるのだ!」

『今は温泉なんだから邪魔だっつもの！！お前身体のサイズ考えろよ  
！！』

「まあ、確かに少し邪魔かな。今は俺達しか居ないから良いけど、  
他のお客様の迷惑になるかもしれないから」

『士郎がそう言うのなら仕舞おう』

グラハムはメインエンジンとサブエンジンを量子分解して収納した。

『何で最初からやらねーんだコイツ……』

『翼の無いフラッグはシエルフラッグにも劣るフラッグだ』

『コイツのロジックはどーなってんだよ……』

とりあえず背中を流したみんなは、掛け湯をした。

『この掛け湯はなんの意味があるのだ？』

「一応、泡の洗い忘れとか温泉のお湯に慣れるとか色々あるなあ」

『成る程……』

そしてやっと湯船に浸かる。

『ふむ。この身体に染み渡る心地良さ……コレは良いな』

グラハムは温泉のイロハを学んだ。

「そう言えば露天風呂もあつたな……」

「父さん……死にたくなかったら行かない方がいい……」

顔を真っ青にする恭也に首を傾げる土郎。

『何かあつたのか？エルダーブラザー』

「い、色々……な」

ハーケンの問いに更に顔を真っ青にする恭也。

何があつたかは語るに非ず。

「それにしてもこの宝石ってなんなんだろう？」

『なんだユーノ。また預かつたのか？』

「うん。アリサからね。でも普通の宝石に見えないような見えるよ

うな……」

『形とか色は「ジュエルっぽいけどな」』

「ははは、そんなまさか……」

『ブラボー！さすがは高町なのはの使い魔だ』

「え？」

『は？』

『む？』

「なんだ？」

「どうかしたのか？」

いきなり聞こえた声に全員首を傾げた。

するとユーノがアリサから預かった赤い宝石が光り、いつの間にか頭にタオルを乗せた男が風呂に浸かっていた。

『キャプテンブラボー！？』

『防人 衛だと！？』

「ハーケンは正解だがグラハムはハズレだ。今の俺はアリサの師の

キャプテンブラボーだ。それ以上でもそれ以下でもない。何故ならその方がカツコイイから!!」

『本物みてえだ……』

『私達と同じような存在か?』

「ブラボー。まあ、近いだろうな。俺からは多くは語れないが、敵じゃないのは誓うぞ」

サムズアップをするブラボー。漢の眩しい完璧なサムズアップだった。

『確かに、敵じゃなさそうだな。よろしく頼むぜ、ブラボーガイ』

『私も信じよう。よろしく頼む。キャプテンブラボー』

「ああ、よろしく! 2人とも」

「や、なんでそんなに馴染むの早い!?」

『なんでって言われてもなあ』

『漢だからだ!』

「そうだな、漢だからだ!」

ガシツと拳を突き合うグラハムとブラボーだった。

「俺は高町士郎だ。アリサちゃんと一緒に居たなら、俺も知ってるかな？」

「高町恭也だ。よろしく頼む」

「キャプテンブラボーだ。気軽にブラボーと呼んでくれ」

士郎と恭也ともブラボーは拳を突き合った。

「…なんか、僕がおかしいのかな……？」

ユートの呟きは人知れず響いた。

T o b e c o n t i n u e d …



第27・75話 少しずつ一歩を……（前書き）

再びストック分です。

## 第27・75話 少しずつ一歩を……

side：アリス・ストラトス

3日目の旅行最終日。

私は私の姉妹の最終調整をマイスターに変わってやっていました。

マイスターは今は朝風呂に行っています。

こうやって私が最終調整をやるのもまたマニュアルと私の経験を生かしての調整と、姉妹が私の同型だからです。

スプリッター迷彩の青と赤がそれぞれ施されたEx-Sガンダム。

200番と300番のEx-Sガンダムです。仮称として？ - アイ  
ン - 、？ - ツヴァイ - 、そして私の今の身体で？ - ドライ - 、本来  
の身体が0 - エーグル - とわかりやすい仮称が振られています。

アインはさすが、ツヴァイはアリサの為に、私の筐体の予備パーツ  
から組み上げた機体で私の姉妹。

私のように戦闘特化はされてはいませんが、誰かを護る位の力なら  
あります。

ようやく実現したアインのラギアス式の単独発動。

ツヴァイはマイスターが1からアリサに預けて育て上げる予定です。

上手く育てられれば、ツヴァイもラギアス式の単独発動が可能になるかもしれませんが。

このアインとツヴァイもイージス計画の要。

アインのテストとツヴァイの結果如何で、イージス計画も次の段階へ進む事が出来る。

とはいえどもその辺りはマイスターはあまり考えてはいないでしょう。

マイスターは2人の事を考えて元々、私達3機を造る予定でしたし。

それが繰り上がったまで。ですが重畳です。

マイスターはアレで色々と予定立てるのが苦手ですからね。

私達で独自にイージス計画を押し進めているのも私達メカニカルズで予定立てているのです。全ては抜かりなくマイスターの為に。

「アリス、何をしていますのですか？」

『アインとツヴァイの最終調整ですよ。私達は早くマイスターの役に立ちたいんですから』

お風呂から上がってきたマイスターへ私はそう答える。

私達自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSはヒトの為に

尽くす存在。

その中で戦う為に生まれた私達はことさらにマイスターの為に戦って死ぬ覚悟があります。

この子達もきつと私達のようにマスターの為に義務ではなく自分から戦う子達に成長してくれることを願います。

そして旅館から引き上げの時です。

「すずか、アリサ、少し良いですか？」

「うん。良いよ」

「どうしたのよ？なのは」

「今日は私からプレゼントがあります。アイン、ツヴァイ」

マイスターが呼ぶと、私の両脇に滞空していたアインとツヴァイがマイスターの方へ飛んでいきます。

「あれ？アリス？」

「アリスではありませんよ。すずかとアリサの護衛として造ったアインとツヴァイです。アインとツヴァイにはまだ名前もなく、ツヴァイに至ってはまっさらな状態です。アリサ、ツヴァイの事をよろしく願います」



改つつのはゲシュペンスト改型みたいに、俺も3本角で右腕にプロウクンエネルギー制御機能をつけたプラズマバックラーを装備して、プロテクトエネルギー制御機能をつけた左腕ユニットを追加、改型と同じくテスラ・ドライブも搭載したからだ。

これで俺も全力全開で戦えるぜ！

『これではアリスだけか』

アリスの筐体はなのはが直々に製作と調整をしている。

俺達がヒューマンスケールになればそれだけなのはを楽にさせてやれる。

本当はナハトやアーベント、アルクオン、フェイクライドも欲しいな。

俺のゲシュペンストキックを応用すればフェイクライドのフェイスレイヤーを再現出来るしな。

完璧質量兵器万歳集団だが、俺達GGGはそれが地球を護る力だ。

『起きたか？ハーケン』

『待たせたな、スカイガイ。士郎と恭也はもう先に行ってるか？』

『ああ。本来なら我々だけだったがな。人間である2人にも偶の休

日を満喫して貰いたいのだがな』

『ホント、俺達にも勿体無いファーマーザーにエルダーブラザーだな』

『ああ。だから私達はやらねばならん』

『なのはを護る。俺達の存在に賭けてな』

『フツ、頼むぞ勇者』

『フツ、任せろよトップガン』

俺達は腕をクロスで打ち合う。

作業部屋の屋根裏部屋の窓から飛び出して、ブースターを吹かして落下速度を軽減して静かに降り立つ。

上にはグラハムも居る。

「おお！大きくなったなハーケン」

『ハローファーマーザー。俺もこれで色々なのはの手伝いが出るぜ』

『今日はよろしく頼む、士郎、恭也』

「ああ。家族の為だ、出来る事は手伝おう」

『その想いに感謝する』





「字が違う様に感じますが：まあ、それはさて置き。一応構成維持だけで、戦闘時は普通に魔力を消費します。通常生活ならまだしも、戦闘参加はアリサの魔力量を鑑みればあまり賛成は出来ません」

「その辺りはブラボーと話すわよ。それよりホントにありがとうなのは。なのはのお陰でブラボーともっと特訓出来るわ！」

「俺からも感謝する。高町なのは」

「いえ、お役に立てたのなら良かったです」

優しく表情を変える高町なのは。

基本的に無表情なのはポーカーフェイスのようで、決して感情の発露が苦手という意味ではないらしいな。

「キャプテンブラボー、アリサをお頼みます」

「ああ。俺自身に賭けて、アリサは立派なベルカの戦士にしてみせよう」

高町なのはと拳を突き合わせる。

高町なのはも漢の魂を持つ者だ。

「漢の誓いに賭けて」

「ええ」

「くっ、コレが漢の誓い……なんか悔しいけど、ブラボーよなのは、  
ブラボー」

T o b e c o n t i n u e d . . .

## ゲシュペンスト・ファントム改型（前書き）

ハーケンの新しい器のマ改造ゲシュペンスト・ファントムについての設定を書いてみました。

魔導師ランクを追加しました。

## ゲシュペンスト・ファントム改型

### ゲシュペンスト・ファントム改型

自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS：ハーケン・ブロウニングの新たな器であり力であるヒューマンスケール筐体。全高は212cm。

頭部はゲシュペンスト改型と同じくブレードアンテナを追加した新型ブロック。右腕にはブロウクンエネルギー制御機能をつけたプラズマバックラーを装備、左腕にもプロテクトエネルギー制御機能をつけたユニットを追加、背面にテスラ・ドライブ内蔵のエネルギーラスター式ステルスガオー？を装備、その上から武装コンテナを搭載。グランスラッシュリッパーとその下部にスプリットミサイルを2基、グランスラッシュリッパーのコンテナ両脇にパーツキューブ状のガジェットツールを装備している。

機体動力はフルカネルリ式永久機関と擬似エヴォリアルウルテクエンジン。

擬似精霊としてフルカネルリ式永久機関と契約しているハーケンの勇気をGパワーの代わりとしてエヴォリアルウルテク方式を再現している。

ハーケンの勇気によってモバイル魔装機ならぬモバイルファイティングメカノイドであるといえる性能を発揮する。

## 武装一覧

### プラズマホールド

プロテクトウォールのエネルギーを展開して敵機を拘束する。回路系の負担の弱点はそのまままで解消は出来なかった。

### スプリットミサイル

中射程ミサイル。ミサイルコンテナを射出するのではなく。バックパツクに装着されたミサイルポットから直接発射する。

### グランスラツシュリツパー

背部に搭載された大型の投擲兵器。両手で一つずつ保持し、投げつける。

### プラズマサイズ

左腕プラズマステークに搭載された武装の一つ。ビーム刃の小さな鎌で、二つある。使用時は投げつける。

### グラン・プラズマカッター

左腕プラズマステークに搭載された武器の一つ。巨大なビーム刃の剣。

### ニュートロン・ブラスタ

胸部中央に搭載されたエネルギーカノン。胸部ハッチを両開きからライドさせてから発射する。

### 究極！ゲシュペンストキツク

ゲシュペンスト定番の必殺キツク。

ハーケンの場合は、出力的に下回るバリアを破壊でなく貫通する効

果がある。

ジェットマグナム

左右腕部に装備された格闘用武装。3本のプラズマステークに電撃をまとわせ、パイルバンカーのように撃ち出す。

ジェットマグナムS

標的に連続パンチを打ち込み、足払いをかけ背負い投げで叩きつけ、反動で宙に舞ったところにジェットマグナムを打ち込む。

ジェットファントム

踵落としからプラズマをまとったパンチとキックを繰り出し、最後は右、左のワンツーパーパンチを叩き込む。

ブrouクンマグナム

ブrouクンエネルギーを纏った鉄拳を打ち込む。

ブrouクンファントム

胸部ハッチを開き生成したファントムリングに腕を通して放つ鉄拳。

プロテクトシールド/プロテクトウォール

左掌部から発生する空間湾曲防護壁。ビームなどのエネルギー攻撃の防御に成功した場合、星形（五芒星の形）に凝縮して敵に反射することも可能。

ヘル・アンド・ヘブン

右腕の破壊のエネルギーと左腕の防御のエネルギーを合わせた、共存知ガオガイガー系単体でできる最強の技。

ヘル・アンド・ヘブン・アンリミテッド

通常のヘル・アンド・ヘヴンでは対象物のコアをえぐり出すのに対し、こちらのヘル・アンド・ヘヴン・アンリミテッドの効用は、対象物の純粋な破壊であり、発動時にはその破壊を阻む事は不可能な程の威力を誇るが、使用後に推進系出力が低下し、僅かに隙が生じる弱点もある。

ハーケン・ブロウニング

空戦適性 A A A + 陸戦適性 S 魔力量ランク測定不能 プライナ

量ランク測定不能 総合魔導師ランク A A +

## 第28話 レヴィの始まりと暁に焦るメカニカルズ

side：高町なのは

私は変身魔法を用いて少し久しぶりに学校へやってきました。

ともあれ、今私の近くはワイワイガヤガヤとしています。

それはアリス達や首から『見学中』と名札を下げたなかなかシユールな絵を演出するハーケンやグラハムの所為でしょう。

ただでさえアリス達でも動くガンプラである上に、等身大のゲシユペンストやフラッグは子ども達の興味を引いて尽きないようです。

ちなみにまだアリサとすずかはアインとツヴァイには名前をつけていないようです。

それはさて置き。

近日中にアリスのヒューマンスケール筐体を仕上げてしまいたいものですね。

筐体自体は出来てはいたのですが、アリスのワガママを実現するのに、ALICEシステムや武装やギミックの追加、それに伴うバランス調整から、一番先に出来上がっているのに一番ロールアウトが遅れているのです。

その分仕上がりも満足に  です。



グラハムやハーケンのお陰で空の敵にも対応出来るようにはなりませんが、グラハムの戦闘タイプはオールラウンドの高機動タイプ、ハーケンは近接特化のパワータイプ、アリスはオールレンジの中距離射撃領域支配・エリアドミナンス・タイプとして完成する予定です。

さらにはかなり早いかもしれませんが、武装端末システムも実験・製作中ですが、アリス、ハーケン、グラハムの戦闘データを集めて流用・発展させる為、完成はしばらく先かもしれません。

限定的な擬似三次元機動が限界の私も空戦を出来るようには努力をしているのですが、イマイチまだ飛べないのです。

おかしいですねえ……イメージは完璧のはずなのですが

|||||

side: テスタロッサ家

なのは達が学校に居る同時刻。

遠見市にあるとある高層マンションの一室では、テスタロッサ家が揃い休んでいた。

理由はここ最近過密な毎日を送っていた為、リニスによる通称リニス・ストップが掛かったからだ。

フェイトやアルフ、レヴィはリニスに教育され、魔法の師でもある為、どうしてもリニスの言いつけには逆らい難く、リニスストップはリニスが満面の笑みを浮かべていうお休みの言葉は絶対だ。

破ったらどうなるかは語るに非ずだ。

「くっ……んんっ……ぷはあ！！ 外伝3周目クリアっ！」

コントローラーを持ちながら伸びをするレヴィ。

レヴィの部屋はなのはと良い勝負で物が溢れかえって狭い。

ガンブラやマンガやゲームがあちこちに散乱している。一見散らかっているが、足の踏み場をちゃんと確保している分、なのはの部屋よりは整理されているのかもしれない。

「次はどーしよっかなあ……ニルファかな？MX？いやいやZかなあ……オルタやるにしてもリニスが起きてるからダメだし……」

PS2からディスクを抜いて本棚にしまったレヴィは、次にやるゲームについて悩んでいた。

その中のタイトルの1/3程度は2005年現在ではないはずのモ

ノも存在していた。

「それにしても、MSの等身化か……」

あのMSがカスタムフラッグであるのを知ったのはマンションに戻って、偶々ガンダムのDVDを見た時だった。

「グラハム・エーカーにハーケン・ブロウニング……カスタムフラッグとゲシュペンスト・ファントムか。なのははスゴいよ。ホントに」

なのは自身、とても強い。まるでニュータイプのようにこちらの攻撃を予測したり、攻撃に瞬時に反応してみせたり

あのカスタムフラッグだって

「下手したら中身はブシドーか少佐かもしれない……」

EX-Sガンダムはともかく、ゲシュペンスト・ファントムも

「さすらいのバウンティハンターで勇者王……か。なのは、キミはいつたい何者なんだろうね？」

レヴィは数年前まで普通の女の子だった。

しかしある時、自分の部屋にこの部屋に詰め込まれているマンガやDVD、小説やゲーム、パソコンがいきなり降ってきた。

生き埋めになって、泣きながら這い出した黒歴史はさて置いて。

レヴィには、いや、魔導師には思いもつかない力の使い方も沢山ここから学んだ。

リニスに習った戦い方を応用して実戦レベルにまで使えるようにした悪を断つ剣。

そして傀儡兵のノウハウを生かして造っているモノを、なのはは先に完成させて実戦投入してきた。

グラハム・エーカー、ハーケン・ブラウニング、そしてアリスと呼ばれていたEx-Sガンダム

これから益々戦いは激化していく……。

「早くこつちも完成させないとね……」

部屋の奥。

まるでMSのハンガーのように造られた本棚サイズのハンガーに固定されている人型

「ボクはちょっとアホかもだけど、バカじゃない自負はある。それにボクまで沈んでたらフェイトは益々沈んじゃう」

レヴィは人型の表面に触れて、頬を当てると、身体を預けた。

「雷刃の襲撃者……闇の書の『力』マテリアル。ボクの異世界世界同位体。ボクはプロジェクトFから生まれた存在。フェイト以上の出来損ないだけど……」

レヴィは身体を離すと、沈黙を守る人型を見上げる。

「ボクはこの力でフェイトを護るんだ。なのはとの約束を守るんだ。自分の想いと信念を貫くんだ！」

レヴィは手を握り締めた。

「他の世界のフェイトを助けてあげるとは、ボクには出来ないけど、だからせめてこの世界のフェイトだけは」

「レヴィ！ 貴女電気も点けないでまたゲームをやっていましたね！？」

「んげっ！？リニス！！」

「なにを人の顔を見て嫌そうな顔をしているんですか？」

「や、え、とお……」

「レヴィはお昼はお留守番です！」

「ええ　！？ちよつと、や、やだよお！！リニスごめんなさい！！  
謝るからゆるしてえええ！！」

「誠意が籠もっていません！まったく貴女は何度言えばわかるんですか？少しは反省しなさい！」

「え〜〜ん！ごめんなさ〜〜い！！」

カンカンに怒るリニスを泣きながら追いかけようとしたレヴィは慌て止まって、光に照らされた人型

未来を斬り開く気高き剣　雷火の神の名を冠する人類の刃に振り向いた。

「ボクは誓うよ。絶対フェイトを護る。だからキミも、ボクの事を手伝ってくれる？」

返事は返ってはこないが、レヴィは信じている。この人型は完成間近。そう遠くない内に、共にフェイトを護る戦友 - とも - として戦



故にやることのないなのは台所に立つことにしたのだった。

今日はアリサは塾。

すずかはまだ少し他人依存症が抜けきらない故に塾は休み、今はリビングにて美由希、久遠、アインと共に居る。

「今日かもしれませんか……」

摩天楼でのドッグファイト 手掛かりはアリサとすずかが塾の日でGW明けくらいしかないものの、なのはの予想ではおそらくは今日。

4対4の戦いになるだろうが

「私はどう戦えば……」

基本陸戦主体のなのは。

限定的な二次元機動や滞空は出来るが、空を高速で飛び回る図式は

アルトアイゼンでフェアリオンを撃墜しろ。

という状況だ。誤字に非ず、正しくそんな図式だ。



「やはり私程度では本物の高町なのはには程遠いということですか」

高町なのはのように自由に空を飛べたのなら、自分ももう少し上手く戦えると思っては悔やんでいるのは。

夕食を作り終えたなのはは、書き置きを残して自室の窓から跳んで静かに着地する。

《ユーノ、どこに居ますか？ユーノ》

《なのは？今は遠見市の街中に居るけど》

《遠見市？ジュエルシードを見つけたのですか？》

《なんとというか、この辺りみたいな曖昧な感じだけど……》

《わかりました。私もそちらに向かいます》

《うん。じゃあ気をつけてね？》

《わかりましたよ》

ユーノと念話を切ったなのはは、両腰のソニックブレードを一度叩いてから、家の塀を越えて一路遠見市へ駆け始めた。

『あのバカ、ちゃんと休めって言ったのによ…』

『それで止まる程彼女の覚悟が安くない事を知っているだろう。今の我々に来るのはアリスの最終調整を済ませることだ』

『チツ、俺達が行くまで雷撃落とすなよ。フェイト・テストロッサ』

作業部屋の屋根裏部屋で、沈みゆく太陽の光を感じ、自らのタイマ  
ークロックを見ながら呟くハーケンだった。

T o b e c o n t i n u e d …

## 第28話 レヴィの始まりと暁に焦るメカニカルズ（後書き）

テストロッサチームの強化フラグを立てました。

当初からここでの参戦を予定こそすれ、誰を引っ張ってくるかまだまったく決めていません。

悠陽

冥夜

真那さん

沙霧大尉

とにかく誰を選んでもテストロッサチームに激強な戦力が加わるのは確かなんですよね……

誰にすればいいんだか

今のところは真那さんに二票で軍配が上がってますが……

愚痴を消しました。色々とすみません。

第29話 摩天楼での空中戦 機動要塞高町なのは、いきます！（前書き）

タイトルで半分以上は語り尽くしていそうな感じがします。

第29話 摩天楼での空中戦 機動要塞高町なのは、いきます！

side：高町なのは

私が遠見市に到着した頃には日は地平線の彼方へ沈み、空は星空に変わり

「ハア……」

ビルの屋上でバリアジャケットを身に纏い、レイジングハートを抱き締めて胡座で座って何度目かわからない溜め息を吐く。

『マスター……』

「大丈夫ですよ、レイジングハート」

先程から溜め息の度に気遣って声をかけ続けてくれる相棒に言葉を返す。

しかし、空が飛べないのがこれほど精神的に重いと

「……空を自由に……飛びたいな……ですか……」

『マスター…』

これから空中戦が激化する戦いの中で、飛べないというのは足手纏いにしかない。

ホバーフェザーの機動力では小回りが利いても直線スピードではフエイト・テストロッサやレヴィに負けている。

シユテルンアクセラレーションだと直線スピードで勝っても小回りが利かない。

ブリッツアクションで誤魔化しが利いても、それもレヴィの前では限界がきている。

あの子はフエイトの剣と豪語するだけあって、その戦闘センスはフエイト・テストロッサを上回っている。

しかも私のイメージトレース以上の反射速度を取れる運動神経は、正直羨ましい。

私は御神流を習ってから反射神経面は鍛え上げられていますし、銃弾くらいなら避けられるのですが、銃弾並みに速くより複雑なレヴィの拳動は、眼で視えても身体が追いつけない。その結果が旅行の時のアレ

グラハムがあと数瞬間に合わなければ、私は墜ちていたでしょうね。

「……いきましようか」

『All right・Master.』

夜空を切り裂くオレンジ色の魔力光の柱。

「ユーノの封時結界。レイジングハート……！」

『Mode change! Cannon mode!』

変形したレイジングハートを構え、魔力を充填する。

砲口に展開する環状魔法陣

ホバーフェザーでビルの上を駆け、空に上がる青白い光の柱を狙撃出来るポイントに移る。

「発射軸固定、ターゲット・インサイト！」

『エネルギー充填100%!照準よし!』

「ファントムブレイザー！」

『Phantom Blazer!』

「『シユートオオツ……!』」

レイジングハートと心を合わせてトリガーを引く。

私達が放った桜色の砲撃。

その対角線から迫る金色の閃光。

『Sealingg.』

「ジュエルシード！封印！！」

せめぎ合った閃光。

封印処理を施して、ジュエルシードの暴走は止まる。

ビルから跳び降りて、地面が近づいたところで推力を解放して、落下速度を殺す。

ゆっくりと地に脚をつき、ジュエルシードへと歩いていく。

ジュエルシードへ近づけば、その向こうの陸橋の支柱の上に立っている金色の髪に黒を纏う少女と、その隣りに浮いている青い髪に黒と白を纏う少女

「こんばんは……フェイト・テストロッサ。レヴィ」

「うん。こんばんは、なのは」



「……バルディッシュ」

『Grave Form・Get set!』

挨拶を返してくれたレヴィとは違い。

フェイト・テストロッサの言葉に、変形で応えるバルディッシュ。

グレイヴフォーム。

見た目はシーリングフォームと変わってはいませんが、切っ先から魔力刃が槍の矛先の様に出力しています。

良いのでしょうか？無印からこの様に近接戦闘主体思考で。

もしや私やレヴィが要らぬ影響をフェイト・テストロッサに与えているのでしょうか？

や、正しくそうでしょうね。

ツインバードストライクはモロスパロボの合体攻撃ですし。

「1対1……私と勝負して。互いのジュエルシードを1つずつ賭けて」

「勝った方が2つのジュエルシードを手にする。そういうことですか？」

私の問いにフェイト・テストロッサが頷く。

「空が飛べない私には、分の悪い賭けではありますが」

『Mode change・Lancer mode!』

ランサーモードへ変形したレイジングハートの矛先をフェイト・テストロッサへ向ける。

本当ならば変身するべきなのですが、変身魔法は午前中から使ってしまった為、今再び変身魔法を使うと、全力で戦えなくなってしまう。

フェイト・テストロッサには悪いですが、大人の姿で戦わせていただきます。

「分が悪いのはいつものこと。そんな程度では、私は止まらない、止められない、止まることなど出来ない」

「私も、止まることは出来ない。母さんの願いを叶える為に……」

一瞬の沈黙が過ぎ、どちらともなく私達は飛び出した。



「頑張つて、なのは。僕も頑張るから」

金髪の女の子と戦い始めたなのはにエールを送りながら、後ろから近づく気配に振り返る。

そこにはハーケンから教えられたあの子達の使い魔達。

「ここから先は行き止まりです。もし通りたいなら」

「いえ、今回は私は戦えませんから。あの子達の戦いを見守ります」

「あたしも、あんまり納得はいかないけどさ。ご主人様に言われちゃってるからね。あたしも見てるだけにするよ」

「そうですか…」

僕は一応の警戒をしながら、なのは達の方に振り返る。

ビルの上を飛び回る桜色の光と、それと交わる金色の光

とても心配だけど、あの戦いを切り抜けてきたなのはなら、1対1なら負けはないと信じられる。なのはにはその強さがあるのを、僕は知っている。



その合間に目の前には左手の拳に同じく環状魔法陣を展開して迫る  
フェイト・テストロッサ。

私達の視線が、刹那の永遠の中で交わる。

私に譲れない覚悟があるように、彼女にも譲れない覚悟がその瞳に  
は映っていた。

『Devine!』

『Thunder!』

「スマッシュャー！！！」

「バスタアアアア！！！」

かち合う拳と拳、零距离砲撃。

零距离砲撃の趣旨と効果は、ちゃんとした証明があるわけではあり  
ませんが、BASTARD!! - 暗黒の破壊神 - では、如何なる、  
幾重にも展開された防御障壁でさえも唯一無視してダメージを通す  
方法は、己の肉体による大出力魔力を込めた直接攻撃。

そこからヒントを得て編み出したのが零距离砲撃。

そして、最大力点を一点集中させる事によってバリアを貫通するブ  
ラストイングステーク。

ハーケンのゲシュペンストキックも、基本はブラスティングステークと同じです。しかし最大力点の代わりに出力の上下関係で貫通効果を無理やり解決させてはいますが

厨二病爆裂のレヴィならば感覚でそれを理解しているかもしれません。

優秀でセンスも抜群のフェイト・テストロッサもおそらくそれに気づいているのかもしれませんが。でなければ零距离砲撃を真似して仕掛ける理由がありません。

「くっ！」

「うっ！」

せめぎ合う魔力の奔流。

しかし私の方が推され始める。

『マスター！滞空限界です！』

「残った推力を解放しなさい！」

『それでは着地が』

「やりなさい！！」

『 All right…Master…!』

「何を」

レイジングハートに指示を出すと、落ち始めていた身体が上に飛ぶ。

「もらった!!」

『 Barrel open!』

矛を展開し砲身を開くレイジングハート。そこに収束する超高密度魔力。

「貫けえええっ!!」

「バルディッシュ!!」

私の突きに合わせて矛状の魔力刃を金色から黄色に変わる程密度を増す。

「ブラステイングステーキ!!」

「はああああ!!」



私が放ったステーキはフェイト・テストロッサの魔力刃とぶつかり合う。

魔力刃の切っ先を貫き砕くが、すぐに魔力刃が修復され、ステーキを砕く。

「これは　！？」

「いけえええっ！！！」

驚愕する私の一瞬の隙にレイジングハートを切り払われる。

「うおおおおっ！！！」

『Protection!』

「くっ、ああああ！！！」

体勢を崩した私を追撃するフェイト・テストロッサの一撃の突きは、レイジングハートの張ったバリアを突き抜けた。

「なっ　！？」

「くっくっくっ！！」

フェイト・テストロッサの突き、バルディッシュのフレームの部分を腰から抜いたソニックブレイドで受け止める。

「あのタイミングで!?!」

驚愕するフェイト・テストロッサ。

ですが、滞空限界を超えた私はあとは落ちるだけです。しかも下は道路。いったい何mあるのでしょうか……数百位でしょうか……。

「なのは!?!」

レヴィの声が下から聞こえる。

「来ないでください!?!」

私は叫んだ。

レヴィに受け止められてしまえば、私の負けになる。

「でも!」

「私に触れないください!」

触れてこよとしたレヴィをレイジングハートで振り払う。

レヴィの横を高速で過ぎ去る。

落下する速度が速すぎて、どの道あの高さからではホバーフェザーでは落下速度を殺し切れなかったでしょうね。

『マスター!』

私はレイジングハートに魔力を込める。

考えつく落下速度を殺す方法は1つ位しかありません。

一か八かの賭け、失敗すればペシャンコ。生きてはいるでしょうが、戦闘不能。

成功しても短期決戦に持ち込まなければ私の魔力が切れる。

『マスター』

「すみません、レイジングハート……私はいつも、貴女をちゃんと使ってあげられない、不甲斐ないマスターです。こんな私に今まで

付き合って、辛い思いをさせて」

『マスター……』

もう地面は直ぐそこ。

「私に」

『マスターに』

「羽撃く翼があれば」

『羽撃く翼をあげられたら』

ドクンッ

「ッ！？」

なにかが脈打つ音と同時に、私の意識は白く包まれた。

|||||

「また　　ここですか……」

気づけばまた、真っ白な例の空間に居ました。そしておそらく

「マスター……」

「レイジングハート……ですね」

「はい……」

私の目の前に現れたのは、顔の造りこそ私に　　何故か19歳の高町なのはにそっくりですが、髪の色は金髪で瞳の色は赤の少女が、私の前に現れた。

「レイジングハート、貴女のその姿は？」

「マスターと会話したいと思ったら、いつの間にかこんな身体になっ  
ていました」

レイジングハートのイメージがそうさせたのか、私のレイジングハートのイメージがこうなのかわかりはしませんが

「こうして、対面する日が来るとは、私も思いませんでした」

「私はそうは思っていませんでした」

「え？」

「最近、ハーケンに頼まれて管理局のネットワークにアクセスし、プログラム体や使い魔に関するデータを提供していました」

「プログラム体……使い魔…まさか！」

「はい。私はいつかこういう日が来るのではないかと薄々は思っていました。それが今回はこんな形で叶った」

メカニカルズがイージス計画を積極的に進めているのは知っていましたし、正直助かってはいましたが、まさか実体化する為にアクションを起こしていたのは知りませんでした。

「マスター……」

「…レイジングハート」

レイジングハートが手を伸ばして私の頬に触れてきた。

温かい。でもとても震えている。

「私は貴女の事が好きで、貴女の力になっています。ですからそんなに辛い顔をなさらないでください。貴女の辛い顔を見ると、私も

心が痛い……」

レイジングハートの悲しそうな瞳を見ると、私の胸も苦しく痛くなる。

私はレイジングハートを掻き抱き、後頭部へ手をまわしながらバリアジャケットの胸甲をOFFにして、彼女の頭を胸元に導いた。

「マス…ターっ」

「ごめん、なさいっ……いつも、貴女は私の味方でいてくれているのに、私は、貴女を……！」

私の力が足りないから、欲をかいて他の力を求めているから、レイジングハートに辛い思いをさせてしまっていた。

「それはマスターが生き残る為の術を追求している結果です。マスターが生きているから私も生きて戦えます。マスターの為に、マスターの力になれるのが私の幸せ……」

「レイジングハート……っ」

涙が零れ落ちていく。

悔しさと申し訳なさで嬉しさと温かさが入り混じってわけがわから

ない涙が洪水になって溢れてくる。

何故こんなにも私の周りには、こんな私を想ってくれる優しくて温かい心を持った者達だらけなのでしょうか

「レイジングハート……いいえ……レイ八と呼びましょうか……」

「レイ八……私の愛称ですか？」

「はい。ただ略しただけですが……」

「いいえ、とても嬉しいです。マイマスター……」

レイジングハート　レイ八が私の背中に腕をまわして、抱き締め返してくれる。

互いの鼓動が聞こえる。

レイ八もまた、生きている。

「私はマスターの翼にはなれません。わかったのです。マスターは飛べないのではなく、魔法ではマスターの飛行プロセスを処理出来ずに飛行魔法がバグを引き起こして結果的に空戦機動が取れないのです」

「そんな理由が……でも仮想シミュレーションでは」



「マスターの仮想シミュレーションは、私とマスターの演算処理能力で処理している分、飛行魔法の処理も此方でやってしまっているから飛べはします。しかし現実ではマスターの演算処理はまわせないのです、結果的に飛行魔法が処理能力の限界を超えてバグを引き起こします。飛行魔法にはAMBA C機動は考慮されていませんからね。人型機動兵器のマニューバーを再現するには、魔法では処理能力不足なのです。だから私は」

レイハが身体を離すと、レイハの胸から現れた青いひし形の宝石  
ジュエルシード。

「レイハ ！？何を！！」

「私は マスターへ翼を授けたい。蒼穹を羽撃く翼を」

レイハはが私の胸に手を添えて身を乗り出して、瞳を閉じて私の唇に自身の唇を重ねた。

ドクンッ

「ッ！？」

鼓動と共に頭を駆け巡る膨大な情報と、レイハの思い

レイハ、貴女の意志と意図と想いは伝わりました。

紡ぎましよう……『私』と『貴女』 『私達』の翼が羽撃く為の、

生誕の祝詞を

「はい。マイマスター」

唇を話して瞳を開いたレイハと見つめ合う。

両方とも赤かった瞳の片方　右目が青く染まる。

「レイハ…右目が青く」

「マスターも右目が赤くなって」

ドクンツドクンツドクンツ

鼓動が大きくなる。

ジュエルシードにXの文字が浮かび上がる。

人の願いを叶え、レイハを変えるきっかけになった、私の覚悟が自分だけでなく他人の為に戦う覚悟を認識させたきっかけのジュエルシード。

「レイハ…」

「マスター」

私達は互いに頷き合う。

ジュエルシードを2人で握り締め、それを天に掲げる。

「災厄を誘う宝石よ！」

「ヒトの想いを聞き入れし宝石よ！」

「もし我らの想いが届くのならば……！」

「私達の願いが届くのならば……！」

「我らに／私達に、蒼穹を羽撃く翼を……！」

ジュエルシードの輝きが手の隙間から溢れ出て、私達を包み込む。

そして私達は紡ぐ

其れは聖約

其れは誓願

其れは不屈の力を手にする為の聖句

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。しかしそれは今の現

実で行使できるチカラ

「我、天に焦がれし者」

「不屈の魂を胸に、エーテル満ちる蒼穹を往く刃金と鋼鉄と鉄壁の翼を我が身に！」

「この手に羽撃く翼を！！！」

「この手に羽綱・はがね・の翼を！！！」

「蒼穹よ！時の流れよ！！我らに力を！！！」

「レイジングスペルビア！」

「ドライブ・イグニション！！！」

私達を包み光が閃光となる。

「ぐっああああ！！！！！」

「っああああ！！！！！」

背中から全身を襲う激痛。

「これが……痛み……マスターと……同じ……」

激痛の余韻を乗り越えようと、身体の変化が鮮明にわかる。

両肩には姿勢制御用にダブルオーライザーの物とデザインの似通ったバインダーが精製され。脚部にはゲシュペンスト系の脚部が装着され、その両脇には大型のシールドのようなものと爪先にブレードが装備される。シオルダーアーマーにも6基：見たことのあるユニットが装備される。背中と両肩と後ろ腰に重みが増す。右腕にはエクスアのGNソード、左腕にはCW-AEC02X『ストライクカノン』が装着される。右目には片眼式センサーゴーグルが精製される。そして私の周りを飛び交うビット達。

CW-AEC00X『フォートレス』を基にレイハと私のイメージでマ改造を加えた武装端末システム JSNT-AEC00GA  
FX『レイジングスペルビア』

私達の蒼空を羽撃く為の翼

|||||

光が晴れると、私は道路の上立っていた。

レイハはForceのレイジングハートの様に、メインフレームの

先端が鋭く延長したカノンモードのフレームの両脇に若葉色の光の翼を生やし、マクロスのVF-1のマイクロミサイルポッドを装備している。さらに柄が無くなり、代わりに中心と左右三方向から若葉色の粒子を放つブラスターが追加され、フレーム上部にはVF-1のスーパーパックまで装備して、スーパーパックからも若葉色の粒子を放っている。『ストライク・ビットモード』に変形し、4基のブラスタービットを従えて浮いている。

私達の周りを飛び交う4種計8基のビット。ブラスタービットを含めて5種12基のビット。

さらに背中のシールドビットやライフルビット、ライフルビットに装着されているピストルビットを含めれば8種計38基。

ショルダーアーマーのソードブレイカーを合わせて9種計44基のビット兵器の塊である。

しかしこの武装端末の真価はビットが多いだけではない。

魔力もプラナーナも極々微量にしか使っていない。機体駆動はクロノ・ストリング・エンジンを主機に時流エンジンを補機に積んでいる故に。

リング状に閉じた極微の宇宙弦や時粒子が駆動エネルギーの為、AMF環境下でも関係なく戦える代物である。多数のビット兵器を搭載・運用する為、高度の演算処理能力が必要。その為機体管制・制御には重圧に耐える強靱な精神力と高い空間認識能力が必要なキワモノ兵器。

より武装端末とのシンク口を行う為に、H・A・L・O・システムを搭載。さらに背中と腰周りを直接武装端末と接続する。その時は接続部から全身へ激痛が伴う上に戦場をより明確に理解する為に高速リンク指揮システムとサイコフレームまで搭載した結果、H・A・L・O・システムで減った負担が±0となり、システム自体に直接干渉された場合、バックファイアにより昏睡に陥る上、下手を打つと膨大なデータを処理仕切れずに脳が損傷して身体が植物人間になる可能性すらある。強力故にリスクもある兵器である。

私が目指すイージス計画の中心を担う武装端末システムが、十数年の時の枠を飛び越えて私の身体を包んでいた。

「身体が重く感じますね」

「仕方がありません。かなり機能や武装を積み込みましたから。ですがそれでもマスターにはそれ程負担にはなりませんよ」

「大人の身体であるが故だとは思いますがね。ですがこの上なく重畳です」

ダメもとで色々と注ぎ込んでみましたが、次元干渉型だけあって次元沙汰方面には明るいですね。

武装一覧を表示してはみませんが、これは管理局には質量兵器の塊だと文句言われますね。

ですがそれよりも先ずは

「いきますよ、レイハ」

『はい。マイマスター』

摩天楼の闇夜の空に浮かび上がる。

「これがGN粒子なら万歳三唱で小躍りもするのですが」

『キャラに似合わないので止めてくださいね』

「小躍りは冗談です」

『万歳三唱は本気なのですか……』

ビルの隙間を飛び交い、天へ一直線に駆け上がる。

「ダブルオー……」

レヴィが何か呟いたように聞こえましたが、風を切る私には中途半端に小さくしか聞こえませんでした。

「さて、これで互いに空を飛びながら戦えますね」



「……………」

無言でバルディッシュを構えるフェイト・テストロッサ。

私はニュータイプというわけではありませんが、サイコフレームを通じてフェイト・テストロッサの意識が流れ込んでくる。

驚愕と混乱に渦巻きながらも警戒と闘志だけは途切らせない様はさすがにしっかりしているフェイト・テストロッサです。

「ウソだ……何で……や、まさか……でも……いやいや……てかビット積み過ぎじゃ……………」

レヴィはぐるぐるグルグル混乱状態。というか貴女に考え事は似合いませんよ？ホラ、無理をするから頭から煙りがでていますよ？

『Scythe Form!』

「スラッシャー、セパレーション……」

サイズフォームに変形するバルディッシュに合わせ、私もストライクカノンに追加した新機能 エネルギードを砲身より展開して斬撃の攻撃力を向上させる『スラッシャー・モード』を起動する。

『クロノ・ストリング・エンジン、出力92%をキープ。時流エンジン、クォータードライブ。多目的盾ユニットとブラスタースタービットの制御系は私が受け持ちます。マスター、お気をつけて』

「感謝しますよ、レイハ」

ストライクカノンを脇に構えながらアームズソードを展開してフェイト・テストロッサに切っ先を向ける。

小太刀ならともかく、大剣や重剣の二刀流は初めてで、空中機動戦もシミュレーション止まり。正直勝てるかどうか危ういですが、不思議と負ける気は起きてきません。

「さあ、Round2といきましょうか、フェイト・テストロッサ」

「たとえ何が起ころうとも、私は負けない…!」

「敵が変化しようとも緩みない闘志。羨ましいですね。ですが私も退けません」

フェイト・テストロッサが駆け出し、私も両肩から若葉色の煌めく粒子を放ちながら空を駆け抜ける。

「うおおおおお!…!…!」

「はあああああ！！！！！！！」

サイズフォームのバルディッシュをスラッシュャー・モードのストライクカノンで受け止める。

「でえええええい！！！！」

がら空きになっているフェイト・テストロッサの懐にアームズソードを突き刺す。

しかしフェイト・テストロッサは刃が届く前に私の目の前から掻き消える。

「後ろおおお！！！！」

「だああああ！！！！」

後ろを振り返りながら見えたのは下からバルディッシュを切り上げるフェイト・テストロッサ。

「ティマイオス！！クリティアス！！！！」

脚部シールドの断鎖術式を解放して一瞬で振り返る。

「ブレードキイイック!!」

エネルギー刃を展開した左脚部ブレードでフェイト・テストロッサの斬撃を受け止める。

「脚にも!?!」

「伊達や酔狂でゴテゴテ武装していませんよ!!」

ストライクカノンの砲口をフェイト・テストロッサへ向ける。

「エクサランスカノン!ヴァリアブルシュート!!」

「っ、キャアアア!!」

直射弾を受けて吹き飛ばすフェイト・テストロッサへ再度ストライクカノンの砲口を向ける。

「レイハ!!時流エンジン、出力100%!!」

『キャプチャー・ターゲット!!』

砲口に集中するエネルギー！。

センサーゴーグルに映るロックオン・マーカ―がフェイト・テスト  
ロッサをロックする。

「リアクター・スマツシャアアッ！！」

引き金を引いた瞬間。反動を抑えながら光の中へ消えゆくフェイト・  
テストロッサを見届ける。

地上を抉るリアクター・スマツシャ―。

しかしそのクレーターに倒れているはずのフェイト・テストロッサ  
の姿がない。

「かなり危なかったけど」

「上っ　！？」

上からバルディッシュを振り下ろしてくるフェイト・テストロッサ  
は、マントを着けておらず、背中から金色の光の一对の翼を生やし  
ていた。

「もっと強く、もっと速く、もっと熱く！」

「シールドビット！」

背中からシールドビットを展開し、超高速で飛び回るフェイト・テストロッサへ向ける。

「この程度！」

「ライフルビット展開！ピストルビット分離！」

シールドビットのオールレンジ攻撃を高機動で躲し抜けるフェイト・テストロッサへ、さらにライフルビットを追加して、ライフルビットからピストルビットを分離させて東方EX弾幕張りの高密度弾幕を展開するのにも関わらず、フェイト・テストロッサには掠めもしない。

「くっ、頭が……」

『マスター、無理をしないでください！』

17基の同時ビット制御は私には荷が重いようですね。元々マルチタクスは苦手の方ですし、こればかりは鍛えて慣れて行くしかないです。

「ライフルビット後退！シールドビット、アサルトモード！」

ビットに指示を飛ばしながらストライクカノンを構える。

アサルトモードに変化して砲撃に変わった弾幕でフェイト・テストタロツサの軌道を限定して、ピストルビットで牽制をかけて誘導する。

「狙い撃ちます!!」

フェイト・テストタロツサをロックオンした瞬間にトリガーを引く。

しかしトリガーを引いた瞬間にフェイト・テストタロツサが掻き消え、眼前に現れた。

「これで!!」

「ところがギッチョン!!」

バルディッシュが振り下ろされる前にストライクカノンの反動を耐えずにそのまま受け流す。

肩にかなりの激痛が走りましたが、砲撃の反動はそのまま運動エネルギーに変換され、私は後ろに下がりながら右回転。

そのままストライクカノンでフェイト・テストタロツサを打ちつける。

「くっ、あっっー!!」

「ぐっ」

無理な動きでカウンターを合わせられましたが、結果的には痛み分けです。

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「ハア…ハア…ハア…ツ!!」

ゴキーンッ

「ぐっ! あああっ!!」

反動を受け流し、そのまま攻撃に移って外れてしまった肩の関節を無理やりはめ治す。

「キリが…ありません…ね…」

「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

私と違ってかなり限界にきているはずのフェイト・テストロッサ

しかしその闘志は衰えるばかりがさらに高まっている。



逆にこちらはビット兵器の使用で頭痛がし、疲労からテンションも下がり初めている。長期戦は不利になる。仕掛けるなら次で最後にする。

「スラッシャー・セパレーション！」

再びストライクカノンのスラッシャー・モードを起動する。

「次で極めます……」

「ハア…ハア…ハア…っ!!」

フェイト・テストロッサが再び消える。

前、右、左、上、後ろ

どこにも居ない……なら!

「下っ!!」

「ああああ!!……!!」

「時の流れよ!私に力を!!」

ストライクカノンを纏うエネルギー刃が輝きを増す。

「はああああ！！！！！」

「つえああああ！！！！！」

振り上げられるバルディッシュと、振り下ろされるストライクカノン

魔力刃をエネルギー刃が干渉し合って、激しい火花を散らす。

「バルディッシュ！！」

「レイハ！」

私達の声に密度を増して膨れ上がる刃。

しかし膨らみ合う魔力とエネルギーが維持構成を保てずに爆発する。

「キヤアアア！！」

「くっ、ああっ！！」

私達は互いに吹き飛び、場所が悪かった私はビルの外壁へ叩きつけられ、そのまま地上へ落下していく。

『マスター!!!』

1対1の勝負を、私の意を汲み観戦していたレイ八が、多目的盾ユニットで私を受け止めて、地面へと降ろした。

ストライクカノン小破

戦闘続行は可能ですが、壊してしまいたくない為、量子変換させて収納します。

「ジュエルシード……」

今回の事の発端のジュエルシードが真後ろにある。近くで戦闘するのは、次元震を誘発しかねませんね。

機体状況も、先程の鏖競り合いと衝突からか、クロノ・ストリング・エンジンの出力が50%を割り込み始めていますし、身体も怠くなってきました。

「レイ八、時流エンジンを主機に切り替えてください。続けていきます」

『わかりました、マスター。時流エンジン、メインバイパス接続』

「さあ、まだまだ続きは」

ドクンッ

「ッ  
！！」

時流エンジンからエネルギーが機体中に供給された瞬間。身体中が  
否、魂が脈動を起こした。

『マスター？』

「あ……ああ……あ……」

アツイ、か、身体が……胸が、いや、魂が

胸を押さえ込んで膝を着く。アツサを耐えるように

『マスター！？』

「時流……エンジン……ジュエル……シー……ド……ま、さか……」

くっ、封印しているからタカを括ってジュエルシードの近くで時流  
エンジンの出力を上げた結果がコレですか　！！



第29話 摩天楼での空中戦 機動要塞高町なのは、いきます！（後書き）

色々と詰め込み過ぎにフラグ乱立であとがコワすぎる……。

テストロッサチームに加わるのは

今のところ真那さんとタマが2票

TAKERUとVGGが1票ずつ。

果たして誰がでるのか……

一応まだ受け付けていますが、TEはそこまでちゃんと知らないの  
で、なるべくALとかのキャラなら助かります。

717

次回も荒唐無稽にぶっ飛ばしますので、よろしくお願いします。

JSNT - AECOOGAFX 『レイジングスperlビア』 (前書き)

なのはとレイ八さんの共同作業によるマ改造武装端末システムJSNT - AECOOGAFX 『レイジングスperlビア』の設定になります。

## J S N T - A E C O O G A F X 『レイジングスペルビア』

J S N T - A E C O O G A F X 『レイジングスペルビア』

レイジングハートがジュエルシードリアルXの力で、なのはのイメージをトレースして形成した武装端末。

ForceのCW - A E C O O X 『フォートレス』 CW - A E C O 2 X 『ストライクカノン』をそのまま再現し、いくつか機能を継ぎ足しま改造したのがJ S N T - A E C O O G A F X 『レイジングスペルビア』である。J Sはジュエルシード、N Tは高町なのはの頭文字、G A Fはギガ・エンジェル・フォートレスの意味。

『不屈の誇り』という意味の名に恥じぬ性能を持ち、機体駆動はクロナ・ストリング・エンジンを主機に時流エンジンを補機に積んでいる。リング状に閉じた極微の宇宙弦や時粒子が駆動エネルギーの為、A M F環境下でも関係なく戦える代物である。多数のビット兵器を搭載・運用する為、高度の演算処理能力が必要。その為機体管制・制御には重圧に耐える強靱な精神力と高い空間認識能力が必要である。機動要塞なのはの代名詞ともなる武装端末である。

より武装端末とのシンク口を行う為に、H・A・L・O・システムを搭載。さらに背中と腰周りを直接武装端末と接続する。その時は接続部から全身へ激痛が伴う上に戦場をより明確に理解する為に高速リンク指揮システムとサイコフレームまで搭載した結果、H・A・L・O・システムで減った負担が±0となり、システム自体に直接干渉された場合、バックファイアにより昏睡に陥る上、下手を打つと膨大なデータを処理仕切れずに脳が損傷して身体が植物人間にな



る可能性すらある。強力故にリスクもある兵器である。

各多目的盾ユニットは2基ずつになり、新たなユニットも追加されている。

スラスタはエーテルスラスタの為、推進剤切れの心配も基本的には無縁。

機体装甲はすべてオリハルコン製の為、機体耐久性と多機能盾ユニットのユニット制御にも一役買っている。

CW-AEC00X『フォートレス』はユニットの数が増え、両肩には姿勢制御用にダブルオーライザーの両肩のバインダーを模したエーテルスラスタを装備する。脚部にも姿勢制御や機体重量を支えるサポーターとしてゲシュペンスト系の脚部が装着され、その両脇には脚部シールド『ティマイオス』『クリティアス』を装備する。

CW-AEC02X『ストライクカノン』は最大出力砲撃時に砲身を延長して射程と威力を底上げする『メガ・キャノンモード』。エネルギー刃を砲身より展開して斬撃の攻撃力を向上させる『スラッシュャー・モード』を追加する。カートリッジシステムはレイジングハート・エクセリオンと同じくオートマッチクマガジン式を採用している。

パーティクルビット

粒子砲を積んだラージサイズの多目的盾の名称。計2基。

プラズマビット

プラズマ砲を積んだミドルサイズの多目的盾の名称。計2基。

ブレードビット

ブレードを積んだスモールサイズの多目的盾の名称。計2基。

ブラスタースピット

stsのブラスタースピット。使い方も変わらない。計4基。

ストライクシールド

ラージサイズの多目的盾ユニット。計2基。ユニット先端がブレードになっており、ブレードユニットでは対応出来ない硬度の対象や射撃系が通用しない相手を想定している。ラージサイズにも関わらず、全ユニット中一の機動力と運動性を備えている。

ソードブレイカー

肩部アーマーに6基装備される自動誘導可能な攻撃ユニット。攻撃ユニットは缺のような形状をしており、展開してレーザーを撃つほか、ユニット自体が目標を打突したり、レーザー刃を出力し、目標を斬り裂いたりもする。

シールドビット

計10基のシールドビットを背中 of 接続アームに装備している。アサルトモードの使用も可能。リフレクター機能付きで、魔法やビームを反射する事が可能。

バインダーシールド

両肩に装備されるフレキシブルバインダー式のシールドユニット。迎撃用のビーム砲と粒子マイクロミサイルを内蔵している。

アリユミユレ・リユミエール

各種シールド系ビットが使用して展開する事が出来る光波防御機構。本物と同じく実弾、エネルギー弾、さらに魔法にも防御効果を発揮するが、実体剣にはすこぶる弱い。

ライフルビット

尻部に計6基装備する。シールドビットよりも大型の遠隔誘導兵器。威力はプラズマビットとシールドビットの間だが射程は全ビット中最長。

ピストルビット

ライフルビットに接続されているピストル状の武装。ライフルビットと同じく計6基装備。銃剣付きで接近戦も可能。ライフルビットから分離して弾幕の形成やグリップが存在している為、ピストルのままや手持ち火器としてライフルビットごと使用が可能。

AMフィールド

アンチ・マギリング・フィールドを自機周辺に展開するエネルギーフィールド。GNフィールドを参考にしている為、フィールド表面だけにアンチ・フィールドが広がっており、表面限定集中式の為、魔法のAMFよりも魔法の減水と結合阻害効果が高い。しかしGNフィールドと同じく実体剣にはすこぶる弱い。

アームズソード

名前が違っただけでエクシアのGNソードそのもの。右腕に装備する。

ティマイオス/クリティアス

脚部に装着された時空間歪曲シールド。これによる重力制御により高機動を得る。形はデモンベイン・トゥーソードと同じ。

アトランティス・ストライク

脚部シールド『ティマイオス』及び『クリティアス』のエネルギー解放によって時空間歪曲を発生させ、それに生じた時空間反発エネルギーを蹴りで直接目標に叩き込む近接粉碎呪法。飛び蹴りや回し

蹴り、踵落とし等の多彩なパターンがある。かなりの威力を持ち、直撃すれば大抵はただではすまない。反発エネルギーに指向性を持たせて身体の周りにフィールド状に纏い突貫するエーテルランサー・モードが存在する。

#### ブレードキック

爪先に装備されているブレードにエネルギーを纏わせて放つ蹴り。アトランティス・ストライクには威力で劣るが発動が速く威力には申し分ない。

#### トランザムシステム

身体に蓄積されている魔力素を全面解放することで、すべての能力を3倍引き上げるといふものである。ただし、時間制限がある上、使用後は身体機能が大幅に低下してしまうという欠点もある。具体的にはひどい脱力感に襲われ熟練魔導師でも身体を動かすことすらままならない程。

#### S・Z・O・ソード

ゾル・オリハルコニウム製の剣。脚部ブレードを分離させて柄と鐔を形成。2本の刀身が缺のような形になっており、敵に突き刺した後、後に刃を開くことも出来る。

JSNT・AECOOGAFX『レイジングスperlピア』（後書き）

こんなぶっ飛び性能でも色々制限つけてしかもチートにならないように書くにはかなり頭を捻りますが、頑張っていこうと思います。

第30話 ふたりの高町なのは 前篇(前書き)

さて、色々と後戻り出来ないストーリーになってきました。

### 第30話 ふたりの高町なのは 前篇

side：レヴィ・テスタロッサ

なのはが身体にMS少女とか武装神姫みたいにゴテゴテと武装してフェイトと戦って、東方EX弾幕張りのビットのオールレンジ攻撃から逃げる為にボクが考えた高機動魔法：ブースト・ドライブ

魔力素を加速させて直接推進に利用することで運動性と機動性を上げる補助系統魔法。

本当はパターンTBSに使う予定だったんだけどね。

それを使ってなのはを追い詰めたフェイト。

なのはの弱点は身体がなのはの反射神経についていけないところだ。パターンTBSだって、なのはは眼でちゃんと追っていた。ボク達の動きを全部見えているのに身体が動けない。それをなのははボク達の数手先を読んで攻撃を中ててくるんだ。

本当になのはは強くて凄くてカッコイいだ。

そんななのはが仕切り直しにジュエルシードの近くで時流エンジンをメインバイパスに接続した瞬間に、空気が変わった。

なのはが膝を着いた瞬間、ボクは飛び出していた。マントをパージしてソニックフォームへ、バルニフィカスをフルドライブへ

「なのはあああああ！！！！！」

ジュエルシードから発せられた閃光と衝撃波。

ボクは無防備で吹き飛ばされたなのはを受け止めながら陸橋にぶつかって、なのはを守るように抱き締めて地面に落ちた。

「がつ……あ……く、うつ……な、のは……」

衝突と落下の痛みを無視してなのはの様子を確認する。

バリアジャケットも武装も解除されたかなにかでボクの腕の中で気絶してる私服のなのはは、ボクの見慣れた大人の姿じゃなくて子供の姿になっていた。だからその 色々……ちよっ……と……えっちにみえる

「なのは……は……」

なのはの背中にまわした手が何かべったりしたものを触った。

「なのは……？」



認めたくなくて、ボクはなのはの名前を呼ぶけど……返事が返ってこない。

「な、なの……は……？や、やだ……よ……そん、な……」

ボクの身体が湿ってきた。背中が湿っぼくて嫌だ。

コロ…

「ジュエル……シード……」

地面に落ちたジュエルシード……シリアルX

ボクは現実を認めたくなくて、シリアルXのジュエルシードから、今回のターゲットのジュエルシードへ眼を向けた。けど

「な、なの……は……？」

ジュエルシードは消えていて、代わりになのはが倒れてた。

「え？え？え？え？ええ　！？」



『急かずにいられるか！！次元震反応に重力震反応だそ！？いったい何が起こったか想像すらつかないんだぞ！！』

ハーケンとグラハムは最大戦速で遠見市へ向かっていた。

飛行形態でかなりのスピードが出るはずのグラハムと平飛行するハーケン。

決してグラハムがスピードを落としているわけではない。ハーケンが無理をしてグラハムと同じスピードで飛んでいるのだ。

アリスの筐体の調整をしていた2人は、感じた巨大な魔力波と、次元震

そして空間跳躍時に決まって起きる重力震反応を感知した。しかも強力な反応だった。

ただでさえ次元干渉型エネルギー結晶体のジュエルシードは、一つでも危険な物だ。しかもこの世界のジュエルシードの暴走体は明らかに強すぎる。

さらにそこで重力震反応とくればハーケンが急ぐ理由も、隣りを飛ぶグラハムにもわかる。

『スピードを落とすぞ。目標まであと600』

『チッ、結界とビルの影で見えやしねえ…！！』

『結界内に入るぞ』

『オーライ。フルカネルリ式永久機関、ドライブ！空間干涉！』

『結界干涉、進入する』

封時結界内に干涉した2人は直ぐ様、重力震の震源地に降り立った。

『ジュエルシードはロストか』

『魔素とエーテルが空回りして念話も繋がらねえ……』

そこで2人はは地面に広がる血のあとを見る。

グラハムが片膝を着いてその血に触れる。

『……なのは物のだ』

『クソツ！！』

ハーケンは夜空を見上げる。

『……まだ封時結界が張ってあるなら、ユーノが居るはずだよな……』

『レーダーにも映らん。時間をかけたくは無いが…』

『どこに居る、なのは！ユーノ！』

空に飛び上がって辺りを見回すハーケン。

ボンツ！

『ぐオッフ！？』

『だからいわんことではない』

『るせえ！』

飛行ユニットから黒煙を上げたハーケンは近場のビルの上に降り立ち、その隣りにグラハムが降り立つ。

『チツ、ブースターがイカれやがったか……テスラ・ドライブもイエローシグナルか』

『だが、無理をした甲斐はありそうだ。あそこを見たまえ』

グラハムがライフルで指す先。

ビルの屋上の影

そこに横たわらされ、ユーノやりニスに治療を受けている2人なのはを見つけた。

2人は直ぐ様其処へ駆けつける。

『なのは!』

「ハーケン! グラムさん!」

『ユーノ、なのはの様態と状況の簡潔な説明を求めたい』

「え、えっと、僕にも何が何だか」

『私が説明します。グラム』

『レイジングハートか……』

『レイジングハート、何があつたんだ!』

レイハはデータリンクとモニターで、起こった事をおさらいと確認を含めてハーケンとグラムにありのままを伝えた。

『デバイスとの絆が新たな力を産んだか……』

『OK、ニューカラムレードレイハ。状況はわかったが、このダブルなのはの状況、消えたジュエルシードはどうするよ?』

『どうもこうも、コレは私達の決定権の範疇を越えている。なのはを連れて一時帰投しよう。迅速な対応と処置に感謝する』

「いえ、この子たっての願いでしたから…」

リニスに礼を告げるグラハム。

「リニス、ボクも着いて行ってもいい？なのはが心配だから」

「…私は構いませんけど…」

『私は構わん。ハーケンは？』

『俺も構わないぜ。お前はなのはのフレンズなんだろう？』

「うん！ありがとう！」

レヴィはハーケンとグラハムへ礼を言うと、さっそくなのはを横抱きに抱えて高町家の方へ飛んで行った。

『さて、こっちのセカンドなのはを連れて、俺達も帰るか』

「すみません。あの子のわがママを聞いてもらって」

『別に構いはしない。なのははともかく、彼女の方はなのはを友人と想い心配しているのは信用における。無用な争いを引き出すなら、

「この方が良い」

『そう言う事だ。お転婆ブルーガールは任せて、そっちのライトガールもちゃんと休ませてやるんだぜ?』

「あんたに言われなくてもわかってるさ。帰ろうフェイト」

「うん。…レヴィのこと、お願いします」

『任せとけよ、ライトガール』

フェイトにサムズアップで応えるハーケン。

『では我々はこれにて失礼する。何かあれば高町家にきたまえ。場所はそちらのリトルレディが知っているはずだ』

「わかりました。その、お大事に…」

『そちらもな』

リニスと軽く挨拶を交わしたグラハムは、もうひとりのなのはを横抱きにすると、レヴィの後を追って高町家へ飛んだ。

その後をハーケンとレイハが続いた。

「これって」





「…ゆ…め…」

起き上がろうとしましたが、それは叶いませんでした。

「な…のは…あ…」

「なのはちゃん…」

私の両脇をレヴィとすずかが占領して動けません。それ以前に

「…」

私の身体が子供になっていました。

私は変身魔法は使ってはいませんが

「起きたの？なのは」

「アリサ…私は」

「あなたはまだ寝てなさいよ」

起き上がろうとした私を、私の机の椅子に座っていたアリサが言葉



《ブラボー、そっちはどう?》

《こちらに変化はない。彼女も眠ったままだ。そちらはなにかあったのか?》

《今ちょっとなのはが起きたけど、また寝させたわ。今起きられても大変でしょ?》

《良い判断だ。だがキミも眠った方が良い。明日は長い1日になるだろう》

《わかったわ。おやすみ、ブラボー》

《ああ。おやすみ、アリサ》

あたしはブラボーとの念話を切ってからなのはを見る。

昨日の夜、レヴィが担ぎ込んできたのはと、グラハムが担ぎ込んできたのははそっくりそのもので、頬の傷痕とツインテールと前髪のポリウム以外は全部そっくりすぎて、双子よりはドッペルゲンガーの方がしっくりくるぐらいそっくりで

「こつという展開って、やっぱりアレよね…」

あたしと同士のレヴィと話し合って、導いた結論。

ジュエルシードが次元干渉型エネルギー結晶体で、しかも時流エン

ジンとクロノ・ストリング・エンジンを積んだ武装でフェイトと戦っていたならなおさらあたし達の結論は濃厚で説得力も強い。

あのなのはは、なのはの裏面、なのはの影がジュエルシードの影響で実体化したかもしれない説。

でも一番あたしが思っているのは平行世界のなのはを呼び込んだんじゃないかももしれない説。

どっちがあつてるかわからないけど、多分それは明日わかるかもしれない。

「なのは……」

あたしはベッドで寝る3人を起こさないように飛行魔法でなのはの上まで浮遊して、なのはの顔を覗き見る。

「なにがあつても、あたしはあんたの味方だから」

あたしはなのはの唇に自分の唇を重ね合わせる。

仄かに温かくて甘いけど、鉄臭い香りがこびりついたなのはの香りは、なのはの、なのはだけの香りだから。

「なのは……」

あたしは布団を少しズラしてなのはの上に乗る。ちょっと苦しいかもしれないけど、少しだけならいいわよね？

「なのは……」

頬の傷痕にそって親指を這わせる。

あっちのなのはにこの傷痕はなかった。

「ん……あ……はうん……」

「っ……」

なのはの甘い声に胸が飛び出そうになる。

指は首筋を舐め、パジャマのボタンを外せば、脇腹にも胸にもたくさん傷痕がある。

それを一つ一つ指で撫でていく。

「あ……あ、あ……んん！」

蚊の鳴き声みたいに小さな甘くて熱い声を漏らすなのは

「そうよ、あたしが好きなのはは、『ここにいる』なのはなんだから」

「あ………やつ！………あつう！！」

「なのは」

消音魔法と催眠魔法とバインドと結界魔法を、ハーケンから教えてもらった誰にも気づかれないう程度の魔力を使って、なのはを隔離する。

多分メカニカルズなら気づいてるだろうけど、メカニカルズはあっちのなのはで忙しいだろうし、あたしの事も気づいてるだろうし、多分邪魔はしないと思う。

「もう少し待っててね、もう少しであたしも」

そうしたらあたしだってなのはの心の半分を分けて貰う。

一心同体なんて未熟なあたしじゃまだまだ無理だけど。

でもいつかは一心同体になれるようにあたしはもっともっと強くなるから。

今はこんなズルいあたしを許して

T o b e c o n t i n u e d . . .



### 第30話 ふたりの高町なのは 前篇（後書き）

アリサファンの皆様ごめんなさい！！

さて、やってしまいました。

平行世界 s t s 前に高町なのはさんが星光なのはの世界に降臨です。ちなみにこの子どもなのはさんは大体ふた通りの設定を用意しています。

一つは原作とはまた別の平行世界でビル街で戦っていた原作基準のなのはさん。

もう一つは、これまた原作には関係ない平行世界で、s t s コミック一巻や s t s 本編で語られた、過去で撃墜されたなのはさん。

両者の違いはやっぱり人との絆と、戦闘能力と経験です。

どちらにしてもフェイトやユーノとの関係に悩むでしょうし。戦い方とかは星光なのはとは全く異なる上、闇の書事件の経験の有無もありますし。

あと撃墜なのはさんならマテリアルズとの出逢いの有無も別になります。

その辺りを私ひとりでは決められなかった為、読者の皆様にもご協力をお願いします。

他にも意見がある方は遠慮なく言ってください。

### 第31話 ふたりの高町なのは 中篇

side: - -

高町家やテストアロッサ家が遠見市から撤退する様を、遙か上空で見下ろす存在が居た。

「しばらく留守にしていた間に、随分と地球が騒がしくてセラエノから跳んで帰ってきたは良いが」

直立で腕を組みながらコート裾をはためかすのは、黒いサンングラスを掛け、銀髪でショートカットであるが後ろ髪は長く紐を使って一房に纏めている少女だった。

「成る程、この世界も中々愉快に歪んでいるな。コレではあの姑息で矮小な腐った混沌の介在を憂慮してしまうが、あの高町なのはは『理』のマテリアルのように見えてその実かなり人間臭い」

この少女もまた、遠目ではあったが、なのはとフェイトのドッグフアイトを目にしていた。

「システムより切り離された私とはまた違った意味で確かに存在しているようだが、あの武装端末システムといい、次元震や重力震、



九つの斬撃を、神速をさらなる神速で返す。神速の剣同士の打ち合い。

ただ緩急の使い分けの合間に神速を加えることによって相手を倒す。故に勝負は一度、一瞬、モノクロの神速の領域でも着いてくるグラハム。

互いに握る木刀が火花と煙りを散らしながら交差する。

『うおおおおおー！！！！！！！！！』

「はあああああ！！！！！」

バキッ！！

打ち合った木刀が砕けた。

互いに残った一刀。

グラハムは動いていない。

「（今っ！！）」

小太刀二刀御神流裏 奥技之参 射抜  
変幻自在の高速の突きの連撃。

御神流二刀奥義の中では最長の射程で最速を誇る奥義。

神速のスピードで突きを繰り出し、突いた勢いからもう一方の小太刀で相手を完全に貫く。その際に一撃目を引き戻す事でさらに突きを放つ事もでき、最大威力で放てば厚い鉄板さえも貫ける。

『神速』を使用すると更に早くなり、狙い撃ちまで可能。受け流すか横に避けるかしか回避方法が無いが、熟練した使い手のそれは恐ろしいほど早く、受け流しや回避より先に貫かれてしまう必殺の奥義。

小太刀一本でも両手を添えて放てば4連突き位なら放てる！

突きの構えを取った瞬間に、グラハムも木刀を両手で握りしめた。

#### 一撃目

グラハムの胴体を狙った突きは、半身を僅かに逸らされて紙一重、薄皮一枚で躲された。

#### 二撃目

引いた小太刀を身体ごと押し出して疾さを速める。狙いは顔。

でもそれは首を逸らされて僅かに掠めていくだけ。擦れた小太刀から煙りが上がる。

前に行き過ぎた懐に、グラハムが胴を入れてくる。

勢いを利用して飛び上がりながらグラハムの上を取る。

三撃目の狙いはグラハムの利き腕の左肩！

『ぐぬっ！！』

「つつ、あ……」

私の小太刀はグラハムの左肩の関節の間を貫いていて、スパークが散る。

やりすぎた！！

『肉を斬らせ』

「え」

グラハムは胴で振り抜いた木刀を右手に持ち換えながら着地する私の首筋に木刀を当てた。

『骨を断つ』

「……………っは、…ま、参りましたあ……」

一気に肩の張り詰めた力が抜ける。

「グ、グラハム、肩、平気？ごめんね」

『いや、少し食い込んだだけだ。整備すれば問題ない。しかし美由希もまた強い剣士だな。良い修行になった』

「う、ううん。私の方こそありがとう。やっぱりグラハムって強いね」

私が頼んでグラハムに打ち合ってもらったけど、どんな入りも紙一重で避けられていなされて、一撃しかまともに入れられなかった。こんなじゃ、なのは手伝いなんて出来ないなあ

『…何か悩み事があるようだな。私に話せる事であれば耳を貸そう』  
「……………」

私は少し悩んだ。

グラハムに話せば、私がまだ悩んでいる事も解決出来るのかもしれないけど。それでも良いのかと

恭ちゃんやおとーさんは自分の力で戦っているのに、私だけ

『キミの悩み事が根が深そうなのは見ていてわかる。だがひとりで





「二日酔いの目覚めより気っ怠い朝ですね……」

『おはようございます。マスター』

「レイハ……」

私は身を乗り出して机の上のレイハを手取る。

「ケガはありませんでしたか？」

『はい。機体に損傷はありません』

「そうですか……良かった」

また一つ、変わった。

もうこの世界が平行分岐した世界となりつつあるのは確かめる必要もありませんが、相棒がケガをしないで済むのは良きことです。

「レイハ、私の気絶している間のログを表示してください。現状を細かくしりたいのです」

『マ、マスター……その……』

「どうかしましたか？レイハ」

『いえ、ですから、その』

言い淀むレイハ。

何かあったのでしょうか？

『よう、起きてるか？マイブラザー』

「ハーケン、レディの寝室にノック無しで入るのがバウンティハンターの礼儀ですか？」

『おっと、こいつは失礼。だが元気そうでなによりだ』

「おかげさまで。それより此処に居た3人は？」

『さすがに1日メシ抜きは子どもの身体には悪いからな。桃子が店にしよっぴいていったよ』

「そうでしたか……。悪い事をしてしまいましたね」

腕をついてベッドから起き上がって

「あはっ？」

『お、おい!』

『Mode change! Strike Bit mode!』

ストライクビットモードに変形したレイハが、ぐらついた私の身体を受け止めてくれた。

「き、気持ち…悪い……」

『お前、大丈夫か？顔が蒼白真つ青通り過ぎて土色だぞ?』

「だ、大丈夫……ですよ…。それより、ハーケン。私が寝ている間に何があったのですか?」

『やあ…それが…かあつ、たく!しょうがねえ。どっちにしても、なのはの力がないとどうにもなりやしねえから、とりあえず着いて来い。つてか、歩けるか?』

「あー…無理かも……です…」

頭がグラグラする。眼がハッキリ覚めているのに、身体が寝ているような感覚が

『シールドビット展開』

「レイハ、コントロールを一部こちらに。ビットに乗って動きますから」

『ですが…』

『おいおい。無理するなよ』

「いえ、原因は…なんとなく、わかっていますよ」

おそらくビットの使いすぎで神経が疲れているのでしょっね。これも慣れていくしかないですね。

「ハア……ウエツ……」

『だから無理するなって。レイハ』

『はい。ハーケン』

「ごめんなさい」

『気にするなよ、ブラザー』

『はい。気にしないでください。マスター』

私はレイハの制御するシールドビットに横たわって、部屋の外のハーケンの所まで運ばれると、ハーケンに横抱きに抱えられる。



私が言うと、私達の周りに様々なデータがモニターで表示される。その中には映像データもある。

『ユーノが拾ったセカンドレイジングハートによれば、このものはガジェットに墜されたのはらしい』

「今から数年後の未来……ですか。それで？他にわかったことは？」

『少なくとも、ブラザーの未来じゃないな。レイジングハートはエクスレオンで、カノンモードは積んでないからな』

私の前のモニターに表示されるレイジングハートのスペックデータ。

やはり改修してある分、以前のレイハよりフレーム強度は上のようなですが、今のレイハはメインフレームがオリハルコン製になっている為、頑丈さはレイハが上のようなですね。

「それは僥倖です。カートリッジシステムのデータが入ります。それで彼女の様態は？」

『一応、レヴィンところのリニスとユーノの治療で身体的に異常は見当たらないんだが』

「リンカーコア……ですね」

『ビンゴ。その通りさブラザー。リンカーコアにダメージがある。このままじゃ』

「飛べなくなる可能性すらある。飛ぶにしろ血反吐を吐くようなりハビリを有す。でしょう?」

『ああ。stsの知識云々じゃなく、マジにな……。俺達で治してやれる所まではやったが、リンカーコア周りとなると、その辺りの管理権限はブラザー無しには出来ないからな』

つまりこの高町なのは今後の運命は私の手中にあると

そういうわけですか。

「今は返還する方法もその保証もありませんし。放っておくのも色々その後味も悪いですし」

私は入力端末に指を走らせる。

『OK、それでこそ俺のご主人様だ』

「勘違いしないでください。あくまでも人道的視点での判断と仮にもGGGを名乗るものとしては放っておくという選択肢がないだけです」

医療ベッドが作動して作業が開始される。



リンカーコアの方についてはまだまだ未知の領域ですが、備えあれば憂い無し。こんなこともあるつかと、リンカーコアを損傷した時の対策法くらいは用意出来ています。

限定的な時間逆行ならば、今の私達の技術力ならば可能です。

『タイムイオス』と『クリティアス』、そして『時流エンジン』があつて初めて可能なことですが。

限定的な時間逆行効果で、身体の傷を癒やすのではなく、損傷を受ける前に戻す医療ベッドの試作品。

まだ時間は掛かりますし、リンカーコアに作用するかどうかは未知数ですが、リンカーコアが身体の臓器の一部であると判断されているのならば、この医療ベッドで治せるはずです。

「あとは命運を天佑を天に賭けるだけです」

『オーライ、ブラザー。んで、お次はどこへ行く?』

「一旦着替えてから店に出向きます。みんなに無事な顔を見せると、アリサに言われてしまいましたからね」

『OK、ブラザー。そんじゃあ捕まってくれ』

「サンクス、ブラザー」

『なに、これくらい、構いやしないぜ』

ゴーグルに光るツインアイが一瞬点灯する。ウィンクのつもりでしょうか？

「……………ハーケン」

『なんだ？ブラザー』

「…やっぱり、人間の姿の方が良いですか？」

『……………まあ、な。ロボットのままじゃ、色々出歩くのも大変だし、目立つしな。だからって、ブラザーが気に病む必要はないんだぜ？俺達はこの身体だから戦えるんだ。それ以外の形になるには自前でなんとかするさ。だからなのは。お前はお前の戦いに集中しろ。お前の戦いを邪魔するヤツは俺達がなんとかする』

「ハーケン……………あなた達はどうして……………」

『それが俺達の選択さ。存在理由からくるものじゃない。お前が産みの親だからってのも関係ない。これは俺達自身の意志だ』

自身の意志で行動することを求めて造った自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOS

私のやっている事は早くも実を結んでいるようですね。



して柔らかに地面に降り立つ。

「問答無用か、ならば」

少女の周りを光が満ち、幾何学の科学文字が疾走し、少女の手を包み、肩を伝い、実態を造る。

少女の体軀には似合わない巨大な長身のバズーカ砲が顕現する。

少女は慣れた身のこなしでそのバズーカ砲を肩に担ぎ構える。

「災厄の亡者め…薙ぎ払ってくれる!」

『GIRAGADOaaaaa!』

「沈めええええ!」

大口を開け、突撃してくる異形へ少女はお構い無しにトリガーを引いた。

バズーカ砲から放たれたのは弾頭ではなく閃光だった。

「アクセス!アユテュル表による暗号解読、術式置換!その力を封ぜよ、災厄の魔石よ!」

少女が唱えると、異形は四散し、残ったのはジュエルシードだった。

「フツ、なんと他愛もない、鎧袖一触とはこのことか。しかし、師匠のようにはまだ、上手くはいかなんだな。いや、比較対象が規格外過ぎるか？まあ、良い」

少女はジュエルシードを拾い上げて、後ろに待機していた大冊の本に向かって後ろを見ずに投げる。

本はひとりでに開き、ジュエルシードを挟み込んだ。

「さて、世界はどうやら私にも舞台に立てと言いたいらしい。ジュエルシードに関わってしまった以上、無関係のままにもいくまい」

少女は漂ってきた本を掴むと、後ろ腰のホルスターに本を仕舞った。

「征こうかな、闇天の書よ」

少女はひとり呟きながら闇に消えた。

To be continued...

第31話 ふたりの高町なのは 中篇（後書き）

色々後戻りは利かないですが、このまま行って行きましょう。

GODクリアしました！！

対ユーリ戦が笑えるほど難しかった。

そしてマテリアルズがまったく似てないなあ〜と、思いつつプレイしていました。

ホント似てない。

可愛かったし面白かったぞマテリアルズ！

ディアーチエは最初からはやてと同じく笑いを提供してくれてありがとう！

レヴィはホントに微笑ましくてほのぼのするええ子やったなあ〜。

シュテルはカッコ良かった。もうコレだけしか語れないほどカッコ良かった。

さて、撃墜なのはさんを採用させて頂きましたが、なのはさんの名前はどうしましょうか？

意見の中でこの撃墜なのはさんはGODを経て撃墜されたのはさんという案があったので、なのはさんの名前をシュテルからもじるというかパクって『シュテルン』とかなんとか考えては見ているのですが、他に皆さん良い意見があれば出して頂けますか？

一応本日午後12時を締め切りでお願いします。

では皆さん、次回をお楽しみにしつつ、意見と感想を下さい。お待ちしております。

第32話 ふたりの高町なのは 後篇(前書き)

誤字を修正しました。



第32話 ふたりの高町なのは 後篇

side：高町なのは

ハーケンに抱えられて翠屋までやってくる頃には身体の気怠さも少しはマシになった為、翠屋にはひとりで入れました。

「あら。おはよう、なのは

「おはようございます。母様

「なのは――――！！」

私が母様に挨拶をしていると、お転婆娘のレヴィが口の周りが汚れたまま私の方へ突っ込んでくる。

「ひらり

「わわわ ！？

私は一度身体をそらしてレヴィをやり過ぎしながら後ろにまわって羽交い締めにする。

「な、なのはあ…離してよお」

「口の周りがデンジャラスな貴女を素直には離せませんよ」

「はい、なのは。これでレヴィちゃんの口を拭いてあげて」

「わかりました、母様。ほらレヴィ、大人しく此方を向きなさい」

「なのはが拭いてくれるの？えへへ…なんか照れる」

「いいからジツとしていなさい」

「はーい！」

「まったく、貴女という娘は…」

私は母様から受け取ったウェットティッシュでレヴィの口周りを拭いていく。レヴィは嬉しそうに絶えずニコニコと。そんなに嬉しいことなのでしょうか？

「いいなあ〜レヴィちゃん」

「純粹無垢に見えて実は策士？あの娘…」

端のボックス席で皿のタワーを築くすずかとアリサが何か言っているようですが、小さくて聞こえません。

「えへへー」

「フフ」

不思議ですね。レヴィを見ていたら身体が軽くなってきました。

クウ……

「なのは、お腹空いて、アタツ！」

「今の事は記憶の彼方に消し去りなさい。でなければ零距离からブラスター3掛けのスターライトブレイカーブラスタービット4基付きを見舞って差し上げましょう」

「わわわわ！！わかったわかったわかったよ！！忘れる忘れる！！忘れるから壁ブチ抜き級最終砲撃だけはやめてええええ！！！！！！」

ガクガク真つ青な顔で震えるレヴィの耳元に口を寄せ

「あとで話しがあります。私の作業部屋で」

「……わかった」

瞬時に真剣な表情で私の言葉に応えると、レディはまたニコニコし

た笑顔で私の手を掴む。

「一緒にゴハン食べよう！」

「ええ、わかりました」

私はレヴィに手を引かれてずかずかとアリサの居るボックス席へ

「なのは」

「久遠」

レディとは違ってキレイに食べている久遠は問題無く抱き止められます。

「クウ……もう、大丈夫？」

「ええ、ご心配をお掛けしましたね」

私は久遠の頭を撫でたり首筋を撫でたりと、心配させてしまった分、何時もより優しく丁寧に久遠を撫でていく。

「クウ…あう…クアン…」

「フフ、久遠はいつも可愛いですね」

トロンとした表情の久遠は天然記念物です。

「ほらほら、イチヤイチャしてないで早く食べましょうよ」

「イチヤイチャなどしていませんよ？これは私達のスキンシップです」

「クウ」

「いいなあ〜久遠ちゃん」

「ねえねえなのは！なにから食べる？」

私は久遠を隣りに座らせながら、取り皿を持ち出すレヴィに食べたい物を取って貰いながら、小型のモニターを呼び出して高町なのはの様態をモニターする。

彼女はこれから高町家に置くでしょうし。場合によっては名前を変える必要もあるかもしれませんが、その辺りは彼女の目覚め待ち。

治療費はカートリッジシステムのデータとレイ八が要求したジュエルシードの暴走体との交戦データで、対価としては十分に貰ってしまいましたから、完治するまでは面倒を見るつもりです。

あと好い加減、私も戦闘スタイルを色々で見直して整理しておかないとなりません。せっかくの両利きです。やれる事は多いですからね。

「あんたねえ…食事時くらいは食事に集中しなさいよ」

「そうは言いますが、アリサ。今は時間との勝負です。時空管理局に介入される前にイージス計画を次の段階に移行しないとなりませんから」

「イージス計画って、外伝のアレ？超巨大バリアで衝撃波から地球圏を守る作戦のヤツ」

「OGSのアレだよね？ブライアン・ミッドクリッド大統領の東京宣言で、公となった外宇宙からの侵略者に対抗するための、兵器開発から地球圏規模の巨大バリア設置までを含めた地球圏防衛計画」

アリサの言葉に続いて言うレヴィ。

アリサはジト目をレヴィに向け、レヴィは得意気に胸を張っている。

「今回はレヴィの言った方のイージス計画です。管理世界は絶えず争い危ういバランスを保ち続けています。管理局の介入でなんとかなっている世界もあるようですが、広大に広げすぎた管理世界すべてを管理仕切れず、しかも人手不足でもありません。私は今回の事件以前に地球がロストロギアを巡る舞台になる事を予期し、3年前からイージス計画を進めてきました。地球だけは誰の手でもない、自

分達の手で守れるように」

「なのはってまるでOGのピアン博士みたいだね。でも地球は管理外世界だか……ああ　！！」

「気づきましたか？レヴィ」

現状の管理局事情を知らないだろうアリサとすずかは置いてけぼり状態ですが、あとでちゃんと説明しますよ。

「管理外世界だからある意味治外法権区だから　」

「私の技術を接收される危険性もあるわけですよ。これがね」

「ちょ、なんなのよそれって！そんなの泥棒じゃない！！しかもなのはが時間をかけてやって来た事を横取りしようなんて最っ低よ！　一体何様のつもりよ！！」

私の言葉に身を乗り出すアリサ。しかし管理局はこの程度ではありませんよ。

「下はともかく」

「上、トップ、管理局を裏から支配している最高評議会が真っ黒なんだよ。詳しくはボクも言えないし、管理局全体がそうってわけじゃないけど。魔導師のエリートとかはまるっきりテイターンズっぽ

「いところもあるし」

「なによ……それ……それで次元世界の警察なんて、よく務まるわよ」  
怒りを露わにしていたアリサは額に手を当ててソファに座り込む。  
まあ、呆れて物も言えませんかよ。

「管理局は質量兵器が御法度といえますか」

「質量兵器アレルギーだからね。次元航行艦も、デバイスだってエネルギーが違えば立派な兵器だし、非殺傷設定をしなければ立派な人殺しの武器になるのに、管理局はその辺りを履き違えているようにボクは思うよ」

「デバイス云々はあたしにもわかるわよ。あたしの核金は一応非殺傷設定に出来るようにはなってるけど、元々核金にはそんなの無いし。てか今の流れだとあたしの核金も狙われる可能性大ってわけか」

「核金、武装錬金は魔導師よりも戦力になりやすいですし、リンクーコア等の特殊な資質が要りませんから余計でしょうね」

「その為のイージス計画……なんだね？なのは」

「ええ。管理局が安易に手を出せない程の私設武装組織。地球を脅威から守る存在。地球防衛計画イージス計画の要。地球防衛勇者隊：ガッツィ・ギャラクシー・ガード 通称GGG。それが私の目指すイージス計画です」



「あんだ昔っから色々考える子だったけど、まさか此処まで考えて動いてたなんて、さしものあたしも思わなかったわ」

「私も……なのはちゃんと前からもう戦ってたなんて知らなかった」

「本当ならふたりを巻き込むつもりはなかったのですが、現状、それを許してくれる程に世界は優しくはないようです。いずれにせよ、話しておいた方が良いと思って話させて頂きました」

「別に、戦いに首突っ込んでんのはあたしの意志だから、なのはが気にする事じゃないわ」

「私も、なのはちゃんと一緒に居たいのは私の思いだから」

「アリサ、すずか」

「それで？この話しを持ち出した意図はなに？まさかこれから大変だから手を引けてふざけたこと言つつもりじゃないでしょうね？」

「あ、う、その……」

ず、凶星を当てられてしまいました。

う、アリサの素敵過ぎる笑顔が直視出来ません。

「そうよねえ、あたしなのはならそんなこと言わないわよねえ？てか言ったら燃やす」

「ヒッ！」

目、目が本気と書いてマジに見えてメラメラ燃えています。こ、殺される。コレは下手を打てば絶対殺されます！

「アリサちゃん。あまりなのはちゃんを責めたらかわいそうだよ。なのはちゃんは私達の事を思ってる」

「だからよ。こちらら伊達や酔狂で親友名乗っちゃいないのよ。困ったら手を貸す。無条件で助け合うのが真の親友ってもんでしようが。そりゃあ、あたしはまだまだヒヨっただけどさ、あたしにだって出来る事はあるわよ！」

アリサは核金を懐から取り出して握り締めながら言った。

アリサ、そんなに私のこと

「ボクも、なのはの味方だよ。ジュエルシードが絡んだらまた戦わないとならないのがちよつと辛いけど、ボクはなのはとの約束を守る。フェイトもなのはも守る。それがボクを選択」

バルニフィカスを握り締めて言うレヴィはいつになく真剣な表情で、アホの子の一面はまったく感じられない。

「私にはまだ出来る事はないけど、みんなの無事を祈って待つこと

くらいなら出来るから。私は私の戦いをするよ?」

「レヴィ、すずか」

「なのは…久遠も、戦う」

「久遠」

「私も私に手伝える戦いをするよ、なのは」

「あ、姉様!」

「元々巻き込んでしまった僕が言えるような事じゃないのかもしれないけど、僕にも出来ることだけのことをするよ」

「ユーノ」

いつの間にか後ろには姉様やハーケン達まで居て

「アリサが決めたことならば俺も微力ながら尽力しよう」

「決まりだな。キミの負けだ、なのは」

「ああ。俺達オールメンバーがなのはの仲間でGGGのメンバーだ」

「無論、私も忘れないで下さいね?マイスター」

モニターが開き、ハンガーに固定されているアリスも映る。

『マスターはひとりじゃありません。私達一人一人がマスターの味方です』

「みんな……すみません。私の戦いにみんなを巻き込んでしまう事を謝罪すると共に、共に戦ってくれる仲間達に感謝を」

『しっかり頼むぜ？高町長官殿？』

「はい！」

私は涙を堪えながら返事を返す。

小さな一歩でも積み重ねていけば大きな一歩になる。

私の紡いできた絆が今、地球を守る為の力となる。

「では長官たる私より、地球防衛計画イージス計画の発動及び、その機動部隊たる地球防衛勇者隊：ガッツィ・ギャラクシー・ガード  
通称GGGの発足と活動開始を今此処に宣言します！！諸君の  
勇気ある誓いと行動に改めて感謝の意を表します！！」

『OK、長官殿。俺達の勇気ってやつを見せてやるぜ！』

『再び地球を守る為に戦うか。因果な物だが、悪くはない上に、負ける気はしないな』

「足手まといにならないように頑張るからね、なのは」

「あたしも頑張ってもっと強くなるから、期待して待ってなさいよ？」

「ブラボーだ。アリサ・バニングス。明日の訓練もピシバシ行くぞ！」

「応ともよ！望むところよ！」

「私も、時間はかかるかもしれないけれど、なのはちゃんの力になれるように頑張るから」

「クオン！久遠も！」

「ボクだって、なのはの為に」

「僕には出来ることは少ないけれど、少ないなりにやれることを命一杯するよ」

「いつの間にか、遅くなってしまったな。なのはもアリサちゃんもすずかちゃんも」

「ええ。昔の貴方みたいに。でもなのはなら大丈夫な気がするわ。あの子には沢山のお友達が居るんですから」

各々の決意を語り合う子供達を見守りながら、士郎と桃子は無事を祈るばかりだった。



テルだった。

「身体に異常は……無い様ですね」

「え？あ、あれ？」

わ、わたし、あの時確か

「っ！？」

お、思い出した……わたし

「無理に思い出す必要もないというのに……」

「あっ……」

「今此処に、貴女を害するモノはありません。ゆっくりと深呼吸をして、心を落ち着かせなさい」

「う、うん……」

消え入る様な小さい声でしか返せなかった。

シュテルにそっくりってことはわたしにもそっくりなんだけど、こ

の子に抱き締めて貰ったら、恐怖感が一気に抜けてどこかにいつちやっただ。

深呼吸してからゆっくり現実を視ていく。

シュテルにそっくりな子は、ただシュテルにはない、顔や首筋に傷痕があつて、それもまだ新しい傷痕で、少なくとも半年経っていないさそうな傷痕

「落ち着けましたか？高町なのは」

「え、う、うん。なんとか。うん。大丈夫」

「あまり無理も禁物ですが、現状を早く説明しなければならぬ以上。しかしこの物事を貴女が受け止められるかどうか…」

シュテルにそっくりの子は険しい顔つきでそう言った。

「貴女は私の所為でこちら側へ来てしまった。そのことについてと、今現状、貴女を元の時空次元軸に返せる目処も方法も無いことを含めて謝罪させて下さい。本当に申し訳ありません」

「え、あの、え〜っと」

本当に申し訳ないと思っているのは見てわかるんだけど



「申し遅れましたね。私は高町なのは、現在9歳。ジュエルシードとの戦争真つ只中の魔導師です」

「ジュエルシード!? そ、それに9歳で高町なのはって」

高町なのはと、わたしの名前を名乗ったこの子とジュエルシードという言葉。な、なにがなんだかさっぱりなの……。

「この世界はまだ、ジュエルシード事件の真つ最中だということですよ。高町なのは」

「え、えつと、それって。もしかして、わたしは過去の世界に」

「貴女からすれば2年前の出来事が、今この世界では現在進行形で起こっています。貴女の世界とは極めて近く、限りなく遠いこの世界ではね。ジュエルシード事件で小規模次元震があつたのは覚えていますか?」

「あ、うん。フェイトちゃんと戦った時に　あ、レイジングハートは　!?」

フェイトちゃんとの戦いで壊しちゃったレイジングハートのことを思い出して慌ててわたしはレイジングハートを探すけど

「心配なく。ちゃんとこちらで修理しておきました。レイハ」

『はい。マスター』

高町なのはと名乗った。えーっと、やっぱり『なのはちゃん』って、呼んだ方がいいのかな？

と、とりあえずなのはちゃんが誰かを呼んだら、デバイスモードのレイジングハートが板みたいなのに載せられてわたしの目の前まで飛んできて、その後ろから白い外装に金色の内装に赤いコアの

「レ、レイジングハート……なの？」

「ええ。レイハ。モードチェンジ、デバイスモード」

『All right . Mode change ! Device Mode !』

わたしの前で変形したなのはちゃんのレイジングハートは、わたしのレイジングハートとは細かい部分が違っている。

「これが私のレイジングハート、レイハです」

『以後よろしくお願いします。並行世界の高町なのはさん』

「にゃ！に、日本語　！！」

『マスターと同じ言語で喋りたいと思うのはいけないことですか？』

「え、あ、の、う、ううん。ただ、日本語で返されるなんて思っ  
てなかったから」

わたしもレイジングハートと出逢っていつも一緒だけど、ミッド語  
で応答されるのが当たり前だったからなんだか新鮮でびっくりしち  
やった。

「話を戻しますが」

『マスター、こちらにお掛け下さい』

「ありがとうございます。レイハ」

レイジングハートを運んできた板がなのはちゃんの後ろに移動する  
と、なのはちゃんはそれに座って少し床から足を離す位置に板が浮  
かび上がった。

あの板、いつたいなんなんだろう？

「小規模次元震発生の折り、私の所持していたとある機関とジユエ  
ルシードが共鳴反応を起こし、一時的に私と貴女の次元を繋ぎ、貴  
女をこちら側へ引き込んでしまった。それぐらいしか可能性があり  
ません」

「ま、待って、そ、それじゃあ……」

「現状、貴女を返還させる確実な方法が存在しないという理由がこれです。時空間転移は濁流の中で蜘蛛の糸を辿る様な物だと言われています。送り返すにしても今の私達にはその確かな技術が確立出来ていない以上、貴女をそんな危険な転移で送り出す事を、私はしたくはありません」

「そう……なんだ……」

色々難しすぎてわからない事も色々あるけど、わたしが普通には帰れない場所まで来てしまった事は何となくはわかった。

「ごめんなさい！あの時私がジュエルシードは封印してあるからと安易に勝手に思い込んで自己完結して時流エンジンを主機にまわしてしまったばかりに、貴女をこちら側へ引き込んでしまった！謝って赦されることでない事は重々承知しています！恨み辛みの何もかも全てを引き受けます。ですから少しだけ、少しだけ時間を下さい！必ず貴女を元の世界へ送り届けますから！」

床に飛び降りて土下座してわたしに謝ってくるのはちゃん。

わたしが同じ立場で2年前に同じ事をしてしまったら、多分……うん。ユ一ノくんに頼りきりで何も出来なかったかもしれないのに、なのはちゃんはわたしを元の世界へ返してくれようとしている。

「…うっ…くっ…」

「はっ！？た、高町なのは！何を！？」

わたしはデバイスモードのレイジングハートを杖代わりにしてベッドから起き上がった。脚がフラフラする。けど

「あっ！」

「あぶなっ！！」

倒れそうになったわたしを、なのはちゃんが受け止めてくれた。

なのはちゃんとわたしの体格差は頭半分くらいなのかな？

「だ、大丈夫……ですか…？」

「うん。大丈夫……」

「あの…えっと…」

わたしはまだフラフラする脚を理由にしてなのはちゃんにしがみつく様に力を抜いた。

でもなのはちゃんががっしりとわたしを受け止めていてくれる。わ

たしより力持ちなんだね、なのはちゃんは。

「高町なのは……？」

「ちょっとだけ……ちょっとだけ、このままでいたいな」

わかっててはいても、やっぱり認めたくないのかもしれない。

またひとりぼっちになっちゃったこと。

でもなのはちゃんのお陰で、わたしは今五体満足でここに居られるのかもしれない。

それにここが今過去の世界なら、わたしにも何かお手伝い出来るかもしれないし、最悪2年後のなのはちゃんにわたしと同じ失敗をして大ケガをさせないようにも出来ると思うから

「……ちょっと……だけ……ちょっと……と……だ……け……っ……」

「……ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさいっっ、じゅっ……な……さいっ」

なのはちゃんは悪くない。そう言っても多分、余計ツライ思いをさせちゃう感じがしたわたしは、なのはちゃんを羽交い締めするように抱き締めて静かに泣くしかなかった。

わたしの方がちょっとだけお姉ちゃんなのに、なんだか情けないけど、今は泣いていたい。泣いておかないと、もう泣けそうにないし、多分わたし以上に我慢しちゃうかもしれないのはちゃんにも今は泣いて欲しいから

友達と家族とのちょっとした別れと、なのはちゃんへの感謝を込めて、わたしは久しぶりに堰を割るように泣いたんだ。

T o b e c o n t i n u e d . . .

### 第32話 ふたりの高町なのは 後篇（後書き）

さてはて、未だにあまり進まないPT事件ですが、これから一気に加速させたいですねえ。

一応プレシアさんよりヤバイラスボス級の敵とかは考えてますし、あの娘も出してしまいたいですし。

転移して来た撃墜なのはさんの名前に関しましては、とらハ3の元ネタから『ななせ』と名付ける予定にしています。

詳しくは『高町なのはが生まれるまで』に参照されていましたので、一度目を通してみては如何でしょうか？

なのはさんの内面描写にかなり迷いましたが、撃墜された年齢の11歳ならいくら魔法少女でもこんなくらいか？と予想して書いてみました。

なんとというか変に大人びてて書き難いぞリリカルな子ども達よ！！

ユーノはともかく、すずかはやっぱり技術系にまわすか、吸血鬼一族だからネタにぶっ飛ばすかで未だにかなり悩んでいます。

どちらにしてもバイオレンス的な内容になってしまふのは私の心や価値観がズレているからだろうか？

だってデモンベインとかマブラヴオルタとかガン×ソードとかOGとかGAとか大好きなんだもん！！



次回もお楽しみに。

第33話 新しい 名前を呼んで（前書き）

さてついに改名の回です。皆様のご協力に感謝します！

### 第33話 新しい 名前を呼んで

side：高町なのは

あの後、泣き腫らした顔で私達は互いに笑いあって、高町なのはをベッドに寝かせてから、私もベッドへ上がって高町なのはの隣へ横になりました。

べ、別に良いじゃないですか！

こっ、アレですよ！

離れようとしたら泣いた後で潤んだ瞳で、「も、もう…ちょっと…  
…もうちょっとだけ…」なんて迫られてもみなさい！

コレが断れるわけがないではありませんか！

断ったヤツは人間の風上にも置けない外道ですよ！

コホン！

失礼しました。

とにかくそんなやり取りのお陰で私は高町なのはと一夜を共にする事になりました。

「ねえ、なのはちゃん」

「なんでしょうか？高町なのは」

「うっ、わ、わたしのことも『なのは』って呼んで欲しいの」

「それは難しいことです。いずれにしてもあまり親しくなりすぎない方が身のためですよ？」

「…なんで、そんなに悲しいことをいうの？」

「私と貴女の道はねじ曲がって交差し、螺旋状に歪に入り混じってしまっている。その歪を直さなければいずれ私か貴女のどちらかが世界から去らねばなりません。そしてそれは自身の居るべき場所へ帰る貴女でしょう。いずれ別れる運命なのです。私達は」

「でも……でも、せつかく逢えたからわたしはなのはちゃんと仲良くなりたい。それにわたしには2年分の経験があるし、それを利用すればなのはちゃんのこれからも楽になるかもしれないし、フェイトちゃんやプレシアさんやアリシアちゃんだって」

「ウエイト。そこまでしておきなさい。高町なのは」

「ふえ？」

私は高町なのはの目を真つ直ぐに見詰める。

「フェイト・テストロッサが何の為に戦っているのかは、おそらくは貴女の世界のフェイト・テストロッサと変わりはないのかもしれない

ませんが、この世界のフェイト・テスタロッサには、アルフ以外にも彼女の傍で彼女を支えている者が居ます」

「アルフさん以外にも？」

「ええ。だから全てが同じとは限りません。並行世界というものは極めて近く、限りなく遠い。無限大数に分岐する世界です。中には父様が私達の顔を見る事叶わずに鬼籍に入ってしまったているかもしれない世界。中には兄様が忍さんとは別の女性と結ばれているかもしれない世界。中には私達がユーノとは出逢わずに違った形で全く違う魔法と出逢い、その戦いの最中で恋をして、事後はその恋を成就させながら翠屋を継いでいるかもしれない世界。様々な世界が並行世界です。この世界もまた、貴女の知る世界とはかけ離れつつある世界でもあるのです」

「うう、む、難しいけど、なのはちゃんの世界がわたしのもしもの世界だとしても、わたしがなのはちゃんと仲良くしたらダメって理由にはならない気がするの」

難しいと口にはしつつも核心を突いてくる辺りは、幼くとも次元世界と関わりを持つ故でしょうか。しかし、だから

「貴女はわかっていますね。別れてしまえば私達はもう二度と会うことはないのですよ？そんな運命ならば必要以上に親しくしない方が心の傷も軽くて済みます」

そう、貴女の知るマテリアルズ以上に私達の縁はかなりの奇跡的偶

然で交じり合った物。そして高町なのははいずれにしても帰さなければならぬ存在。

不屈のエース・オブ・エースが、私達の血みどろで泥臭い戦いを知ってはいけないのですよ。

「で、でも、やっぱりそんなの悲しいよ」

「私は別に悲しくはありません。縁が結ばれようとも関わらなければ、その薄っぺらい縁は縁に非ずですから」

「……それじゃあ、なんでなのはちゃんはわたしを助けてくれたの？」

「それが私の義務だからです。対価も貴女のレイジングハートから頂いています。等価交換。ギブアンドテークです」

「……じゃあ、なんでなのはちゃんは一緒に居てくれるの？」

「アフターケアの一環に過ぎません」

「……ウソだ」

「なにが嘘でしょうか？」

「だって、なのはちゃんだってわたしなんだよ？」

私よりも下の位置に横になっている高町なのはは、身体をもぞもぞ

と動かして私と同じ目線に合わせて、私を見詰め返してくる。

互いの顔……唇さえ触れてしまいそうな距離に、私よりも身体的には2歳年上なのに、私よりも愛らしく可愛らしく、幼く柔らかな無垢な私の顔が悲しそうに歪まされていた。

「わたしがなのはちゃんだったらとつてもツライ事を言って、なのはちゃんがツライくないはずがないんだもん」

高町なのはがそう言って私の胸に手を当ててくる。

小さい手なのに、大きく温かく感じるその手が胸に触れた瞬間。胸がキツく締めつけるように痛くなった。

「うっ…」

「ほら、なのはちゃんのウソつき」

「嘘、では…っ」

余計に苦しくなる胸。

何もされていない。魔力もエーテルもプラーナも覇気も感じない。ただ胸に手を当てられているだけなのに、なぜ！？

こんなにも胸が痛くて苦しくなるのですか！

「なのはちゃんはわたしなんかよりもずっとずっと、優しいから」

「やめ…やめて…やめて、ください…い…」

アナタが 『高町なのは』が自分を指し、私と比較して『なんか』なんて言わないで下さい！

「わたしの命を拾ってくれた。こんなに優しいなのはちゃんだから、わたしも仲良く…ううん。仲良くじゃない。…友達に なりたいんだ」

「つぐうっ!!」

心臓を鷲掴みにされるような痛みが胸に走る。

私に…私に！

アナタからそんな言葉を貰う資格なんて！

私には

私は…!!!!



「はっ、あぐ、かはっ」

「だからなのはちゃんにも呼んで欲しいの。わたしの名前。高町なのはじゃなく、『なのは』って、呼んで欲しいんだ」

「っは、た、高町…なのはっ…ぐうっ」

胸がイタイ。

心がイタイ。

タマシイガいたい。

高町なのは

彼女は私が求めて憧れていた魔法少女そのものだった。

レイジングハートに記録されていたデータは全て私の知る高町なのはと

魔法少女リリカルなのはの高町なのはその物だった。

P.T事件、闇の書事件、闇の欠片事件、砕け得ぬ闇事件を経て11歳となった。こちら側への転移を除けば正しく魔法少女である高町なのは。

そんな彼女の言葉は私の心の殻をいとも簡単に打ち砕いていく。

それは彼女が本物で私が所詮は贋作で偽物で星屑で固めた弱い存在



そんな存在の私が、貴女に感謝される理由も、手を差し伸べられる理由も、なにもない！！

「恨んで、憎んで、怒って、殺されても文句を言えない事をしてしまった私に、なぜ貴女は何も言わず、何もせず、友達になりたいないなど言うのですか！！！！」

「……わたしが……そうしたいと、思ったからだよ」

「私にそんな資格などありはしませんよ！！！！恨みなさい！！憎みなさい！！怒りと憎悪、怨讐を私に！！私にぶつけてくださいよ！！家族や友人から引き離してしまった罪と罰を私にぶつけてくださいよっ！！！！」

「……そんなことをしても、わたしは悲しくなるし、なのはちゃんだって悲しくなるだけだもん。だから、そんなことはしたくない」

「私に優しくしないでください！！貴女はなぜそんなにも私に！貴女の未来も過去も現在も永遠に奪ってしまったかもしれない私に！そんなにも優しくしていられるのですか！！！！なぜ恨まないのですか！！なぜ！なぜ！！何故！！どうして……っ！！」

「……わたしの為に……こんなに苦しんで、泣いてくれるのはちゃんか、好きだから。わたしとなのはちゃんは一緒だけど、わたしよりもずっと優しいのはちゃんが、わたしは好きになっちゃったから」

「わた、し、は……やさし、く、なん、て……！！」

「優しいよ。すっごく優しいんだ。誰かの為に涙を流せる人は、世

界で一番優しいんだ」

「うっ……ぐず……ううっ……うっ、あああああ」

感情を堪え切れずに泣くしかなくなってしまった私を、高町なのははそっと抱き締めてくれた。

「わ、たし、に、やさし、く、しな、い、で、っ」

「どうして？優しさには優しさで返すのが当たり前だよ？」

「わ、たし、に、かえせ、も、の、な、い、っ」

「いいよ……もう、いっぱい返して貰っているから。私が何ともなくいられるのは、なのはちゃんのお陰だから」

「だが、わた、し、なに、も、っ！」

「知ってるよ。なのはちゃんが私を治してくれたの、わたしは知ってるよ」

「な、ぜ、あの、と、き、まだ、ね、て、っ」

「にははは 実はちょっとだけど、起きてたんだ。難しい話しばかりで寝たフリしてたけど、なのはちゃんがわたしの傷ついたリンカーコアを治してくれたから、わたしは翼を無くさずに済んだの。わたしは、なのはちゃんのお陰でまた空を飛べるんだ。あの青いわたしが大好きな空を」

「たか、ま、ち、なの、は…」

「…やっぱり高町『なのは』だから呼びにくいのかなあ？」

「そ、いう、いみじや」

「でもやっぱり『なのは』が2人じゃややこしいよね？でも他にいい名前なんて」

「だか、なぜ、あなたが…名前、変える、必要、ない、っ！」

「だってなのはちゃんはなのはだと一生『なのは』って呼んでくれなさそうにないから。それに『なのは』がひとりだったら、世界がわたしかなのはちゃんを追い出す必要だってないんでしょ？」

「あなた…わからないと、いって…おきながら…！」

「…うん。なのはちゃんの言ってる意味はわからないことだらけだったけど、なんだかそんな感じがするの」

「……まったく、さすがは、かんかくでまほうを、つくってしまうだけは、ある、ようですね…」

「にやはは。それほどでも」

「…ほめて、など、いませんよ。まっ、たく…」

これでは泣き怒鳴り散らしていた私がバカではありませんか。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

早朝。

4時辺りに起きた私は道場でただひとり小太刀を振るっていました。顔は運動には関係無い理由で火照ってしまつて、雑念を斬り払うように御神流を振るっていく。

斬 虎乱を繋げてから瞬動を使つて間合いを詰めるように踏み込みながら虎切を放ち、後ろを振り返りながら、貫による突きを放ち、そして徹を打ち込む。

「…スウ…ハア…」

御神流の基本的な動きは自然に意識せず出来るようになるにはなってきましたが、まだまだ修練が足りませんね。実戦レベルでも神速を使えるようにならないければ通じることは少ないでしょう。

私は手元の小太刀を見詰める。

両利きの私には二鬪流が一番戦いやすい型なのかもしれません。

レイハは一本ですが、レイハを使う時も腕癖は悪いですし、レイジングスperlビアも基本的に両腕で武器を扱う。さらにT W O S W O r d / T w o G u n やバウンティハンターでも二闘流ですし。

やはり私には

「ますます高町なのはには遠ざかっていきますね」

や、それ以前に女子の戦い方でもありませんが、そうでもしなければ戦えないのが私です。

身体全て、全身全霊を賭けて戦ってこそ勝ちを取りにいけているのかもしれないし、今更変えようもありません。マラソンや水泳とはわけが違うのですから。

『朝から性が出るな。なのは』

「グラハム」

声を掛けられて視線を見上げれば、道場への入口には腕を組んでいるグラハムが

「おはようございます。グラハム」

『ああ。朝の挨拶、即ちおはようという言葉を慎んで贈らせて貰おう』

道場に入ってきたグラハムは両腕からソニックブレードを抜いて私へ向けて構える。

『抜け、なのは。私はキミとの朝の打ち合いを所望する！』

「……………良いでしょう」

私は御神流の構えを取り、グラハムは自然体のままで相對する。

『これ…』

「尋常に…」

『「勝負っ…！」』

私達は互いに駆け出し、殺陣斬撃を奏で演じる疾風となる。

|||||



side：高町なのは（11歳）

なのはちゃんがお父さんやお母さん、お姉ちゃんにわたしの事情を1から話すなか、わたしは落ち着いていられなくて辺りを見回していた。

見慣れた家のリビングのはずなのに、当たり前のようにアリサちゃんやすずかちゃん、そして人間の姿のユーノくんが居て、今は忙しいお兄ちゃんが居ないのはちょっと不思議な光景だけ

「ブラボー！おかわり！！」

「おお、またかレヴィ。食べ食べ、どんどん食べ！戦士の資本はまず身体だからな！」

『だからって4杯目は食い過ぎだぜ……』

わたしも黒いロボットさんに同意なの……。

キッチンには知らないおじさんが居て、これまたレヴィにそっくりな名前まで一緒のレヴィちゃんまで居て。すずかちゃんとアリサちゃんに挟まれている女の子とか、ロボットのお人形さんとか

なんだか見慣れない光景でいっぱいなの！

「 というわけです」

「なるほどねえ……つまり、もしもの可能性のなのは1人って解釈で良いの？」

「その通りです、姉様」

「なのはより2歳お姉さんなのか。それにしたら結構変わってるなあ。なのはちゃん髪を伸ばすタイプなのか」

「ツインテールのなのはこんな感じなのねえ。なのはも髪を伸ばしてみないの？」

「私は髪の毛でも風を感じる派なので、今のこの姿だとこの長さで髪型で丁度良いですよ、母様」

「そう？ちょっと残念……」

お父さんもお母さんもお姉ちゃんもまったく動じていません！

なんで？もしかしてなのはちゃんは既に

「魔法は1日目から兄様にバレてしまいましたので、今此処にいるみんなと、兄様、そして忍さんも魔法の理解者です」

「じゃ、はは……そ、そうなんだ」

な、なんだかなのはちゃんは色々と凄すぎるの。

「まあ、事情はわかった。たとえどんなのでも俺達の娘には変わらないんだ。ゆつくり自分の家と同じように寛いでくれて良いからな、なのはちゃん」

「あ、えの、あの、その」

「子どもは遠慮しないで、大人に甘えても良いのよ？なのはちゃん」

「で、でも……」

わたしはついなのはちゃんを見てしまう。

お父さんもお母さんも、わたしを置いてくれるって言うているみただけど、なのはの名はやっぱりなのはちゃんの物で、あとからやって来たある意味部外者のわたしが、なのはちゃんの名前を取っちゃうわけには

「ねえ、おとーさん、お母さん。2人も『なのは』が居るとさ、ちよつとごつちやになってややこしいからさ、こつちのなのはには新しい名前を送ってあげない？そうすれば新しい名前で別の名前ならこつちのなのはも気引けしないで済むと思うんだけど」

「おね　み、美由希さん」

「ははっ、無理しないで『お姉ちゃん』でもいいってば。なのはは

『姉様』って固く呼ぶから実は忍さんとか少し羨ましかったんだ」

「すみませんね、お堅い妹で」

「拗ねないでよなのはあゝ。私はどんななのはでも大好きなんだから」

「離してください、姉様。苦しいですし痛いです」

「やゝだよん」

そう言いながらなのはちゃんに抱きつくお姉ちゃんは、なのはちゃんの頬に自分の頬をスリスリ擦りつける。

なのはちゃんは無表情だけど嫌そうな感じはしていなさそうに見える。

「新しい名前か……それでも良いか？なのはちゃん」

「ふえ？え、えーっと、は、はい。わ、わたしも、『なのは』はやっぱりなのはちゃんの名前だから、あとから来たわたしが『なのは』を名乗っちゃうのはなのはちゃんに悪いから」

「だから貴女が名前を変える必要はないと言いませんでしたか？高町なのは」

お姉ちゃんに纏わりつかれながらも私の方を向いて言うなのはちゃ

ん。

「ははくん そっかそっか、なのはちゃんのはなのはが名前で呼んでくれないから名前を変えたいんだ？」

「う、うん」

「ちょ、姉様！高町なのは！貴女も肯定しないでください！」

「なるほど、となるとなのはちゃんには新しい名前は必要なわけか」

「自分の名前を呼び捨てにするのが恥ずかしいのかしら？なのはにも可愛いところがあるのねえ」

「そ、そんな理由ではありません！母様までなにを言い出すのですか！父様も納得しないでください！」

お姉ちゃんの腕の中でわたわたしだすなのはちゃんはちょっとカワイイなあ……。やっぱりシユテルとはかなり違うのかも

「よし、それじゃあ『ななせ』でどうだ！」

「あら、なのはの名前を決める時に最後まで悩んだ名前ね」

「ああ。あの時は美由希がなのはが産まれるからって桃子の為に摘んできた『菜の花』が決め手になったからな。余り物って感じであまり良い感じはしないかもしれないけど、最後まで悩んだ名前だから

ら、受けとつてくれると良いんだけど。やっぱり別なのが」

「ううん。あ、ありがとう　お父さん！」

私はちよっぴり溢れた涙を拭くのも忘れて、お父さんに笑顔で応えた。

わたしの名前

多分違うかもしれないけれど、わたしの名前の由来が聞けたのも嬉しい。

ちよっとの間かもしれないけれど

「お世話になります。お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

「」「ようこそ、高町家へ！」「」

わたしがお辞儀して言うと、お父さんもお母さんもお姉ちゃんも笑顔で迎えてくれた。

「よろしくね、なのはお姉ちゃん！」

「ブフォ　！？つケホケホ！…い、勢いとどさくさに紛れて私をお姉ちゃんですか…貴女の方が年上でしよう！」

「良かったじゃない、なのはお姉ちゃん？」

「ハッ倒しますよアリサ。貴女もいきなり変な事を言わないでください！高町なのは！」

「ごくら！ダメよ？なのは。『ななせ』はもう、ななせって呼ばないよ！」

「ですが母様」

「名前……呼んでくれる？なのはちゃん」

「うっ！」

お姉ちゃんから脱出したなのはちゃんにわたしは詰め寄る。

も、もう一押し……なの！

「わ、私は」

「やっぱり、もっとお話ししないと　ダメなのかな」

もっとお話しして、なのはちゃんを知らないと、名前で呼んで貰えないのかな？

「ううっ……わ、わかりましたよ。……な、なな……せ……キャッ！」

「…もう一度……呼んで」

わたしはなのはちゃんにもっと、新しい名前を呼んで貰いたかったから、いつかのフェイトちゃんの時みたいに抱きついてた。

「お願い　なのはちゃん」

「……ななせ」

「なのはちゃん。もういつかい」

「　ななせ」

わたしの腰に手をまわして、頭を撫でてくれながらわたしの新しい名前を呼んでくれたなのはちゃん。

わたしより少し身長は低いのに、わたしよりとても大きく、まるでお姉ちゃんやお母さんみたいに感じる。なのはちゃんはお姉さん肌なのかもしれない。

「よし！それじゃあ姉妹仲良く朝風呂と行っちゃおうか！」

「うん！」

「…姉様、私の身体の状態を知っているの提案なら刀の錆にして差



し上げましょうか？」

「へへ〜ん この高町美由希！まだまだ妹に負ける腕は持ち合わせ  
てはおらんのだ！〜！」

「良い覚悟ですな。では表に出なさい」

「負けて傷が増えてもしらないよ〜？」

「構いません。全力で勝ちに行く為に何でもしますから。そう……  
なんでも……フフツ」

「な、なのはちゃん、どこかケガしてるの？」

というよりなのはちゃんちょっとコワいの……。

「多分右腕と左足に……あとお腹辺りに傷があると思う」

「よく判るわね、すずか。あたしでも腕と脚しかわからないわよ」

「私は、見てる事しか出来ない分、結構見てるから」

「ちょっぴり悔しいわね」

すずかちゃんとアリサちゃんも、結構鋭いかも

『諸君！朝の挨拶、おはようという言葉を慎んで贈らせていた  
う！』

『おはようございます』

また新しいロボットさんが増えたの

「あらグラハム、どうしたのよ？少しボロっちいじゃない」

『いやはや、今朝なのはと少々鍛練がてら打ち合ったのだが、胴体に重い一撃を浴びてな。ユニットごと換装するのに少々時間がかかってしまった』

「なのはの傷はそれが原因ね……」

『医療ベッドを彼女は嫌うからな。ヒーリングでの自然治癒だから昼過ぎまでには治っているだろう』

「傷は男の勲章というけど、もう少し身体を大切にしなさいよねえ。まったく」

『だがそれがなのはの生き様だ。傷だらけになろうとも、血反吐を吐き地べたを這いつくばってでも諦めぬ不屈の心が勝利の鍵なのだ。彼女のな』

「わかってるわよ。だからあたし達で出来るだけなのはの眼前の敵を打ち砕いて、なのはを総大将まで送り出すのがあたし達に出来ることでしょう？」

『そういうことだ。アリサ・バニングス。キミのなのには対する想いと行動に期待する!』

「任せておきなさい!炎になったキャプテンアリサは無敵なんだから!」

またまた難しい話しでわけがわからないけれど、こっちのアリサちゃんもまた戦う人みたいで、燃えているのはなんとなく判るの。

『ほらほら、メガネシスターもブラザーも睨めっこはお終いだ。ユーファミリーの歓迎会が先だろ?それで良いかい?マザーアンドファーザー』

「ああ。それじゃあ今日は腕に頼を掛けないとな!ブラボー、手伝ってくれ」

「任せておけ!何を隠そう、俺は料理の達人だ!」

「それじゃあお赤飯も炊きましようか」

『ならば買い出しは私とアリスとハーケンを主軸に』

「私が行くよ!」

「ねえねえなのは!フェイト達も誘ってもいい?」

「あちらが良いのならば私が断る理由はありませんよ」

「わかった！それじゃあすぐ呼んでくるよ！」

「なのは、何か手伝える事があれば手伝うよ」

「ではユーノは、私とアリサで庭で会場の準備をしてしまいましたよ。すずか、久遠と……な、なな…せを」

「うん。任せてね、なのはちゃん！久遠ちゃん、ななせちゃん。邪魔にならないように2階に行こう」

「ウエイト！待ちなさいすずか！せめて道場か作業部屋にしてください！私の部屋には絶対に上げないでください！」

「は〜い！……フフ、それじゃあ静かに行こうね？久遠ちゃん、ななせちゃん」

「クウ」

「にゃ、にゃははは……」

向こうのお父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

こっちの高町家は色々な意味で賑やかで楽しそうで温かい家族なの！

To be continued…

第33話 新しい 名前を呼んで（後書き）

前半ちよっぴりシリアスに、後半はまだ高町家を良く知らない『ななせ』の視点からでした。

次は管理局との接触が大きなイベントになりますね。

次回もお楽しみに！

第34話 吸血姫の夜……（前書き）

前もって言いますが……

すずかファンの皆様！！すみません！！

### 第34話 吸血姫の夜……

side：メカニカルズ

高町家敷地内にある高町なのはが築きあげ、高町なのはの為に築かれた黒金の城。

高町なのはの作業部屋にてメカニカルズは揃っていた。

『それじゃあ、始めるぜ？ブラザーズ』

ハーケンの声が静かに木霊する。緊張の瞬間に皆声が出せないのだ。

ガゴン

レバースイッチが降り、ハーケンが固定されているハンガーに回路が接続される。

ハーケンの足元に展開されるラギアス式魔法陣。

それは回転しながらフラフープのように下からハーケンの筐体を通って行き、眩い若葉色の光で包み込んでいった。

『エーテル係数400を突破。予定通りだ』

固唾を飲んで各々が見守る中、グラハムがモニターを見ながら告げる。

永遠にも永く刹那にも満たない、時間が流れ、次の瞬間に光が作業部屋に満ちる。

『ハーケン！』

「…OK、スカイガイ」

グラハムがハーケンの安否を確認すると、機械音声ではない肉声の声が返ってきた。

光に焼かれたセンサーのリカバリーが終わり、ハンガーを見ればそこには

「成功だぜ。ブラザーズ」

そこにはゲシュペンスト・ファントム改型ではなく、ハーケン・ブロウニングその姿があった。

『成功しましたね！ハーケン』



「ああ。マイソウルカルムレイドレイ八のお陰さ、感謝するぜ」

『いえそんな、ハーケンの努力の賜物ですよ』

ハーケンに感謝されたストライクビットモードのレイ八は恥ずかしげにコアを点滅させた。

今回ハーケンがやったことは、プログラムとしての再構成によって人間的な肉体を得ることだ。無論戦う為の筐体は量子分解されてハーケンのプログラム構成の一部として共にある。

メカニカルズが求めた人間的な肉体。

その意味は今以上の結束力を得るためと、活動範囲の向上だ。

P TやM Sの筐体では世間を出歩くのには目立ち過ぎる上、下手を打つと研究所行きになってしまう。

普及型の自己進化完全自立型擬似人格コンピュターOSのデータ取りはアリサとすずかのアインとツヴァイに任せて、自分達は主人たるなのはをより効率良く支援する為に、人間の姿になる事は火急の急務だった。

それが今実を結び、ハーケンはハーケン・ブラウニングの肉体を得る事が出来たのだ。

「ふむ。コレが人間の肉体の感覚か。少々非力だがその分行動範囲の拡大が出来たという事を喜ぶべきか」

次にプログラム体となったのはグラハムだった。何故か身体や顔は27歳であるのに服はアロウズの陣羽織だ。仮面が無い分マシか

「ああ……これで私はもっとマスターの力になれるんですね……」

これまたアロウズの制服に身を包んだ19歳の高町なのはをモデルに、髪は金髪、瞳は赤、そして金色のヘッドギアといった容姿でプログラム体となったレイハは胸に手を当てながら感動していた。

「キミはいいのか？アリス」

『ええ。私は色々と複雑な造りをしているものですから。それに、マイスターの最高芸術品であるこの筐体を勝手にいじってしまうと何が起るか検討もつきませんから』

メカニカルズで唯一プログラム体での肉体化をしないのはアリスだけだった。

しかしアリスの懸念も当然の結果である。

アリスはインテリジェントデバイスであり、ファミリアでありALICEシステムの中枢システムでもあるのだ。

自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSであるハーケンや

グラハム。インテリジェントデバイスであるレイハとは色々複雑度が違うのだ。

『ですがこれで色々、こちらの方が便利と言えば便利ですし』

「確かにそれもそうだな」

肉体化すると、PTやMSのようなセンサー類を使えなくなる欠点がある。

確かに五感はハッキリしているが、それでも人間基準での話。

オーバーテクノロジーを駆使して造り上げられた筐体程の性能はなく、再度筐体への変換が必要だが。

826

「まあ、なんとかなるんじゃないか」

「ああ。それにヨロイは見せびらかすものでもないからな」

「しかも熱血的な変身シーンはお約束だろ？」

「熟知しているな、ハーケン」

グラハムとハーケンは腕を交差するように打ち合う。

やはり根本的には造った人物に似てしまっているらしい。



あの日以来。私はなのはちゃんかアリサちゃんの隣りで眠らないとぐっすり眠れなくなっちゃった。あと久遠ちゃんも。

とにかく、なのはちゃんが聞いたお医者さんの話しだと、心の問題だから、時間を掛けないとダメなんだって。

今でも暗い場所はひとりじゃいけないのは恥ずかしいけど、それ以上には上回ってくる。

でもやっぱり一番コワイのはなのはちゃんはともかく、アリサちゃんが私に何も訊いてこない事がコワイ。

なのはちゃんがお医者さんとお話ししたなら、私が吸血鬼だって事を知られてしまったかもしれない。なのになのはちゃんも何も訊いてこない事がコワイ。

どうしてなのかもわからない。

なのはちゃんもアリサちゃんも変わらずに私に接してくれる。

私はなのはちゃんもアリサちゃんも好きだから逆にツラくて、そして私は私自身がコワイ。

2人とも修行をして強くなるうつつで頑張っているのは良いことなのはわかってる。

でもキズを負う度に漂ってくる血の香りに、2人の血を少しでも良いから吸ってみたいって、思ってしまう自分がコワイ。

「……スウ……スウ……スウ……」

「……なのは……ちゃん……」

なのはちゃんは寝ている時だけはいつも無防備で、私を惑わせる極上の眠り姫。

甘くて優しく、お日様みたいな香りの中に少しだけ混じる血の香り。

私の吸血鬼一族の血がなのはちゃんの血の香りを嗅ぎつけて、頭をぼろりとさせていく。

「……はあ……はあ……はあ……なのは……は……ちゃん……」

息が熱くなっていく。

視界が滲んで、鼻の奥がツンとしていく。

ダメなことでも、手が私の意志と関係無く、なのはちゃんのパジャマのシャツのボタンを外していく。

お腹の辺りから漂う真新しい血の香り。

新しいキズがまた増える。

「ん……ちゅ……ちゅる……」

「あっ……は……んんっ……」

「んふ……なのは……ちゃん……」

結構薄くて石鹸の香りに混じっているけれど

「おいしい……なのはちゃん……」

なのはちゃんの唇を指先で撫でてから舌を差し込む。

「ふぁ……んふ……あっ……ちゅる……んっ……」

舌で歯と歯の間をこじ開けて、なのはちゃんの口の中を……犯していく。

「んっ……はぁん……っ……はぁ……」

「つぷ……ちゅ……フフ……私のなのはちゃん……」

アリサちゃんは知らないかもしれないことだけど

なのはちゃんのファーストキスの相手は 絶対に私。

1年生の時のお泊まりの時に私が寝ているなのはちゃんの唇を奪ったのが最初。

あの時の身体中に電気が走ったような痺れる感覚は、今でも忘れな  
い。

あの時、私は一生なのはちゃんを愛し続ける事を決めたの。

私の命も魂も、何もかもすべてがなのはちゃんのモノなの。

そう……………何もかも すべて！

アリサちゃん、知ってるかな？

なのはちゃんは首筋と口を責められるのがとっても弱い。

「あ……………やっ！…はうん…っあ！」

「可愛いよ、なのはちゃん……………んっ」

なのはちゃんの頬に手を添えて唇を重ねる。唇にこびりついた血の味の混ざった甘いなのはちゃんの唾液を舐めとる。

官能小説とかもいくつか読んでいるから、なのはちゃんを気持ち良くさせる方法はいくらでも知ってるよ。



頬を桜色に染めて、熱くてイヤらしい吐息を漏らせて

起きている時のなのはちゃんもカッコイいみんなの英雄・ヒーローで、私を守ってくれる騎士様。

でも夜の王様は 吸血鬼の血を引く私の時間。

本当はこの力で、なのはちゃんを助けてあげられれば良いけど。

私は子どもだから、まだ上手く自分の力をコントロール出来ない。

血のお陰で運動神経は高いけど、それでも今のアリサちゃんより私は弱い。

なのはちゃんみたいに機械関係で頭が良いわけでもない。

でも、なのはちゃんの部屋にあった漫画とか小説の中には頑張れば私にも出来ることもいくつかあった。吸血鬼についての本もかなり参考になった。

私の血筋が死徒や真祖なのかわからないけれど

「はあはあ……あつ……あ、や、はうん……！」

「……ちよつと……熱いね……なのはちゃん……！」

汗を掻いて、部屋中になのはちゃんの甘い香りが充満する。とって





です。

「お風呂にでも入りますか…」

変な夢を見た所為で、すっかり汗を吸ってしまったワイシャツを鬱陶しく思いながら着替えをタンスから掘り出す。

あんな夢を見たのはMUGENでメルブラをやった所為ですね。

お嬢様で吸血鬼でヘアバンドがチャームポイント。

ちよつと似通っているからあんな夢を見てしまったのかもしれないね。

「さて、今日も1日精一杯生きていきましょうか」

私は毎朝の口癖を呟きながら部屋を出た。

「フフ……ごちそうさま……なのはちゃん」

すずかが髪や瞳を紅く染め、口元に弧を描いてサディスティクな笑みでそんな事を呟いている事は知りも知りませんでした。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

第34話 吸血姫の夜……（後書き）

もはや超人しかいないリリカルバイオレンスな世界。

一番まともなのが桃子さんだけってどうよ？

や、桃子さんもメンタルテイサイドのヒエラルキーはトップだから  
まともなのか？

次回もお楽しみに……………

すずかちゃんは隠れSだと私は信じてやみません。

第35話 吸血姫のネガイゴト……（前書き）

またまたすずかちゃんが中心の回です！

### 第35話 吸血姫のネガイゴト……

side：月村すずか

高町家の朝はとっても忙しい。

ハーケンさんやグラハムさんが人間の姿になってからは一部が戦場になっている。

リビングにはテーブルが1つ増えて、片方を女性陣、片方が男性陣で使っているけど

「オイコラ！ブラボー！！テメ、それは俺の唐揚げだろ！！」

「フム。早い者勝ちは世の常だ。ハーケン」

「ああ！！テメエまた！！つかどさくさ紛れに横から箸を入れてくるんじゃねーよ！グラハム！！」

「フツ、武士たる者。腹が減っては戦は出来ぬのが理。悔しければ食われる前に食うことだ」

「よく言ったグラハム！ブラボーだ」

「よかねえよー！！」



スゴく、賑やかになったかな……？

「アッチは大変ねえ。しかも騒がしいし」

「って、アリサちゃん！それはわたしの春巻きなの……！」

「ブラボーとグラハムが言ったたでしょ？早い者勝ちよ早い者勝ち。食卓は常に戦場なのよ。ななせ」

「うう〜！」

アリサちゃん。それはさすがにななせちゃんがかわいそうだよ。

「にゃあ！！な、なのはちゃんまでえ〜！！」

「美味しくいただきました。ぶい」

いや、Vサインしても大人気ないよ、なのはちゃん。

「ふふ、まだおかわりはあるから大丈夫よ。ななせ」

「うう…ありがとう、お母さん」

席を立ってキッチンに向かう桃子さん。



妖怪の中で最も強大な力を持つ種族。個々の強大な能力は同等の能力を持つ妖怪は居るものの、それらを全て併せ持つことが種族としての絶大な魅力となっている。悪魔と呼ばれることもある。

吸血鬼の特性として、日光に弱く、川や降雨などの流れる水を越えることを嫌がる。炒った豆に触れると皮膚が焼ける。ただし、日傘を差せば日中でも出歩けたり、水自体を恐れているわけではない。

次に吸血鬼として有名なのは、人間が秘術によって遺伝子・細胞・その他神経系や魔法関連の体内機能を変化させた元人間。吸血鬼の弱点のひとつである昼間を歩くことができるハイ・デイルイトウォーカー - 高位なる日の下を歩くもの - と通称されている真祖の吸血鬼。

吸血種の中で、吸血鬼と呼ばれるモノたちの大部分をしめる種。一般に言われる『吸血鬼』のイメージに適う存在である、月姫の吸血鬼、死徒。

吸血種の中の、吸血鬼の一種。その中でも最も特異な存在。死徒と異なり、生まれたときから吸血鬼であるもの。人間に対して直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した『自然との調停者』『星の触覚』。ヒトを律するものならばヒトを雛形に、ということとで精神構造・肉体ともに人間の形をしているが、分類上は受肉した自然霊・精霊にあたる。月姫の真祖の吸血鬼。

超越種の中の一民族であると思われる。生粋の魔。月姫世界においては系統樹からして人間とは違っている最初から鬼であるモノ。鬼種 - きしゅ -

この辺りが吸血鬼の大体の部類だとは思っただけ。

私の場合はまず死徒には当てはまらない。

月姫の真祖の吸血鬼も当てはまらない。

魔術的な真祖の吸血鬼か、妖怪の吸血鬼、鬼種のどれかの血統だとは思っけど結局わからない。

せめてお姉ちゃんがどんな力を使えるのか知れたら良かったのに。

そうすれば結果によつたら私は紅赤朱 - くないせきしゅ - の可能性だってある。

魔力を使えば髪や瞳が紅くなるのは呪詛が廻っているからかもしれない。

『略奪』紛いの事も出来て、発火も一応頑張れば出来る。後は爪で切り裂いたり。ちよつと痛いけど。

となるとやっぱり鬼種なのかな？

ううー……なのはちゃんだつたらわかるかもしれないけど、アリサちゃんが今まで秘密にしたから、私もある程度形になるまで秘密にしたい。

理想はピンチのなのはちゃんを颯爽と現れた私がカッコ良く助ける、いつもとは逆の立場の逆パターンのギャップ墜とし！吊り橋効果も狙える！一石二鳥二段構え！

そしてその日の夜にベッドで

うう……なのはちゃん、どんな風に鳴いて嬌声を上げてくれるんだろ。この前よりも多分スゴいのかもしれない。

なのはちゃん初めての全部は私が貰うの。アリサちゃんにだって渡さないもん！

でもひとりじゃ限界もある。

咲夜だけでもやっぱり同じ。

でもファリンやノエルも、お姉ちゃんにも魔法や魔術は多分専門論外だろうから、魔術や魔法についてそれなりの見識を持っていて、私に戦う方法を教えてくれる人が居てくれたら

《ならば造ってしまえば如何ですか？お嬢様》

《咲夜？》

頭に響いたのは咲夜の声。咲夜からの念話だ。

《お嬢様は紅き夜に座する悪魔の王。吸血鬼には変わりはないのですから、従者の2人や3人は当たり前ではありませんか？》

《でもどうやって……》

《私にお任せを。この十六夜咲夜には策があります。お嬢様は従者



あたしは屋上で焼き鳥を食べながら、最近のすずかの様子について考えていた。

最近すずかもこっさり何かやり始めている。

図書館によく行ってるみたいだし、咲夜がプログラム体として実体化出来るから、夕方、暗くなってから帰ることもある。

さらに日に日にすずかから感じる十二カの気配。

魔力に似た気配だけど正直わからない。

だからって、妖力ってわけでもないわよね？

すずかは吸血鬼だなんて、そんなバカバカしいこと、あるわけ無いじゃない。

確かに運動神経は良いし、ちょっと黒いところもあるけど、吸血鬼はさすがに無い。

「っと、妹紅。次塩のひなでお願い」

「あいよ。ちょっと待ってな」

すずかが咲夜なら、コッチは『鳳凰』藤原妹紅ってね

アドチルスタイルだからカツコ良くて、あたしの魔法面での先生で、健康マニアの焼き鳥屋よ。

お陰様で蝶・美味しい焼き鳥がいつでも食べられるのよ。これが。

「それできあ……妹紅はどう思う？すずかのこと」

「どつって……それは、私にはわからないよ。ただナニカをしているのは確かだろうさ。あの子からは最近感じる魔力が日によって量というか、勢いというか、波というか、まあ、そんな感じのものがさ。揺らいでいる感じがするのさ。つまりは」

「何かしらで魔力を使ってる……」

「ブラボー。あいよ、焼けた」

「あんがと」

あたしは妹紅から焼きたて直送焼き鳥を受け取りながら、サイダーを飲んで、七味をつけてひな肉を食べる。

「あづー！」

「当たり前だろうに……ほら、火傷してないか？」

「だ、大丈夫よ。ノープロブレム。……でも、ならいっただいナニに」



「さあな。でも案外、アリサと同じかもしれないかもな」

「まさか、ヴァンシユジュエリー……!?」

「んや、それは無いな。ガンダムん時にあの子のことスキャンしても、特にそう言った『余計』なものの魔力とかは感じなかった」

そう言っつて塩皮にかじりつく妹紅。

EX-Sガンダムのセンサー類はなのは謹製のオーバーテクノロジーだから、信頼性は高い。

妹紅が言っつんだから、多分そうだと思う。

「しばらく待ってみるしかないか……」

すずかもすずかかで頑固な部分があるから、訊いても言っつてくれなさそうだし。

でも

「なのはにだけは、迷惑かけるんじゃないわよ。すずか……」

あたしは透き通る程蒼い空へ向けて呟いた。



コホンッ

さて

「わかってるよ。アリサちゃん」

『お嬢様？如何なさいましたか？』

「ううん。なんでもないの」

なにやら呟いたお嬢様でしたが、主君にはぐらかされてしまえば追  
求は出来ません。

「それより、直死の魔眼って、どうすれば手に入るかな？咲夜、プ  
ログラムで再現とか出来ないかな？」

『お、お嬢様？』

「フフ……直死の魔眼は、ナイフで戦う咲夜にはぴったりだと思わ  
ない？」

口の端に弧を描き、サディスティクに笑う我がお嬢様。ああ、この  
笑みを向けられるお母様が羨ましい。

しかしそうになると、お嬢様は私に『殺人姫』となれと？

確かにあの能力でならば、『十六夜咲夜』としてよりも強いでしょうけど、『狂気』を擬似人格でしかない私が抑えきれるかしら？

『直死の魔眼は、『死を理解した脳と眼球のセット』でなりたつため、私の理解する『死』は多種多様多彩様々ではありますが、ALICEシステムにその様な回路があるとまでは……。すみません。お役に立てず』

「ううん。ちょっと気になってみただけだから、気にしなくてもいいよ。咲夜」

『お嬢様』

私を胸に抱きながら許して下さいるお嬢様。

ああ、お母様。私はすずかお嬢様にお仕えする事が出来て、身に余る幸せです。

そして夜。

私はお嬢様と共に作業部屋に居ました。

イメージをトレースして、自己進化完全自立型擬似人格コンピュータOSを中核にプログラム体を造り出す。そして同時に私が代行者となってお嬢様の使い魔として契約する。

私の動力源、フルカネルリ式永久機関でならば使い魔1体分の魔力を補う事くらい可能ですし、プログラム体も寝食で魔力は回復出来るのはハーケン達が立証済み。使い魔契約は一応の保険という意味。結局、どんなモノを従者とするのか、お嬢様は教えてはくれませんでしたから。

「では、準備はよろしいですか？お嬢様」

「うん。いつでも良いよ。咲夜」

イメージトレースの為にヘッドギア端子を装着したお嬢様に確認を入れ、イメージトレースを開始し、装置を起動させる。

「エーテル係数300を突破。 340…360…400…440…  
460…500…え、まだ上がる？560…600！？644…  
666…664…666…！」

666で安定した。でも通常400〜500の間でプログラム体として実体化するはずなのに。666なんて不吉な数字……。

「さあ、私の御伽噺 - ものがたり - の脚本を、役者を、演出を、悲劇で紡ぐ喜劇を、惨劇で紡ぐ英雄譚章を！手伝って！！」

「くっ！！」



髪と瞳を深紅に染め上げたお嬢様の姿は、まるで血にまみれた姫。

一夜の悪夢の御伽噺を紡ぎ、願いを叶えようとした少女の姿と、重  
なって見えた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第35話 吸血姫のネガイゴト……（後書き）

一気に増えすぎだけど、反省はあっても後悔はしない！！

さあ〜て、すずかちゃんは何をしちゃうのやら、皆さん予想してください

正解者の中から抽選で、すずかちゃんと星光なのはちゃんのベッドシーン（十六夜咲夜撮影）の写真アルバムをあげちゃうぞ

と、いつもの嘘だッ！！



第36話 海鳴の夜に（前書き）

もう、後戻りはできない

### 第36話 海鳴の夜に

開幕と行くところ……。

キャストは混沌とする海鳴の平和を守る勇者諸君

ヒロインは我が主君

ヒーローは星屑の星光

そして悪役たる悪いドラゴンは………いや、すべてを語ってしまったのは演劇もネタが割れてしまったただの絵面の流れにしかならないから、語るのはやめておこう。それに……答えを全ては教えないほうが私は好きでね、考えた人なりの答えが聞けて面白い。何より、考えることは大切だろう？

フッフッフ……さあさあさあ、いざいざいざー！！

遠き者は音に聞け！！近くは寄って目にも視よ！！





私がちょうどシャワーを浴びていた時でした。

作業部屋の方からあの暴走体レジセイアすら上回る存在感を感じた瞬間に視界が真っ赤に染まり、気づけば私はT w o S w o r d / T w o G u nの騎士たる姿に身を包み、この海鳴市であり海鳴市ではない場所において、バイオハザードよろしくなゾンビや魑魅魍魎特盛り出血大サービス万国ビックリシティで殺陣を演じる事になりました。

一応プラーナやエーテルは海鳴市と同様に存在しているので戦闘行動自体は可能なのですが、通信も念話も通じない為、孤立無援の状態です。

「ラギアス式を開発していなければ、私は、B A D T H E E N Dでしたね」

剣を抜き、汚血を払い。腰の鞘に収める。

今の私の武器は、喚び出せるディスクッターとバニティリッパー、フレイルムカッター、小太刀二本のみ。

しかし技や遠距離攻撃法は多彩に用意してあるので、飛び道具がなくともなんとかなりますが、私だけがこのおかしな街に居るとは限りません。

とにかく今は他人を探すのが得策。





「くっ！集え炎よ！！」

デイスカッターに幾何学の魔術文字　字袴子・アザトース・が駆け巡る。

それが私の右手に絡みつき、術式は紅に染まる。

一瞬デイスカッターから右手だけを離して、ナイトゴーストへ向ける！

「カロリックスマッシュ！！」

カロリックの熱線が開放されたが、ナイトゴーストは、カロリックが収束・発射される僅かのタイミングに身体を逸らし、肩を穿つ程度にダメージを収めたが

「アトランティス・ストライクッ！！」

紫電を纏った某荒熊的な強烈一撃必殺の後ろ回し蹴りがナイトゴーストの胸に直撃する！

爆裂した断鎖術式の反発エネルギーにより、ナイトゴーストは血煙となって爆滅した。



「…デモンベイン……一夜の悪夢とでもいうのでしょうか」

ナイトゴントは確かにデモンベインデザインの物だったが故に、私はアレをナイトゴントと名指しました。

「いったい誰が、なんの為に」

機神飛翔は未だ出回っておらず、私が暇つぶしに作った贋作が私の部屋のパソコンにあるだけのはず。

「や、まだ機神飛翔云々を考えるには軽率ですね」

ゾンビとナイトゴントでは配役が限定的過ぎます。せめてウェイトリイクラスのが出てこなければ特定のしようも

びちゃ

びちゃ

「なるほど、次はトマトジュースが相手ですか……」

人型をした紅い液状の物体

まさか

「まるでタタリや、本当に一夜の悪夢の様ですね……」

ディスクッターを構え、フレイムカッターを召喚。

永全不動八門一派・御神真刀流 小太刀二刀術の型を構える。

「さあ、まずはダレから解体して貰いたいのですか？」

飛びかかってくる紅い液状のモノ達に応え、私も飛び出した

||||||||||||||||||||

side:アリサ・バニングス

「ったく！いったいどうなってんのよー！」

『口よりも手を動かせ、アリサ・バニングス！』

「わかってるわよ！直撃！ブラボー拳！！」

あたしは「パワーを纏った拳で2m近い蜘蛛の化け物を殴り飛ばしていく。

「魔王炎撃破！！」

焰を纏った手刀を払い薙ぎ、大蜘蛛を焼き飛ばす妹紅。

妹紅は妹紅で、一応モール街だから弾幕は遠慮して肉弾戦で戦っている。

『KISSyaaaaa！！！！』

『Syasyasyasyasyasya！！！！』

「鬱陶しい上にぞろぞろわらわらと！！SAN値直葬はお断りよ！！」

あたしは脚にプラーナを込めて、瞬動を連続して蜘蛛が放つ糸を交わして懐に入る。

「飛天！ブラボー昇竜拳！！」

しゃがみ込みながら腕を引き締め、全身のバネを解放しながらアッ  
パークットで打ち上げる！

そのまま滞空した状態から隣に居た化け蜘蛛へ

「撃碎！ブラボーキック！！」

回し蹴りを喰らわせる！

ドゴンツ！！バシャ！！

「ウゲエエ……………」

蹴りの威力が強すぎたみたいで、化け蜘蛛の胴体が弾け飛んだ。

SAN値直葬はお断りって言ったのに、自分から直葬にしてどうす  
んのよ……………。

あたしのバアアカ！

「……………大丈夫か？」

「ノープログレムよ……………」

ブラボーに返事を返しながらファイティングポーズを取る。まだまだ蜘蛛の大群は減っちゃいないんだから！

「でもこのままじゃキリがないわ……妹紅！！」

「…わかったよ。良いんだな！」

「ヤっちゃって！」

既に周りに人が居ないのは確認済みだし、ここはあたしが帰りに買いたいものがあつて寄つた遠見市のモール街に似てるけど違つという確信があつた。

だからいくらブツ壊しても大丈夫！

………多分！！

「コレで消し炭にしてやるよ！」

妹紅の足元にエーテルでも魔力でもプラーナでもない別の力。

星の生命エネルギー

遍在する超自然的な力

神秘的な力の源とされる、魔法や超能力といった尋常ならざる特別な力の源とも言われているモノ

『マナ』が集まって、マナが可視域まで集中した部分が、妹紅の足元に広がる赤い光。赤い光だから属性は炎

そしてマナを媒介に引き出す超常の力の一つ。

『晶術』

「灼熱のバーンストライク!!!」

妹紅の頭上から三発の火炎弾が、化け蜘蛛の大群へ降り注ぐ!

「追加にもってけ!!!ヴォルテックヒート!!!」

着弾した火炎弾が弾け、火炎の風となって、さらに化け蜘蛛を焼き喰い殺す。

「さすが『鳳凰』藤原妹紅!頼りになるう!!!」

「この程度で驚くなって。いずれあんたも覚えるんだからさ」

「はい!もこたん先生!!!」

「もこたん言うな!!」

『まったく、緊張感に欠けるなあ……』

妹紅をからかってちょっとリラックス。

「さて、まだまだいくわよ!!」

あたしはとにかくこの蜘蛛の大群を早く倒す為に駆け出した。

|| || || || || || || || || || || || || || || ||

side:メカニカルズ

「まったく、とんだバケモノタウンだぜ」

ナイトファウルを肩に担ぎながら愚痴を零すハーケン。

「しかし人間の身体というのも中々に良い物だ。筐体では培うのが難しい『生物の勘』というものが培える」

汚血を払いながら刀を鞘に収めるグラハム。

アリスは地面より僅かに浮かび上がりながら2挺のビームスマートガンを構え、あまりにグロっちくてグロッキーになったレイ八を背負う美由希を護りながら移動していた。

『まったく情けない。こんなモノ、ただのバイオハザードと思えばいいものを』

「言ってやるなよ。レイ八はバイオハザードとか地球防衛軍とか沙耶の唄を知らないんだからな」

メカニカルズもゾンビや化け蜘蛛や巨大蟻と戦闘していたが、中には見るからにSAN値直葬級の肉塊の化け物や触手の塊等に襲われ、レイ八はプログラム体のまま気絶してしまったのだった。

「しかし、よく美由希は耐えられるな」

「あはは……うん。なんか慣れた」

「……慣れるもんか？フツー」

ハーケンは周りを見渡した。



どこだかわからない。まるであらゆる生物の臓物をブチ撒けたような景色で、なんとなく住宅地じゃないのか？くらいしかわからない場所。

なにせ電柱もブロック塀も家でさえ、肉塊に被われ、唯一道路だけが辛うじて露出している厭な景色が続いている。

常人ならまず気が狂う空間だ。

しかも紅い霧が立ち込めていて3m先すら見えやしない。

そんな景色続きで、ハーケンは慣れる以前にげんなり肩を落とす。

「しかしこうも霧が深く、醜い景色続きでは精神衛生面ではガリガリSAN値が削られていくな」

「だからさっさと早く先に進みたいんだがな。どこまで続くんだか……」

グラハムに帽子の位置を直しながらいうハーケン。

確かにSAN値直葬状態でガリガリ精神疲労が溜まっているのは同感である。

「コレでぴっちぴちの美少女とかだったらSAN値全快ヒャッハー！サタデーナイトフィーバーなんだがな」

『黙れエロス』

「うおっ　！！ちょ、いきなり後ろから撃つヤツがあるか！！」

「ふざけている場合ではないぞ、ハーケン。追加のオーダーだ」

刀を抜き構えるグラハム。

ハーケンの目の前の先には、ビームに貫かれて絶命している肉塊。

「OK、ビジターエイリアンズ。この俺のナイトファウルで切り身にして動物園のエサに寄付してやるぜ？」

「明らかにお腹壊しちゃうからやめなさい」

「軽口はそこまでだ。アリス、支援砲撃と美由希と護衛を頼むぞ！私とハーケンで掃除してくる」

『了解。隊長』

「逝くぜ？エイリアンズ」

ハーケンの言葉を皮切りに、メカニカルズも戦闘を再開するのだった。



を、紙で出来た球体に包む込む。

「愚問だったね。ディアには守りたいモノがあるんだもんね」

「確かに、はやてがとばつちりを受けているからな。結界を張り、零無とダンセイニに後を任せてきたから心配はないが」

出来ることならディア自身。自らを望んだ少女の下について居てやりたいのは山々だが、如何せん。彼女の魂がそうはさせない。

この夢は危険が過ぎる。

それも彼の世界の魔都で起きた一夜の悪夢よりも、規模は同等、然し、影響力　現実感・リアリティ・が強すぎる。

広域結界を張り、また別の存在が封時結界と隔離結界で、この街一帯を世界から複製して切り離したらしい。

これほどまでの結界師はそう易々育ちも居もしない。

「可能性としてはユーノだな……」

この世界軸でそういった結界類の扱いに長けている存在は1人くらいしかディアには思いつかなかったが、如何せん少し急過ぎて術式が甘かったのか、ディアが守る存在が結界の中に残されてしまったのだ。

別にそれにどうこう言いつもりもなく、むしろ現界への被害を未然に防いだことを高く評価もしているが、心配なのは、自らの同胞と  
いうか友人とというか、そんな風な存在の『零無』にあった。

どこの錬金術師だったタタリとタメを張れる壊れっぷりと『狂気』  
を持つ零無を、あまり長い間放置しておくのが逆に心配なのだ。

それに先程の通り、邪悪が世界を侵そうというのなら、ディアは黙  
っているわけにはいかないのだ。

「故郷に帰ってまで、狩りをする事になるうとは思わなかったが」

ディアの身体に紙が包み込み、ディアの服装を変える。

黒いサングラスを掛け、金縁があしらわれた黒い上着とハーフパン  
ツに身を包み、脚にも黒い革靴。そして黒いコートを羽織る。

全身黒尽くめの格好をし、背中から巨大な一对の黒き翼と、その半  
分程度の小さな一对の黒き翼を生やし。ショートカットだった髪の毛が背丈と同じくらいに伸び、髪型も頭の両側の髪が跳ねてまるで  
犬の耳の様に見える形に変わる。

手に錫杖にも見える呪法兵装『賢者の鎌』を携えた姿は死神を連想  
させる。

「邪神ハンター、ラバン・シュリユズベリイの弟子。ディアーチエ・

Y・シュリユズベリイが、怪異を前にして指を銜えてただ観てただけとなってみる。私はあの赤貧バカ探偵以下になっってしまうではないか!」

「ふふ、ディアは負けず嫌いだからね」

ディアの背中の方から、絡みつくように白いワンピースに身を包み、緑色の長髪の美少女が現れた。

「勝てるよ。ディアなら」

「当たり前だ。死徒の一匹や二匹、私のものの数ではないわ!」

月村邸へ続く中庭の一本道へ降り立ったディアは、賢者の鎌を月村邸の玄関へ向ける。

「おや、随分と可愛らしいお嬢さん方だ。しかし、今宵の劇場の役者欄には、君達のような役者は居ないはずだが?」

玄関先に立っている、深い紫系色の高そうな服と黒いマントに身を包んだ金髪で長身の眼を瞑った白人系男性がディアと沙耶に向け、言葉を紡いだ。

「あいにくと身内が巻き込まれてしまっただな。おちおち読書すらし

ていられん。故にこのふざけた夢幻を終わらせにきてやった」

「それは困る。この夢は我が主君の初舞台にして悲願成就の為に投じる序篇の一夜の劇。楽しみにしている私にしても、無粋な乱入者に舞台を荒らされるのは脚本家としても我慢がならない。今のうちに疾く去ぬる事をお薦めするよ」

「愚薦傷み入るが、他者に仕える身と堕ちた死徒に負ける程、私達は易くはない。貴様の方こそ、疾く去ね…！」

「やれやれ、あまりにも使い古された手法で気が進まないんだが。それに無様で無粋で無骨で、優美さも優雅さの欠片もないが……退かぬというのなら仕方がない。君は狩る者側の立場のようだがそれもここまでだ。これからの君は鬼に狩られる立場だ…。さあ、私という鬼から逃げ切ってみたまえ！」

「ほざけ、一夜の泡沫の夢幻に過ぎぬタタリの塵芥が…！」

沙耶が身体の中に消えたディアが、賢者の鎌を構えながら飛び出す。

その速さはまるで疾風

「残念ながらハズレだ。バットンをあげよう。カットツ…！」

「ふんっ…！」

空間を裂く黒い爪痕のような攻撃　　バッドニュース。

しかしディアは賢者の鎌を振るって、バッドニュースを打ち消した。

「なんと…」

これには男性も意外だったらしく、僅かに関心の色が顔に現れる。

「空間を断絶する『零無』の『死狂い』には程遠く、そよ風のように生温い干渉だ。その程度では、私は切れんぞ？タタリよ…」

「成る程……少し力の見極めが足りなかったようだ。非礼を詫びよう」

男性は紳士のように胸に手を当ててディアに一礼した。

「随分と余裕そうだな、貴様自身、存在の心配はしなくていいのか？」

「心配？何を心配する必要がある？既に筋書きは決まっております、後には我々という役者がそれに沿いこのエントランスを舞台に踊るのみ……心配する要素など無いだろうか？」

「筋書きか……ちなみにどんな筋書きか知りたいものだ、な！！」



賢者の鎌で地面のコンクリートを砕き、後ろに飛んでディアは態勢を立て直す。

「なに、幼き童にもわかるぐらい簡単な筋書きだ。決まっているのは終結の形のみという簡単過ぎて呆れるような、筋書きとは言えない代物…それには」

男性の周囲の空間が張り詰め、風もないのにマントが揺らめく。

「君の敗北が終結の形として記されている」

「……フツ、フフフフ、ファッハッハッハ……!!」

男性の言葉にディアは高笑いを上げた。心底可笑しそうに片手を腹に当てる程に

「つくづく脚本家はバカな連中だ」

ディアは賢者の鎌を構え直し、男性へと視線を向ける。

「そのような筋書きなど、私達は打ち破り勝利してきた。今宵もそうだ」

「そうか。では…開幕といこうか。命に保険は掛けたかね？」

「それはこちらのセリフだ。タタリ　ワラキアの夜よ！それともズエピア・エルトナム・オベローンとお呼びでもしようかあああ！」

「………実に不快で不愉快だ。君には死劇を持って刺激的に舞い踊って貰おう。外法を行使する外道の魔術師よ！」

隔絶された闇と血と魔の満ちる館先にて、死徒の中でも最強種の吸血鬼と、外道の知識を行使しながらも光の為に人間の為に闘う魔術師が激突した。

T o b e c o n t i n u e d …

第36話 海鳴の夜に（後書き）

ついにやっちまったよ!!

色々手遅れでヤバい連中が続出だよ!!この世界はいつたいたいどーな  
ってんだよ!!!!

だがしかし!!反省はするが後悔はない!

さて、時間の演目も楽しみに待っていてくれたまえ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

---

星光の魔王-シュテル・ジ・エルケーニヒ-

2012年1月14日07時43分発行